

東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告

－ 平成18年度 －

2007. 3

東大阪市教育委員会

東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告

－ 平成18年度 －

2007. 3

東大阪市教育委員会



皿池遺跡出土の三彩陶(上外面・下内面)

例 言

1. 本書は、東大阪市教育委員会文化財課が、東大阪市建設局下水道部の委託を受け、平成17年12月～平成18年11月末日まで実施した公共下水道管きょ築造工事などに伴う埋蔵文化財調査の概要報告である。
2. 本書には植附遺跡・正法寺山遺跡・芝坊主山遺跡・山畑古墳群・花草山古墳群・五里山古墳群・千手寺山遺跡・墓尾古墳群・半堂遺跡・貝花遺跡・出雲井遺跡群・豊浦谷古墳群・法通寺跡・鬼虎川遺跡・辻子谷遺跡・上六万寺遺跡・山畑遺跡・客坊山古墳群・岩滝山遺跡・上小阪遺跡・若宮古墳群・善根寺山遺跡・北島遺跡・縄手遺跡・下六万寺遺跡・皿池遺跡の概要を収録した。
3. 現場は才原金弘・庵ノ前智博・武田雄志・松田直子、遺物整理は現場担当者がおこない、報告の分担は各章の表に記した。
4. 本書に収録した現場写真は、各担当者が撮影し、遺物は株式会社コミュニカに委託して実施した。
5. 土色名に数字が入っているものは、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じている。
6. 土層断面柱状図の深さは現場地表面が0 mである。
7. 調査の実施にあたっては、東大阪市上下水道局下水道部のご協力のもと、施工業者ならびに近隣市民の方々のご協力を賜った他、現場作業および整理作業には石割典子・西川奈央子・岡本久美・山上憲一・頭師典孝・名古屋大輔・梶本佳代・藤江隆夫・松田誠人・米田一平・秋山昌大・片山くみ子・西尾理恵・西川由里子・秋吉由美子・奥山太佳子・戒井久人・内藤隆・上田礼・西尾さつき・戒井健二・佐野耕平・八田美代子・阪口英治・占部智幸・長谷哲雄・西森忠幸が従事した。これらの方々に記して感謝いたします。

目 次

第1章	平成18年度の下水道関係調査について	1
第2章	植附遺跡の調査	5
第3章	正法寺山・芝坊主山遺跡の調査	7
第4章	山畑・花草山古墳群の調査	9
第5章	正法寺山遺跡の調査	11
第6章	五里山古墳群の調査	13
第7章	千手寺山遺跡・墓尾古墳群の調査	15
第8章	半堂（第4次）・貝花遺跡（第6次）の調査	17
第9章	出雲井遺跡群（第7次）・豊浦谷古墳群の調査	28
第10章	法通寺跡の第4次調査	35
第11章	鬼虎川遺跡の調査	41
第12章	辻子谷・植附遺跡の調査	43
第13章	上六万寺遺跡の第10次調査	45
第14章	山畑（第29次）・客坊山古墳群の調査	56
第15章	岩滝山遺跡の調査	64
第16章	上小阪遺跡の第7次調査	66
第17章	若宮古墳群の調査	78
第18章	善根寺山遺跡の調査	80
第19章	北島遺跡の調査	82
第20章	芝坊主山遺跡の調査	84
第21章	縄手遺跡の第19次調査	86
第22章	下六万寺遺跡の調査	95
第23章	植附遺跡の第18次調査	97
第24章	皿池遺跡の第8次調査	101

第1章 平成18年度の下水道関係調査について

下水道管理設工事に伴う発掘調査を平成11年度より東大阪市教育委員会が実施しており、9年が経過した。下水道工事はほとんどが東地区を中心におこなわれた。

今年度の調査件数及び調査内容の概略は下記の調査一覧表に記した。調査にあたり下水道部と文化財課で協議したが、今年も工事は道幅の狭い旧集落内や道路の迂回路が確保できない場所が多く立会調査が中心になった。また、交通量の問題から夜間工事になり、調査を断念した遺跡もある。

今年度の調査では皿池遺跡より弥生～平安時代の良好な遺物包含層を確認した。白鳳～平安時代の遺物も多く出土しており、瓦や土器などがある。重弧文の軒平瓦や三彩土器などもあり、東に位置する河内寺跡との関連が考えられる。また、縄手遺跡より弥生時代中期の土器が出土しており、周辺に同時期の遺構が広がっている可能性が高い。

今回の収録した調査は平成17年12月1日より平成18年11月30日までに終了したものを対象とし、それ以後のものは次年度に報告することにした。

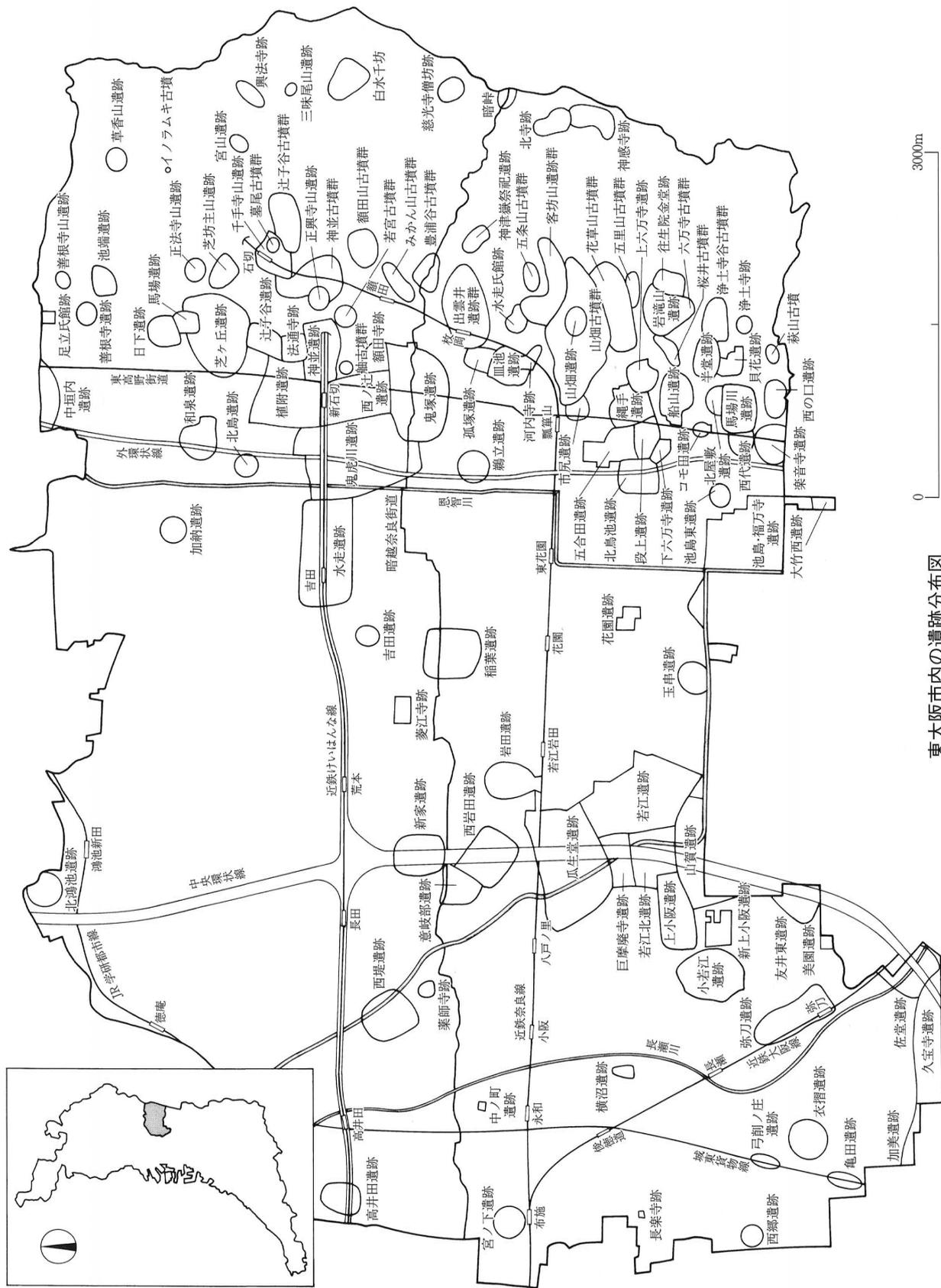
平成18年度下水道工事に伴う埋蔵文化財の調査一覧表

平成18年11月30日

	届出番号	下水番号	遺跡名	届出の工事名称	調査場所	調査	調査期間	調査結果・所見
1	16-695	下事205	植附遺跡	平成15年度公共下水道第65 工区管きよ築造工事	西石切町1 丁目49～ 94、55～73、 371～394	立会	17.3.31 ～ 17.12.26	第2章で報告。
2	16-811	下事242	正法寺山・ 芝坊主山遺 跡	平成15年度公共下水道第55 工区管きよ築造工事	日下町1丁 目1575～ 1582、1672	立会	17.2.15 ～ 17.12.28	第3章で報告。
3	17-40	下事7	山畑・花草 山古墳群	平成16年度公共下水道第22 工区管きよ築造工事	上四条町 1431～ 1574、1462 ～1470	立会	17.9.8 ～ 18.9.4	第4章で報告。
4	17-41	下事8	正法寺山遺 跡	平成16年度公共下水道第20 工区管きよ築造工事	日下町1丁 目1596～ 1597	立会	18.10.1 ～ 18.11.17	第5章で報告。
5	17-58	下事20	五里山古墳 群	平成16年度公共下水道第28 工区管きよ築造工事	上四条町 1171～1745	立会	17.12.15 ～ 18.3.14	第6章で報告。
6	17-73	下事29	千手寺山遺 跡・墓尾古 墳群	平成16年度公共下水道第25 工区管きよ築造工事	上石切町2 丁目1424～ 1426-3他	立会	17.7.5 ～ 17.12.7	第7章で報告。
7	17-225	下事75	半堂・貝花 遺跡	平成16年度公共下水道第47 工区管きよ築造工事	横小路町1 丁目561～ 577、2丁目 87～92・546 ～549	立会	16.7.6 ～ 17.12.26	第8章で報告。
8	17-226	下事84	豊浦谷古墳 群・暗峠越 奈良街道	平成16年度公共下水道第50 工区管きよ築造工事	東豊浦町 843～1175	立会		平成18年5月13日 受付。

	届出番号	下水番号	遺跡名	届出の工事名称	調査場所	調査	調査期間	調査結果・所見
9	17-228	下事90	出雲井遺跡群・豊浦谷古墳群	平成16年度公共下水道第11工区管きよ築造工事	東豊浦町869~889	立会	17.7.6 ~ 18.10.3	第9章で報告。
10	17-269	下事99	法通寺跡	平成16年度公共下水道第39工区管きよ築造工事	東石切町1丁目856~858他	立会	17.9.30 ~ 18.1.30	第10章で報告。
11	17-298	下事107	鬼虎川遺跡	平成16年度公共下水道第206工区管きよ築造工事	弥生町1468~1487	立会	18.6.6 ~ 18.6.30	第11章で報告。
12	17-385	下事142	辻子谷・植附遺跡	平成16年度公共下水道第35工区管きよ築造工事	中石切町2丁目183~204他	立会	17.12.1 ~ 18.5.1	第12章で報告。
13	17-436	下事160	上六万寺遺跡	平成17年度公共下水道第101工区管きよ築造工事	南四条町992~1007、1021、上六万寺町1962~1963	立会	18.4.12 ~ 18.9.4	第13章で報告。
14	17-437	下事168	山畑・客坊山古墳群	平成17年度公共下水道第10工区管きよ築造工事	客坊町1031~1033、上四条町1797~2035	立会	17.9.2 ~ 18.8.21	第14章で報告。
15	17-508	下事184	岩滝山遺跡	平成17年度公共下水道第12工区管きよ築造工事	六万寺町1丁目1590、1604	立会	18.2.6 ~ 18.3.8	第15章で報告。
16	17-593	下事204	上小阪遺跡	平成17年度公共下水道第15工区管きよ築造工事	新上小阪653	発掘調査	18.1.19 ~ 18.1.25	第16章で報告。
17	17-680	下事4	若宮古墳群	平成17年度公共下水道第22工区管きよ築造工事	額田町1141-1	立会	18.4.12 ~ 18.4.24	第17章で報告。
18	17-681	下事6	善根寺山遺跡	平成17年度公共下水道第27工区管きよ築造工事	善根寺町6丁目876-14	立会	18.3.24 ~ 18.4.14	第18章で報告。
19	17-682	下事11	北島遺跡	平成17年度公共下水道第29工区管きよ築造工事	中石切町7丁目2731-1	立会	17.12.12 ~ 17.12.28	第19章で報告。
20	17-751	下事19	市尻遺跡・東高野街道	平成17年度公共下水道第106工区管きよ築造工事	四条町593-1~瓢箪山町109-2	慎重		夜間工事のため、立会調査を実施することができなかった。
21	17-767	下事29	芝坊主山遺跡	平成17年度公共下水道管きよ築造工事（東石切町6丁目地区）	東石切町6丁目1672-88~1672-218	立会	18.4.12 ~ 18.4.19	第20章で報告。
22	17-777	下事38	鬼虎川遺跡	平成17年度公共下水道第34工区管きよ築造工事	西石切町5丁目289	慎重		工事予定地は一般国道170号西石切立体交差事業に伴う発掘調査実施済の場所なので調査は実施しなかった。工事実施。
23	17-778	下事39	縄手遺跡	平成17年度公共下水道管きよ築造工事（末広町）	末広町947~950	立会	18.4.6 ~ 18.4.12	第21章で報告。

	届出番号	下水番号	遺跡名	届出の工事名称	調査場所	調査	調査期間	調査結果・所見
24	18-61	下事68	下六万寺遺跡	平成17年度公共下水道第202工区管きよ築造工事	下六万寺町2丁目1794～1798	立会	18.9.7 ～ 18.9.29	第22章で報告。
25	18-62	下事72	千手寺山遺跡	平成17年度公共下水道第30工区管きよ築造工事	上石切町1丁目1394～1403	立会		平成18年5月1日受付。
26	18-63	下事73	植附遺跡	平成17年度公共下水道管きよ築造工事（西石切町2丁目地区）	西石切町2丁目27-1～484	立会	18.6.14 ～ 18.6.16	第23章で報告。
27	18-105	下事96	辻子谷古墳群	平成17年度公共下水道第11工区管きよ築造工事	上石切町2丁目1300-2～1301-2	慎重		立会調査の予定であったが夜間工事となったので、慎重に変更。工事实施。
28	18-106	下事97	芝ヶ丘遺跡	平成17年度公共下水道第17工区管きよ築造工事	中石切町4丁目2092-4～2099	立会	18.7.24 ～	調査中。
29	18-107	下事98	中垣内遺跡	平成17年度公共下水道第25工区管きよ築造工事	善根寺町4丁目289～310-6	立会	18.11.1 ～	調査中。
30	18-129	下事86	みかん山古墳群	平成17年度公共下水道第205工区管きよ築造工事	東豊浦町2164	立会		平成18年6月9日受付。
31	18-130	下事105	皿池遺跡	平成17年度公共下水道第110工区管きよ築造工事	河内町456～本町668	立会	18.8.3 ～ 18.9.15	第24章で報告。
32	18-131	下事106	芝ヶ丘遺跡	平成17年度公共下水道第23工区管きよ築造工事	北石切町1918～1940	立会		平成18年6月9日受付。
33	18-219	下事128	市尻遺跡	平成17年度公共下水道第107工区管きよ築造工事	四条町587～588	立会	18.7.24 ～	調査中。
34	18-271	下事141	千手寺山遺跡	平成17年度公共下水道第204工区管きよ築造工事	東石切町2丁目363～1636	立会	18.8.25 ～	調査中。
35	18-369	下事154	河内寺跡	平成18年度公共下水道第11工区管きよ築造工事	客坊町697～1163	立会		平成18年10月19日受付。
36	18-370	下事167	西岩田遺跡	平成17年度公共下水道第203工区管きよ築造工事	西岩田4丁目75・153・952・953	立会	18.11.21 ～	調査中。
37	18-371	下事169	浄土寺谷古墳群	平成18年度公共下水道第12工区管きよ築造工事	横小路町1丁目13～27	立会		平成18年10月19日受付。
38	18-392	下事174	芝ヶ丘遺跡	平成17年度公共下水道第18工区管きよ築造工事	中石切町4丁目2158～2187	立会		平成18年11月1日受付。

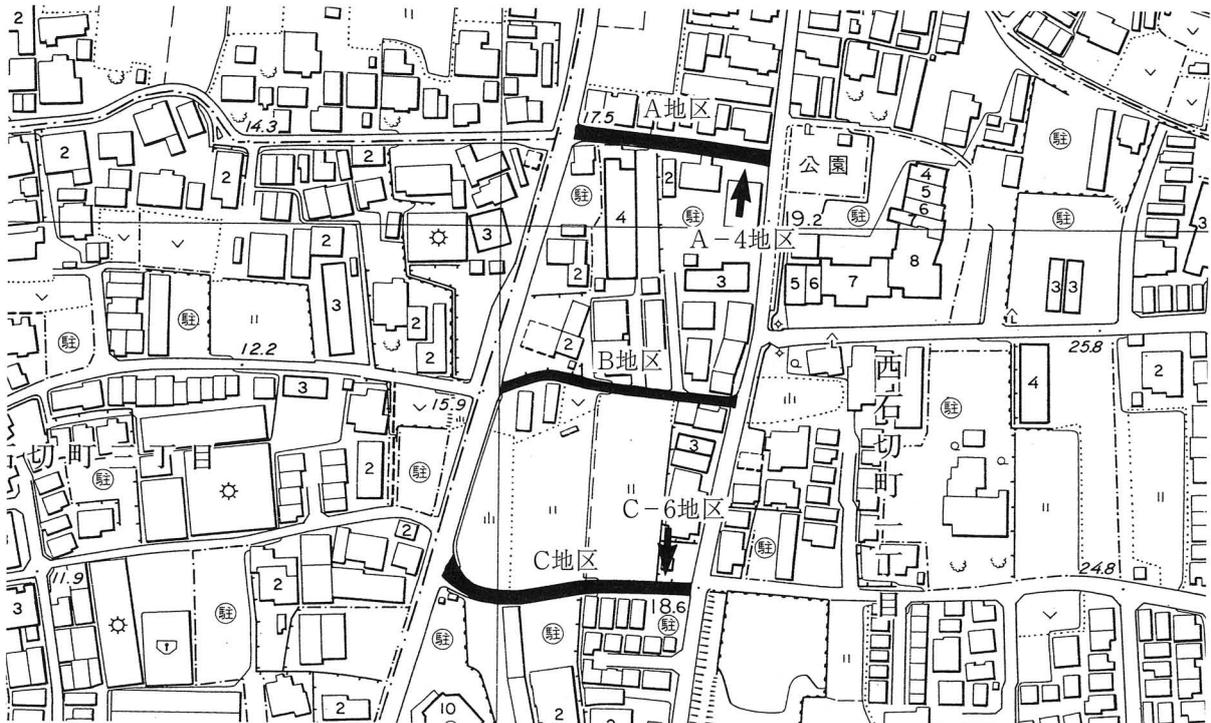


0 3000m

東大阪市内の遺跡分布図

第2章 うえつけ 植附遺跡の調査

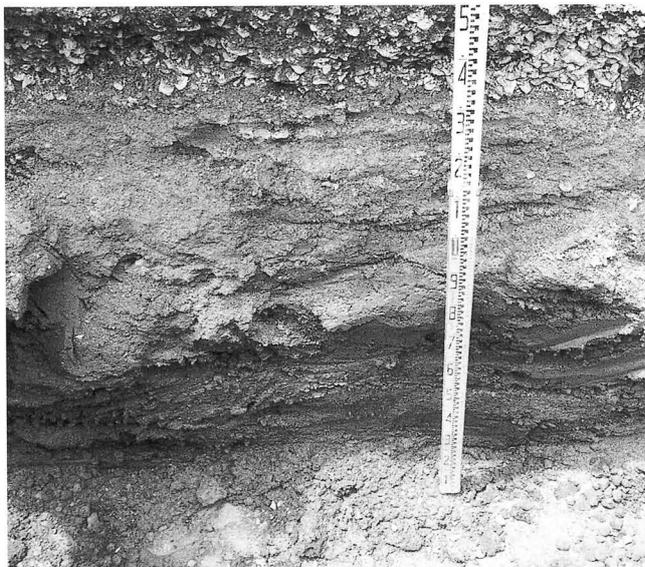
	名 称	内 容
1	事 業 名	平成15年度公共下水道第65工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市西石切町1丁目49～94、55～73、371～394
3	調 査 面 積	207㎡
4	調 査 期 間	平成17年3月31日～12月26日（延べ37日）
5	報 告 担 当	才原
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄けいはんな線（旧東大阪線）新石切駅の北である。当地点は植附遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ234mの間であり、開削工法と一部が推進工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



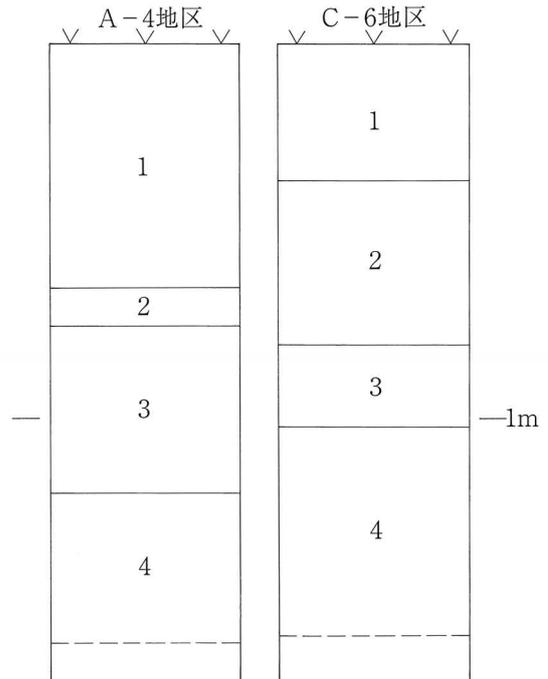
A 地区調査地遠景



A-4 地区土層断面



C-6 地区土層断面



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要 (第2図)

A-4 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂混じり粘質シルト。

第3層 暗緑灰色(7.5GY3/1)細～中粒砂混じり粘質シルト。

第4層 暗緑灰色(5G4/1)粗粒砂混じり粘質シルト。

C-6 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 灰色(5Y4/1)細粒砂混じりシルト。

第3層 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂混じりシルト。

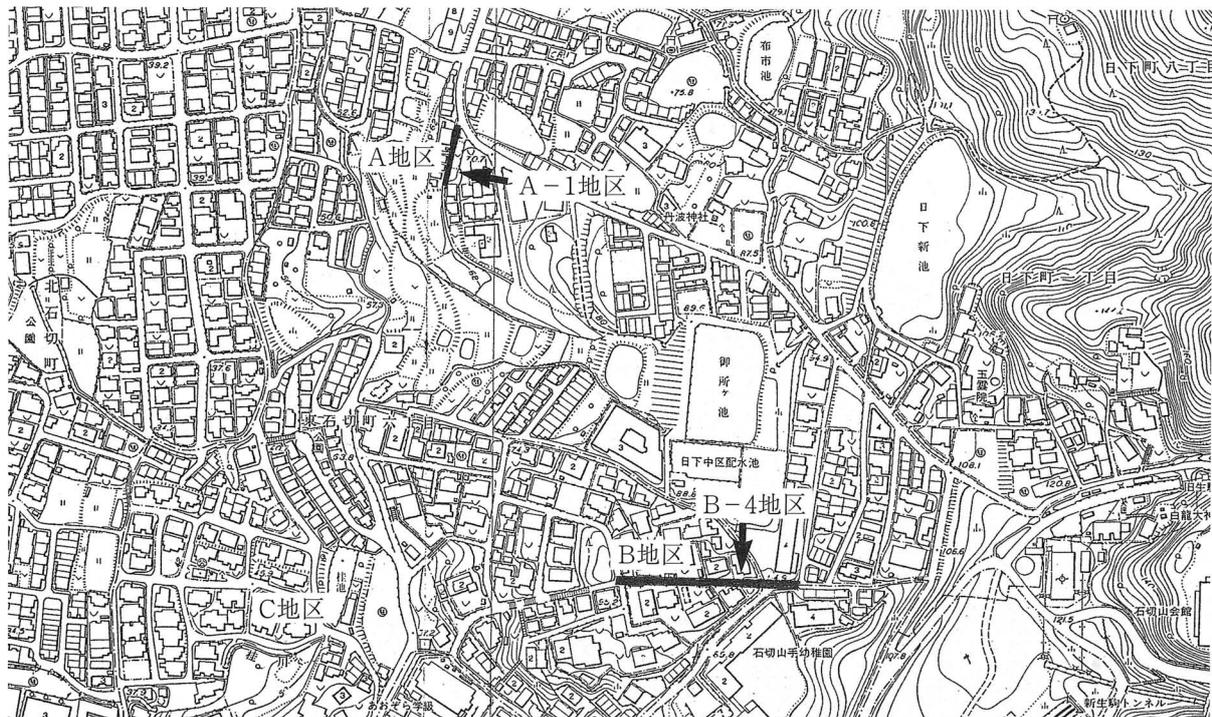
第4層 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混じり粘質シルト。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。

第3章 しょうほうじやま 正法寺山・しばほうずやま 芝坊主山遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成15年度公共下水道第55工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市日下町1丁目1575～1582、1672
3	調 査 面 積	144㎡
4	調 査 期 間	平成17年2月15日～12月28日（延べ23日）
5	報 告 担 当	才原
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は日下新池の西と南西である。当地点は正法寺山・芝坊主山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ170mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/5000)



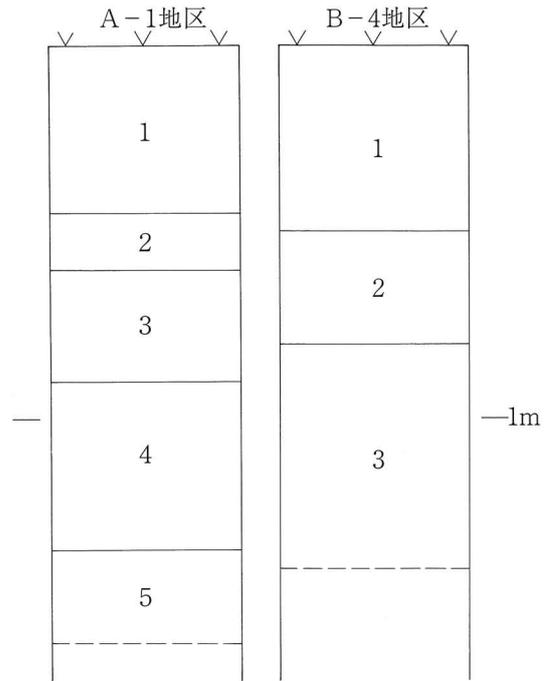
A 地区調査地遠景



A-1 地区土層断面



B-4 地区土層断面



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要 (第2図)

A-1 地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂混じり粘質土。
- 第3層 黄褐色(10YR5/8)中粒砂混じり粘質土。
- 第4層 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じり粘質土。
- 第5層 明黄褐色(10YR6/8)粘土。

B-4 地区の層序

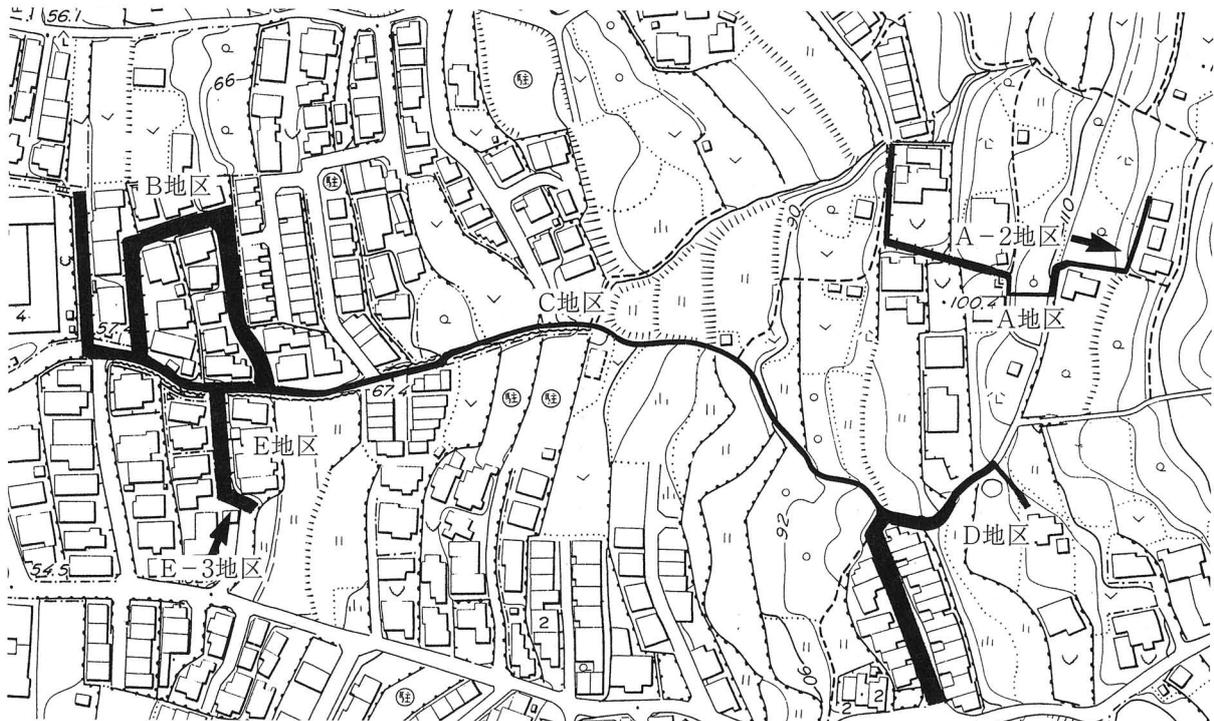
- 第1層 盛土。
- 第2層 明黄褐色(10YR6/8)細粒砂混じり粘質土。
- 第3層 黄褐色(10YR5/6)細～中粒砂混じり粘質土。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。

やまはた はなくさやま
第4章 山畑・花草山古墳群の調査

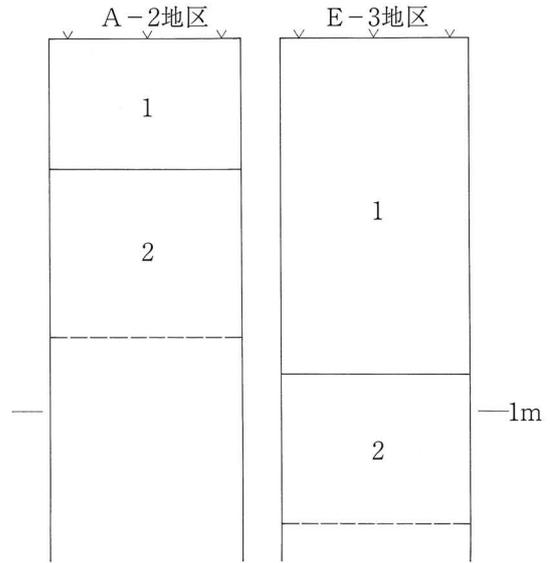
	名 称	内 容
1	事 業 名	平成16年度公共下水道第22工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市上四条町1431～1574、1462～1470
3	調 査 面 積	813㎡
4	調 査 期 間	平成17年9月8日～18年9月4日（延べ120日）
5	報 告 担 当	才原
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は上四条小学校の東である。当地点は山畑・花草山古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ837mの間であり、開削工法である。



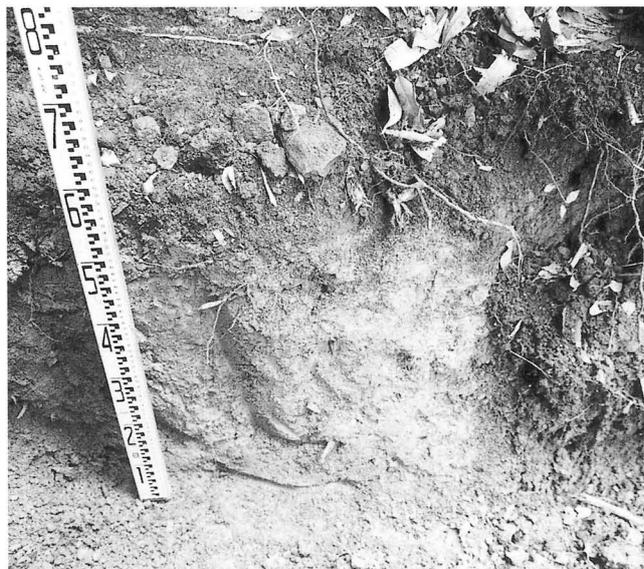
第1図 調査地点位置図 (1/2500)



A 地区調査地遠景



第2図 土層断面柱状図



A-2 地区土層断面



E-3 地区土層断面

1. 調査の概要 (第2図)

A-2 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂混じり粘質シルト。

E-3 地区の層序

第1層 盛土。

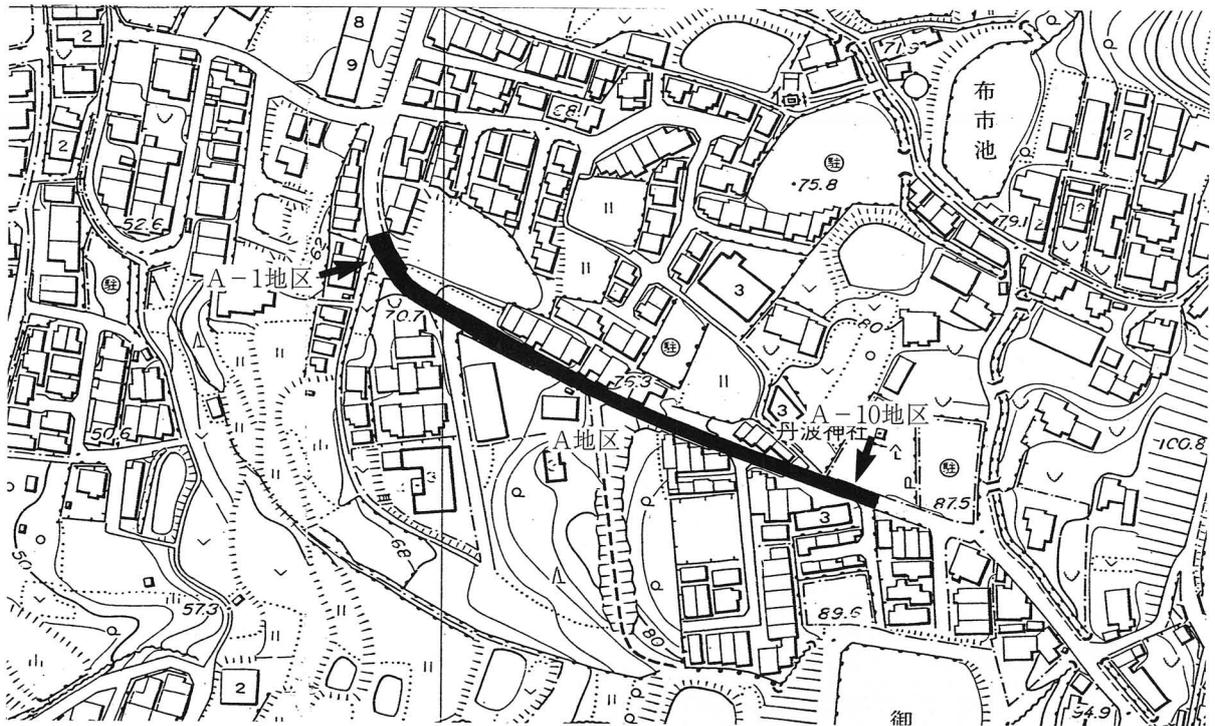
第2層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂混じりシルト質粘土。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。

第5章 しょうほうじやま 正法寺山遺跡の調査

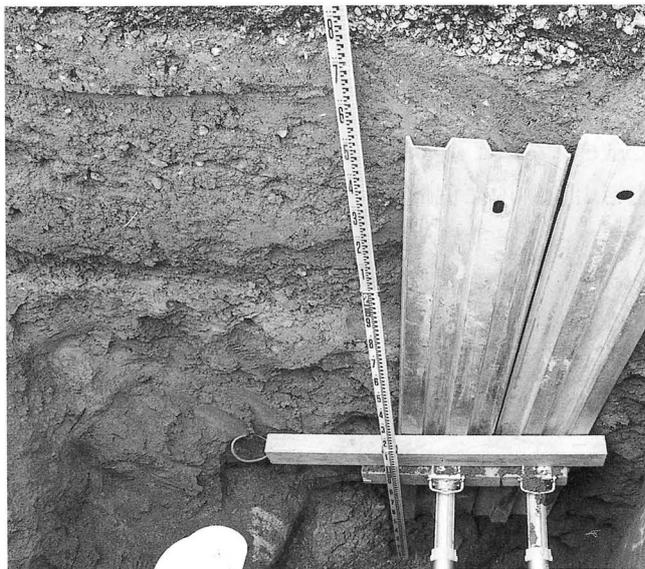
	名 称	内 容
1	事 業 名	平成16年度公共下水道第20工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市日下町 1 丁目1596～1597
3	調 査 面 積	188㎡
4	調 査 期 間	平成18年10月 1 日～11月17日 (延べ14日)
5	報 告 担 当	才原
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は日下新池の西である。当地点は正法寺山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ222mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



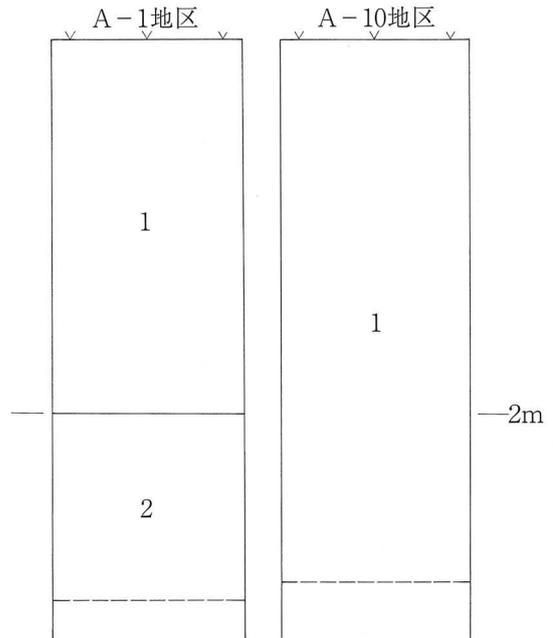
A地区調査地遠景



A-1地区土層断面



A-10地区土層断面



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要 (第2図)

A-1地区の層序

第1層 盛土。

第2層 明褐色(7.5YR5/8)シルト。

A-10地区の層序

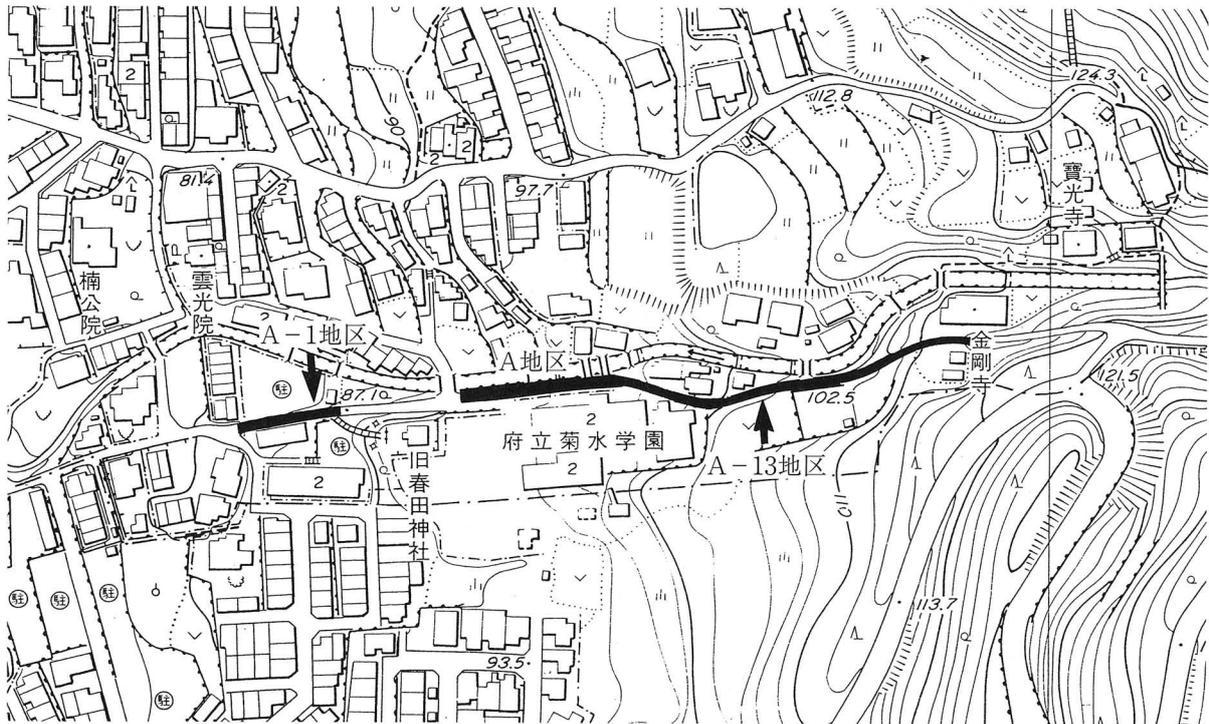
第1層 盛土。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。

ごりやま 第6章 五里山古墳群の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成16年度公共下水道第28工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市上四条町1171～1745
3	調 査 面 積	181㎡
4	調 査 期 間	平成17年12月15日～18年3月14日（延べ29日）
5	報 告 担 当	才原
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪府立東大阪養護老人ホームの北である。当地点は五里山古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ213mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



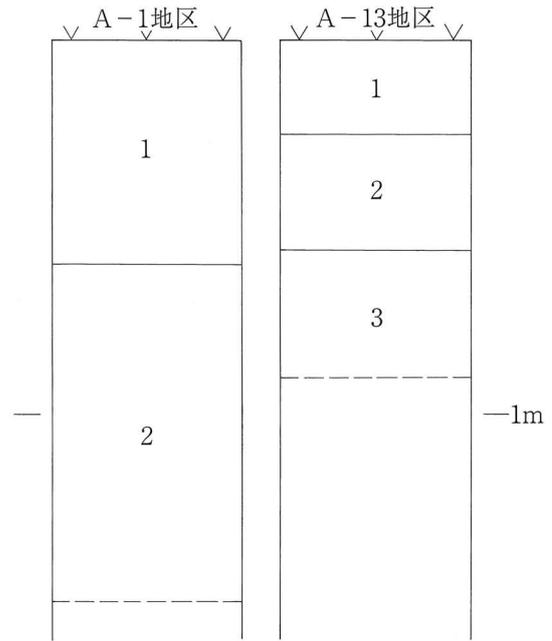
A 地区調査地遠景



A-1 地区土層断面



A-13地区土層断面



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要 (第2図)

A-1 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 褐色(10YR4/6)粗粒砂混じり粘質土。

A-13地区の層序

第1層 盛土。

第2層 褐色(10YR4/4)粗粒砂混じりシルト。

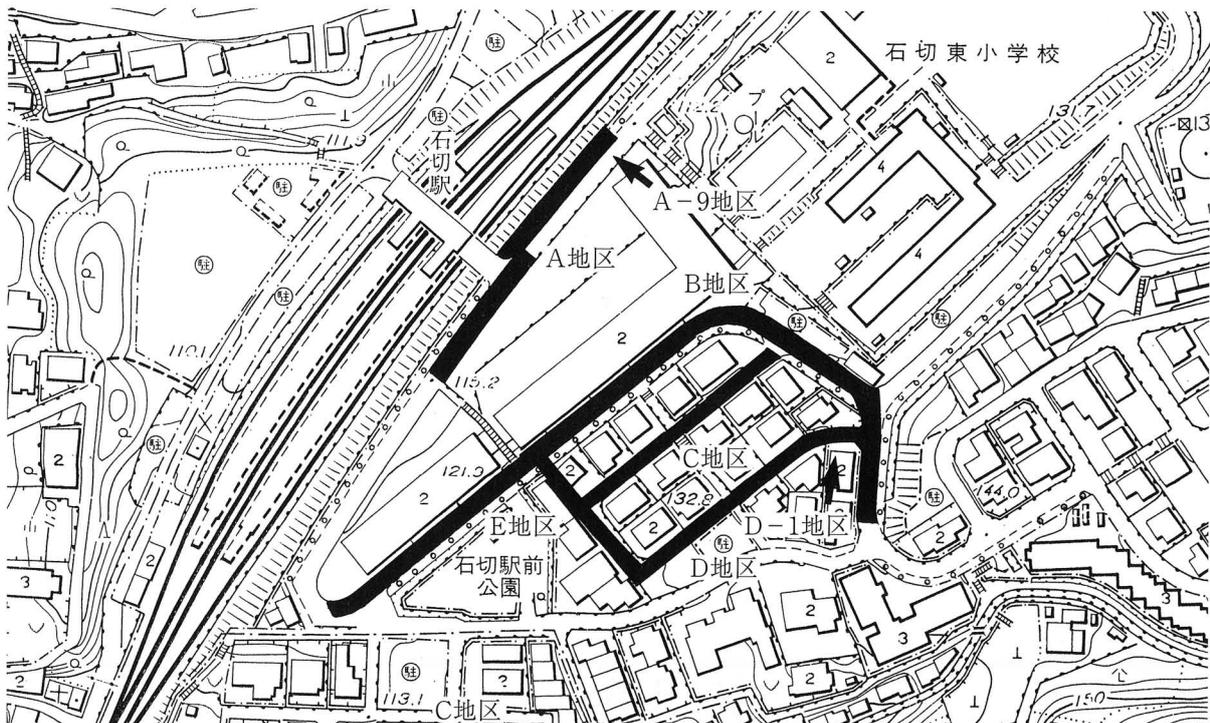
第3層 暗褐色(10YR3/3)粗粒砂混じりシルト。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。

第7章 せんじゅじやま 千手寺山遺跡・墓尾古墳群の調査 はかのお

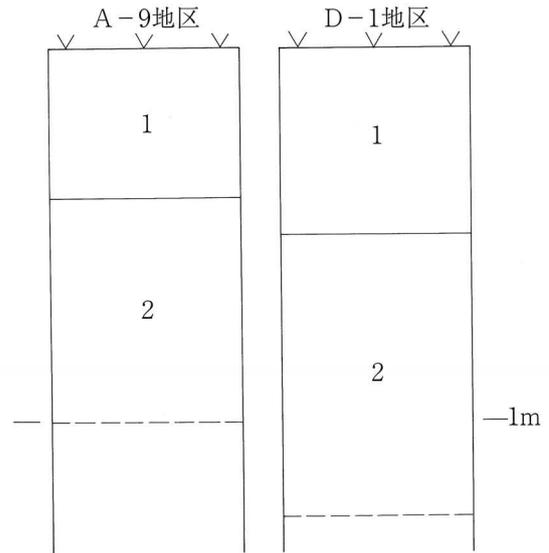
	名 称	内 容
1	事 業 名	平成16年度公共下水道第25工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市上石切町2丁目1424～1426-3他
3	調 査 面 積	413㎡
4	調 査 期 間	平成17年7月5日～12月7日(延べ47日)
5	報 告 担 当	才原
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線石切駅の東である。当地点は千手寺山遺跡・墓尾古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ484mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



A 地区調査地遠景



第2図 土層断面柱状図



A-9 地区土層断面



D-1 地区土層断面

1. 調査の概要 (第2図)

A-9 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂混じりシルト。

D-1 地区の層序

第1層 盛土。

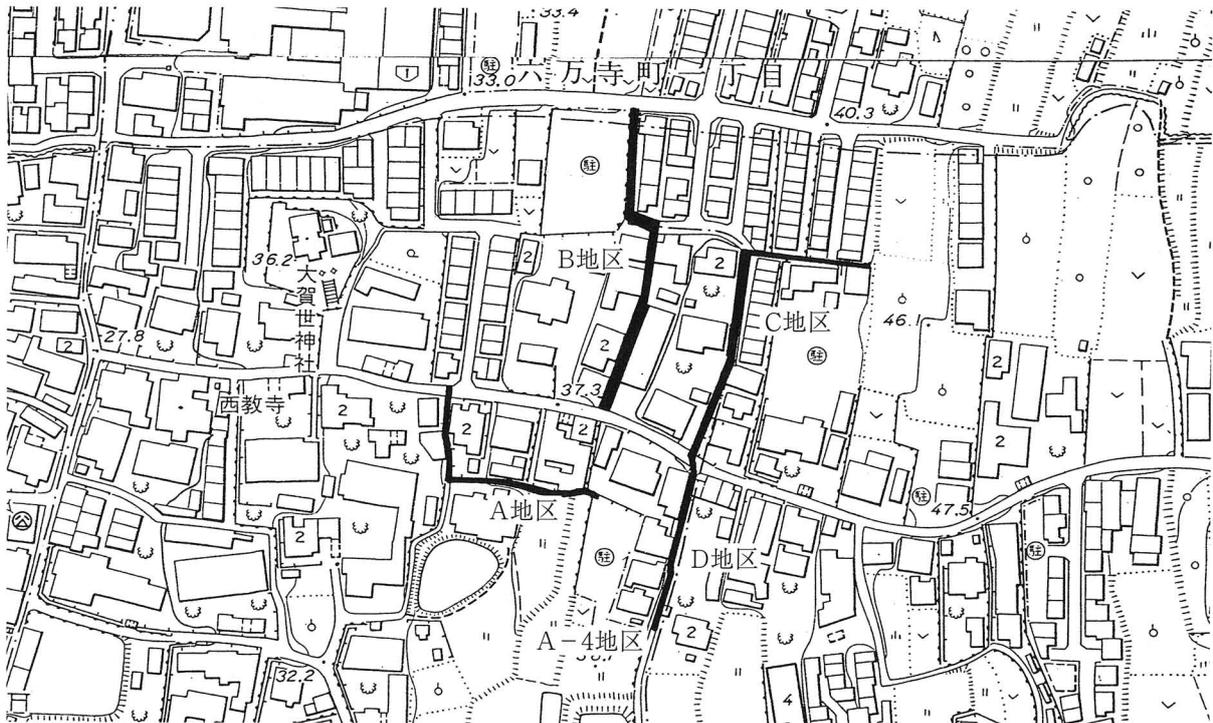
第2層 明褐色(7.5YR5/8)粗粒砂混じりシルト。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。

第8章 ^{はんどう}半堂 (第4次) ・ ^{かいばな}貝花遺跡 (第6次) の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成16年度公共下水道第47工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市横小路町1丁目561～577、2丁目87～92・546～549他
3	調 査 面 積	406㎡
4	調 査 期 間	平成17年7月6日～12月26日 (延べ68日)
5	報 告 担 当	松田
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大賀世神社の東である。当地点は半堂・貝花遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ477mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)

1. 調査の概要

調査区は便宜上A～Dの4地区に分け、A地区より調査を開始した。A地区とD地区は貝花遺跡、B地区とC地区は半堂遺跡にあたる。A・C・D地区で遺物が出土した。

2. 層序 (第2図)

A-12地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト。
- 第3層 オリーブ黒色(5Y3/1)砂。

A-14地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 褐色(10YR4/4)粗粒砂混じりシルト質土。
- 第3層 灰黄褐色(10YR4/2)細～中粒砂混じりシルト。
- 第4層 オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂混じりシルト質土。古代の遺物が出土。

B-10地区の層序

- 第1層 盛土。

C-2地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(10YR3/2)細粒砂混じり粘質シルト。古代～近世期の遺物が出土。

C-16地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 褐灰色(10YR4/1)粗粒砂混じり粘質シルト。
- 第3層 黒褐色(10YR3/1)中粒砂混じり粘質土。

D-7地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂混じりシルト質土。
- 第3層 灰色(5Y4/1)シルト。

3. 出土遺物

今回の調査では、弥生土器、埴輪、須恵器、土師器、瓦質土器、陶器が出土した。細片が多く、図化できたのは34点である。埴輪は川西宏幸氏の「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年を参考にした。

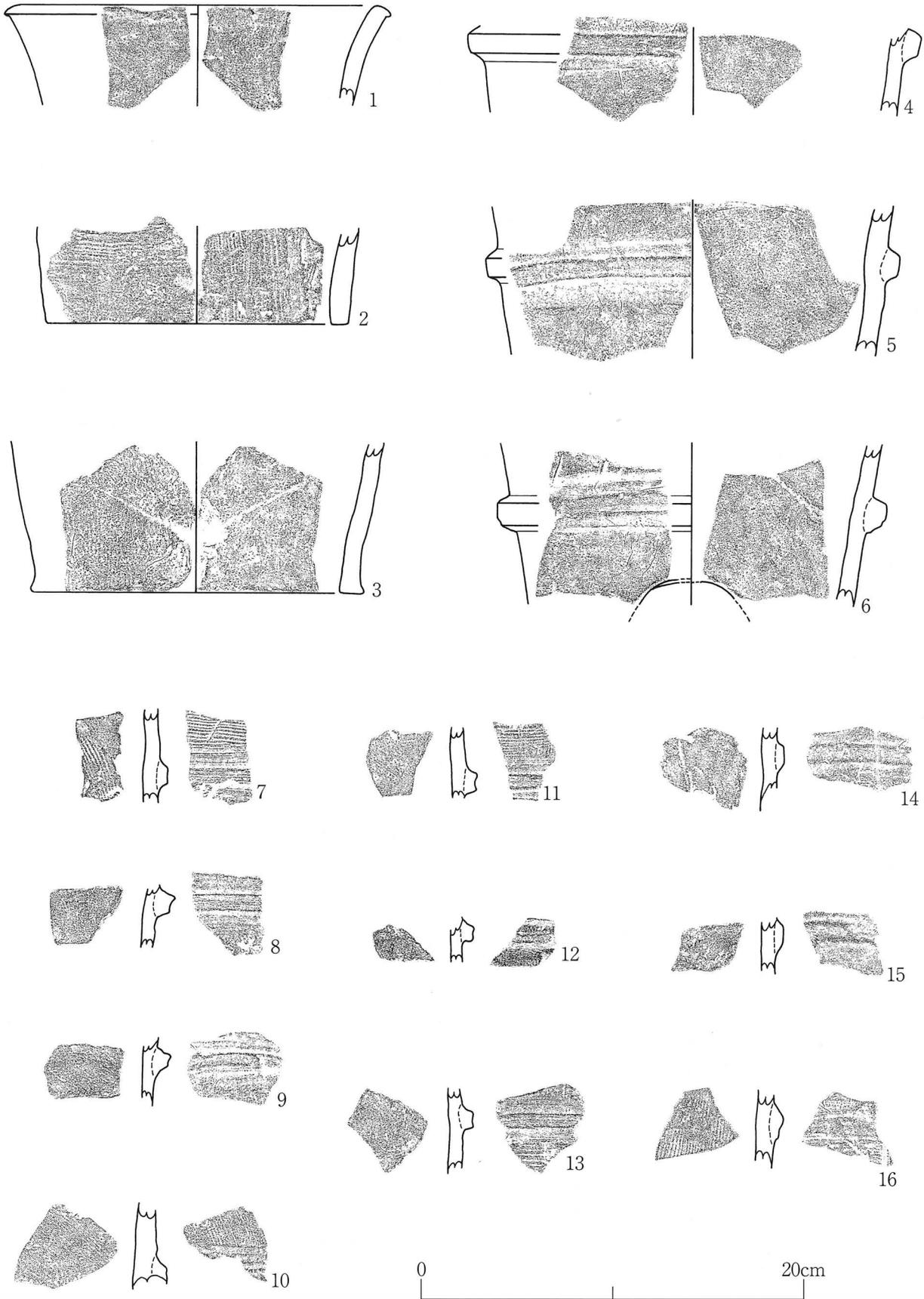
埴輪(第3・4図 1～25)

円筒埴輪と形象埴輪がある。すべてC-2地区の第2層より出土した。黒斑を有しないことから穴窯焼成である。タガの断面が台形のものと突出度が低い不整形なものがあること、器面の2次調整にB種ヨコハケを施すものと1次調整だけのものがあることから、川西編年の第IV期と第V期の2時期があると考えられる。5世紀中頃～6世紀のものである。

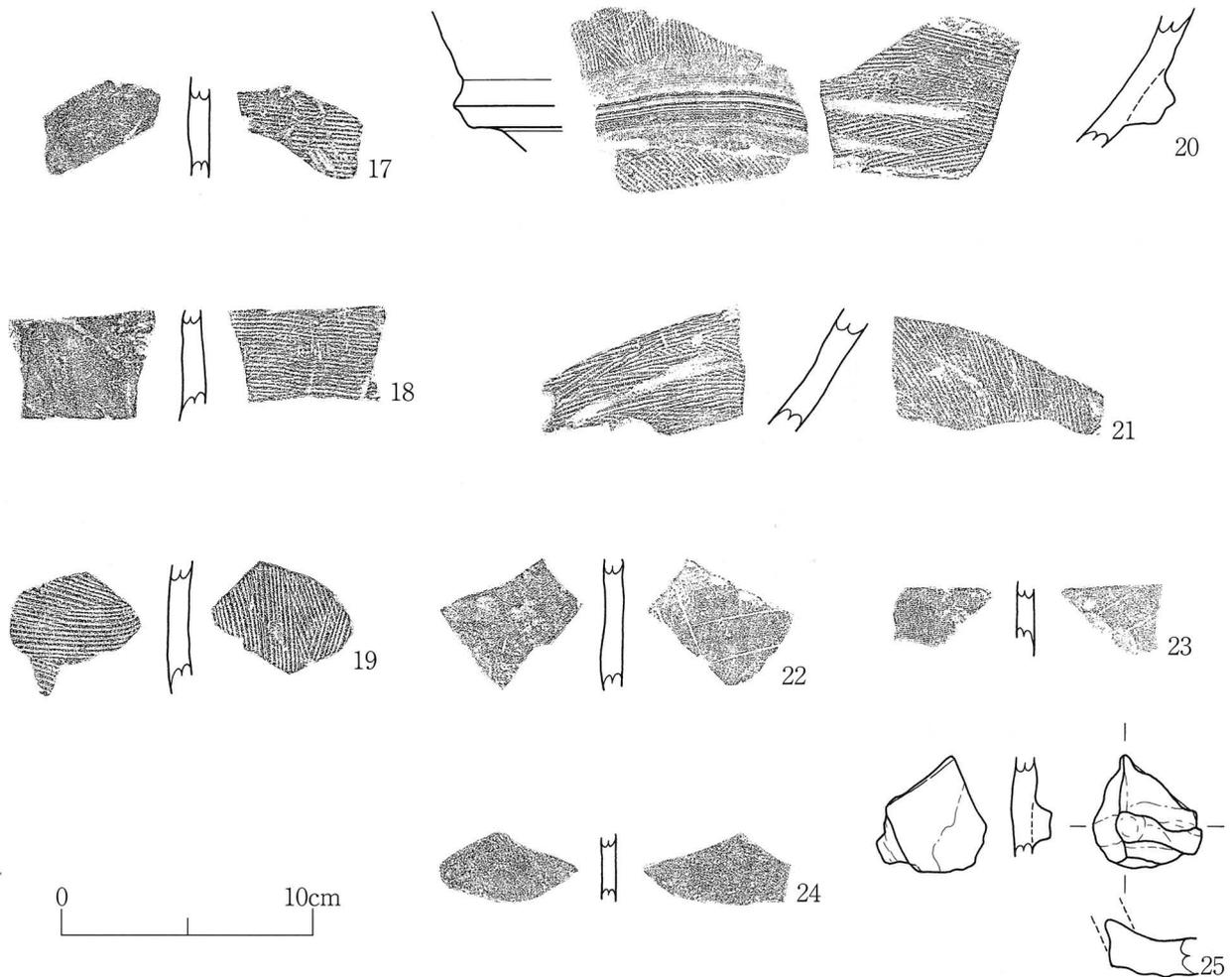
1～19は円筒埴輪である。

1は口縁部である。体部は外傾する。口縁部はやや外反し、口縁端部は面をもつ。内外面はナデ調整する。口径18.6cm、残存高5.3cmを測る。

2・3は基底部である。底面は平らな面をもつ。2はやや外傾する。内面は縦方向のハケメ調整、外面は横方向のハケメ調整する。底径16.6cm、残存高5.1cmを測る。3は外傾する。内外面はナデ調



第3図 出土遺物実測図



第4図 出土遺物実測図

整する。底径17.2cm、残存高7.9cmを測る。

4～19は体部である。4～16はタガが残る。4～13は台形、14～16は低く不整形な断面を呈する。6～9、14は透かし孔をもつが、破片のため形状は不明である。7・11・13・17・18はB種ヨコハケ調整である。4は内外面をナデ調整する。残存高は4.6cmを測る。5はやや外傾する。内外面はナデ調整する。残存高は8.0cmを測る。6は外傾する。内外面はナデ調整する。残存高は7.8cmを測る。7は内面を縦方向のハケメ調整、外面は横方向のハケメ調整する。残存高は5.0cmを測る。8は内外面をナデ調整する。残存高は3.3cmを測る。9は内外面をナデ調整する。残存高は3.6cmを測る。10は内面をナデ調整、外面は斜め方向のハケメ調整する。残存高は4.5cmを測る。11は内面をナデ調整、外面は横方向のハケメ調整する。残存高は3.7cmを測る。12は内外面をナデ調整する。残存高は2.4cmを測る。13は内面をナデ調整、外面は横方向のハケメ調整する。残存高は4.5cmを測る。14は内外面をナデ調整する。残存高は4.4cmを測る。15は風化のため内外面の調整法は不明である。残存高は3.0cmを測る。16は内面を縦方向のハケメ調整、外面はナデ調整する。残存高は4.2cmを測る。17は内面をナデ調整、外面を横方向のハケメ調整する。残存高は4.0cmを測る。18は内面をナデ調整、外面を横方向のハケメ調整する。残存高は4.4cmを測る。19は内面を横方向のハケメ調整、外面を縦方向のハケメ調整する。残存高は4.8cmを測る。

20・21は朝顔形埴輪である。

20は頸部とタガの一段目が残る。タガの断面は台形を呈する。口縁部は欠損する。頸部は大きく外

傾する。外面は縦方向のハケメ調整、タガはナデ調整する。内面は横方向のハケメ調整の後、ナデ調整する。残存高は5.7cmを測る。21は頸部が外傾する。外面は縦方向のハケメ調整する。内面は横方向のハケメ調整の後、ナデ調整する。残存高は4.9cmを測る。

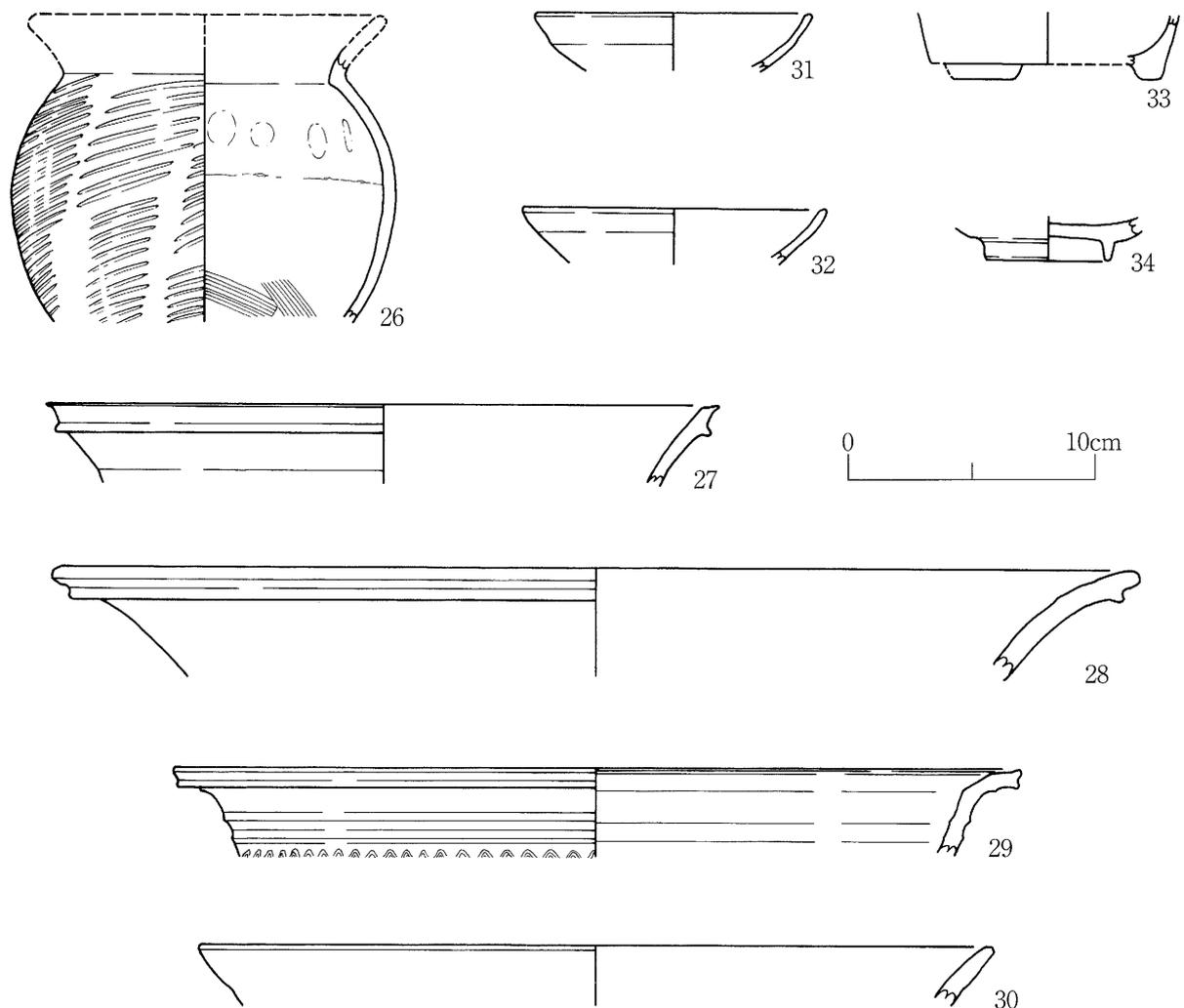
22～25は形象埴輪である。

22・23は盾形埴輪である。片面に線刻を施す。22は縦方向と横方向に2条ずつ線刻が残る。内外面はナデ調整する。残存高は5.3cmを測る。23は斜め方向に2条の線刻が残る。内外面はナデ調整する。残存高は3.0cmを測る。

24・25は器種が不明である。24は内外面をナデ調整する。残存高は2.8cmを測る。25は「L」字状の角をもつ形状を呈する。外面にはタガ状の突帯が残る。突帯は指で押し当てて成形する。内外面はナデ調整する。残存高は4.1cm、残存幅は4.0cmを測る。

弥生土器(第5図 26)

26は甕である。頸部が「く」の字状に外反する。口縁部は欠損しているが、短く外反する形状である。体部外面に煤の付着が見られる。内面上半は指頭圧痕が残り、下半はハケメ調整する。外面は右上がりのタタキ調整の後、ナデ調整する。残存高は12.6cmを測る。胎土中に角閃石を含むことから生駒西麓産である。弥生時代後期のものである。D-8地区より出土した。



第5図 出土遺物実測図

須恵器(第5図 27~29)

27・28は甕である。27は口縁部が外上方へ立ち上がり、口縁端部は平らに納まる。口縁部外面に1条の凸帯を施す。内外面は回転ナデ調整する。外面に自然釉が残る。口径は27.0cm、残存高は3.3cmを測る。28は口縁部がやや外湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く納まる。口縁部外面に1条の凸帯を施す。内外面は回転ナデ調整する。外面に自然釉が残る。口径は43.0cm、残存高は4.5cmを測る。5世紀前半~中頃のものである。29は器台である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は外湾する。口縁端部は窪む。体部外面に2条の凸帯と波状文を施す。内外面は回転ナデ調整する。内面に自然釉が残る。口径は34.0cm、残存高は3.6cmを測る。5世紀中頃~6世紀前半のものである。C-2地区の第2層より出土した。

土師器(第5図 30・31)

30は長胴の甕もしくは羽釜である。口縁部は外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く納まる。内外面はヨコナデ調整する。口径は31.8cm、残存高は2.5cmを測る。平安時代のものである。31は皿である。体部が外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く納まる。内外面はヨコナデ調整する。口径は11.0cm、残存高は2.4cmを測る。14世紀中頃のものである。C-2地区の第2層より出土した。

瓦質土器(第5図 32・33)

32は椀である。体部が外上方へ伸び、口縁部はやや内湾する。口縁端部は丸く納まる。焼成はやや軟質である。内面はヨコナデ調整、外面は指頭圧痕が残る。口径は12.2cm、残存高は2.3cmを測る。14世紀のものである。33は香炉である。体部はやや直立に伸びる。底部は脚を付す。焼成は甘く、にぶい橙色を呈する。内面はヨコナデ調整、外面はナデ調整する。底径は9.0cm、残存高は2.7cmを測る。16世紀のものである。32はA-14地区の第4層、33はA-12地区より出土した。

陶器(第5図 34)

34は椀である。破片のため詳細は不明である。淡い黄色を呈する。高台の断面は逆台形で、やや高い。内外面は釉薬が残る。高台にも釉を施す。底径は5.0cm、残存高は1.8cmを測る。17世紀後半~18世紀前半のものである。C-2地区の第2層より出土した。

4. まとめ

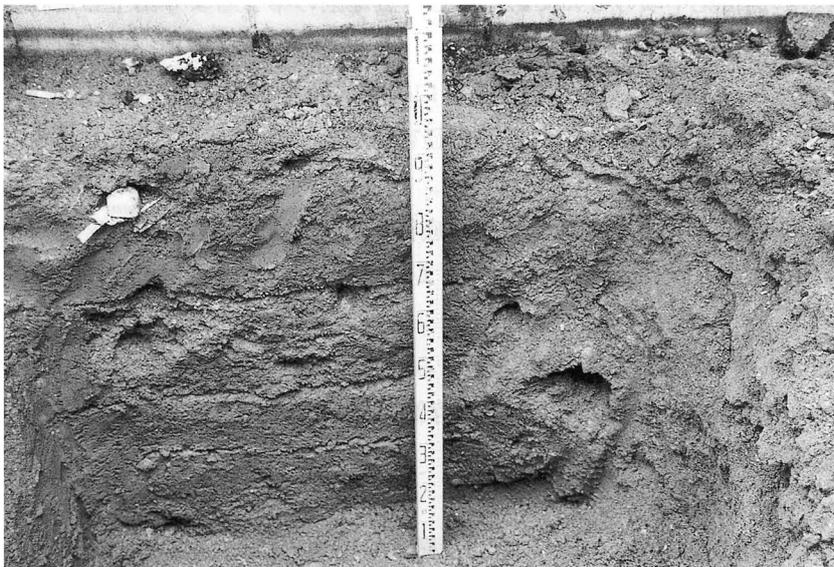
今回の調査では、半堂遺跡と貝花遺跡から遺物が出土した。遺構は検出できなかった。

半堂遺跡は、弥生時代~古墳時代にかけての遺跡である。古墳は、削平されたものが3基確認されており、今回の調査地の北約150mに大賀世神社内の大賀世1号墳、西約100mに2号墳と3号墳が存在する。C-2地区を中心に埴輪がやや多く出土し、タガの断面形と調整法から第IV期・第V期の2時期に分類できる。第IV期の遺物が多くみられることから、主体は第IV期であったと思われる。この付近一帯に、両時期もしくは両時期にわたる古墳が存在した可能性が高い。埴輪が出土した第2層は中世~近世期の遺物も確認できることから、古墳が削平された際の整地層であると考えられる。少なくとも近世期までに削平されたと思われる。遺構は確認できなかった。

貝花遺跡は、弥生時代~中世期にかけての遺跡である。今回の調査では、D-8地区より弥生土器が出土した。D地区南側の第2次調査で、弥生時代後期の遺構・遺物が発見されている。今回の調査では確認できなかったが、当地区周辺にも同時期の遺物包含層が広がる可能性が高い。



A 地区調査地遠景



A-14地区土層断面



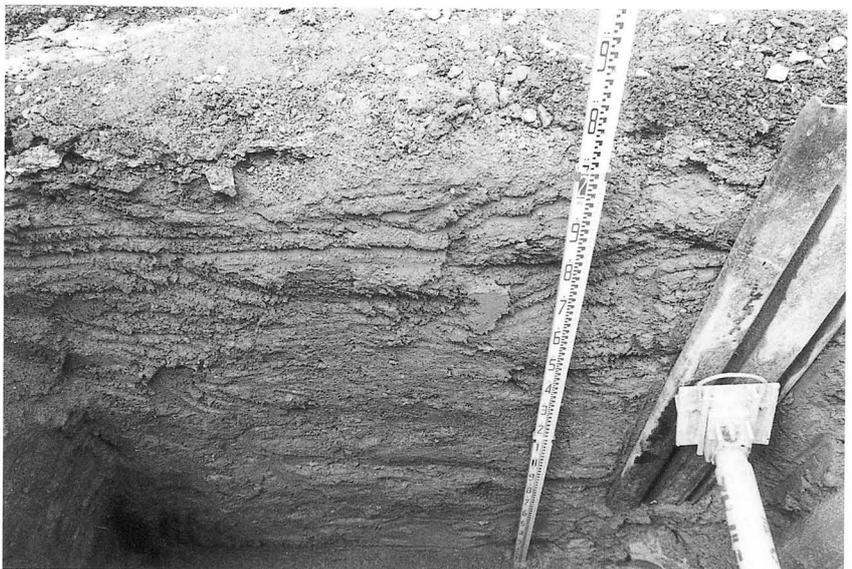
B-2 地区土層断面



C-2 地区土層断面



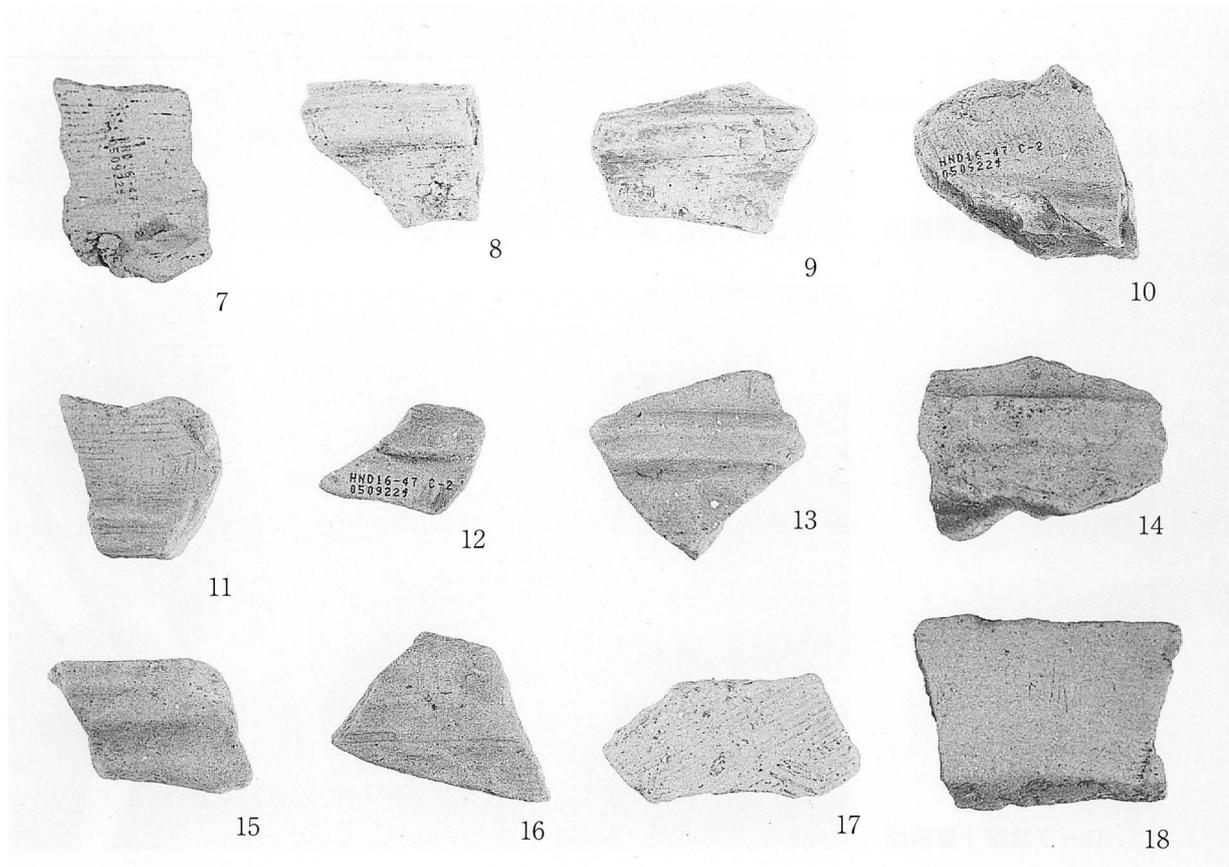
C-3 地区土層断面



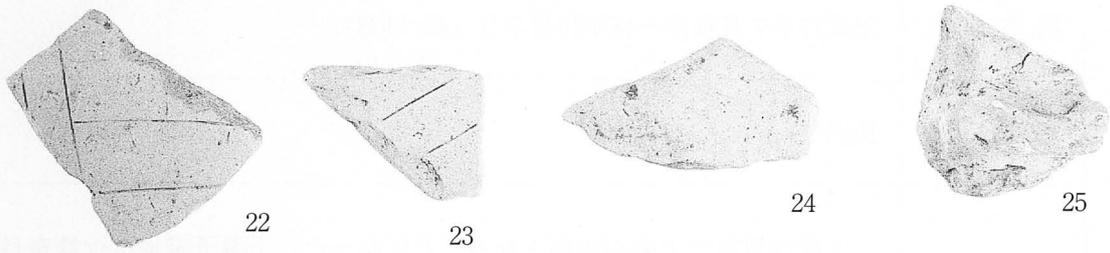
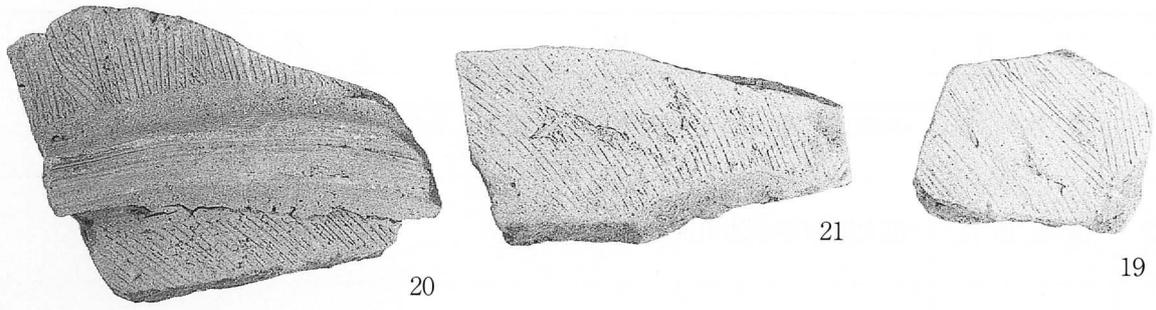
D-7 地区土層断面



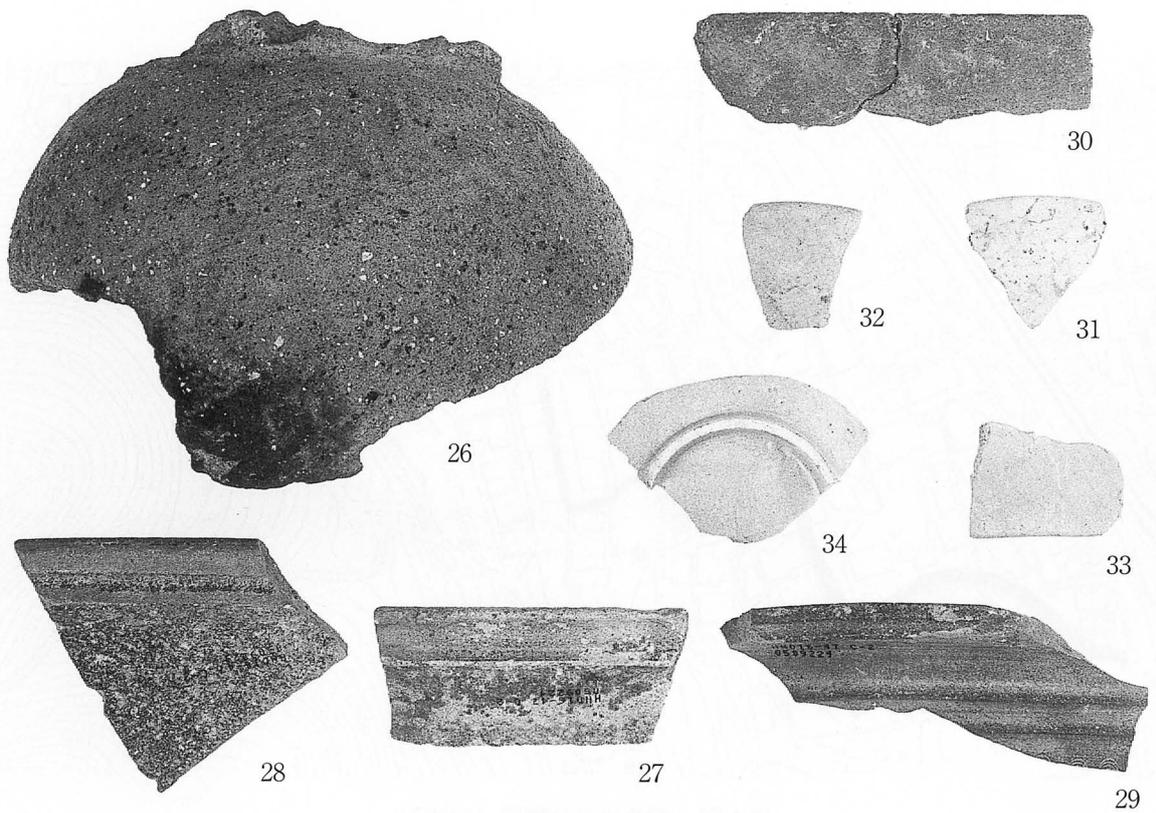
出土遺物 (埴輪)



出土遺物 (埴輪)



出土遺物 (埴輪)



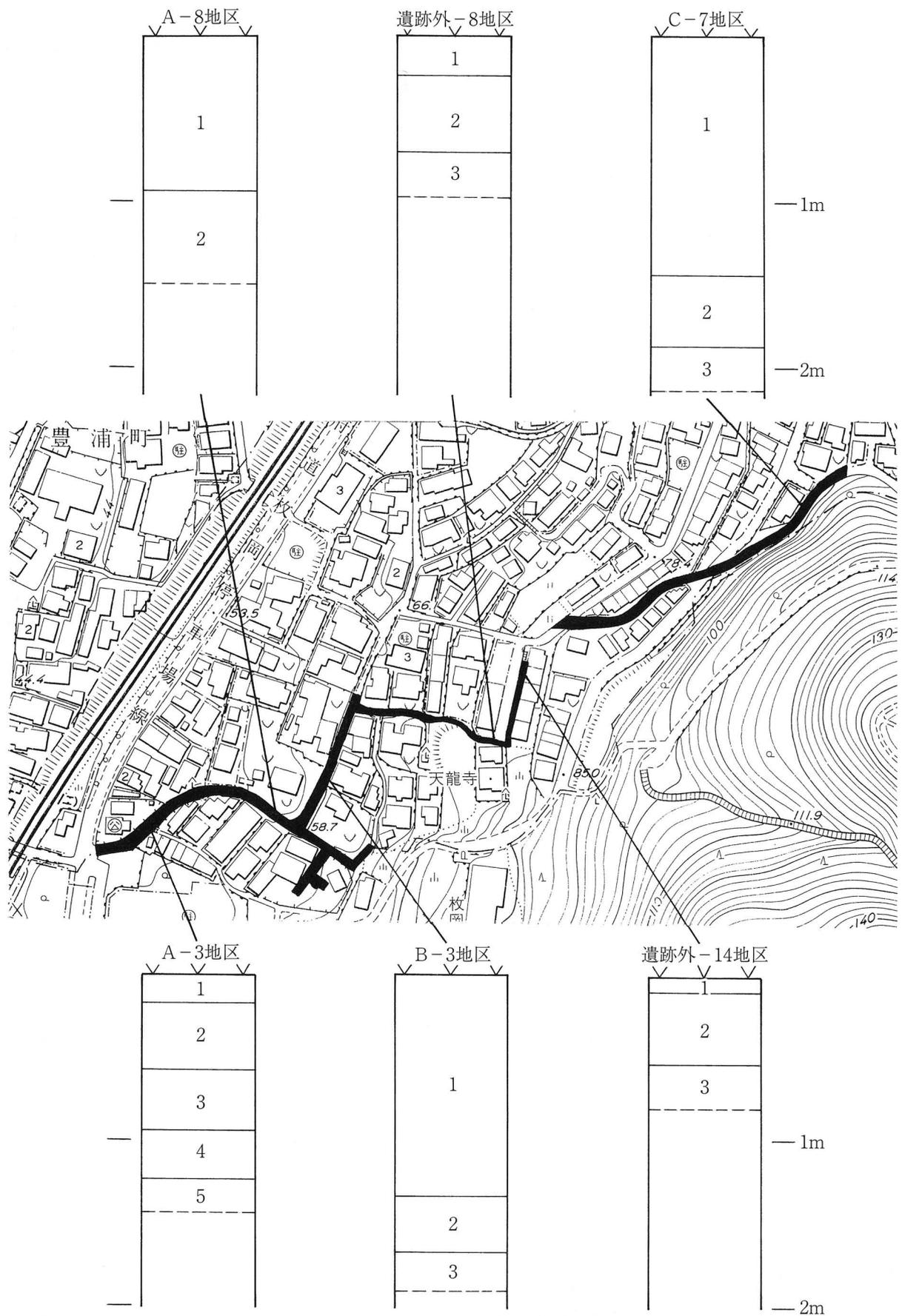
出土遺物 (弥生土器・須恵器・土師器・瓦質土器・陶器)

第9章 いずもい 出雲井遺跡群 (第7次) ・ とようらだに 豊浦谷古墳群の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成16年度公共下水道第11工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市東豊浦町869～889
3	調 査 面 積	293㎡
4	調 査 期 間	平成17年7月6日～18年10月3日 (延べ138日)
5	報 告 担 当	松田
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線枚岡駅の北東である。当地点は出雲井遺跡群・豊浦谷古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ344mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要

調査地区は便宜上A～C地区に分け、A地区より調査を開始した。A・B地区は出雲井遺跡群、C地区は豊浦谷古墳群に属する。A・C地区と遺跡外で遺物が出土した。

2. 層序（第2図）

A-3地区の層位

- 第1層 盛土。
- 第2層 暗褐色(10YR3/3)細～中粒砂混じり粘質シルト。
- 第3層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質土。礫を多く含む。
- 第4層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂混じりシルト質土。
- 第5層 黒褐色(詳細不明)粗粒砂混じり粘質土。

A-8地区の層位

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(10YR3/2)細粒砂混じりシルト。

B-3地区の層位

- 第1層 盛土。
- 第2層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土～粘質シルト。小礫を含む。
- 第3層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト。小礫を含む。

C-7地区の層位

- 第1層 盛土。
- 第2層 暗緑灰色(5G4/1)細粒砂混じり粘質土～粘土。
- 第3層 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細粒砂混じりシルト。

遺跡外-8地区の層位

- 第1層 盛土。
- 第2層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂混じり粘質シルト。礫を含む。
- 第3層 灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂混じりシルト。

遺跡外-14地区の層位

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒色(10YR2/1)粗粒砂混じり粘質土。
- 第3層 暗褐色(10YR3/4)中粒砂混じり粘質土。

3. 出土遺物（第3図）

今回の調査では、須恵器、土師器、瓦質土器、備前焼、寛永通宝が出土した。細片が多く、図化できたのは11点である。瓦質土器は図化できるものがなかった。

1～5は須恵器である。1は蓋杯である。口縁端部は丸く納まる。内外面は回転ナデ調整する。口径は12.6cm、残存高は2.7cmを測る。2～4は杯身である。2は口縁端部がやや鋭く納まる。受部は外上方にのびる。内外面は回転ナデ調整する。口径は10.2cm、残存高は1.9cmを測る。3は口縁端部を丸く納める。内外面は回転ナデ調整する。口径は10.6cm、残存高は3.2cmを測る。4は高台が残る。内外面はナデ調整する。底径は8.2cm、残存高は1.0cmを測る。3・4は軟質である。5は器台の体部片である。内面は回転ナデ調整と見込み部に同心円状の当て具痕が残る。外面はタタキ調整する。残存高は3.5cmを測る。1・2・5は6世紀後半～7世紀中頃のものである。3は7世紀後半、4は7世紀後半～8世紀前半のものである。1・2・5はA-3地区、3は遺跡外-7地区、4は遺跡外-

14地区より出土した。

6～9は土師器の皿である。6は口縁部がやや外反し、口縁端部は内面に段をもつ。内面はナデ調整の後、放射線状の暗文を施す。外面は上半をヨコナデ調整、下半は指頭圧痕が残る。口径は12.0cm、残存高は3.2cmを測る。7世紀後半～8世紀前半のものである。7・8は口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く納まる。内外面はヨコナデ調整する。外面の下半には指頭圧痕が残る。7の口径は10.0cm、残存高は1.8cm、8の口径は10.8cm、残存高は2.1cmを測る。9は口縁部がやや外反し、口縁端部は尖り気味に納まる。体部は段がみられる。内外面はヨコナデ調整する。外面の下半には指頭圧痕が残る。口径は8.2cm、残存高は1.8cmを測る。鎌倉時代のものである。6はA-4地区、7は遺跡外-6地区、8はA-7地区、9はA-3地区より出土した。

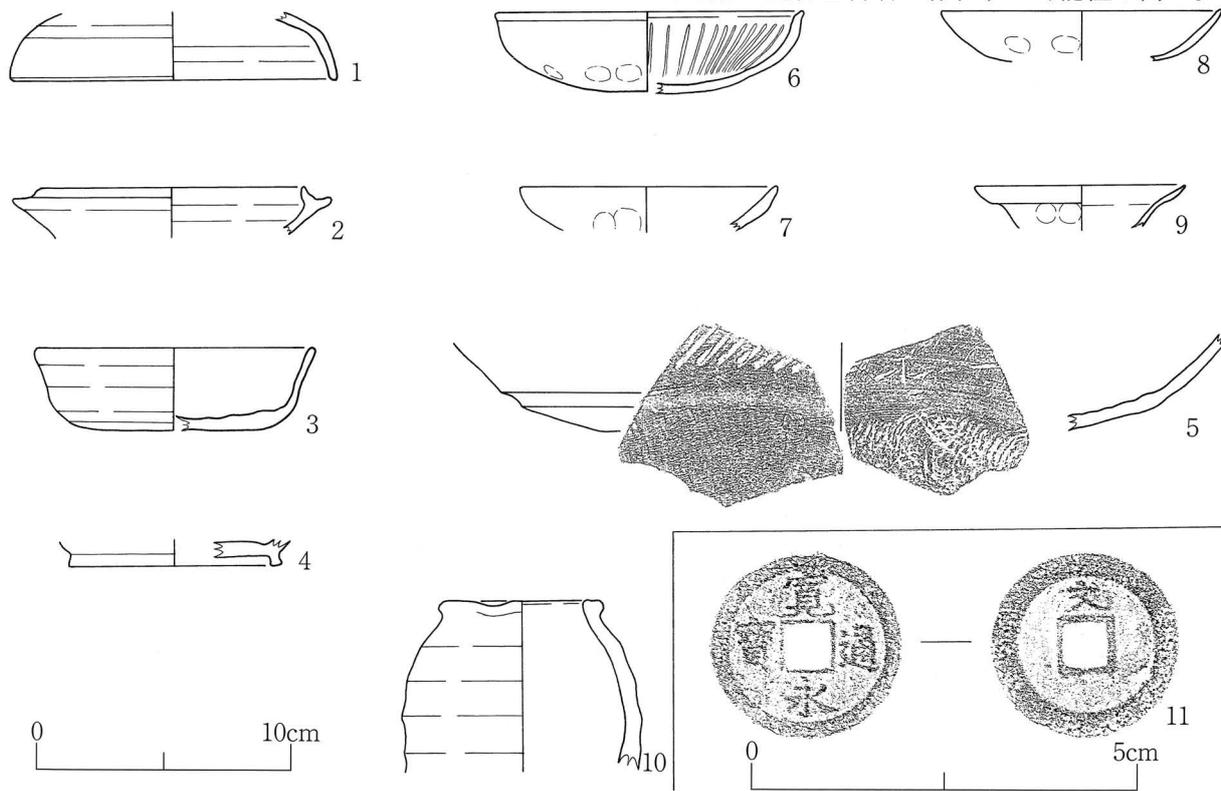
10は備前焼の壺である。内外面は回転ナデ調整する。やや小型である。口縁部に受け口がみられる。口径は6.1cm、残存高は6.7cmを測る。近世期のものである。C-9地区より出土した。

11は寛永通宝である。ほぼ完形である。径は2.4cm、郭孔は0.6cm、厚さは0.12cm、重量は3.00gを測る。A-7地区より出土した。

4. まとめ

出雲井遺跡群は現在までに6次の調査が行なわれており、14基の古墳をはじめ、中世期～近世期の火葬土壙墓や井戸・柱穴などが検出されている。今回の調査では古墳時代～近世期の遺物を確認した。豊浦谷古墳群は古墳時代の小規模な群集墳である。4基で構成すると考えられており、そのうちの2基が現存する。第1次調査では平安時代後期～鎌倉時代の遺物や、掘立柱建物などの遺構も発見されている。今回の調査では近世期の遺物を確認した。

また、遺跡外からも遺物を採集した。出雲井遺跡群の北側に位置し、工事範囲のほぼ全域から古墳時代～中世期の遺物を確認した。遺物はいずれの地点も掘削土からの採集である。土層観察で明確な遺物包含層を確認することはできなかったが、近辺に当時期の遺物包含層が存在する可能性が高い。



第3図 出土遺物実測図



A 地区調査地遠景



A-3 地区土層断面



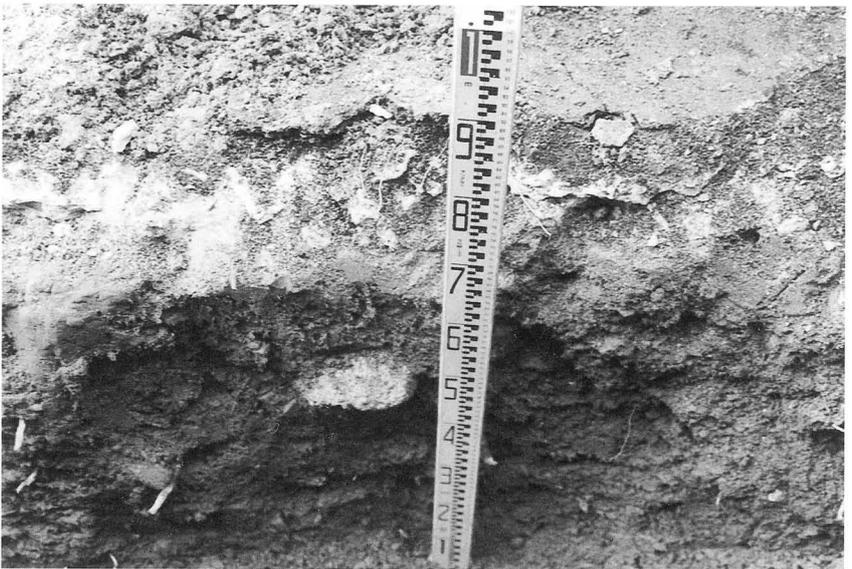
B-3 地区土層断面



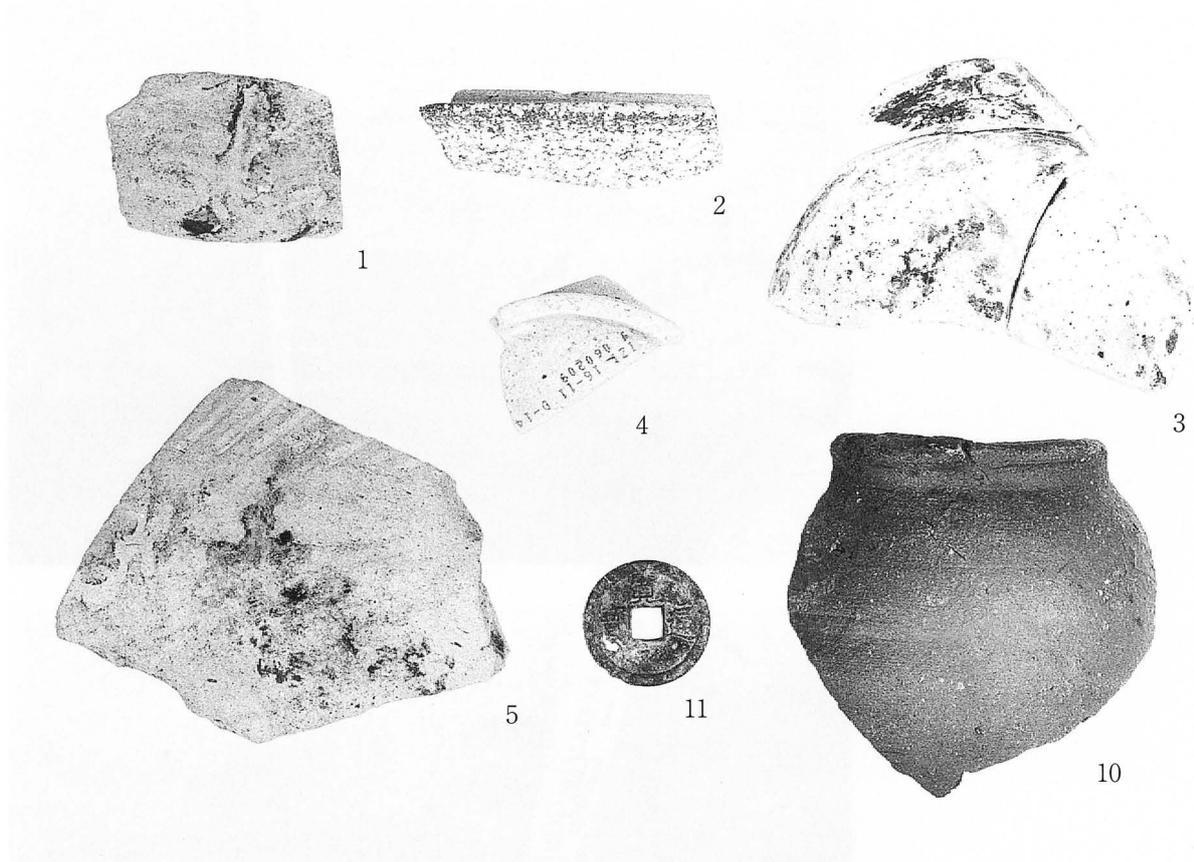
C-7 地区土層断面



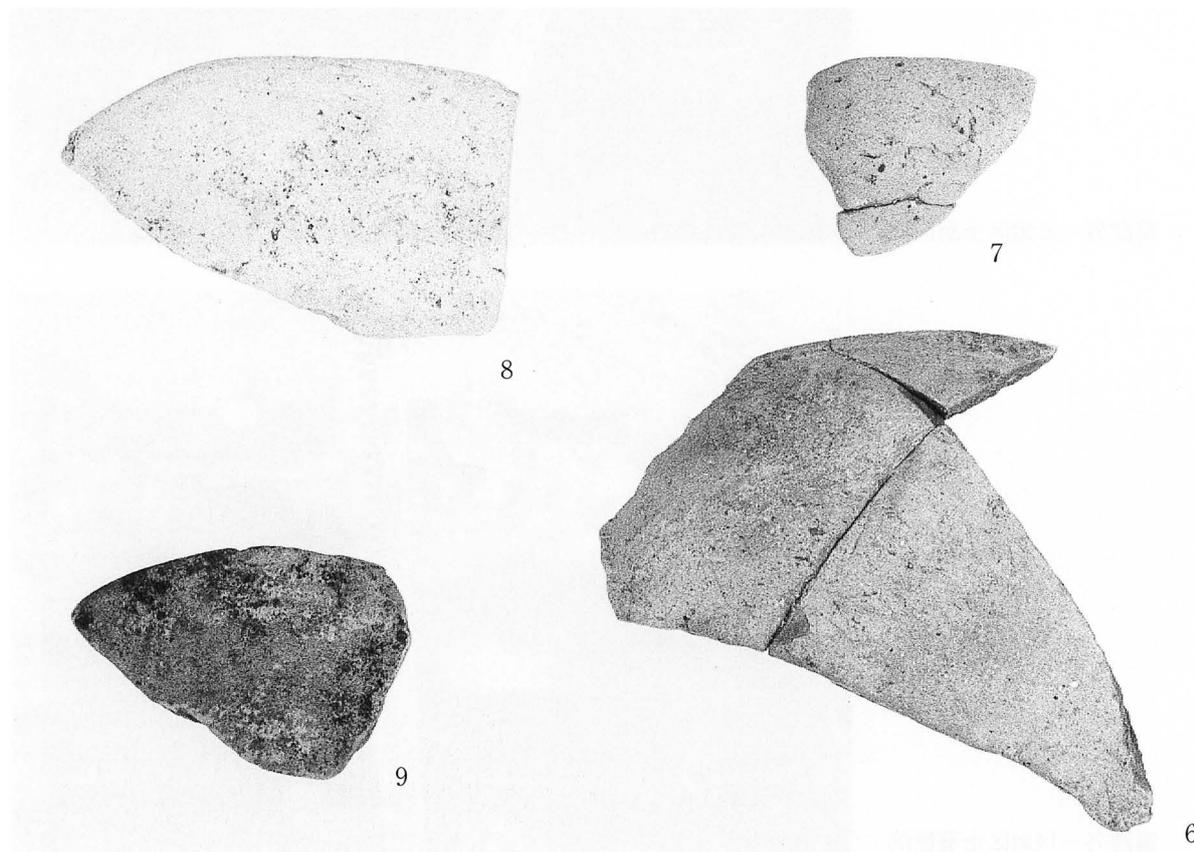
遺跡外-8 地区土層断面



遺跡外-14 地区土層断面



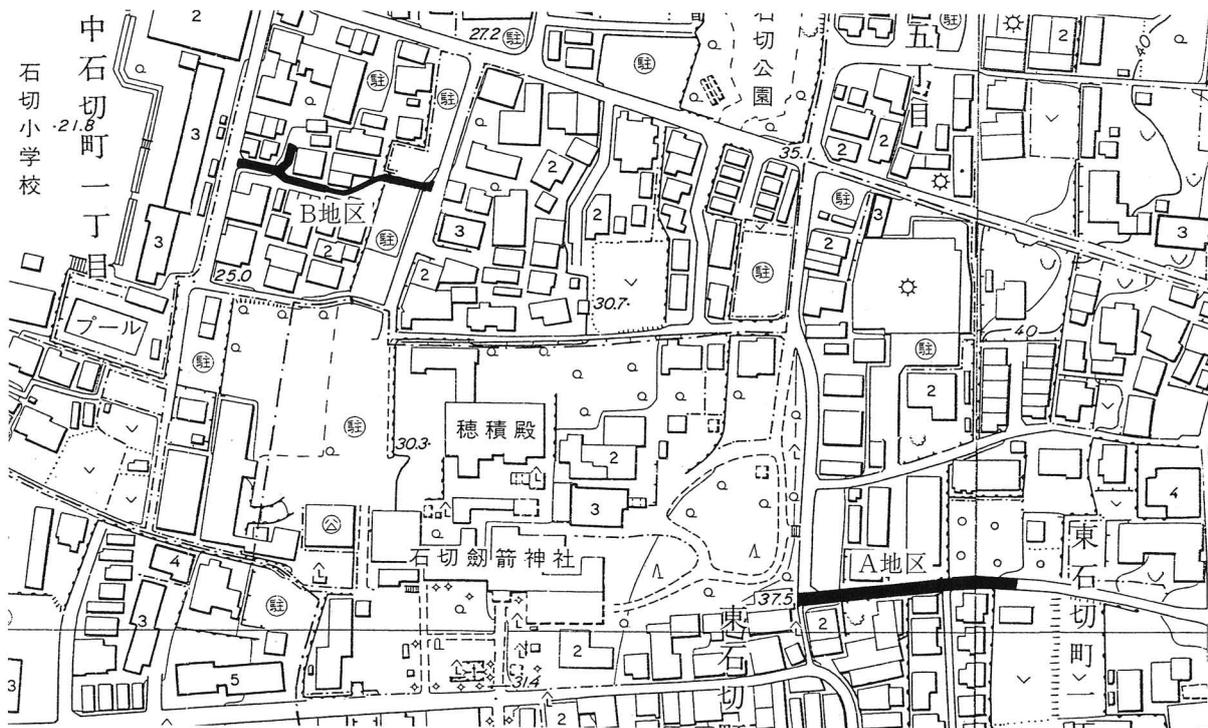
出土遺物（須恵器・備前焼・寛永通宝）



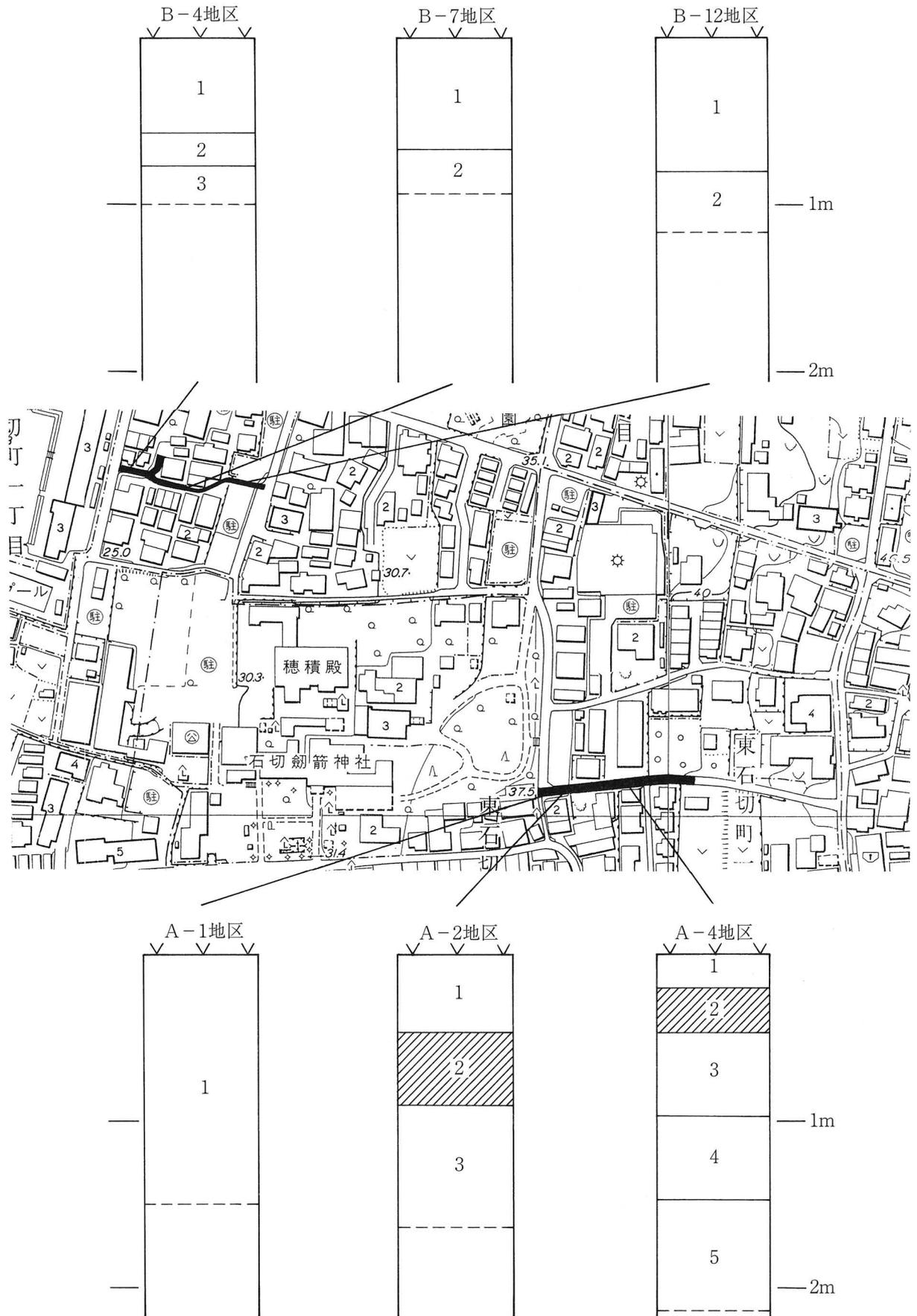
出土遺物（土師器）

第10章 ほうつうじ 法通寺跡の第4次調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成16年度公共下水道第39工区管きよ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市東石切町1丁目856～858他
3 調 査 面 積	128㎡
4 調 査 期 間	平成17年9月30日～18年1月30日（延べ40日）
5 報 告 担 当	松田
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は石切小学校の東である。当地点は法通寺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ151mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要

調査地区は便宜上A・B地区に分け、A地区より調査を開始した。A地区で遺物が出土した。

2. 層序（第2図）

A-1地区の層序

第1層 盛土。

A-2地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂混じり粘質シルト。古代～中世期の遺物が出土。

第3層 黒色(7.5YR1.7/1)細粒砂混じり粘質シルト。

A-4地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂混じり粘質シルト。古代～中世期の遺物が出土。

第3層 オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂混じり粘質土。

第4層 黒色(2.5Y2/1)粗粒砂混じり粘質土。

第5層 黒色(2.5Y2/1)粗粒砂混じり粘質土。巨礫を多く含む。

B-4地区の層序

第1層 盛土。

第2層 灰オリーブ色(7.5Y4/2)粗粒砂混じり粘質シルト。小～中礫を含む。

第3層 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂混じり粘質土。

B-7地区の層序

第1層 盛土。

第2層 暗褐色(10YR3/4)細粒砂混じり粘質土。礫を含む。

B-12地区の層序

第1層 盛土。

第2層 褐色(10YR4/4)粗粒砂混じり粘質シルト。

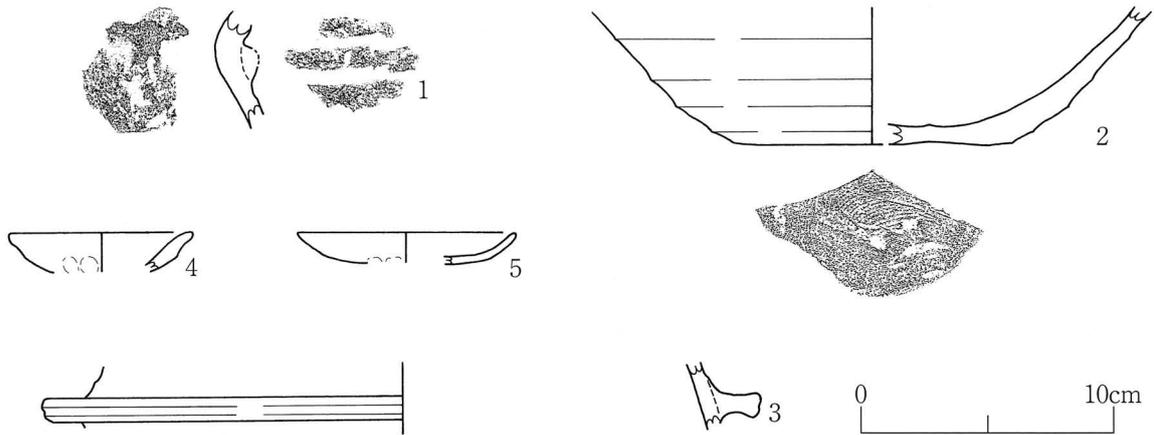
3. 出土遺物（第3図）

今回の調査では、埴輪、須恵器、土師器、瓦質土器が出土した。細片が多く、図化できたのは5点である。瓦質土器は図化できるものがなかった。

1は埴輪である。タガ部は低く、断面は台形を呈する。先端が欠損している。細片のため詳細は不明であるが、朝顔形埴輪の頸部と考えられる。内面は風化のため調整法が不明である。外面はヨコナデ調整する。残存高は4.8cmを測る。古墳時代のものである。A-2地区の第2層より出土した。

2は東播系須恵器の捏鉢の底部である。体部は外上方へ立ち上がる。内面はナデ調整する。外面はケズリ調整の後、ナデ調整する。底部は糸切痕が残り、その上をナデ調整する。底径は9.0cm、残存高は5.5cmを測る。鎌倉時代のものである。A-2地区の第2層より出土した。

3～5は土師器である。3は羽釜である。口縁部は欠損する。体部は内上方へ立ち上がる。鏝部の先端は丸く納まる。内面はナデ調整する。外面はヨコナデ調整する。残存高は2.8cmを測る。鎌倉時代のものである。4・5は皿である。4は体部が外上半へ立ち上がる。口縁部はナデによる窪みをもつ。口縁端部は丸く納まる。内面はナデ調整する。外面上半はヨコナデ調整、下半は指頭圧痕が残る。口径は7.2cm、残存高は1.6cmを測る。13世紀後半のものである。5は体部が外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く納まる。内面はナデ調整する。外面上半はヨコナデ調整、下半は指頭圧痕が残る。口径



第3図 出土遺物実測図



A地区調査地遠景



A地区調査状況

は8.6cm、器高は1.2cmを測る。13世紀後半のものである。A-2地区の第2層より出土した。

4. まとめ

今回の調査で遺物が出土した。A-2～4地区は、昨年度の下水調査で法通寺関連と思われる石の配列を確認した第3次調査地に隣接している。また西約100mに位置する第1次調査地では、建物遺構が多く検出されている。今回遺構を確認することはできなかったが、平安～鎌倉時代の遺物が出土しており、周辺に遺物包含層が分布していると考えられる。

その中で埴輪が1点出土している。破片のため時期等は不明であるが、これまでの調査で埴輪の出土例はなく、近隣の神並古墳群などからの混入品の可能性が考えられる。



A-1 地区土層断面



A-2 地区土層断面



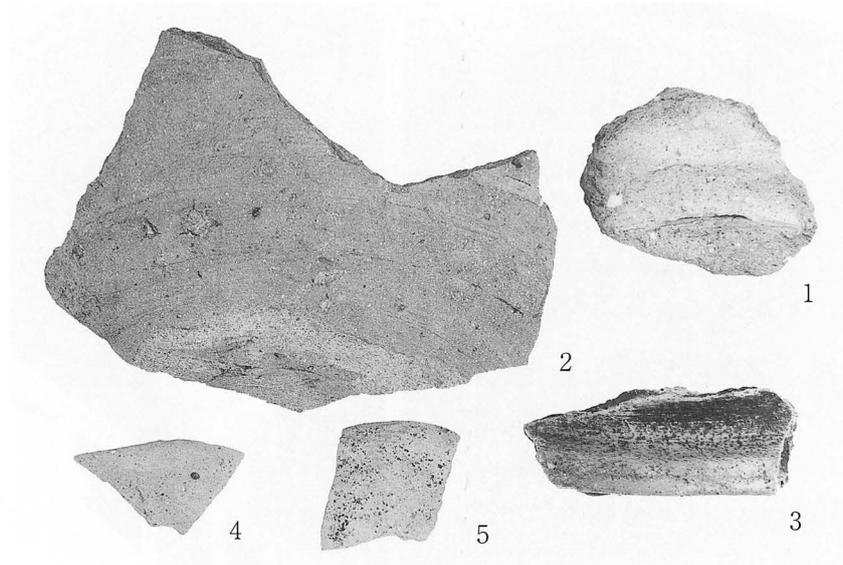
A-4 地区土層断面



B-4 地区土層断面



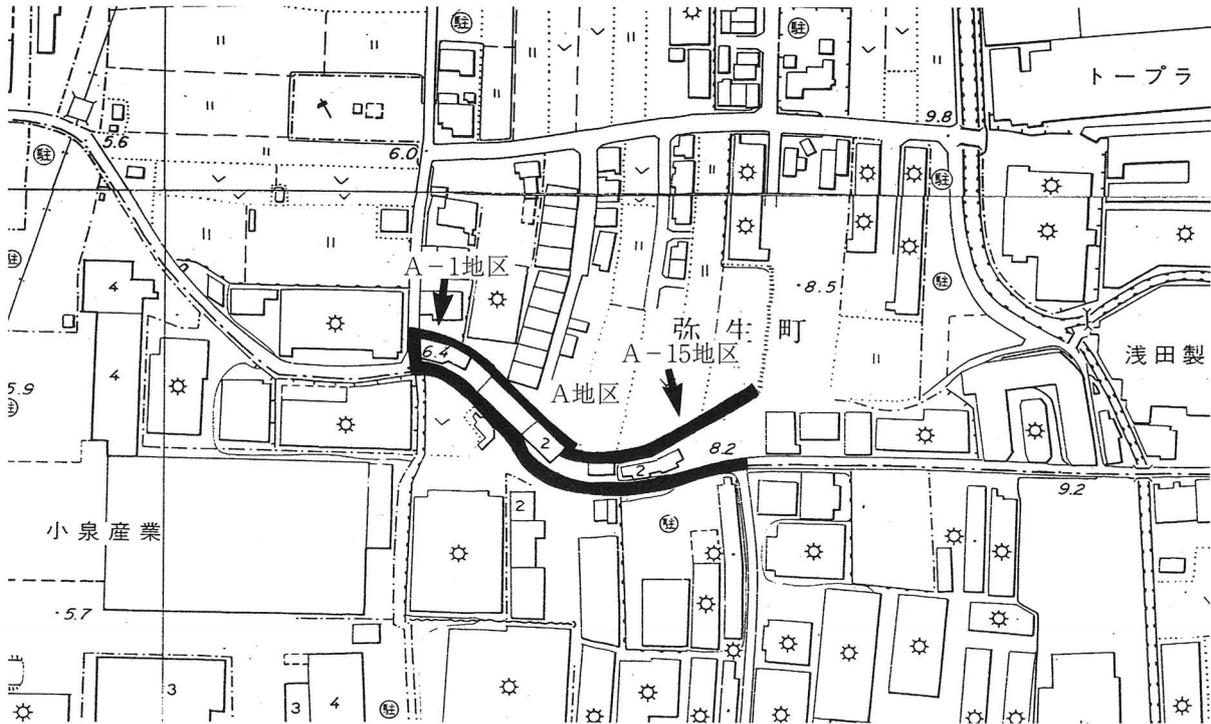
B-7 地区土層断面



出土遺物 (埴輪・須恵器・土師器)

きとらがわ
第11章 鬼虎川遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成16年度公共下水道第206工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市弥生町1468～1487
3	調 査 面 積	217㎡
4	調 査 期 間	平成18年6月6日～6月30日（延べ15日）
5	報 告 担 当	才原
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は弥生給食センターの南東である。当地点は鬼虎川遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ255mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



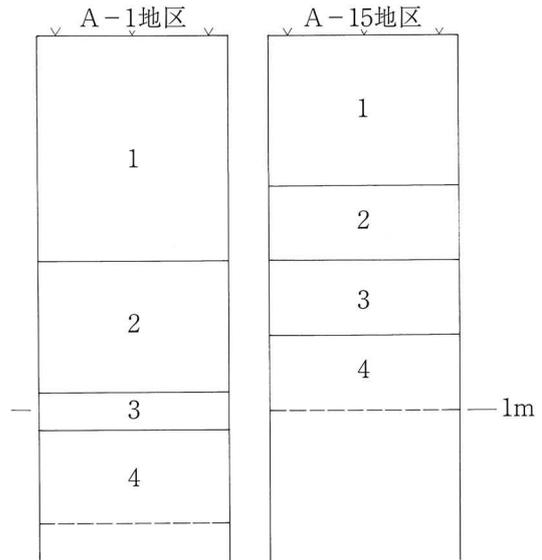
A 地区調査状況



A-1 地区土層断面



A-15 地区土層断面



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要 (第2図)

A-1 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 灰オリーブ色(5Y4/2)粗粒砂混じりシルト。

第3層 暗緑灰色(10GY4/1)粗粒砂。

第4層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘質土。

A-15 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂質土。

第3層 オリーブ黒色(5GY2/1)粘質土。

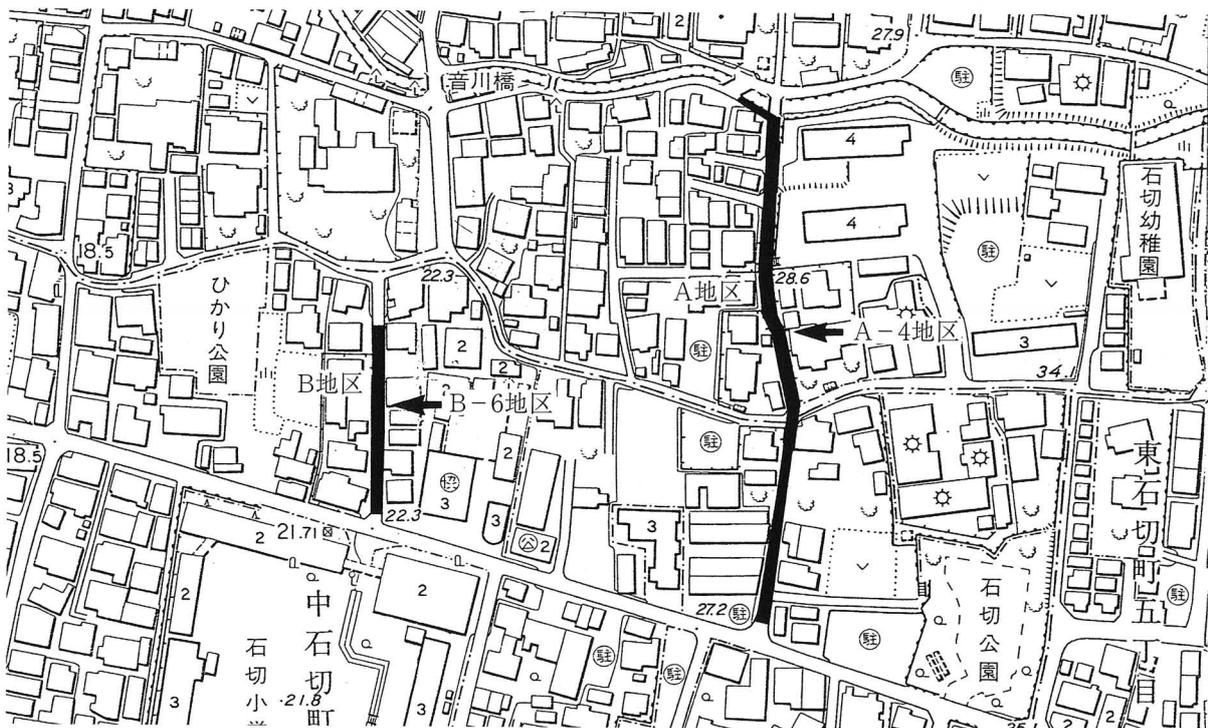
第4層 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘質土。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。

第12章 ぶしだに うえつけ 辻子谷・植附遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成16年度公共下水道第35工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市中石切町2丁目183～204他
3	調 査 面 積	193㎡
4	調 査 期 間	平成17年12月1日～18年5月1日（延べ52日）
5	報 告 担 当	才原
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は石切小学校の北と北東である。当地点は辻子谷・植附遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ227mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



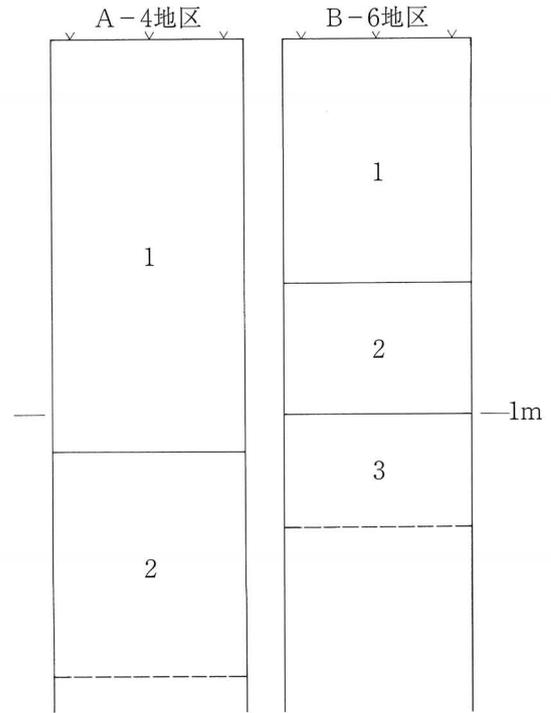
A 地区調査地遠景



A-4 地区土層断面



B-6 地区土層断面



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要 (第2図)

A-4 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じり粘質土。

B-6 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黄褐色(2.5Y5/6)粗粒砂混じりシルト。

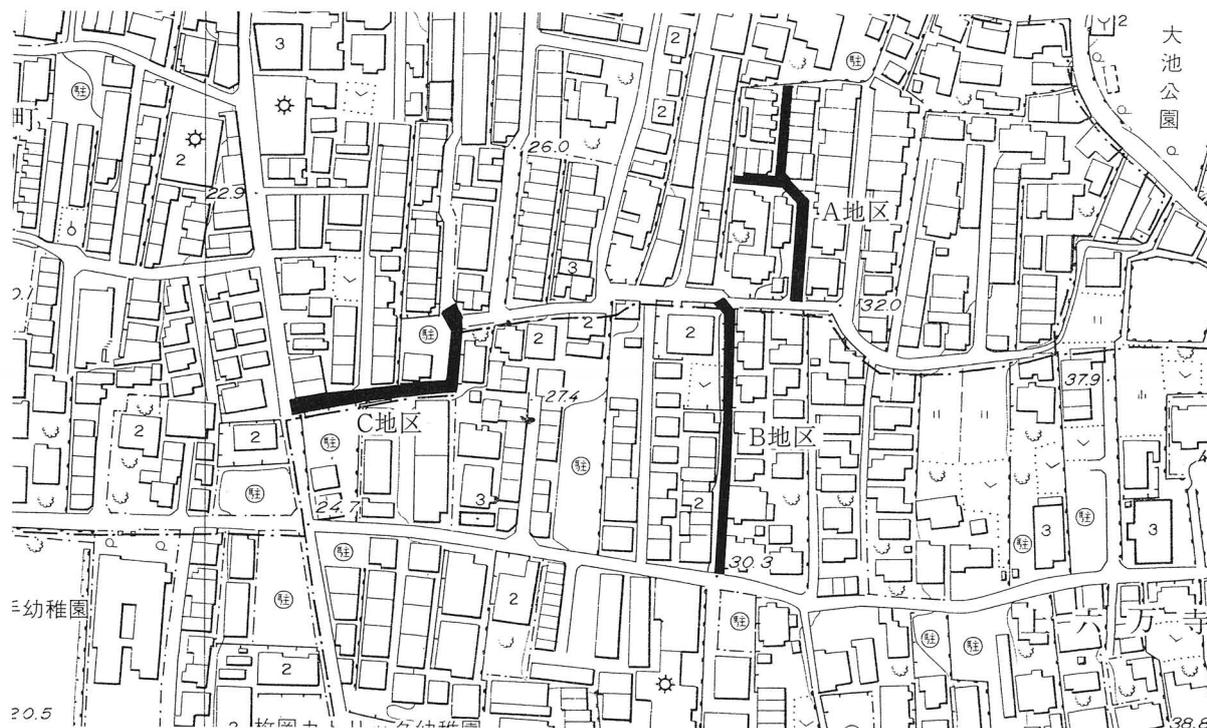
第3層 灰オリーブ色(5Y5/3)粗粒砂混じり粘質シルト。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。

かみろくまんじ
第13章 上六万寺遺跡の第10次調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成17年度公共下水道第101工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市南四条町992～1007・1021、上六万寺町1962～1963
3	調 査 面 積	204m ²
4	調 査 期 間	平成18年4月12日～9月4日（延べ72日）
5	報 告 担 当	庵ノ前
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は繩手中学校の東である。当地点は上六万寺遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ240mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)

1. はじめに

上六万寺遺跡は、生駒山西麓で当市の東部南方、鳴川谷の開口部に発達した扇状地上に位置する弥生時代後期から中世にかけての複合遺跡である。標高は約20～35mを測る。当遺跡の北から東にかけては弥生時代の高地性集落で知られる山畑遺跡や、古墳時代後期の群集墳である山畑古墳群が展開し、西には縄手遺跡(縄文時代中期～江戸時代)、南には船山遺跡(縄文時代後期～鎌倉時代)が接している。

2. 調査の概要

第10次にあたる今回の調査地は、遺跡の北端部に位置する。調査区はA・B・C地区の3地区からなる。A地区は雨水・污水管、B地区は污水管、C地区は雨水管の敷設に伴い掘削を実施した。掘削延長はA地区86.2m、B地区87.5m、C地区80mを測る。

A地区の南端は平成14年度に実施した第7次調査A-16地区(既刊概要では「A-9地区」と誤報)と、B地区の北端は第7次調査A-13地区と、南端は第6次調査A-12地区と接している。C地区は平成14年度に污水管の敷設時に掘削されているので(第7

次調査A-1～7地区)、ここではその調査概要は省略する(「第23章上六万寺遺跡の第7次調査『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-平成14年度-』2003年 参照)。

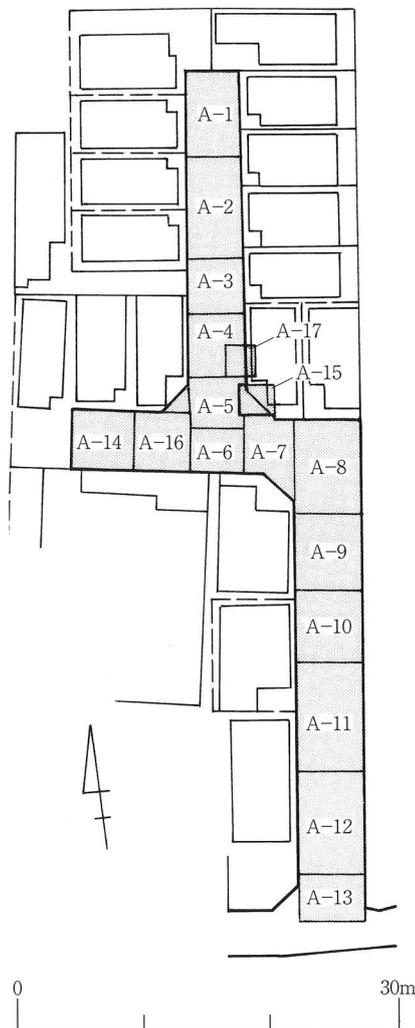
なお、工事はA地区、C地区、B地区の順で実施された。

3. 層序(第2～4図)

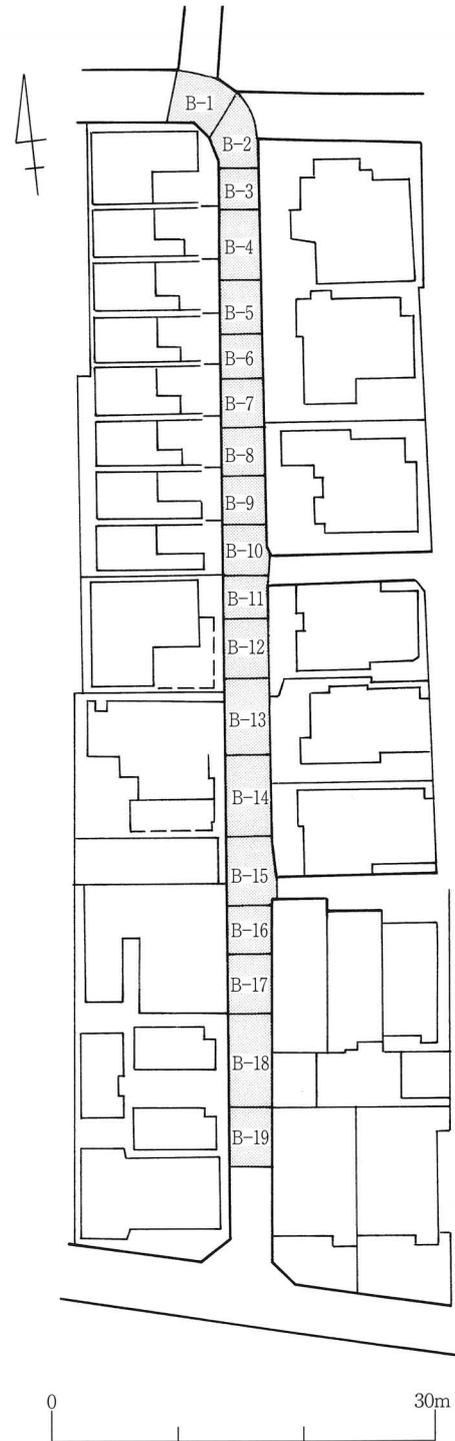
A地区

南四条町1021番地にて設定された総延長約86.2mの調査区である。本管工事・枝管工事ともに立会調査を実施した。工事の進行上、第2図のような地区割となった。

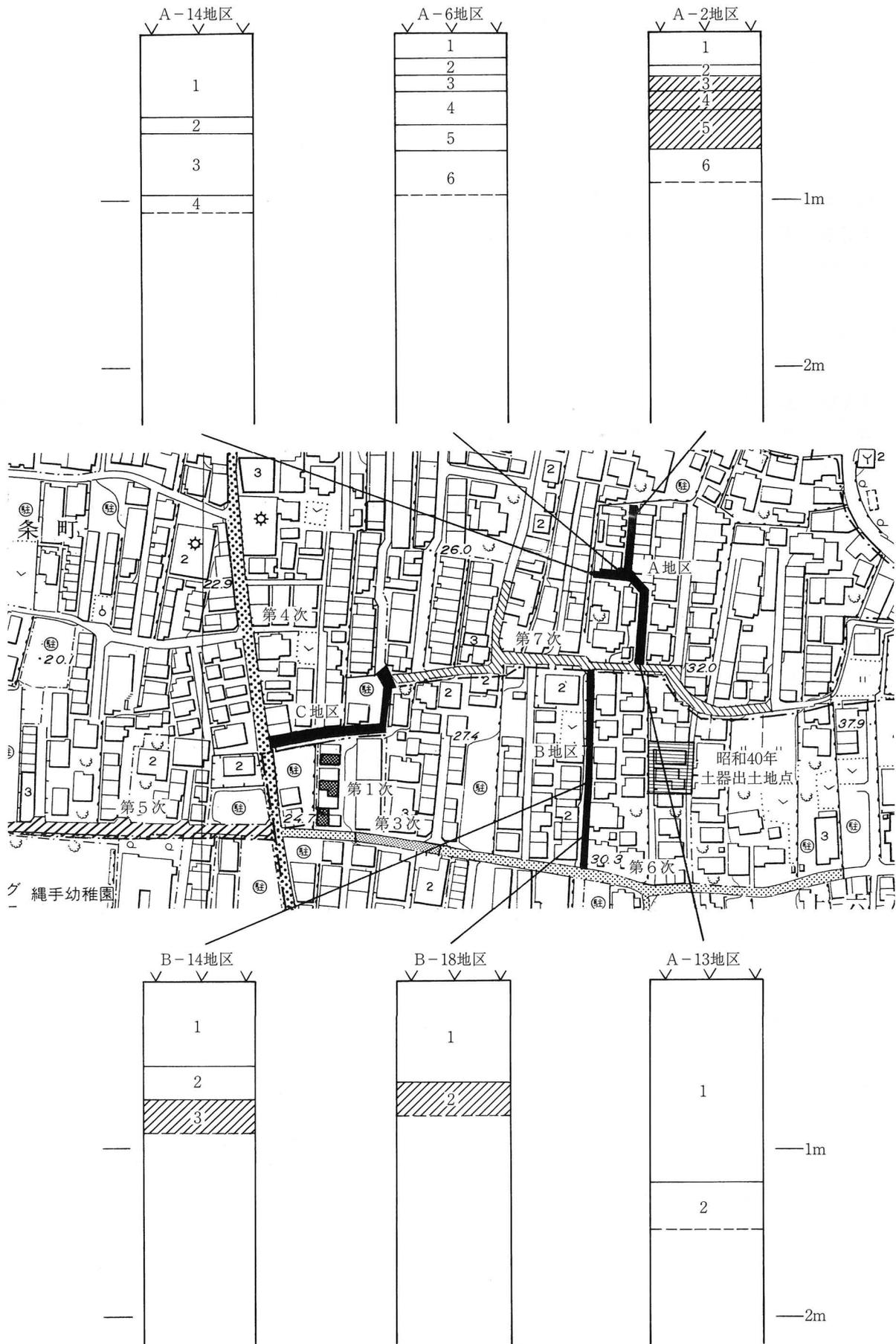
A地区北半部はGL-1m前後、南半部はGL-1.5～2.2m前後を掘削した。北半部のA-2～



第2図 A地区地区割図



第3図 B地区地区割図



第4図 土層断面柱状図

6地区は、第1層の盛土層は0.15～0.3mと薄く、それ以下の地層がよく残っており、遺物も比較的多く包含していた。それに対しA地区南半部(A-12・13地区)は、後世の攪乱が激しく、現地表面より1.5～1.7mは盛土層であった。

A-2地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト。
- 第3層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト。層全体に暗褐色(10YR3/3)砂質土混入。
- 第4層 オリーブ黒色(5Y3/2)砂質シルト。
- 第5層 オリーブ黒色(5Y3/1)シルト。
- 第6層 オリーブ黒色(7.5Y2/2)シルト。

A-6地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黄灰色(2.5Y4/1)粘土。
- 第3層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト。
- 第4層 オリーブ黒色(5Y3/1)シルト。径5mm大の礫混入。
- 第5層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂混じり粘土。
- 第6層 黒色(5Y2/1)細粒砂混じり粘土。

A-13地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 灰オリーブ色(5Y5/2)粘土。オリーブ黒色(5GY2/1)シルトがブロック状に混入。

A-14地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト。
- 第3層 黒褐色(10YR2/2)粘土。
- 第4層 黒褐色(2.5Y3/1)粘土。

B地区

上六万寺町1962～1963番地にて設定された総延長87.5mの調査区である。東に約40mに昭和40年土器出土地点が位置する。北端の東西ライン(B-1・2地区)は第7次調査A-13地区と重複している。南北ラインは工事の進行上、北からB-3～19地区の12地区に地区割した。B-1～4地区はGL-0.7～1.5m掘削し、全面盛土層であった。B-6地区以南はGL-1.3m掘削し、西壁は全面盛土層の箇所が多く、6・7・12～19地区の東壁では遺物包含層を含む層位を確認することができた。その中でも残りのよかったB-14・18地区の層序を以下に記す。

B-14地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂混じり粘質シルト。
- 第3層 黒色(10YR2/1)シルト。

B-18地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒色(5Y2/1)粗粒砂混じり粘質シルト。

4. 出土遺物(第5図・表1)

第1表 地区・層位別遺物台帳

地区	層位	出土遺物	実測図
A-2	第3~5層	弥生土器・土師器・須恵器	
A-2	残土	土師器・須恵器・瓦器・瓦	
A-3	残土	弥生土器・土師器・須恵器・円筒埴輪	1・2・3・6・7・9・11
A-4	残土	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器	8・13
A-5	残土	土師器・須恵器・磁器	
A-6	残土	土師器・須恵器	
A-7	第2・3層	土師器	
A-7	残土	土師器・須恵器・黒色土器・磁器	
A-10	第1層	土師器	
A-10	残土	土師器	
A-11	残土	土師器	
A-12	残土	土師器	
A-13	第1層	磁器	
A-14	残土	土師器	
A-15	残土	土師器・須恵器・黒色土器	5・12・14・15
A-17	残土	土師器・須恵器	16
B-12	第2層	土師器	
B-14	第3層	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器	4
B-18	第2層	土師器	10
B-19	第2層	土師器・黒色土器	
C-9	残土	土師器	

A地区は2~7地区を主体として弥生土器・土師器・須恵器・円筒埴輪・黒色土器・瓦器・瓦・磁器が出土した。B地区は12~19地区で出土したが、出土量は微量かつ細片であった。以下時期別に詳述する。

弥生土器(第5図 1~4)
弥生土器はA-2・3地区およびB-14地区で出土した。今回の調査では、出土量は微量であった。図化することができたのは4点で、1は甕口縁部、2~4は底部である。いずれも弥生時代後期(畿内第V様式)

に属し、生駒西麓産の土器である。1~3はA-3地区残土、4はB-14地区第3層より出土した。

1の甕は復元口径9.0cm、復元頸部径8.4cm、残存高3.8cmを測る。口縁部はくの字形に外反し、口縁端部は外端面を成している。内外面ともにヨコナデ調整する。色調は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

2の底部は復元底径5.0cm、残存高1.4cmを測る。底部は平底である。外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整する。色調は外面にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。

3の底部は復元底径3.6cm、残存高2.0cmを測る。底部は丸みを帯びた平底である。外面はナデ調整、内面は成形時の指頭痕が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

4の底部は底径3.8cm、残存高1.9cmを測る。底部は平底である。外面には成形時の指頭痕が残る。内面の調整は器壁が剥離しているため不明である。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

古墳時代の遺物(第5図 5~7)

古墳時代の遺物としては、土師器・須恵器・円筒埴輪が出土している。出土量は少ない。時期は概ね5世紀後半~6世紀前半にかけてのものである。

5はA-15地区残土より出土した土師器高坏の基部である。基部径2.8cm、残存高2.0cmを測る。坏底部は平たい。脚部は上端まで中空で、しぼりめがよく残っている。内外面ともにナデ調整する。色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面橙色(5YR7/6)を呈する。

6はA-3地区残土より出土した須恵器脚付き壺の基部である。基部径5.0cm、残存高5.5cmを測る。坏部は底部から緩やかに立ち上がる。脚部は下外方に開く。脚部外面上端には2条の凹線を有し、下方の凹線上に径0.7cmの円孔スカシを3方向に有す。脚部は貼り付けている。坏底部外面はカキメ調整、内面は不整方向のナデ調整、その他は回転ナデ調整する。陶邑I-5~II-1に属する。

7はA-3地区残土より出土した円筒埴輪のタガ部である。残存高2.3cmを測る。断面台形状のタガを貼り付けている。外面はタガ部ヨコナデ調整、体部タテハケ調整する。内面の調整は剥離のため不明である。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈する。川西編年V期に属する。

奈良時代以降の遺物(第5図 8~16)

今回の調査で出土した遺物の大半は、奈良時代から平安時代にかけての土師器である。黒色土器はすべて内黒のものである。瓦器・瓦はA地区北半部(A-2・4地区)で出土しているが、数点を数えるにすぎない。瓦器は器厚が3~4mmと薄く、内面のみ暗文が施されている。和泉型の口縁部細片を含む。

8はA-4地区残土より出土した土師器鉢の口縁部である。復元口径17.0cm、残存高2.5cmを測る。口縁部は内彎して立ち上がり、口縁端部は上端面を成す。口縁部内外面ともにヨコナデ調整する。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。奈良時代。

9はA-3地区残土より出土した土師器甕の口縁部である。復元口径24.4cm、残存高1.7cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は外端面を成す。口縁部内外面ともにヨコナデ調整する。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。奈良時代。

10はB-18地区第2層より出土した土師器甕の口縁部である。復元口径28.4cm、残存高3.1cmを測る。口縁部はくの字状に外反し、口縁端部は外端面を成す。口縁部内外面ともにヨコナデ調整する。色調は黄灰色(2.5Y5/1)を呈する。奈良時代~平安時代。

11はA-3地区残土より出土した土師器羽釜の口縁部である。復元口径23.6cm、残存高2.4cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸い。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は横方向のハケメ調整する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。奈良時代~平安時代。

12はA-15地区残土より出土した土師器羽釜の口縁部である。復元口径30.4cm、残存高3.6cmを測る。



第5図 出土遺物実測図

口縁部は外反し、口縁端部は丸い。口縁部外面は縦方向のハケメ調整、内面は横方向のハケメ調整する。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。奈良時代～平安時代。

13はA-4地区残土より出土した土師器皿の口縁部である。復元口径12.0cm、残存高1.6cmを測る。口縁部は外方に屈曲させ「て」の字状を呈し、口縁端部は上方につまみあげる。口縁部内外面ともにヨコナデ調整する。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。平安時代中期(10世紀代)。

14はA-15地区残土より出土した土師器皿の口縁部である。復元口径10.2cm、残存高1.3cmを測る。13と同様、口縁部は外方に屈曲させ「て」の字状を呈し、口縁端部は上方につまみあげる。口縁部内外面ともにヨコナデ調整する。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。平安時代中期(10世紀代)。

15はA-15地区残土より出土した黒色土器碗の口縁部である。復元口径15.0cm、残存高4.4cmを測る。口縁部は内彎して立ち上がり、口縁端部は丸い。内面全面と口縁部上端外面を黒く燻す。外面はナデ調整する。内面は磨耗しており不明である。色調は外面橙色(7.5YR7/6)、内面は灰色(N4/)を呈する。平安時代中期(10世紀代)。

16はA-17地区残土より出土した土師器皿の口縁部である。復元口径7.0cm、残存高1.4cmを測る。口縁部は内彎気味に緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸い。口縁部内外面ともにヨコナデ調整する。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。中世期。

5. まとめ

今回の調査は遺跡の北端部にて実施した。A地区の北端は遺跡の範囲外であったが、遺物が多く出土することから、当遺跡はさらに北に広がりをもつことが確認された。

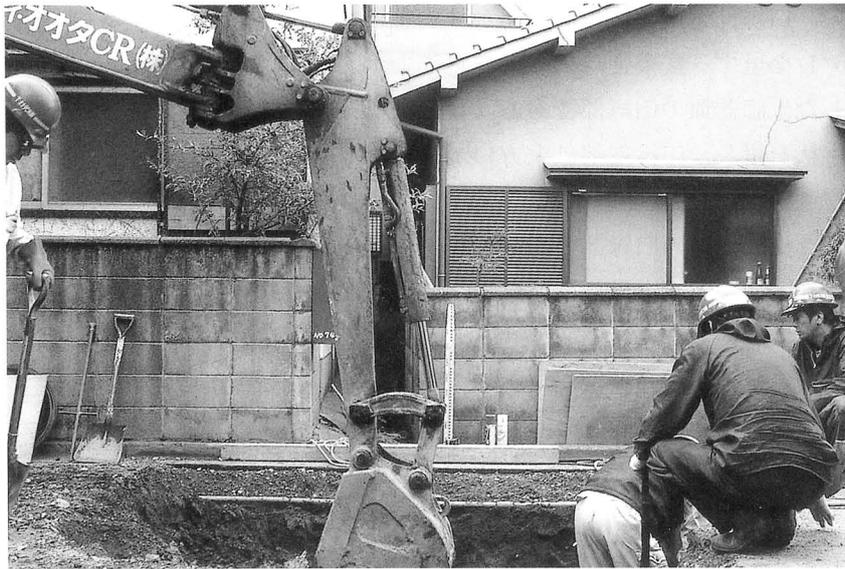
当遺跡は南北の旧河川によって形成された扇状地上に立地しており、古来河川や生駒山からの土石流の被害が激しかった。このことは第4次調査において確認されている。今回の調査で確認された土層や、それに包含されている遺物の状況を観察する限り、同様のことを示しているものと考えられる。

参考文献

池崎智詞1999「第4章 上六万寺第4次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-1998年度-』東大阪市文化財協会



A地区調査地遠景



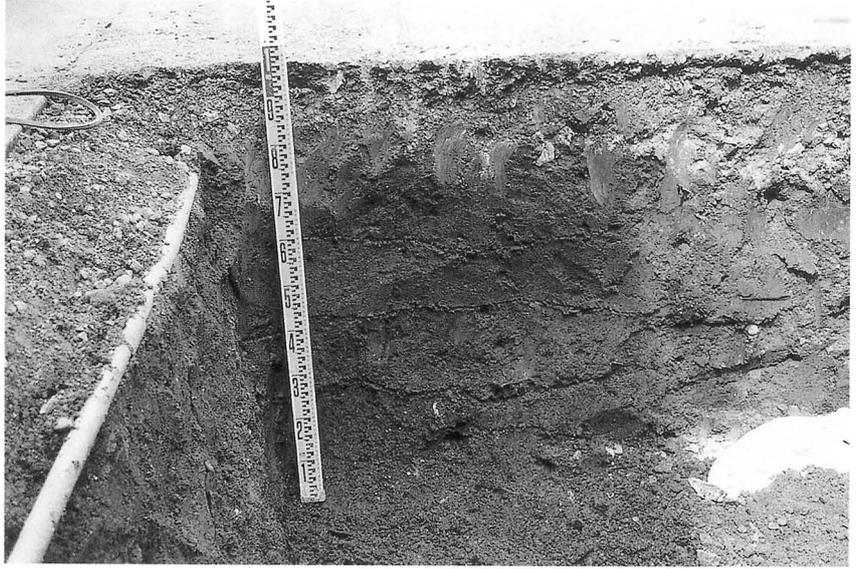
A 地区調査状況



A-2 地区土層断面



A-4 地区土層断面



A-6地区土層断面



A-13地区土層断面



A-14地区土層断面



B地区調査地遠景



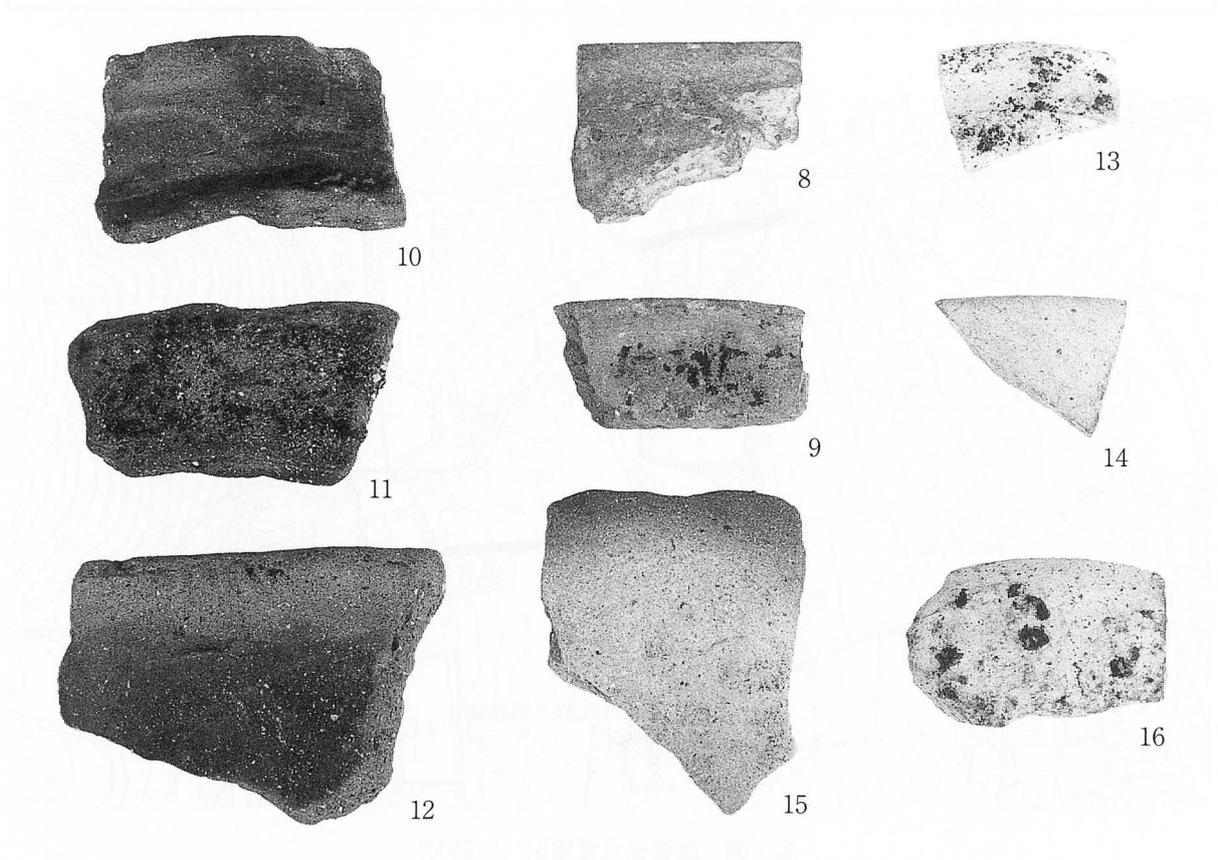
B-14地区土層断面



B-18地区土層断面



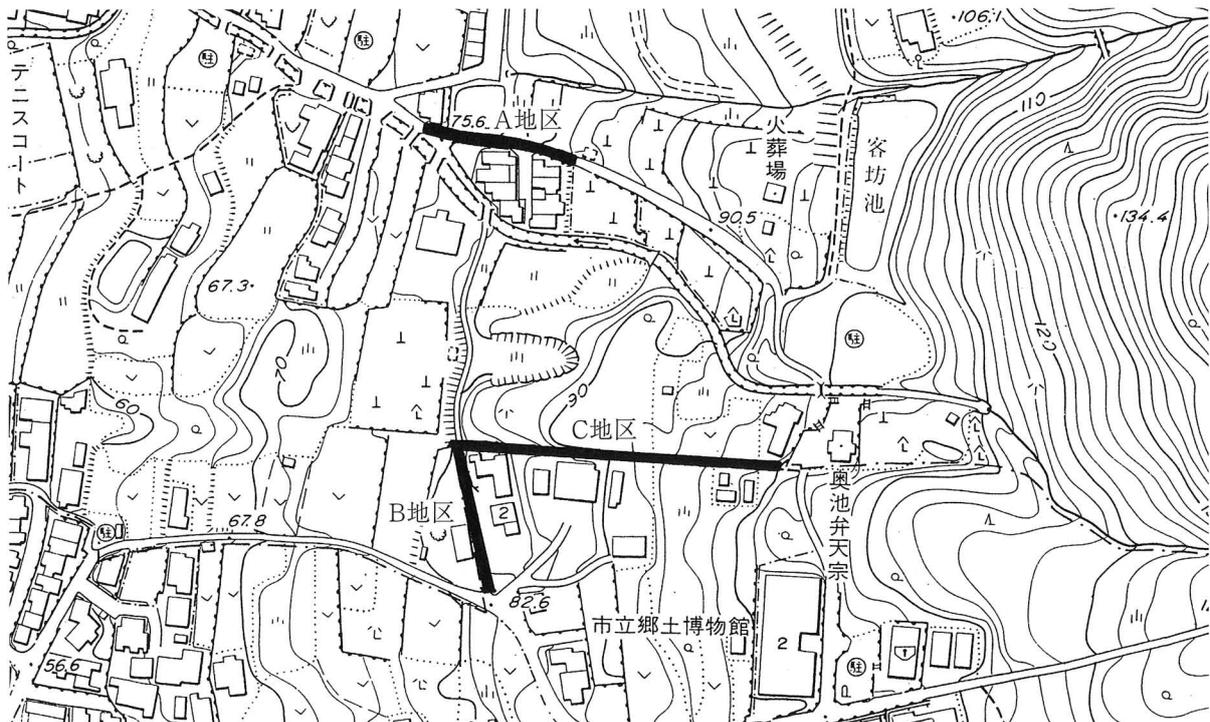
出土遺物（弥生土器・須恵器・土師器・埴輪）



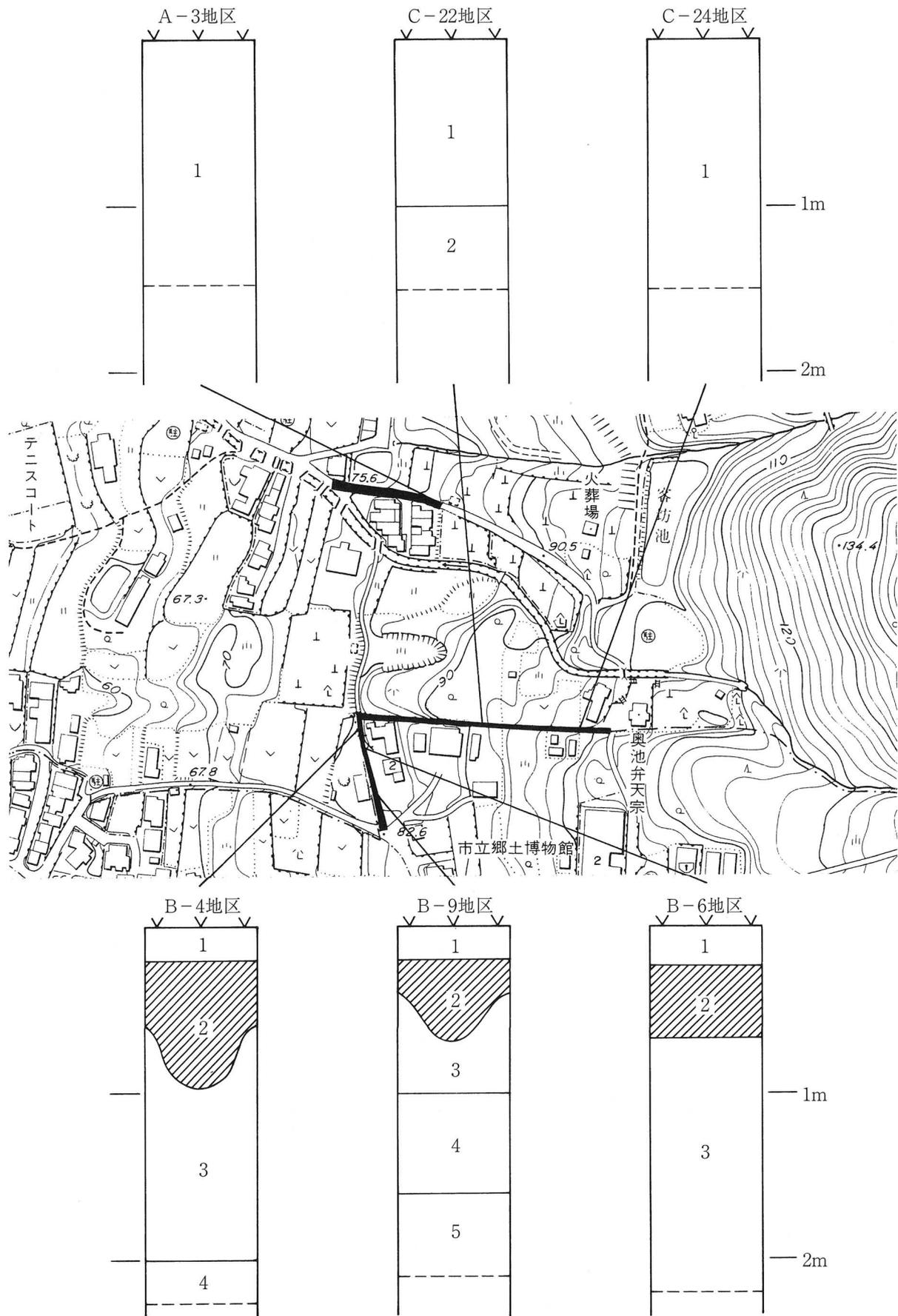
出土遺物（土師器・黒色土器）

第14章 ^{やまはた}山畑 (第29次) ・ ^{きゃくぼうやま}客坊山古墳群の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成17年度公共下水道第10工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市客坊町1031～1033、上四条町1797～2035
3	調 査 面 積	277㎡
4	調 査 期 間	平成17年9月2日～18年8月21日 (延べ98日)
5	報 告 担 当	松田
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は東大阪市立郷土博物館の北西である。当地点は山畑・客坊山古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ324mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要

調査地区は便宜上A～C地区に分け、A地区より調査を開始した。A地区は客坊山遺跡群、B・C地区は山畑古墳群にあたり、B地区は山畑遺跡を含む。B地区で遺構・遺物を確認した。

2. 層序（第2図）

A-3地区の層位

第1層 盛土。

B-4地区の層位

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(10YR3/1)中粒砂混じり粘質シルト。弥生時代の遺物が出土。

第3層 黄褐色(2.5Y5/4)シルト。

第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂混じり粘質シルト。

B-6地区の層位

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(10YR3/1)中粒砂混じりシルト。弥生時代の遺物が出土。

第3層 黄褐色(2.5Y5/4)シルト。巨石を含む。

B-9地区の層位

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(10YR3/2)細粒砂混じり粘質シルト。

第3層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂混じりシルト。

第4層 黒色(10YR2/1)細粒砂混じりシルト。

第5層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂混じりシルト。

C-22地区の層位

第1層 盛土。

第2層 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂。10～50cm大の巨石を多く含む。

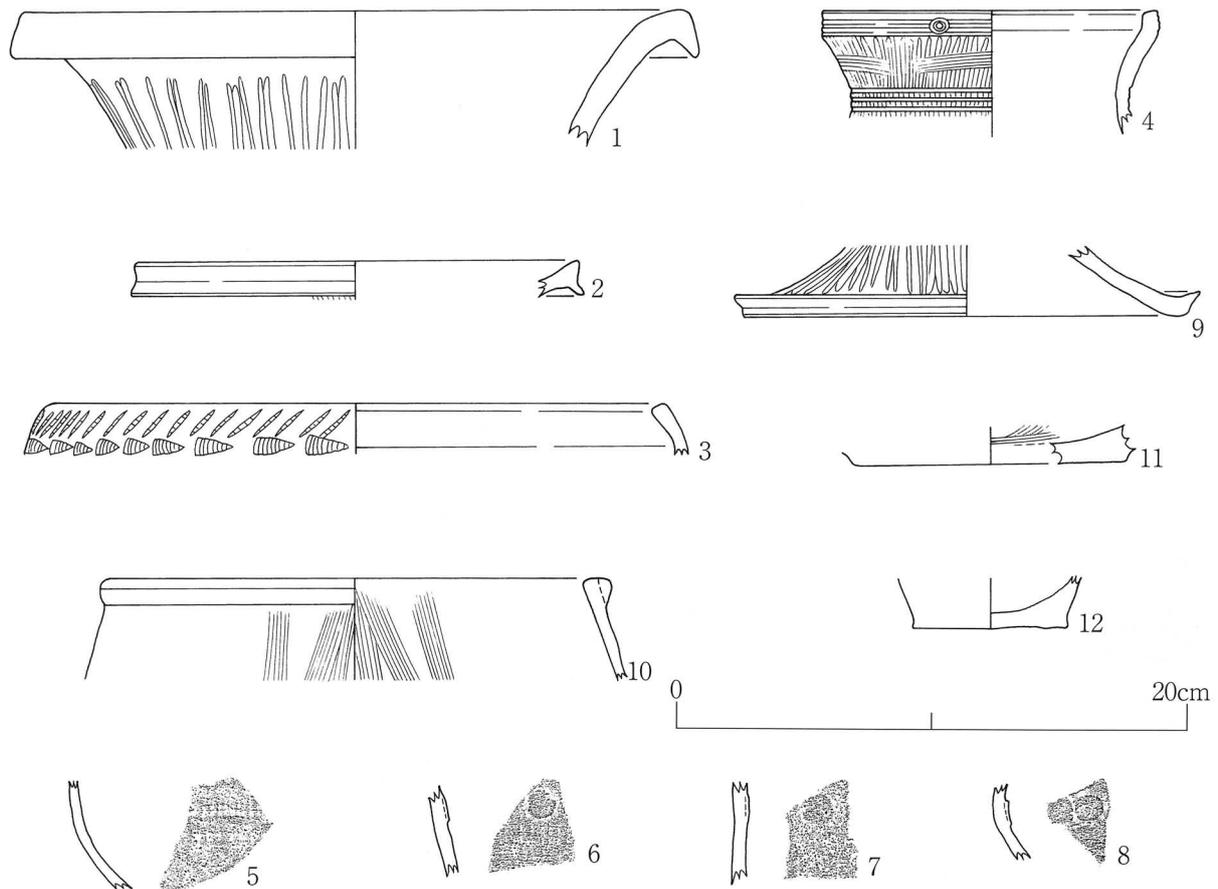
C-24地区の層位

第1層 盛土。

3. 出土遺物（第3図 1～12）

今回の調査では、多くの弥生土器が出土した。いずれも細片が多く、図化できたのは12点である。壺、高杯、鉢の器種がある。

1～8は壺である。1は口縁部が大きく外上方へ伸び、口縁端部は下方へ拡張する。内面はナデ調整、外面はヘラミガキ調整する。口径は25.8cm、残存高は5.5cmを測る。2は口縁端部を上下にやや拡張する。内面はナデ調整、外面はヘラミガキ調整する。口径は12.6cm、残存高は1.5cmを測る。3は口縁部がやや内湾する。口縁端部は上下に大きく拡張する形状となるが、下部を欠損している。内面はヨコナデ調整、外面は櫛描列点文と扇形文を施す。口径は20.2cm、残存高は2.3cmを測る。4は体部がやや直立する。口縁端部は面をもつ。内面は未調整で、口縁部はヨコナデ調整する。外面はハケメ調整の後、ナデ調整する。口縁部と口縁端部に、棒状工具による擬凹線を3条施す。口縁端部には円形浮文を貼り付ける。口径は13.2cm、残存高は4.4cmを測る。5～8は体部片である。円形浮文を貼り付ける。細片のため詳細は不明である。5は内面をナデ調整、外面は櫛描簾状文を施す。残存高4.2cmを測る。6は内面をナデ調整、外面は櫛描簾状文を施す。残存高は3.7cmを測る。7は内面をハケメ調整、外面は櫛描簾状文を施す。残存高は4.1cmを測る。8は内外面をナデ調整する。残存高



第3図 出土遺物実測図

は3.0cmを測る。1はB-4地区、2・5~8はB-5地区、3・4はB-10地区より出土した。

9は高杯である。裾部は緩やかに立ち上がり、裾端部を上方へやや拡張する。内面はナデ調整、外面はヘラミガキ調整する。底径は17.2cm、残存高は2.8cmを測る。B-6地区より出土した。

10は鉢である。口縁部は内上方にやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部は外面に肥厚する。内外面はハケメ調整する。口径は19.8cm、残存高は4.1cmを測る。B-6地区より出土した。

11・12は底部である。細片のため、詳細は不明である。11は外上方へ立ち上がる。内外面は風化のため調整法が不明である。底径は6.0cm、残存高は2.0cmを測る。12は外上方へ緩やかに立ち上がる形状となる。内面はハケメ調整、外面はナデ調整する。底径は10.0cm、残存高は1.5cmを測る。B-5地区より出土した。

4は非河内産、その他は生駒西麓産である。

4. まとめ

山畑古墳群は古墳時代後期の群集墳で、その中に弥生時代中期の集落遺跡である山畑遺跡を含む。山畑遺跡は標高70~100mの高所に位置し、B地区の約50m南で行われた第15次調査では弥生時代中期末の竪穴住居跡、IV様式に属する弥生土器や石器が確認されている。これらのことから、弥生時代中期末の高地性集落と考えられている。今回の調査地は遺跡範囲の北東端で、標高80m前後に位置する。

今回の調査地は山畑遺跡の北端に位置し、南北約50mの範囲である。地表下約0.2mで弥生時代中期の遺物包含層を、ほぼ全域で確認した。弥生土器はB-4~6地区を中心に多く出土し、北端では少なくなる。多くが細片のため図化できなかったものもあるが、器形・文様・調整などの特徴からIV

様式に相当すると考えられる。

従来、高地性集落の特異性を示すものとして、出土弥生土器の生駒西麓産の割合が高いことが挙げられている。今回の出土土器も同様のことがみられ、若干の非河内産を含んでいる。

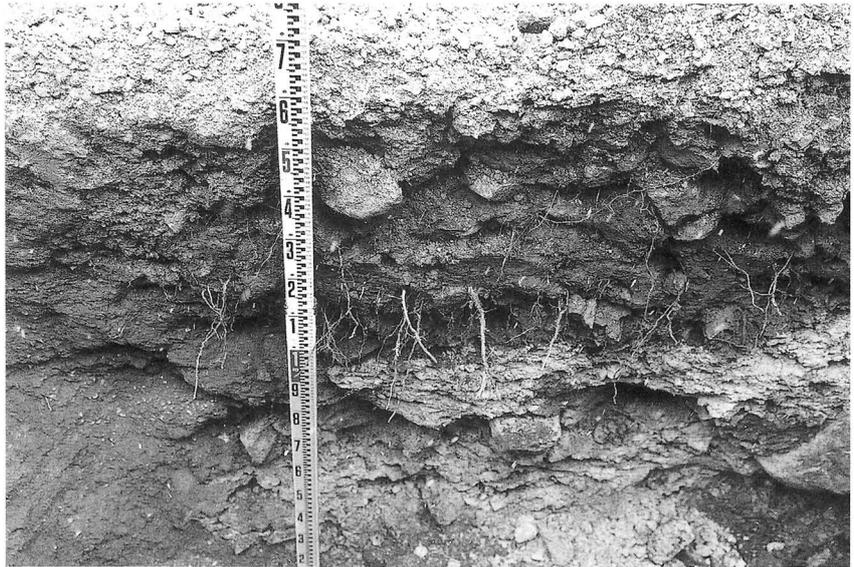
遺構はB-4・9地区で確認した。いずれも第3層上面で検出しており、出土土器の時期と同じ弥生時代中期に属するものと思われる。調査範囲が狭いため詳細は不明であるが、土坑もしくは溝と考えられる。高地性集落に関連する遺構が広がる可能性が高い。



B地区調査地遠景



A-3地区土層断面



B-2 地区土層断面



B-4 地区土層断面



B-4 地区遺構断面



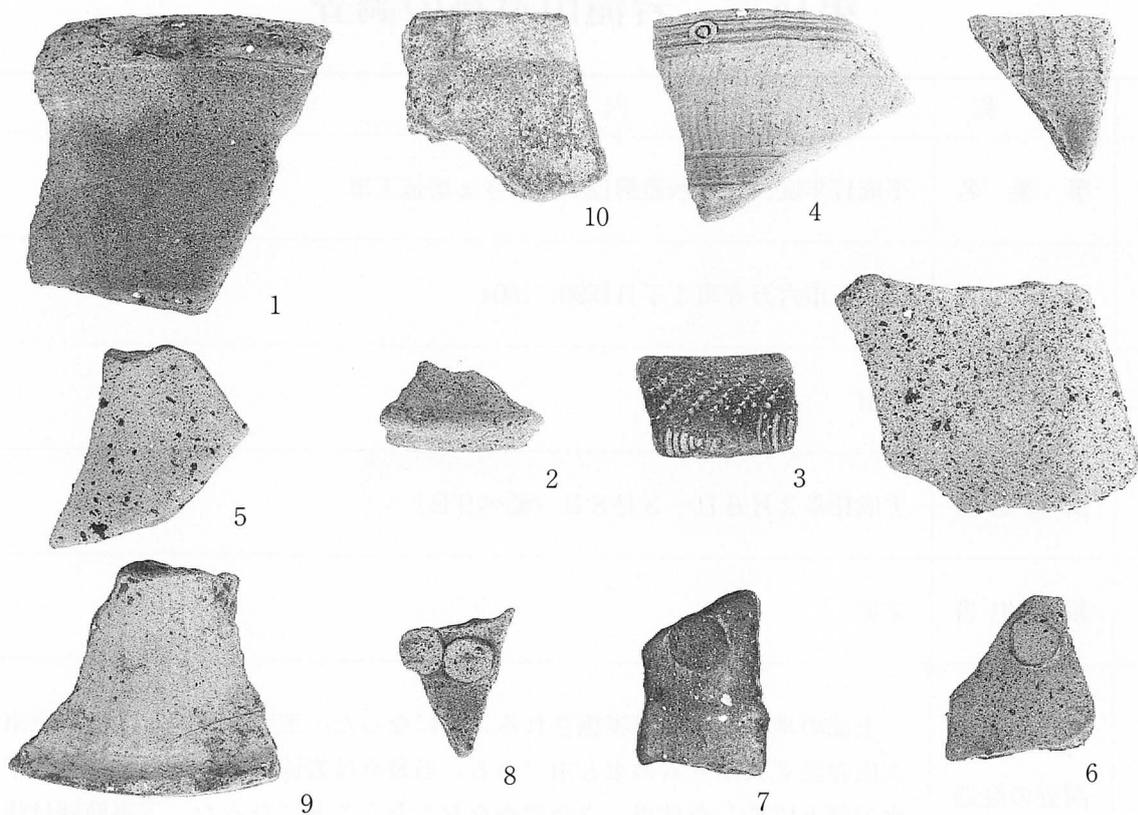
B-9地区土層断面



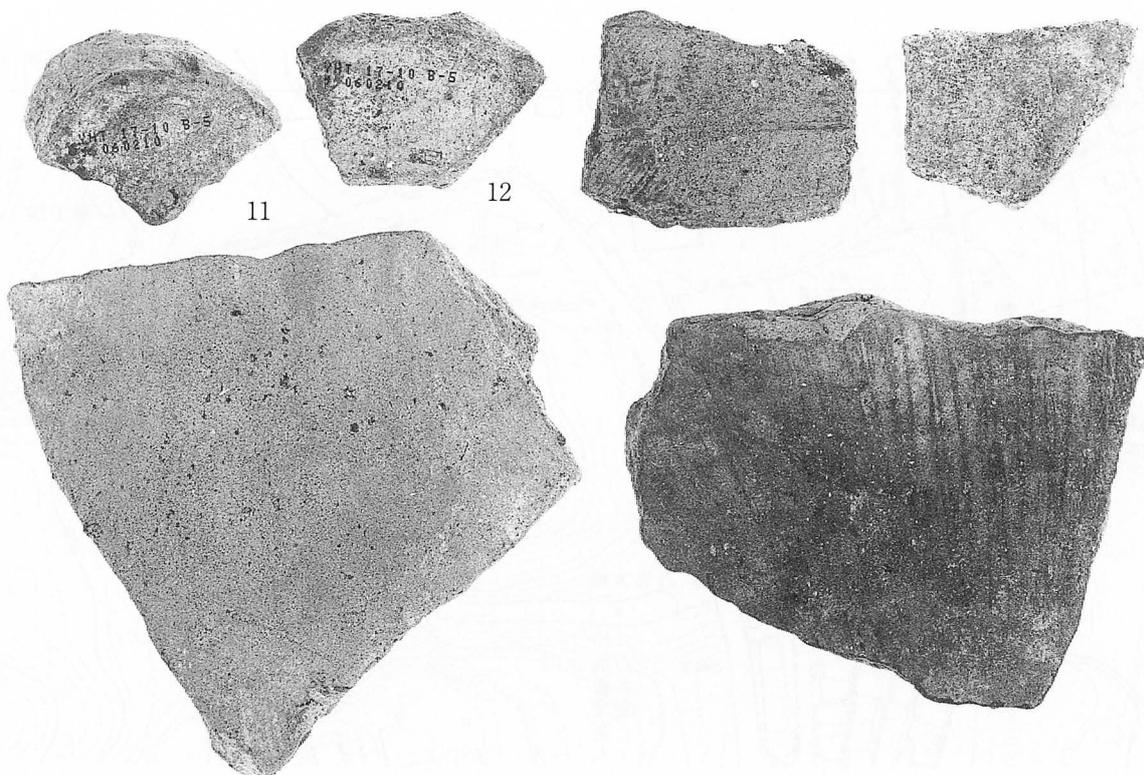
B-9地区遺構断面



C-22地区土層断面



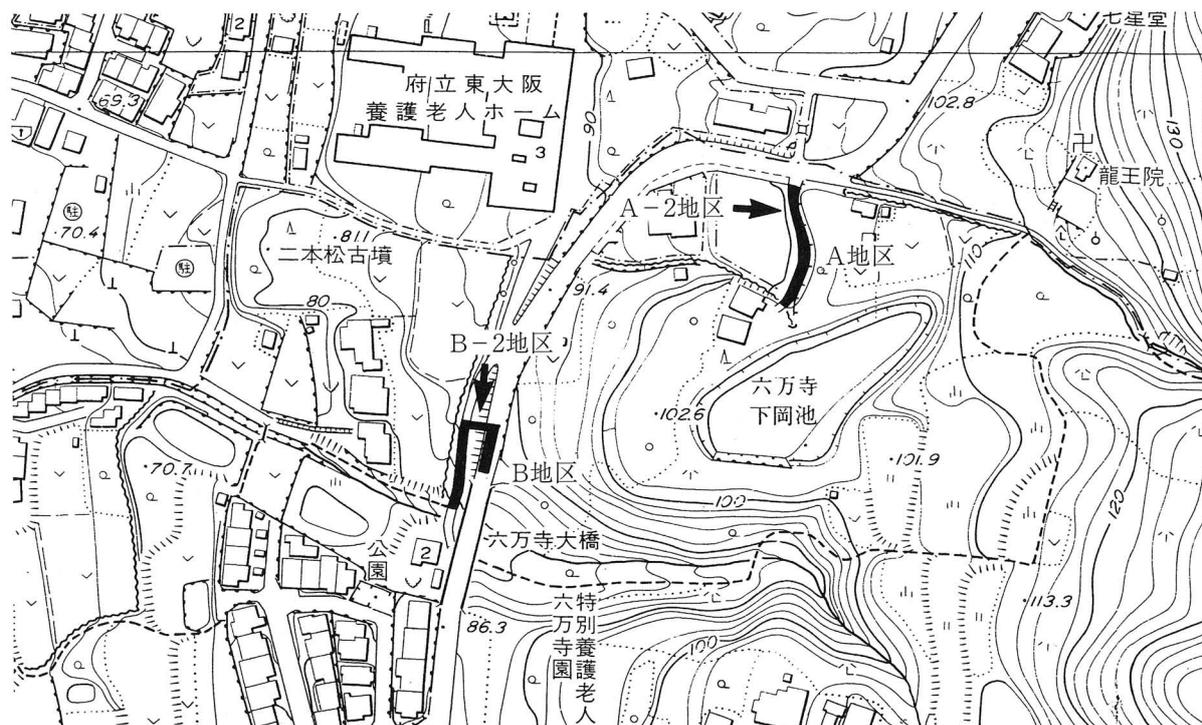
出土遺物 (弥生土器)



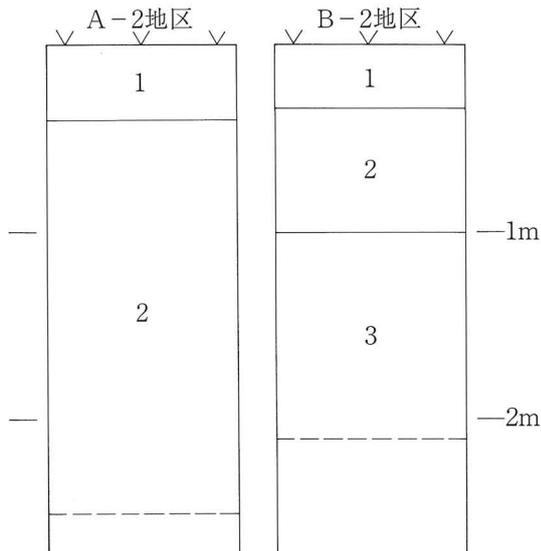
出土遺物 (弥生土器)

いわたきやま 第15章 岩滝山遺跡の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成17年度公共下水道第12工区管きょ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市六万寺町1丁目1590、1604
3 調 査 面 積	63m ²
4 調 査 期 間	平成18年2月6日～3月8日（延べ9日）
5 報 告 担 当	才原
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪府立東大阪養護老人ホームの東と南である。当地点は岩滝山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ74mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要(第2図)

A-2地区の層序

第1層 盛土。

第2層 褐色(10YR4/4)粗粒砂～礫混じり土

B-2地区の層序

第1層 盛土。

第2層 褐色(10YR4/6)粗粒砂混じり土

第3層 暗褐色(10YR3/4)細礫混じりシルト質土。

2. まとめ

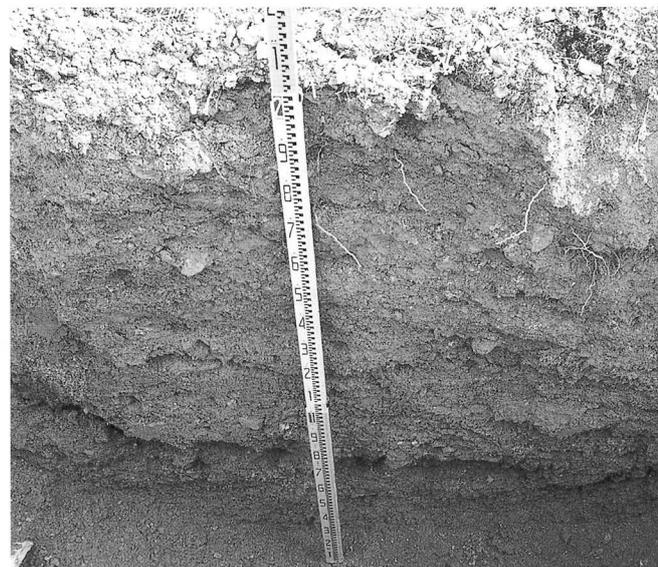
立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。



A地区調査地遠景



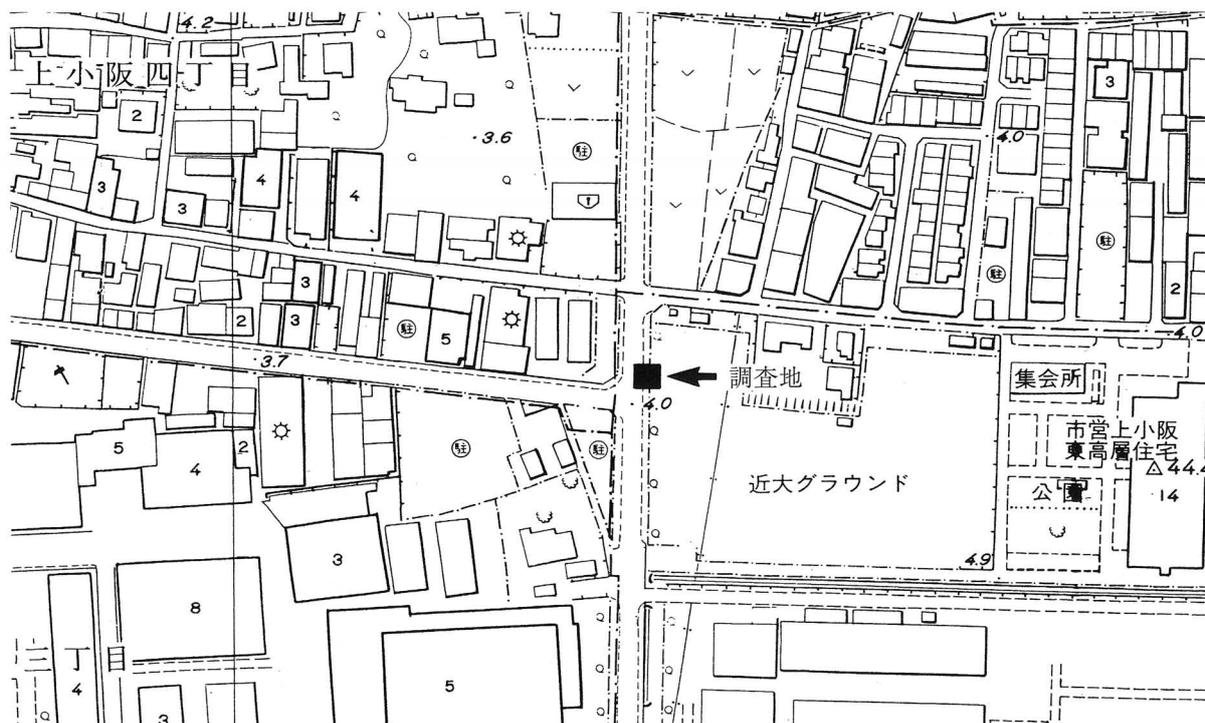
A-2地区土層断面



B-2地区土層断面

かみこさか
第16章 上小阪遺跡の第7次調査

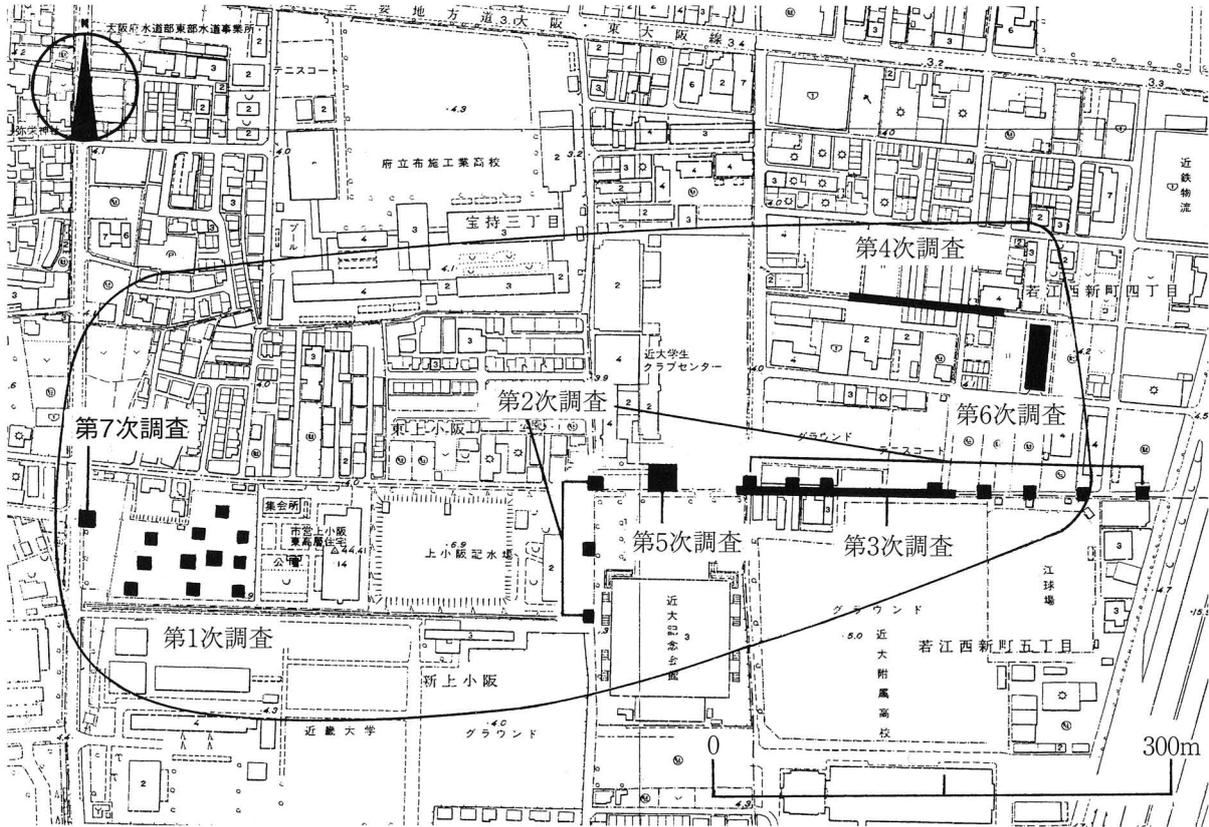
	名 称	内 容
1	事 業 名	平成17年度公共下水道第15工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市新上小阪653
3	調 査 面 積	36㎡
4	調 査 期 間	平成18年1月19日～1月25日（延べ5日）
5	報 告 担 当	松田
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近畿大学グラウンド内の西である。当地点は上小阪遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、発掘調査をおこなうことになった。調査範囲は6×6mであり、推進工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)

1. 調査の概要

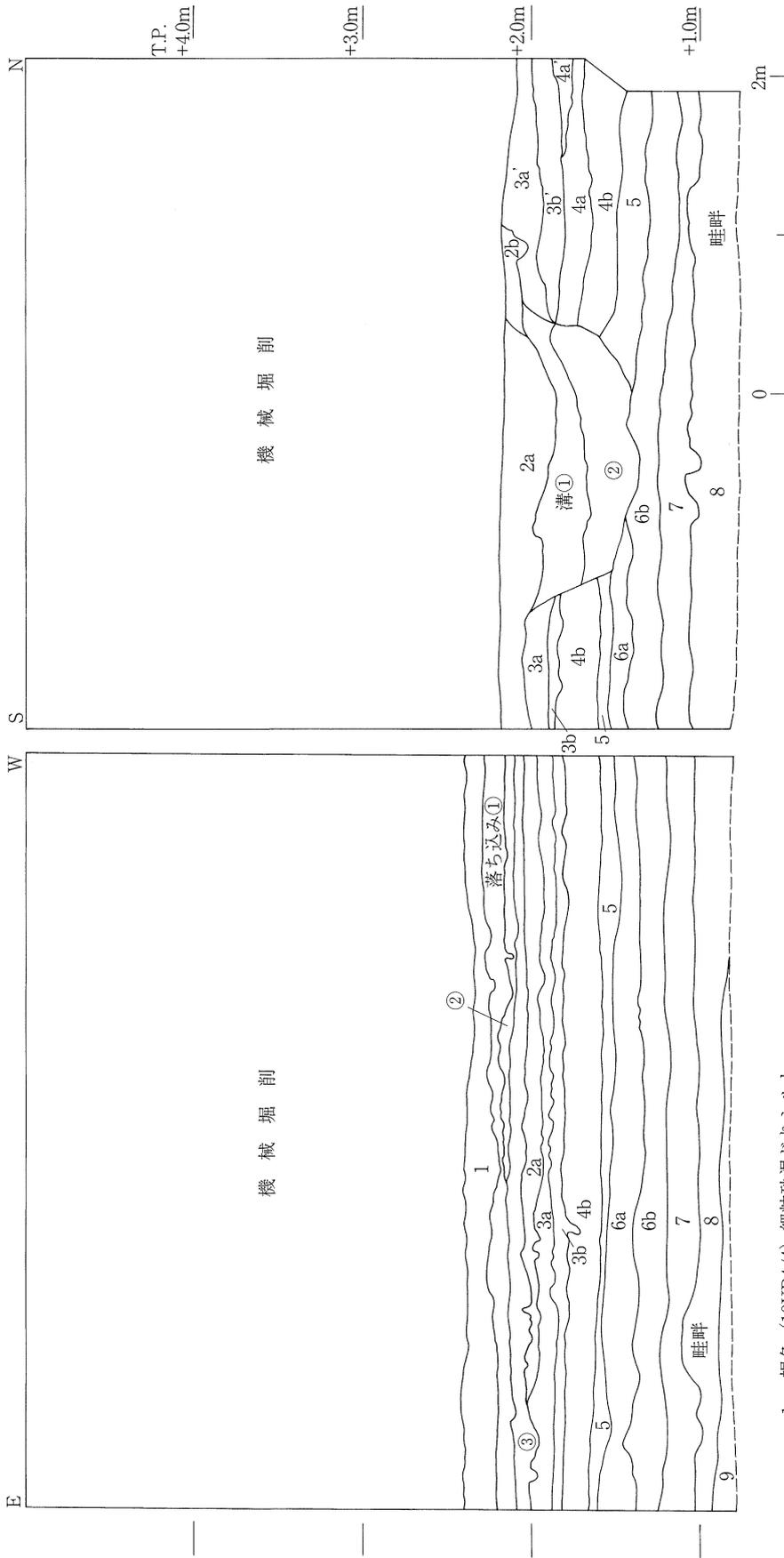
上小阪遺跡は、東大阪市若江西新町・宝持・東上小阪・新上小阪一帯に広がる。1963年に下水道管敷設工事中に弥生土器が出土したことにより遺跡の存在が知られたが、調査には至らなかった。1975年に公営住宅建設に伴う第1次調査が行われ、弥生時代と奈良～鎌倉時代の遺物が出土した。以降、



第2図 第1～7次調査地位置図

第1表 既往調査歴

次数	調査の目的	遺物	遺構
第1次調査 (1975年)	公営住宅建設に伴う試掘調査	鎌倉時代、奈良～平安時代前期、弥生時代	
第2次調査 (1975年)	上水道配水管敷設工事に伴う調査	弥生時代後期	
第3次調査 (1988年)	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	弥生時代後期	奈良時代の土坑、弥生時代後期の土坑・柱穴・溝
第4次調査 (1991年)	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	古墳時代、弥生時代後期	弥生時代後期の井戸・溝・柱穴
第5次調査 (1994年)	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	弥生時代後期	弥生時代後期のピット群
第6次調査 (1996年)	共同住宅建設に伴う調査	弥生時代後期	弥生時代後期の住居跡・甕棺墓・土坑



機械掘削

機械掘削

- 1 褐色 (10YR4/4) 細粒砂混じりシルト。
 - 2a オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細粒砂混じり粘質シルト。
 - 2b 暗オリーブ色 (5Y4/3) 細粒砂混じりシルト。
 - 3a 褐色 (7.5YR4/4) 粗粒砂混じり粘土。暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土を含む。
 - 3a' 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質シルト。
 - 3b 暗オリーブ灰色 (5Y5/2) 粗粒砂混じり粘質シルト。
 - 3b' 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質シルト。
 - 4a 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘質シルト。
 - 4a' 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 中粒砂混じりシルト。北端に堆積。
 - 4b オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘土。
 - 5 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘質シルト。
 - 6a 灰色 (7.5Y4/1) 細粒砂混じり粘質シルト。
 - 6b 暗緑灰色 (10G3/1) 細粒砂混じり粘土。
 - 7 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 極粗粒砂。
 - 8 黒色 (10YR1.7/1) 細粒砂混じり粘土。上部に灰色 (5Y4/1) シルトが混じる。
 - 9 灰色 (7.5Y4/1) 粗粒砂。
- 落ち込み
- ① 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト。
 - ② 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質シルト。
 - ③ 褐色 (10YR4/6) シルト。
- 溝
- ① 灰色 (10Y4/1) 細粒砂混じり粘質シルト。
 - ② 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 細粒砂混じり粘質シルト。

第3図 土層断面図

現在までに6次の調査が行なわれている。広範囲な調査は行われていないが、主に弥生時代後期の遺構・遺物が発見されており、第3・4次調査では土坑・柱穴・井戸・溝が検出されている。また第6次調査では「周溝家屋跡」とされる住居跡1棟が検出された。

今回の調査地点は、東大阪市新上小阪に当たり、近畿大学の駐輪場内に位置する。2006年1月19日～26日の間に実施した。遺跡内では西端に位置し、第1次調査の第1・3トレンチに近接する。

調査区は1963年に行われた下水道管敷設工事内に位置する地点である。当時の発掘調査の記録がなかったため、試掘調査を行なうこととなった。その結果、GL-4.5m付近で既設管に当たり、下水管を入れる際の土止めの板が残っていたため、推進工事ではなく開削工事であったことがわかった。そして、調査範囲を当初より縮小して行なうこととなり、6×6mの推進工法の立抗内を、現地地表下約4.5mまで掘削した。

2. 層序 (第3図)

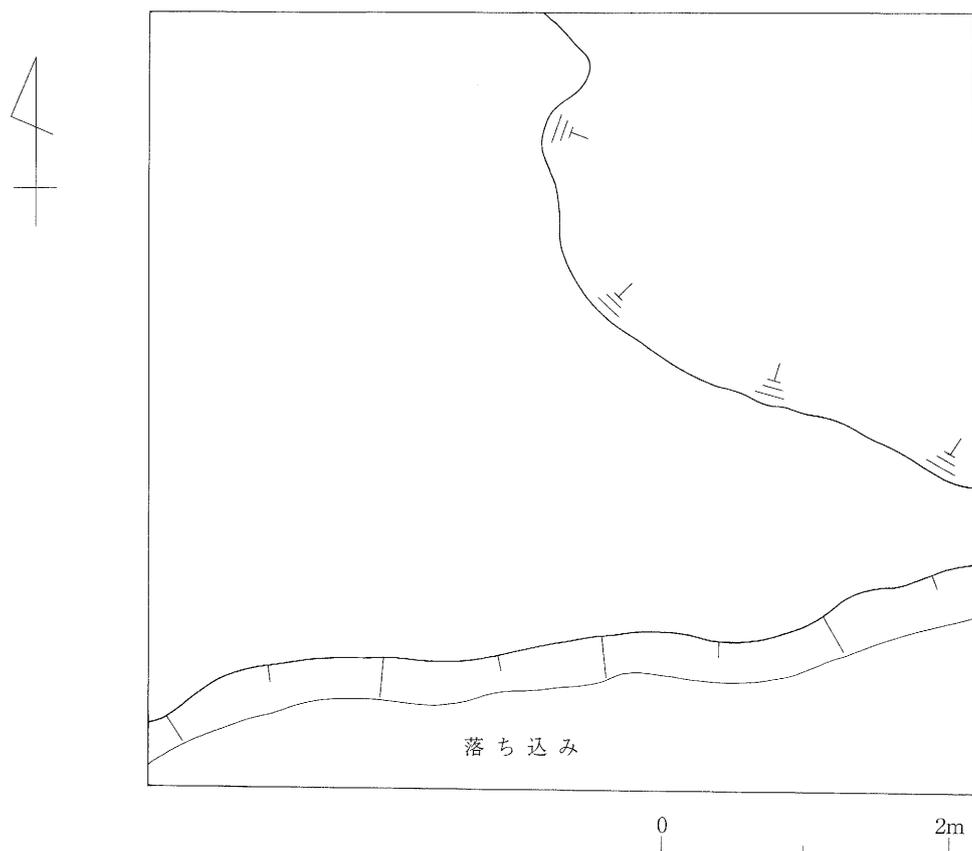
第0層 盛土。厚さ2.6m前後を測る。

第1層 褐色(10YR4/4)細粒砂混じりシルト。瓦質土器の小片が出土した。厚さ15～20cm前後を測る。

第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂混じりシルト。北側で暗オリーブ色(5Y4/3)細粒砂混じりシルトになる。上面で落ち込みを検出した。厚さ20～40cmを測る。

第3 a層 褐色(7.5YR4/4)粗粒砂混じり粘土。上面で溝を検出した。調査区の南北で土質が異なる。厚さ20cm前後を測る。

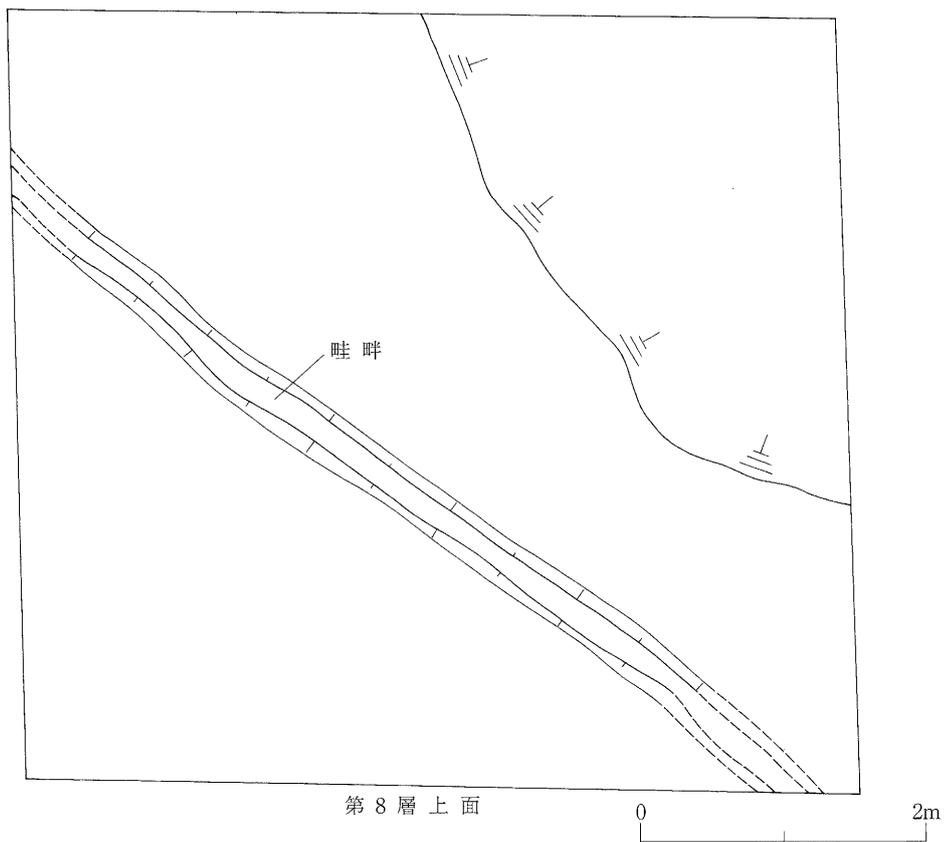
第3 b層 灰オリーブ色(5Y5/2)粗粒砂混じり粘質シルト。調査区の南北で土質が異なる。須恵器



第4図 第2層上面平面実測図



第3層上面



第8層上面

第5図 第3・8層上面平面実測図

と土師器の小片が出土した。厚さ20cm前後を測る。調査区の北側に堆積。

第4 a層 暗緑灰色(7.5GY4/1)粘質シルト。厚さ20cm前後を測る。調査区の北側に堆積。北端に砂の堆積がみられる。

第4 b層 オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土。土師器の小片が出土した。厚さ20~30cm前後を測る。

第5層 暗緑灰色(7.5GY4/1)粘質シルト。厚さ5~10cmを測る。

第6 a層 灰色(7.5Y4/1)細粒砂混じり粘質シルト。厚さ20cm前後を測る。調査区の南側に堆積。

第6 b層 暗緑灰色(10G3/1)細粒砂混じり粘土。厚さ20cm前後を測る。

第7層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)極粗粒砂。厚さ20cm前後を測る。

第8層 黒色(10YR1.7/ 1)細粒砂混じり粘土。上部に灰色(5Y4/1)シルトが混じる。上面で畦畔と足跡を検出した。厚さ15~30cmを測る。

第9層 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂。

各層からの遺物の出土量は微量であり、明確な遺物包含層は確認できなかった。各層の時期は、出土遺物と近隣の第1次調査で検出した層位関係から、第1層は鎌倉時代、第3・4層は奈良時代~平安時代、第7層は弥生時代に相当すると考えられる。

3. 遺構 (第4・5図)

遺構は落ち込み、溝、畦畔を確認した。遺構から遺物は確認できなかった。

落ち込みを第2層上面で検出した。北肩のみ検出し、南肩は調査区外へ続くため全体の形状は確認できない。東西方向に伸びるものと思われる。底面で足跡を検出した。

溝を第3層上面で検出した。幅190cm、深さ70cmを測る東西方向の溝で、断面形は逆台形を呈する。東端の大半は落ち込み状の遺構と攪乱によって切られている。両端は調査区外へと続く。

畦畔を第8層上面で検出した。幅20cm、高さ10cmを測り、断面形は台形を呈する。盛土の痕跡が認められないことから、第8層を削りだして形成したものと考えられる。北西から南東方向へ直線に伸び、両端は調査区外へ続く。畦畔の両側で足跡を確認した。

この他に、第3層上面で落ち込み状の遺構を検出した。攪乱によりわずかし確認することができず、形状など詳細は不明である。

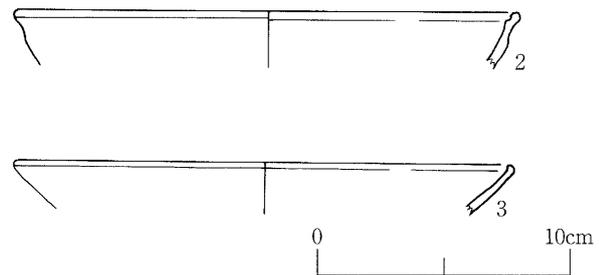
4. 出土遺物 (第6図)

須恵器・土師器・瓦質土器などバスケット半箱出土したが、多くが細片のため図化できたのは4点である。

1は須恵器の壺の頸部である。頸部は直線的に立ち上がる。内外面はヨコナデ調整し、内面の一部と外面には釉が残る。やや軟質である。残存高は2.8cmを測る。平安時代のものである。第4層より出土した。



2・3は土師器の杯である。2は口縁部がやや外反する。口縁端部に沈線を施す。内面は風化のため調整法は不明、外面はヨコナデ調整する。口径は19.6cm、残存高は2.2cmを測る。3は口縁端部が上方に短く拡張する。内外面はヨコナデ調整する。口径は19.2cm、残存高は1.7cmを測る。平安時代のものである。2は



第6図 出土遺物実測図

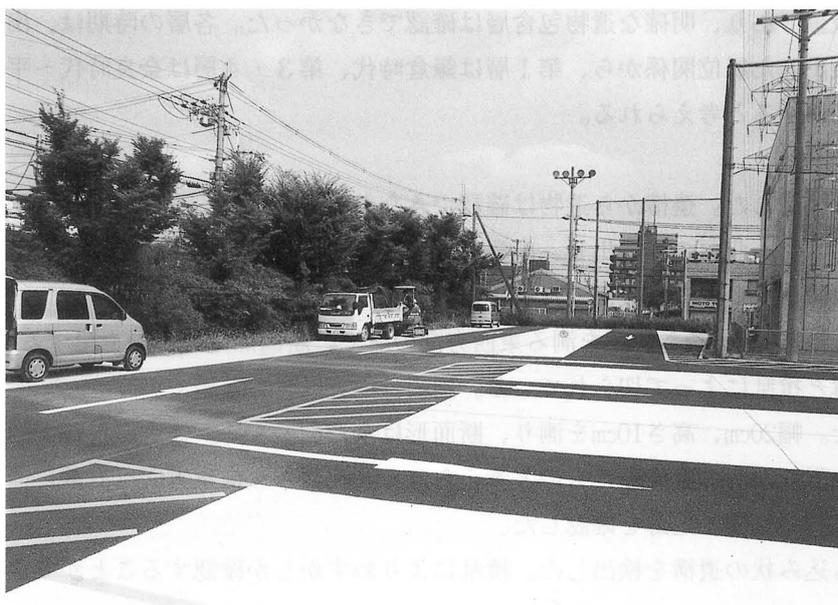
第3b層、3は第4a層より出土した。

4は瓦質土器の椀である。和泉型である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。内面のヘラミガキ調整は粗く、口縁端部にも施されている。外面はヨコナデ調整する。口径は13.0cm、残存高は2.0cmを測る。鎌倉時代のものである。第1層より出土した。

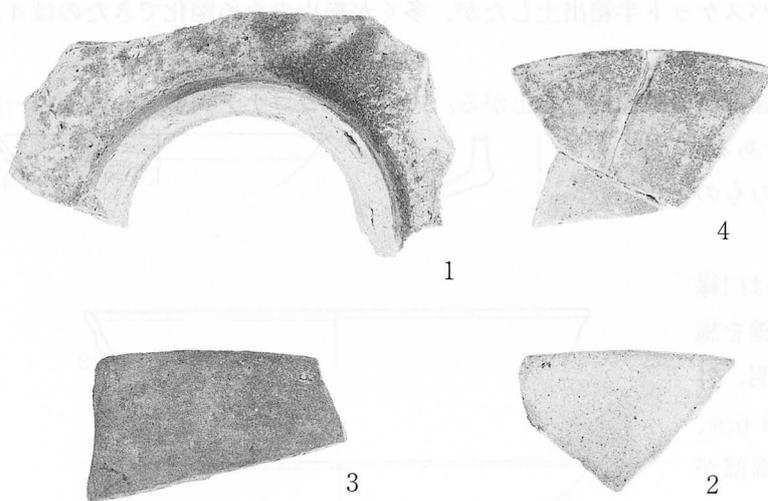
5. まとめ

今回の調査では、出土遺物からT.P.+2.5m付近で鎌倉時代、T.P.+1.5~2.0m付近で奈良時代~平安時代、T.P.+1.0m付近で弥生時代に相当する層を確認した。遺物包含層は確認できなかった。

従来の調査より、第3・4・6次調査地付近一帯に弥生時代後期の集落域が広がると考えられている。今回の調査と近隣の第1次調査で、弥生時代後期の集落に伴う遺構は確認されていないことから、当調査区まで集落の範囲は広がらないと考えられる。しかし、畦畔を検出したことから周辺に水田域が広がる可能性があり、今後の調査に期待したい。



調査地遠景



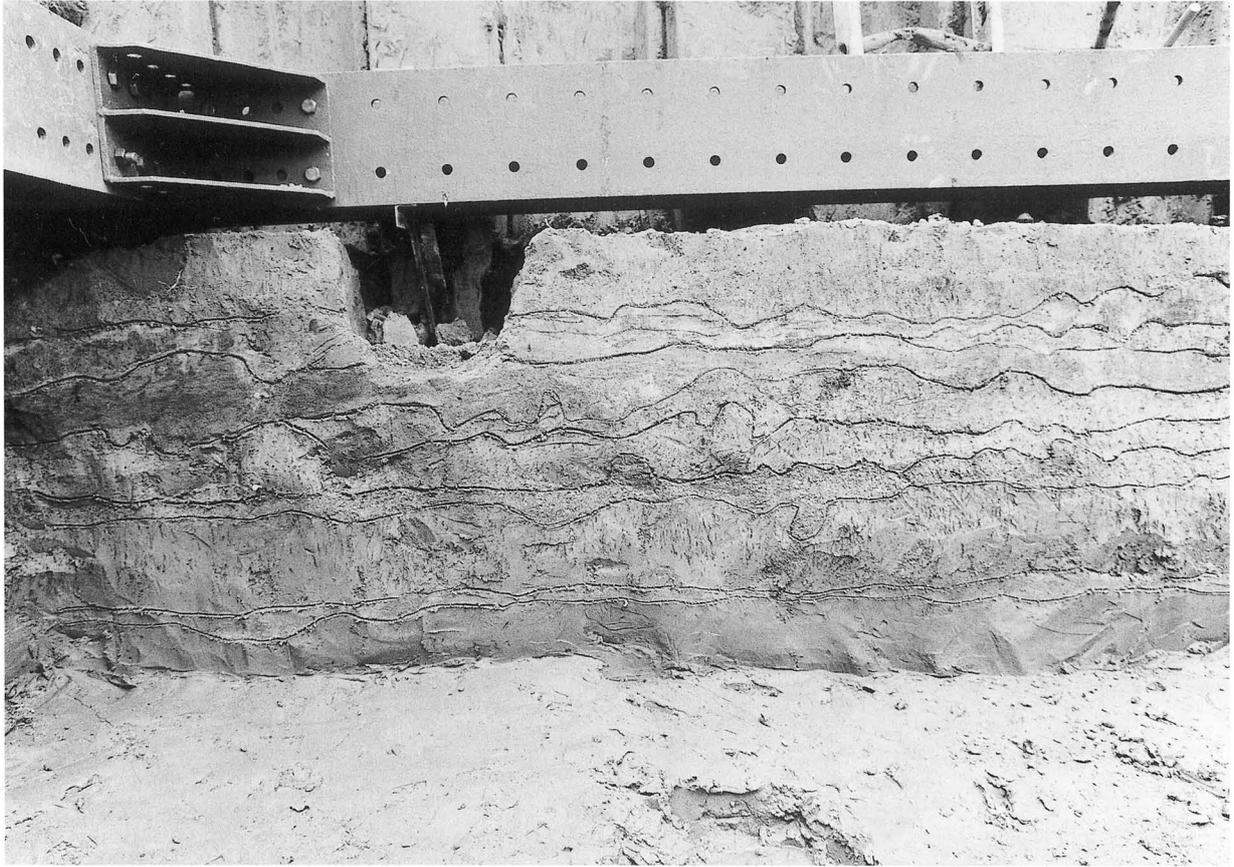
出土遺物(須恵器・土師器・瓦質土器)



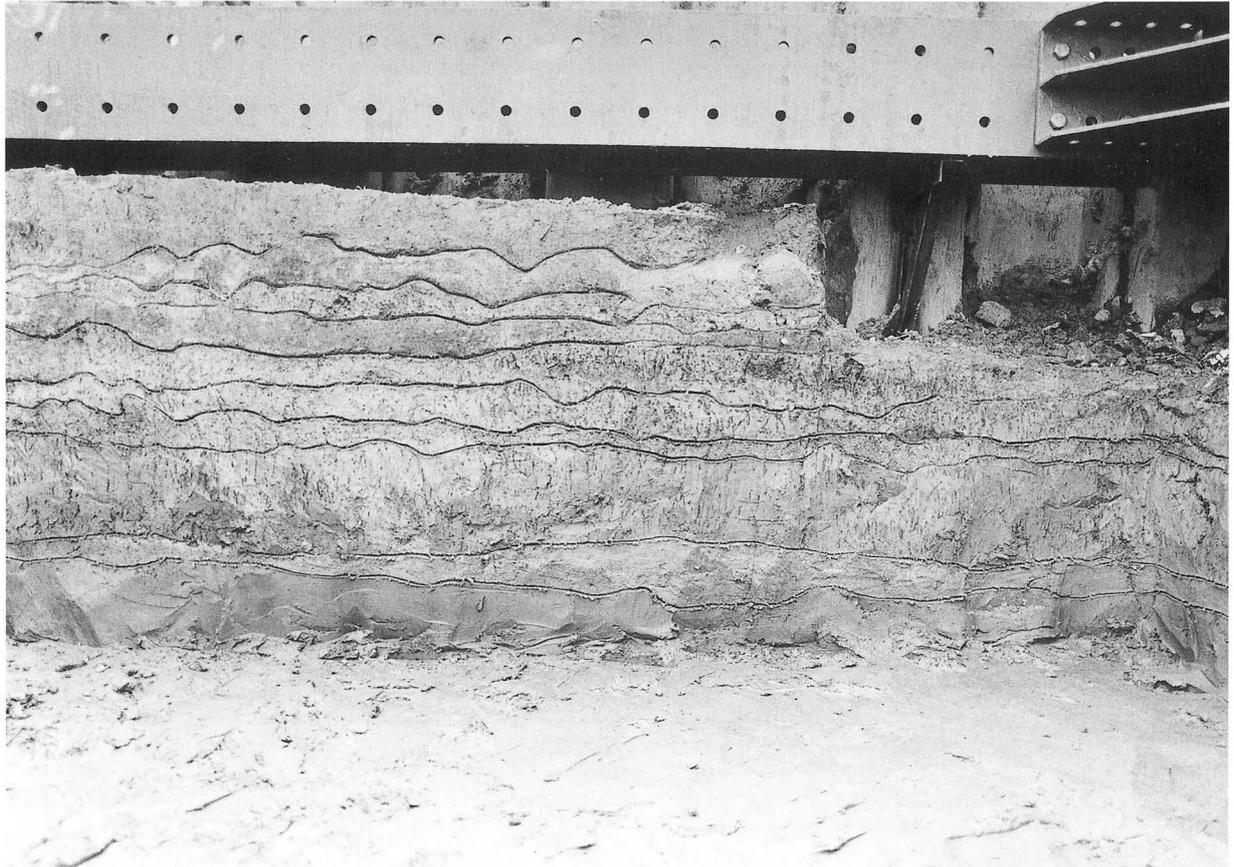
西壁断面 (第2～6層 東より)



西壁断面 (第4～8層 東より)



南壁断面（東側 第1～6層 北より）



南壁断面（西側 第1～6層 北より）



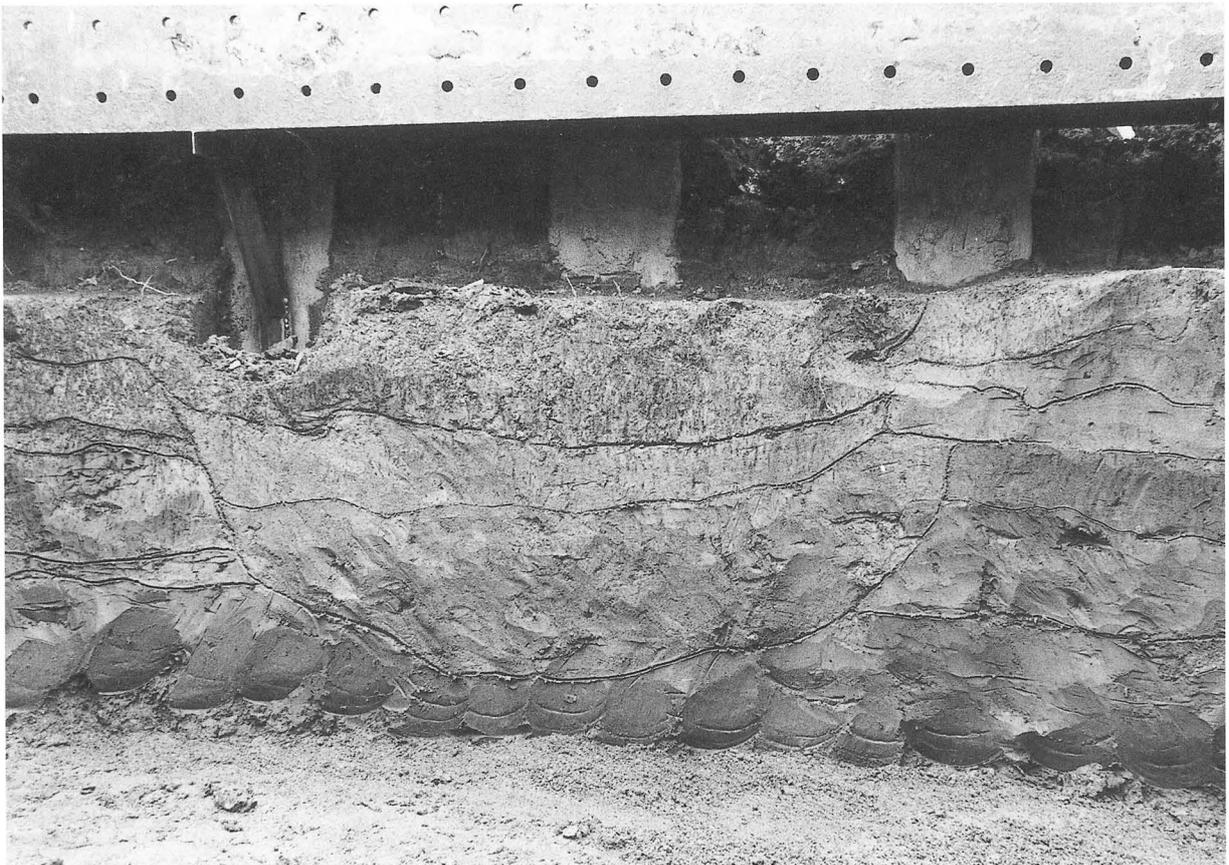
南壁断面（第6～9層 北より）



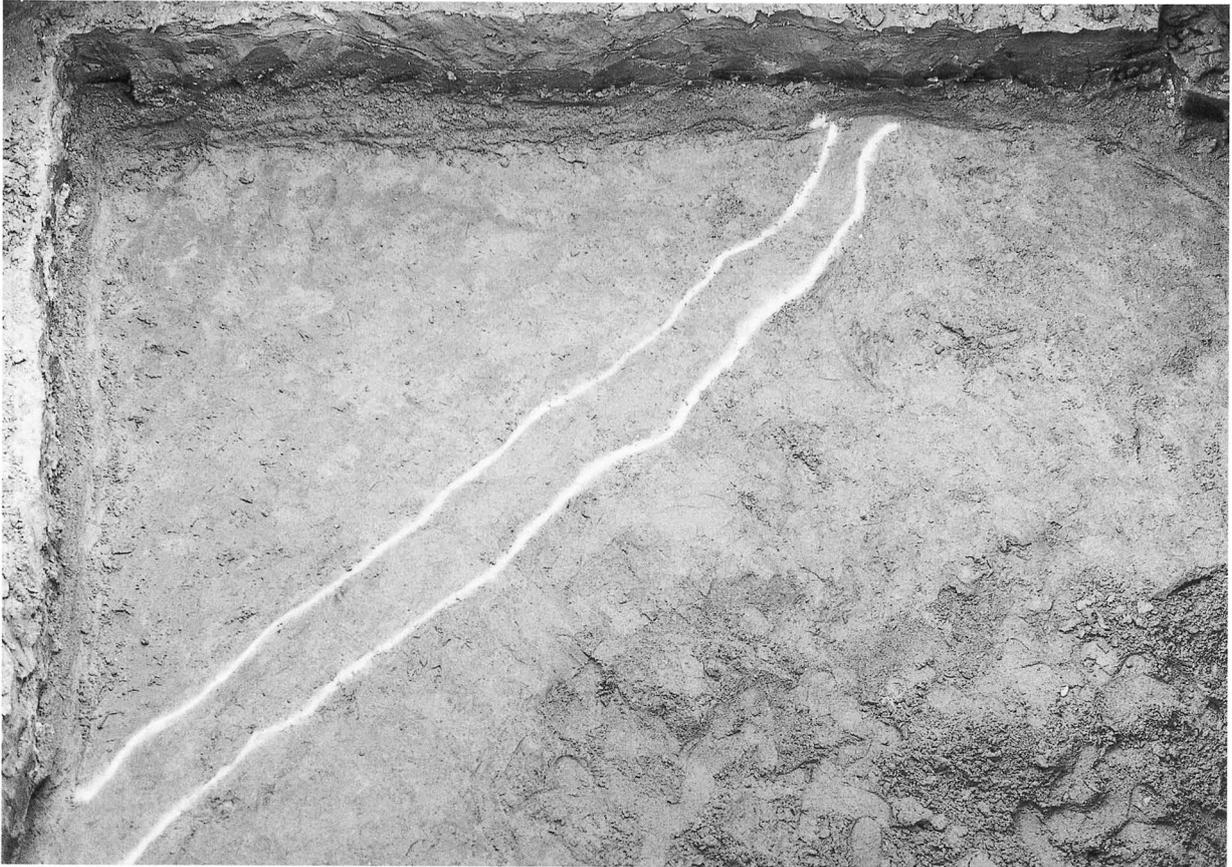
第2層上面落ち込み完掘状況（東より）



第3層上面溝完掘状況（東より）



溝断面（東より）



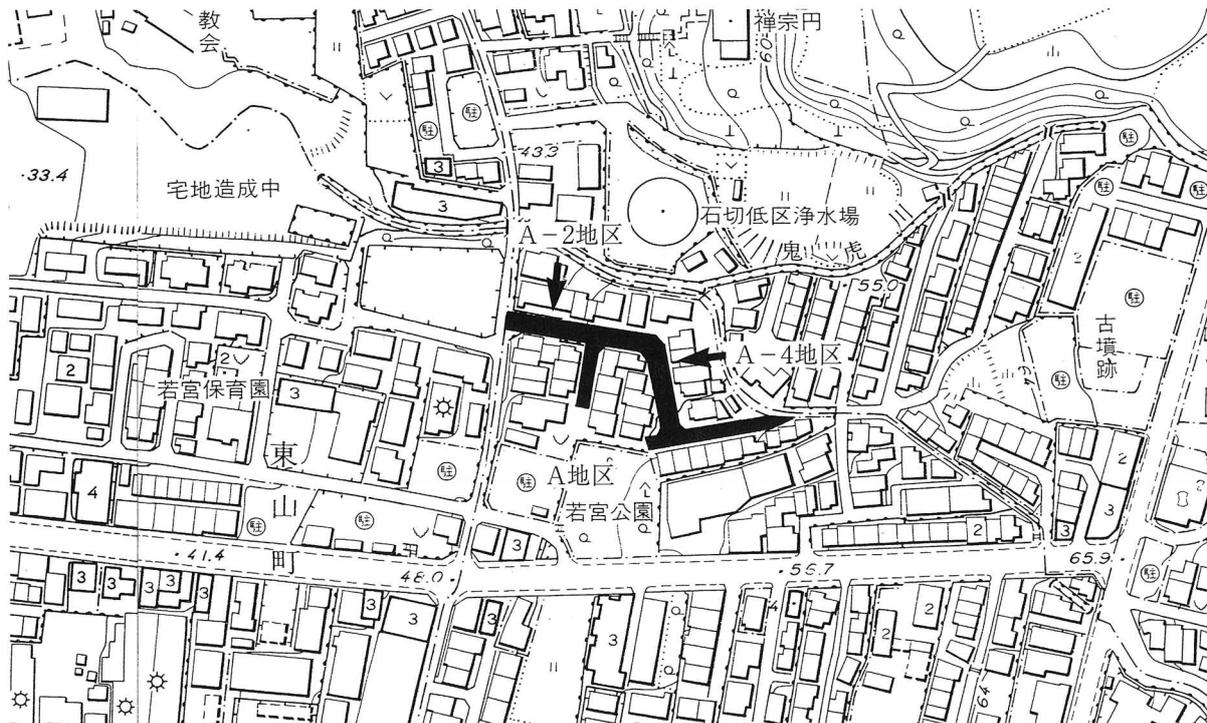
第8層上面畦畔検出状況（東より）



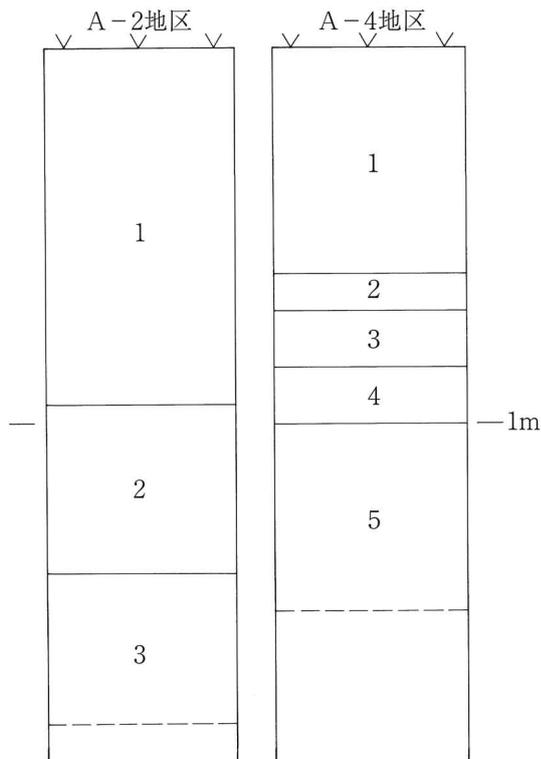
畦畔断面（北より）

わかみや 第17章 若宮古墳群の調査

名 称	内 容
1 事業名	平成17年度公共下水道第22工区管きょ築造工事
2 調査地点	東大阪市額田町1141-1
3 調査面積	70㎡
4 調査期間	平成18年4月12日～4月24日（延べ7日）
5 報告担当	才原
6 調査の経過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄けいはんな線（旧東大阪線）新石切駅の東である。当地点は若宮古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ82mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要 (第2図)

A-2地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 暗褐色(10YR3/3)砂混じり粘質土。
- 第3層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土混じり粗粒砂。

A-4地区の層序

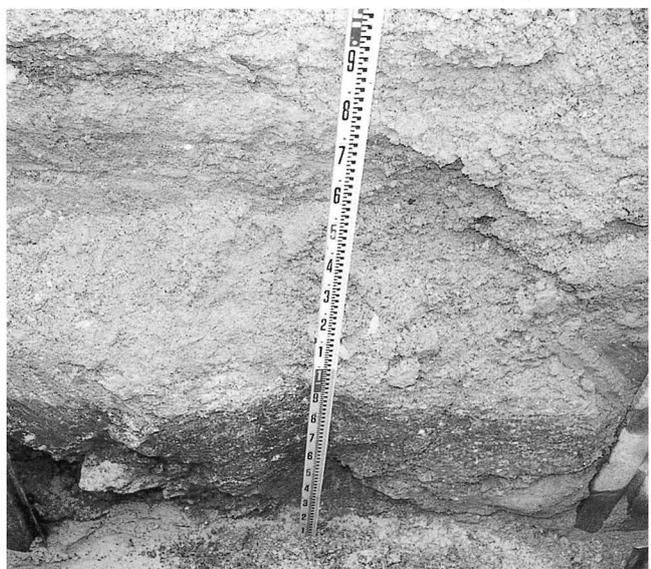
- 第1層 盛土。
- 第2層 暗緑灰色(10G3/1)粘土。
- 第3層 褐色(10YR4/4)中粒砂。
- 第4層 にぶい黄褐色(10YR5/3)粗粒砂混じり砂質土。
- 第5層 にぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂混じり粘質土。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。



A地区調査地遠景



A-2地区土層断面



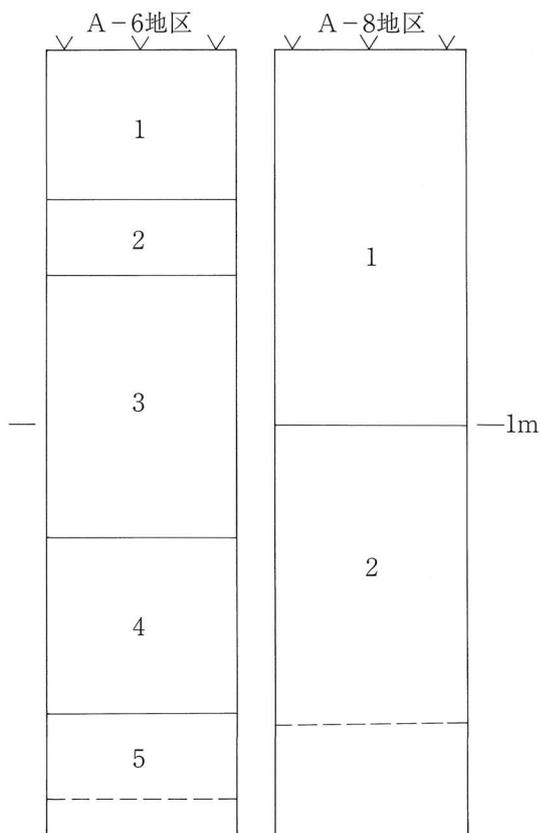
A-4地区土層断面

第18章 ぜんこんじやま 善根寺山遺跡の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成17年度公共下水道第27工区管きょ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市善根寺町6丁目876-14
3 調 査 面 積	91m ²
4 調 査 期 間	平成18年3月24日～4月14日（延べ8日）
5 報 告 担 当	才原
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は孔舎衛中学校の北である。当地点は善根寺山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ93mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要 (第2図)

A-6地区の層序

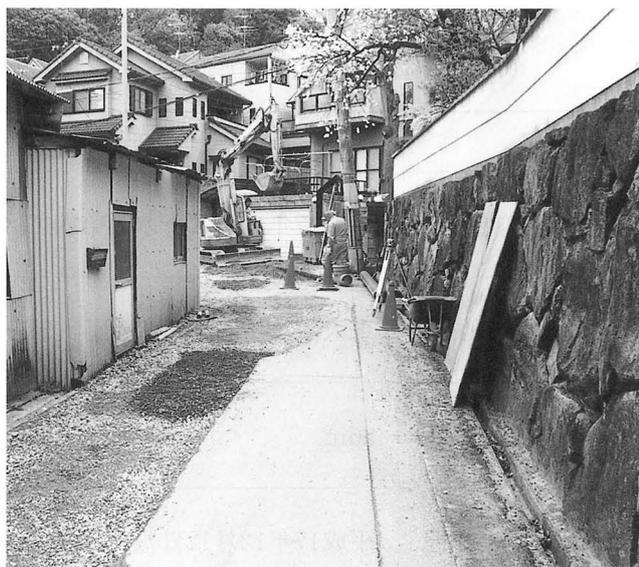
- 第1層 盛土。
- 第2層 黄褐色(10YR5/6)粗粒砂。
- 第3層 褐色(10YR4/4)粗粒砂混じり砂質土。
- 第4層 褐色(10YR4/6)粗粒砂混じり粘質土。
- 第5層 暗褐色(10YR3/3)粗粒砂混じり粘質土。

A-8地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黄褐色(10YR5/6)粗粒砂混じり粘質土。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。



A地区調査地遠景



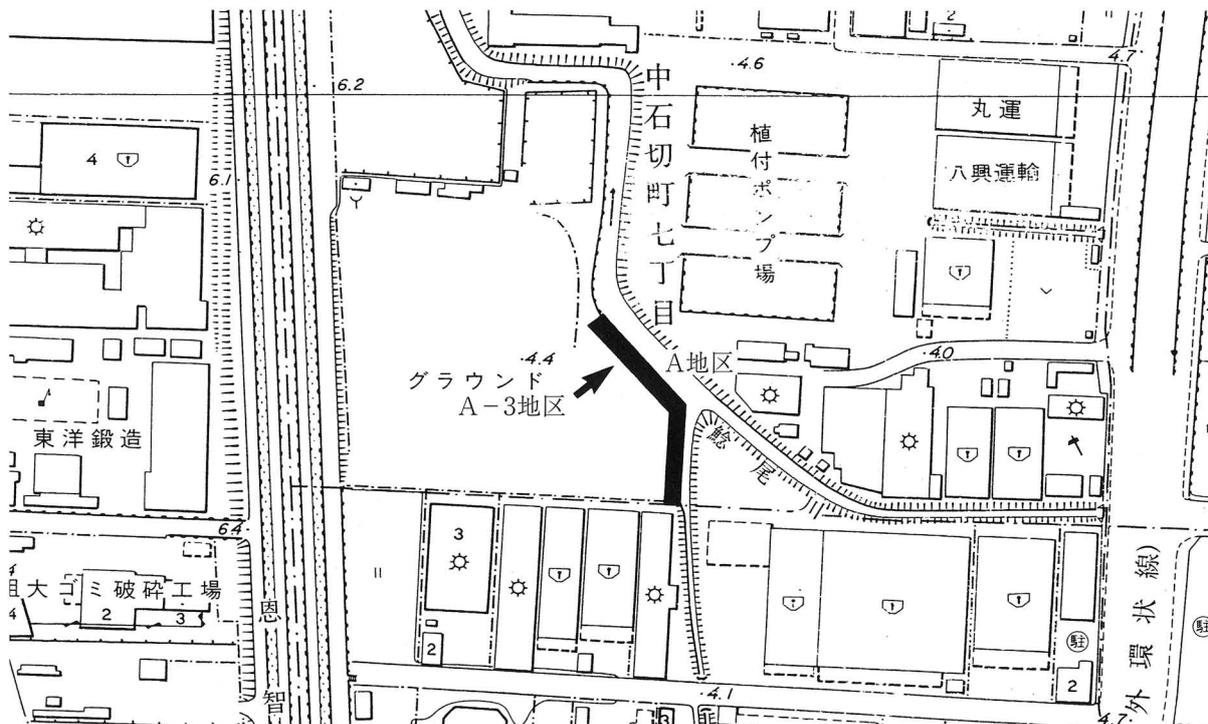
A-6地区土層断面



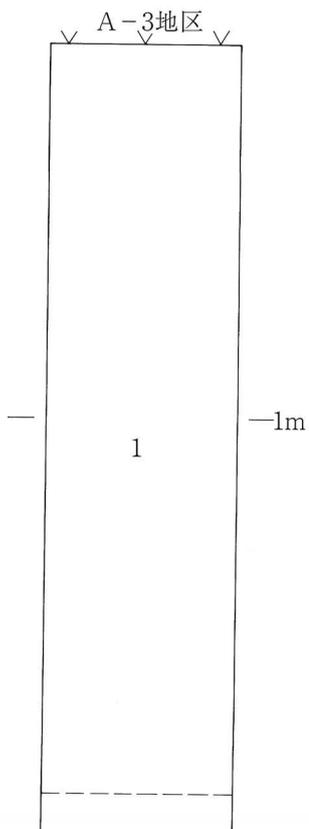
A-8地区土層断面

きたじま 第19章 北島遺跡の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成17年度公共下水道第29工区管きょ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市中石切町7丁目2731-1
3 調 査 面 積	86㎡
4 調 査 期 間	平成17年12月12日～12月28日（延べ6日）
5 報 告 担 当	才原
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は植附ポンプ場の南である。当地点は北島遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約1.0～1.1mで長さ85mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要 (第2図)

A-3地区の層序

第1層 盛土。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。



A地区調査地遠景



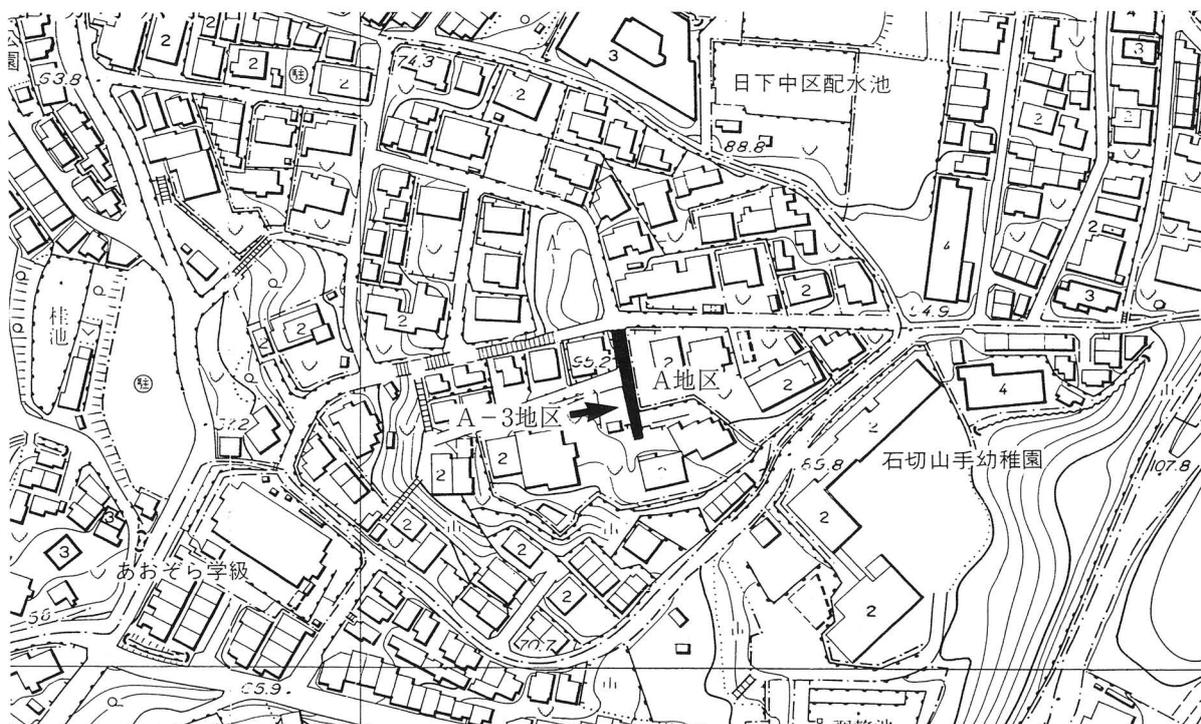
A地区調査状況



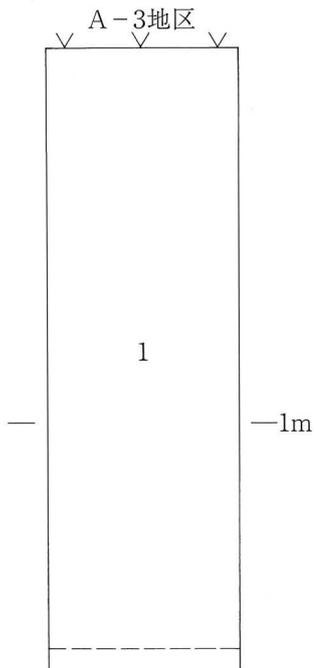
A-3地区土層断面

第20章 しばほうずやま 芝坊主山遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成17年度公共下水道管きょ築造工事（東石切町6丁目地区）
2	調 査 地 点	東大阪市東石切町6丁目1672-88~1672-218
3	調 査 面 積	35㎡
4	調 査 期 間	平成18年4月12日～4月19日（延べ4日）
5	報 告 担 当	才原
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は石切山手幼稚園の西である。当地点は芝坊主山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8~0.9mで長さ38mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要 (第2図)

A-3地区の層序

第1層 盛土。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。



A地区調査状況



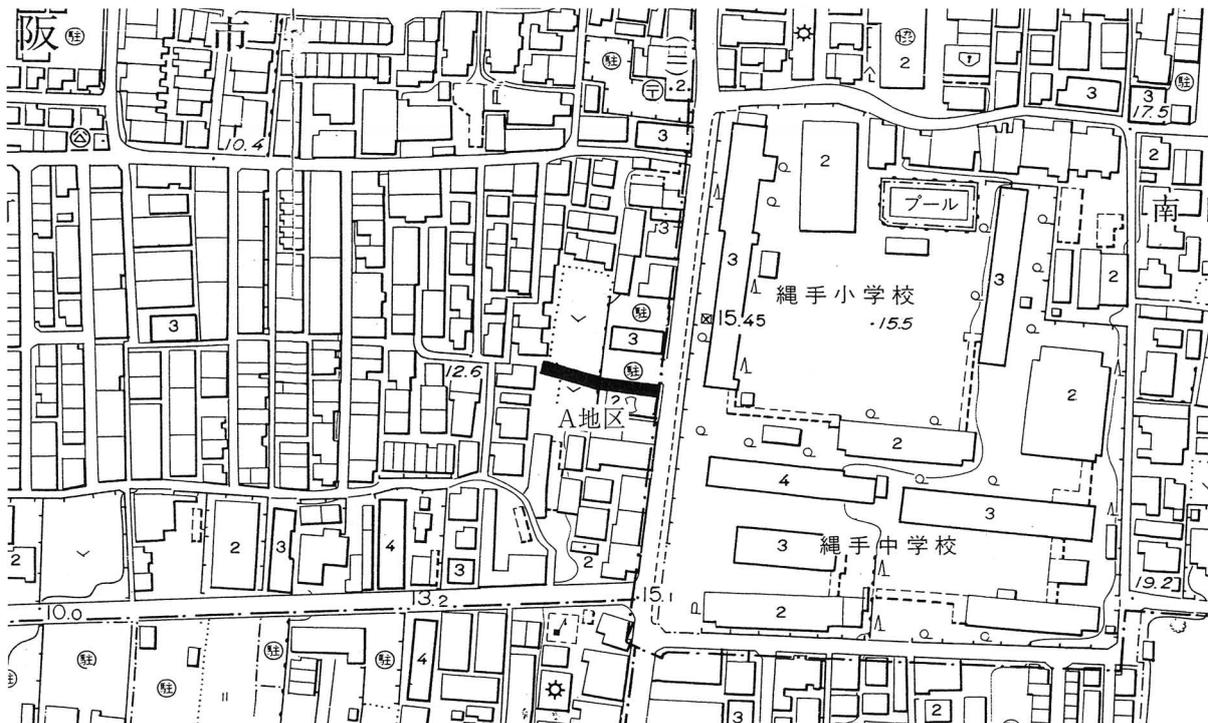
A地区調査地遠景



A-3地区土層断面

第21章 なわて 縄手遺跡の第19次調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成17年度公共下水道管きょ築造工事（末広町）
2	調 査 地 点	東大阪市末広町947～950
3	調 査 面 積	34㎡
4	調 査 期 間	平成18年 4 月 6 日～4 月 12 日（延べ3日）
5	報 告 担 当	庵ノ前
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は縄手小学校の西である。当地点は縄手遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ40mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)

1. はじめに

縄手遺跡は、当市東部南方の南四条町・末広町に所在する縄文時代中期から江戸時代にかけての複合遺跡である。生駒山西麓の鳴川谷の開口部に発達した扇状地の末端部に位置しており、標高は約15～20mを測る。当遺跡の範囲内、縄手小学校敷地内には径30mの円墳であるえの木塚古墳(4世紀末～5世紀初頭)があり、また当遺跡の東には上六万寺遺跡(弥生時代後期～中世)、西には五合田遺跡(弥生時代～古墳時代)・段上遺跡(縄文時代中期～中世)が隣接し、南には船山遺跡(縄文時代後期～鎌倉時代)が存在している。

当遺跡は過去18次にわたる調査が実施されている。既往の調査成果を見ると、特に縄文時代後期の遺構・遺物が主体となっている。当時期の遺構としては堅穴住居跡・石組炉跡・土壇墓・埋甕・溝などが検出され、遺物は縄文土器(深鉢・浅鉢・注口土器など)・土偶・石器(石鏃・石錘・石匙・石剣など)などが出土している。また、その上層には弥生時代以降の遺構が切り込んでおり、古くから集落・墓域として発展してきた地域であることがわかる。

2. 調査の概要

さて第19次調査となる今回の調査地は、旧東高野街道(現、旧大阪外環状線)の西側に接している。調査区は東西ラインで、当初は掘削延長約40mであったが、東半約22mは空地北端の現水路内に下水道管を埋設したので掘削はしなかったため、調査の対象から除外した。西半約18mは、調査前は用水路が流れており、その両脇には耕作地が広がっていた。現地表面は標高約14.8mで、東半(約16.5m)との比高差は約1.7mを測る。今回報告するのは、掘削作業を行なった西半部である。

3. 層序(第2図)

工事の進行上、調査地西端からA-1地区(約6m)、A-2地区(約4m)、A-3地区(約8m)と地区割をした。

A-1地区は現水路の石垣の影響により断面観察はできなかったが、A-2・3地区ではそれぞれ盛土層を含む5層を確認した。各層からの出土遺物については次節にて詳述するが、第2層は古墳時代、第3・4層は弥生時代中期の遺物包含層であることが確認できた。残土からの出土遺物を観察する限り、第5層は縄文時代後期の遺物包含層と考えられるが、層位中より遺物を確認できなかったので断定は控えておきたい。

A-2地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 オリーブ黒色(10Y3/1)砂質土。
- 第3層 灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂質シルト。
- 第4層 オリーブ黒色(7.5Y3/2)砂質シルト。
- 第5層 オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト。

A-3地区(西側)の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 緑黒色(5G2/1)粗粒砂混じりシルト。
- 第3層 暗緑灰色(7.5GY3/1)粗粒砂混じり粘質土。
- 第4層 暗緑灰色(10G4/1)粘質土。
- 第5層 灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂混じりシルト。

A-3地区(東側)の層序

- 第1層 盛土。



第2図 土層断面柱状図

第2層 青黒色(5BG2/1)細粒砂混じり粘土。(須恵器出土)

第3層 暗灰色(N3/)粘土。(弥生土器出土)

第4層 緑黒色(10G2/1)砂混じり粘土。(弥生土器出土)

第5層 暗緑灰色(5G3/1)砂混じり粘土。

4. 出土遺物

A-2地区の残土より縄文土器・土師器、A-3地区(西側)第2層より須恵器(甕体部片)、A-3地区(東側)第3層より弥生土器片、第4層より弥生土器(細頸壺・壺底部・把手付きコップ形土器)、残土より縄文土器・須恵器・磁器が出土した。そのうち縄文土器5点(1~5)と弥生土器3点(6~8)

を図化することができた。

縄文土器(第3図 1～5)

今回の調査で出土した縄文土器は、いずれも縄文時代後期の生駒西麓産の粗製土器である。

1はA-2地区残土より出土した深鉢の体部片である。残存高8.9cm、器厚0.7cmを測る。外面は垂下沈線を施文し、内面はナデ調整する。色調は外面にぶい褐色(7.5YR5/4)～灰黄褐色(10YR6/4)、内面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

2はA-3地区残土より出土した深鉢の口縁部片である。復元口径29.4cm、残存高6.8cm、器厚0.6cm(体部)を測る。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は外側へ肥厚させ上端面を成し、端面と内面に幅2mm・深さ1mmの凹線を有す。外面はケズリ調整、内面はナデ調整する。色調は外面灰黄色(2.5Y6/2)、内面黄灰色(2.5Y4/1)を呈する。

3はA-3地区残土より出土した深鉢の口縁部片である。残存高5.0cm、器厚0.7cm(体部)を測る。口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は外側へ肥厚させ外端面を成している。外面はケズリ調整、内面はナデ調整する。色調は外面にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈する。

4はA-2地区残土より出土した浅鉢の口縁部片である。残存高4.2cm、器厚0.6cm(体部)を測る。口縁部は内彎して立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。外面はケズリ調整、内面はナデ調整する。色調は黄褐色(2.5Y5/3)を呈する。

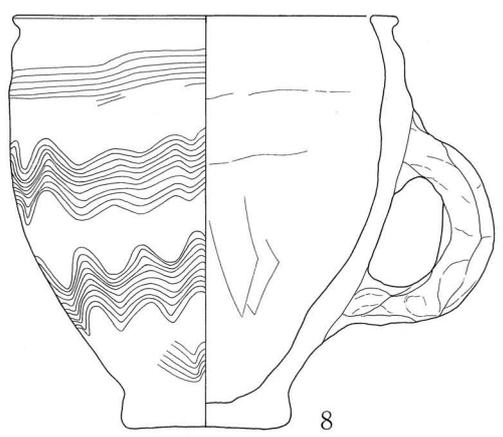
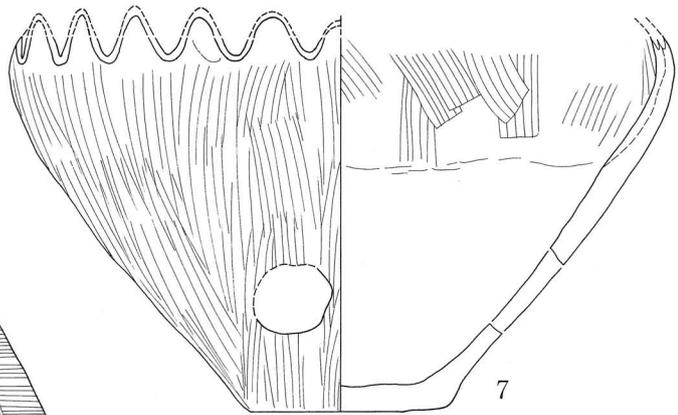
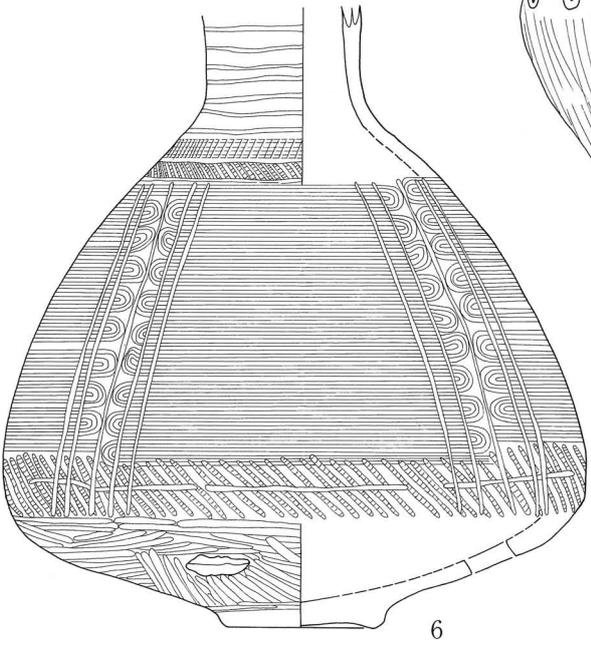
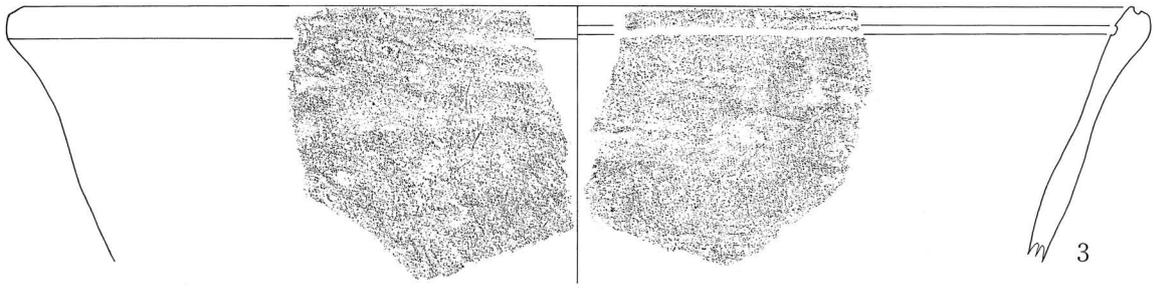
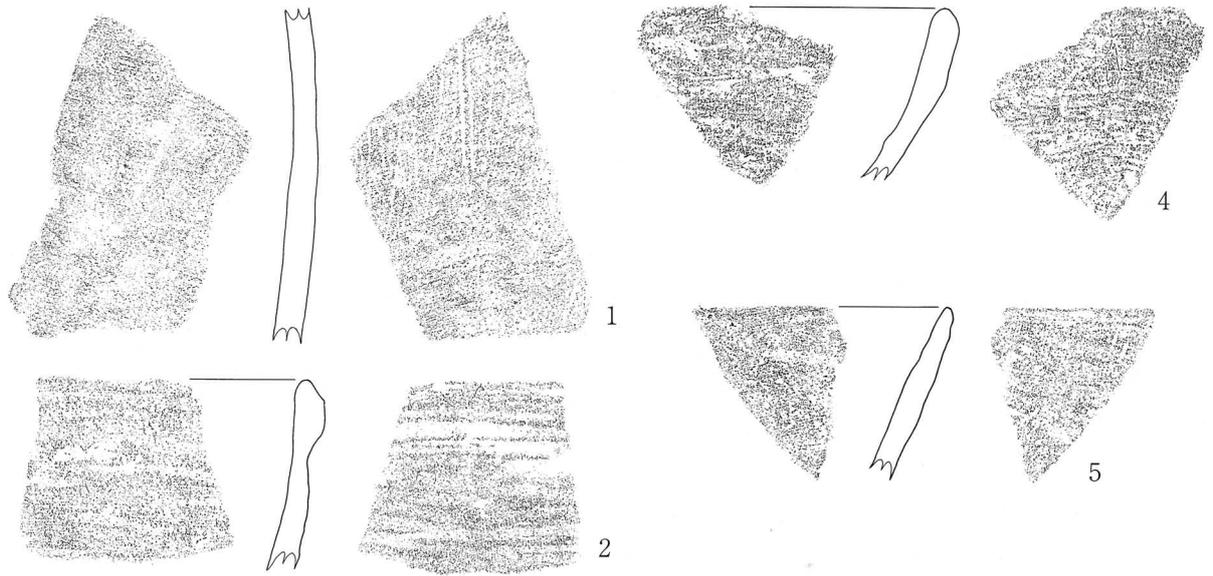
5はA-2地区残土より出土した浅鉢の口縁部片である。残存高4.6cm、器厚0.6cm(体部)を測る。口縁部は上外方へのび、口縁端部は丸く終わる。内外面ともにナデ調整する。色調は外面にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面黒褐色(2.5Y3/1)を呈する。

弥生土器(第3図 6～8)

弥生土器は細頸壺1点(6)、壺底部1点(7)、把手付きコップ形土器1点(8)を図化することができた。3点ともA-3地区(東)の第4層から出土したものである。

6の細頸壺は、口頸部は欠損していたものの、それ以下は完存していた。法量は頸部径4.0cm、体部最大径15.4cm、底径4.0cm、残存高16.6cmを測る。器形は頸部と胴部との境界のすぼまりが強く、体部下半が偏球形で下ぶくれしており、体部の最大径はその屈曲部にある。施文・調整について、頸部には櫛描直線文を施す。櫛原体は中央が幅広く空いており、その両端に2本の条溝がある。櫛原体の幅は0.8cmで、条溝の本数は4本を数える。最低4段は施文している。体部上半には、上から櫛描簾状文、櫛描列点文(A)、櫛描流水文、櫛描列点文(B)の順に施文している。いずれの文様も整然としており、極めて精緻である。各文様帯間は狭く、それぞれに研磨が施されている。櫛描列点文(B)の中央部には横位の文様帯研磨が断続的に見られる。櫛描流水文はS字状曲折を蛇行状に縦方向に繰り返して施文された、いわゆる縦型流水文である。上腹部を四分割し、上部から下部へ連続して施されている。櫛描流水文・櫛描列点文(B)の施文後、各櫛描流水文間に1条、曲折部から内へ約0.8～1.2cmに2条の縦位の研磨が施されている。櫛原体は櫛描簾状文・櫛描列点文(A)は6本/0.6cm、流水文は4本/0.5cm、櫛描列点文(B)は26本/2.5cmである。頸部で使用された櫛原体も含めて、この細頸壺には4種類の櫛原体を用いられている。体部下半から底部にかけてはヘラミガキ調整する。体部下半には径1.0～1.5cmほどの穿孔を有し、体部下半～底部の2/3に黒斑が見られる。色調はにぶい黄褐色(10YR4/3～5/3)を呈する。畿内第IV様式に属する。生駒西麓産。

7の壺底部は、復元体部最大径17.8cm、底径5.4cm、残存高10.0cmを測る。平底の底部で体部の張りは大きい。外面は体部最大径の位置に櫛描波状文、体部下半はハケメ調整する。内面は体部上半にはハケメ調整(6本/1.0cm)、体部下半～底部にかけてはナデ調整する。ハケメ調整とナデ調整の境に



0 10cm

第3図 出土遺物実測図

接合痕が見られる。体部下半、底部付近には径2.2cmほどの穿孔を有し、体部下半から底部にかけて一部黒斑が見られる。色調は浅橙色(7.5YR8/3)～灰白色(2.5Y7/1)を呈する。畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。非河内産。

8は把手付きコップ形土器である。復元口径10.2cm、底径4.4cm、器高11.0cmを測る。平底の底部から内彎気味に立ち上がり、口縁部は外側に屈曲させ、上端面を成している。体部には施文後に幅1.4cm、厚さ1.1cm、断面長方形の把手を貼り付けている。外面には体部上端に櫛描直線文(6本/0.7cm)を、体部上半から下半にかけて櫛描波状文(11本/1.2cm)をラセン状に3段になるように時計回りで施されている。口縁部内外面はヨコナデ調整、外面は底部ナデ調整、底面板状工具によるナデ調整する。内面は体部上半ナデ調整(接合痕あり)、下半は板状工具によるナデ調整、底部は成形時の指頭痕が残る。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。生駒西麓産。

5. まとめ

今回の調査地は長さ18m・幅0.6mと狭隘な調査地ではあったが、縄文時代後期から弥生時代中期を中心とした土器が出土した。縄文土器はいずれも残土からの出土ではあったが、A-3地区第2層から須恵器が、第3・4層から弥生土器が出土しており、縄文時代後期から古墳時代にかけての遺物包含層が調査地周辺にもさらに展開しているものと思われる。

遺構については今回の調査では確認できなかった。しかし遺物に関しては、弥生時代中期の細頸壺や把手付きコップ形土器など目を引くものが出土した。特に細頸壺は精巧に施文された一級品であるといえよう。また一個体に4種類もの櫛原体を使用するのは非常に珍しく、今後櫛描文様を研究する上で貴重な資料になると考えられる。

縄手遺跡の今回の調査は、東高野街道の西側の区域で初めて実施された。そして以上のような成果を得ることができ、遺跡の範囲が東高野街道の西側にも広がることが実証できた。既往の調査成果および今回の調査の遺物出土状況を併せて考えると、調査地周辺にも縄文・弥生時代の集落が広がっている可能性は非常に高いと推測される。



A地区調査地遠景



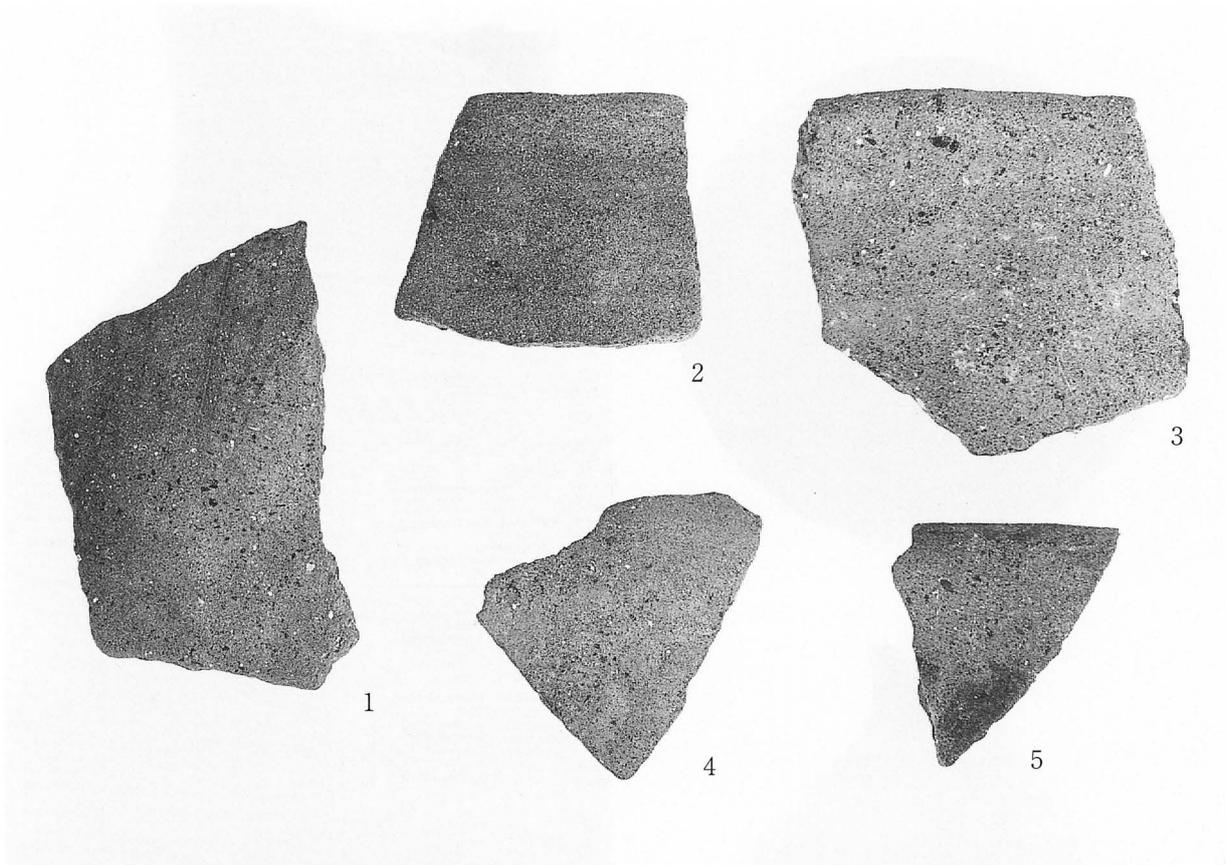
A-2 地区土層断面



A-3 地区土層断面



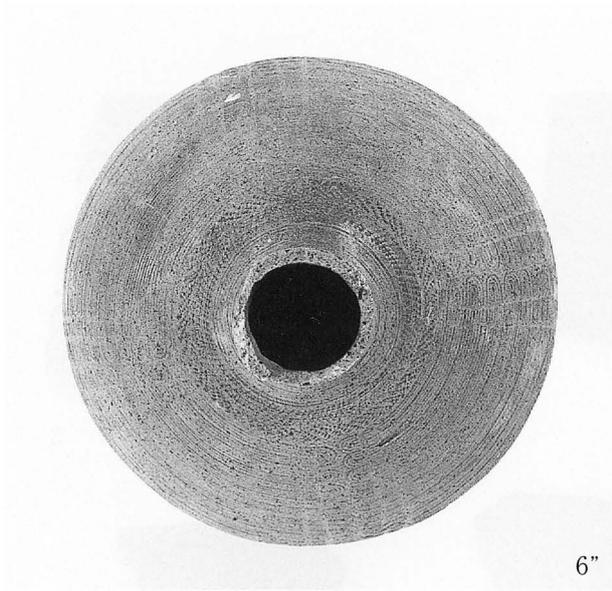
A-3 地区弥生土器出土状况



出土遺物（縄文土器）



出土遺物（弥生土器）



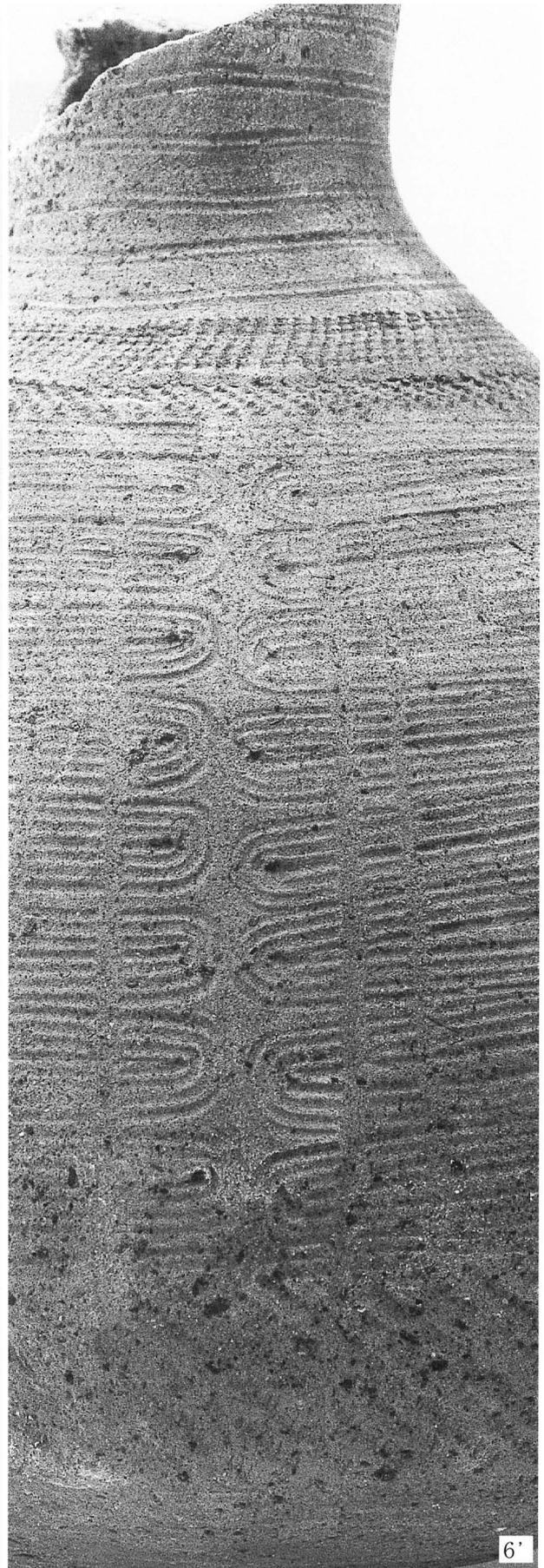
6"



6



6"

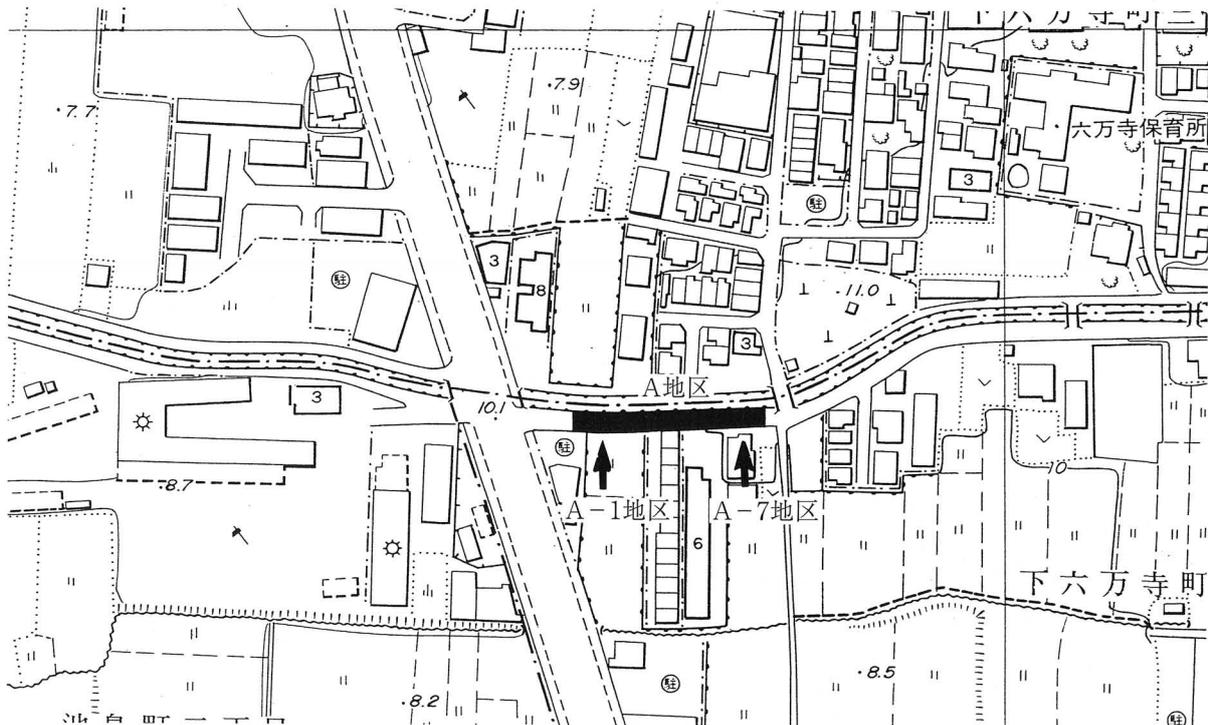


6'

出土遺物 (弥生土器)

第22章 しもろくまんじ 下六万寺遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成17年度公共下水道第202工区管さよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市下六万寺町2丁目1794～1798
3	調 査 面 積	35㎡
4	調 査 期 間	平成18年9月7日～9月29日（延べ7日）
5	報 告 担 当	才原
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪外環状線（国道170号線）の東で長門川の南である。当地点は下六万寺遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ41mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



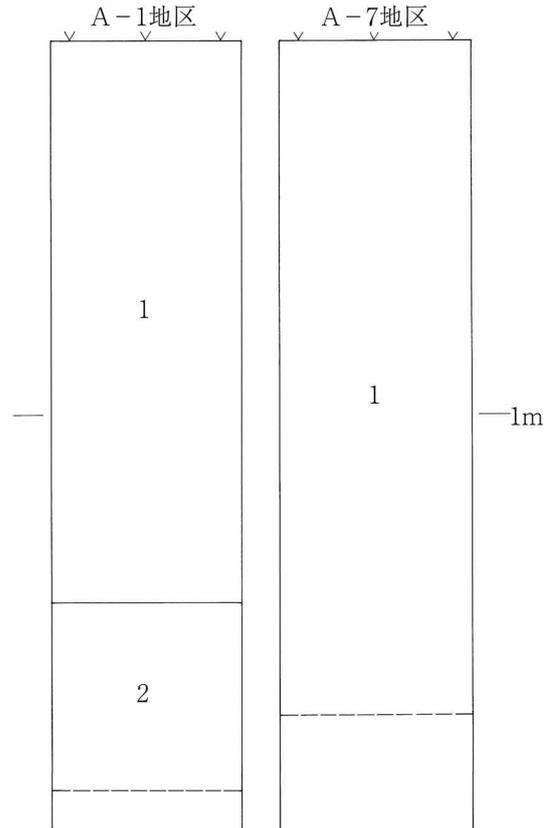
A 地区調査地遠景



A-1 地区土層断面



A-7 地区土層断面



第2図 土層断面柱状図

1. 調査の概要 (第2図)

A-1 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土。

A-7 地区の層序

第1層 盛土。

2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。

第23章 うえつけ 植附遺跡の第18次調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成17年度公共下水道管きょ築造工事（西石切町2丁目地区）
2	調 査 地 点	東大阪市西石切町2丁目27-1～484
3	調 査 面 積	34㎡
4	調 査 期 間	平成18年6月14日～6月16日（延べ2日）
5	報 告 担 当	庵ノ前
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄けいはんな線（旧東大阪線）の北である。当地点は植附遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ40mの間であり、開削工法である。

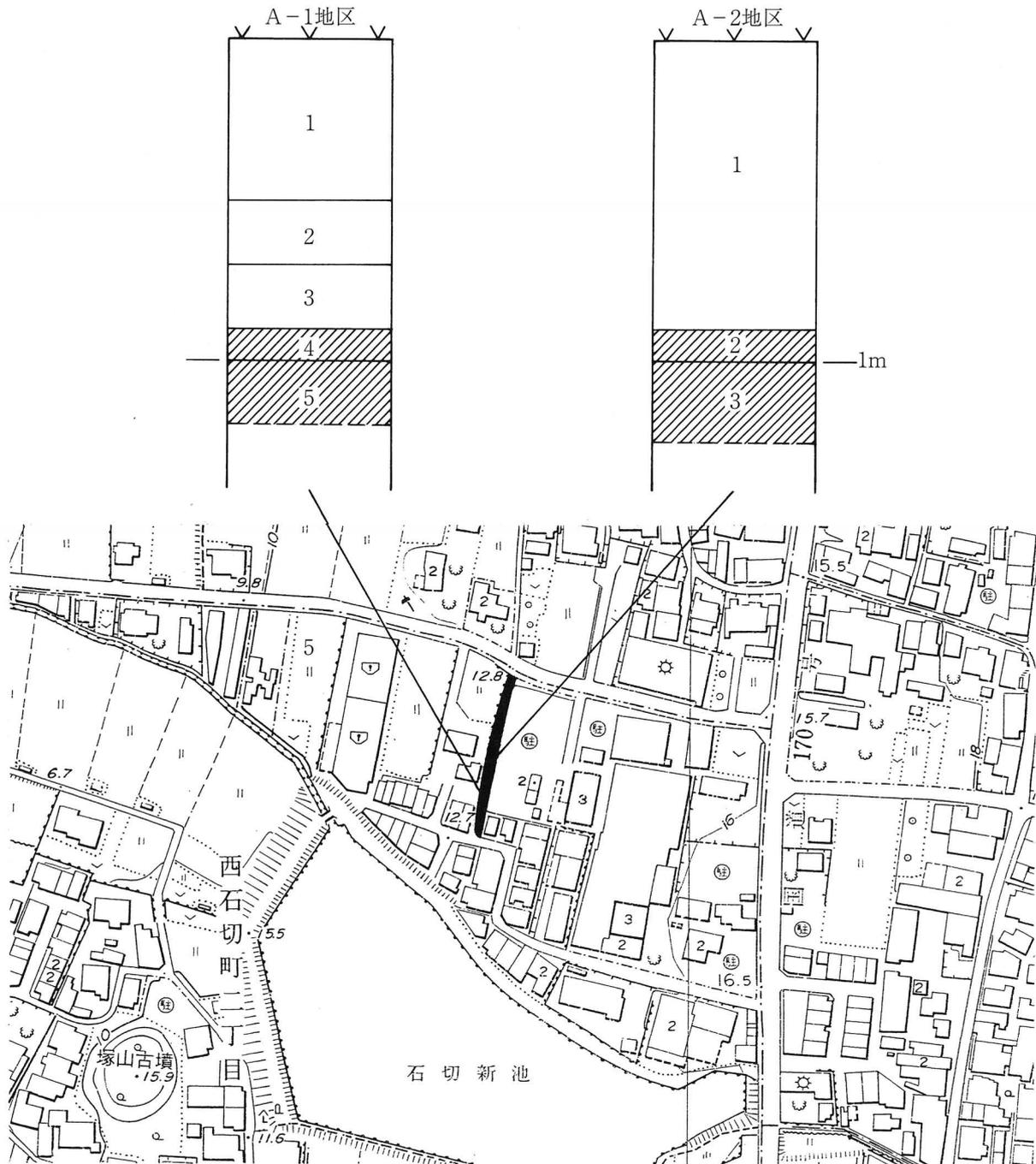


第1図 調査地点位置図 (1/2500)

1. 調査の概要

植附遺跡は、生駒山西麓で当市東部、音川によって形成された扇状地上に位置する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。標高は5～20mを測る。当遺跡範囲内に塚山古墳(5世紀前半)があり、遺跡の南には鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡が、東には辻子谷遺跡・法通寺跡・神並遺跡が接しており、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が密集している地域に所在している。

第18次にあたる今回の調査地は、遺跡の中央部北側に位置する。調査区は南北ラインで、当初は掘削延長40.30mが予定されていたが、北半20mは工事中止となった。そのため調査の対象となったのは南半の20.3mである。



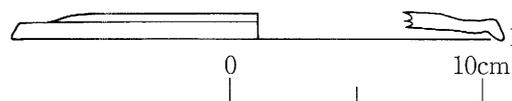
第2図 土層断面柱状図

2. 層序 (第2図)

工事が事前着工していたために、調査地南端の10mは立会することができなかった。工事の進行上、調査地南端より10～17mをA-1地区、17～20.3mをA-2地区とし、各地区にて層序の確認に務めた。

A-1地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黄灰色(2.5Y4/1)粘土。
- 第3層 黒褐色(10YR2/1)礫混じり粘土。
- 第4層 暗褐色(10YR3/4)砂混じり粘土。
- 第5層 灰黄褐色(10YR4/2)砂混じり粘土。
(第4・5層より遺物出土)



第3図 出土遺物実測図

A-2地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 緑黒色(5G2/2)細粒砂混じり粘土。
- 第3層 黒褐色(10YR3/2)中粒砂混じり粘質土。

3. 出土遺物 (第3図)

A-1地区第4・5層で奈良時代の土師器2点、須恵器2点が出土したが、すべて細片であった。そのうち、以下に報告する須恵器蓋坯の口縁部片1点のみ図化することができた。

1の須恵器蓋坯は、復元口径19.2cm、残存高1.05cmを測る。天井部から端部にかけてZ字状のカーブを描き、端部はやや外下方へ屈曲させ段を成している。口縁部内外面ともに回転ナデ調整である。色調は灰白色(N7/)を呈する。陶邑IV-3～4に属する。

4. まとめ

A-1地区第4・5層より奈良時代の土師器・須恵器が微量ではあったが出土した。

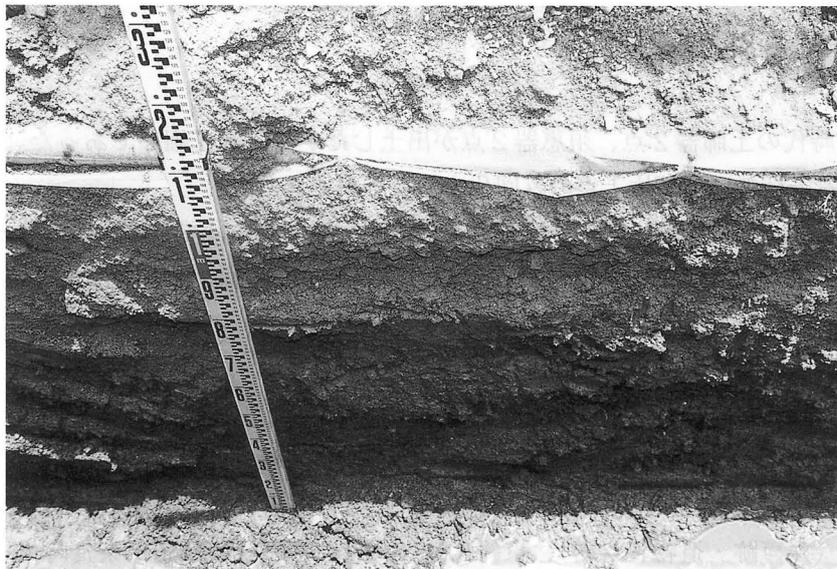
当遺跡は弥生時代から近世にかけての複合遺跡であり、遺跡北半部は特に古墳時代中期から中世にかけての遺構・遺物が検出されている。奈良時代の遺構・遺物に関して言えば、当調査地より北約150mの第9-1次調査No.4 Pit (井戸跡・遺物包含層)、東約100mの第14次調査区(飛鳥～奈良時代の耕作地跡)などで確認されている。こうした既往の成果から見ても、当調査地周辺にも奈良時代の遺構面や遺物包含層が広がっているものと思われる。今後の調査成果に期待したい。

参考文献

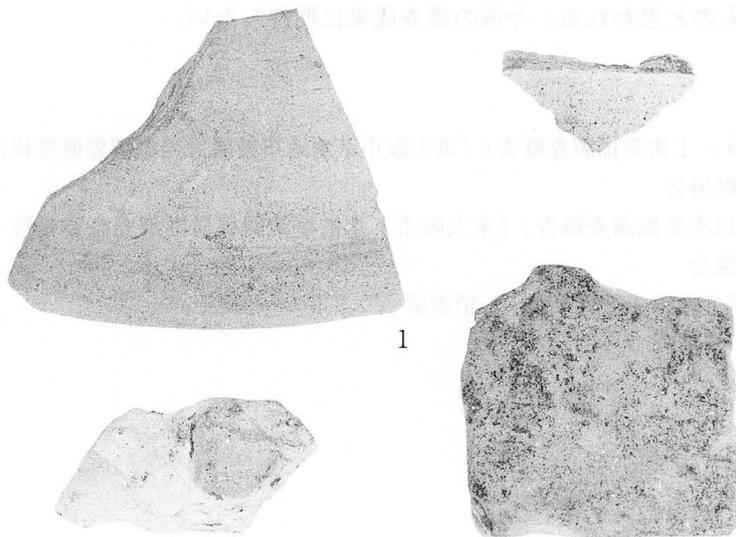
- 松田順一郎1997「第7章 植附遺跡第9-1次発掘調査概要」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-1995年度-』財団法人東大阪市文化財協会
- 松田順一郎1999「第3章 植附遺跡第14次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-1998年度-』財団法人東大阪市文化財協会
- 中村浩1981『和泉陶邑窯の研究-須恵器生産の基礎的考察-』柏書房



A 地区調査状況



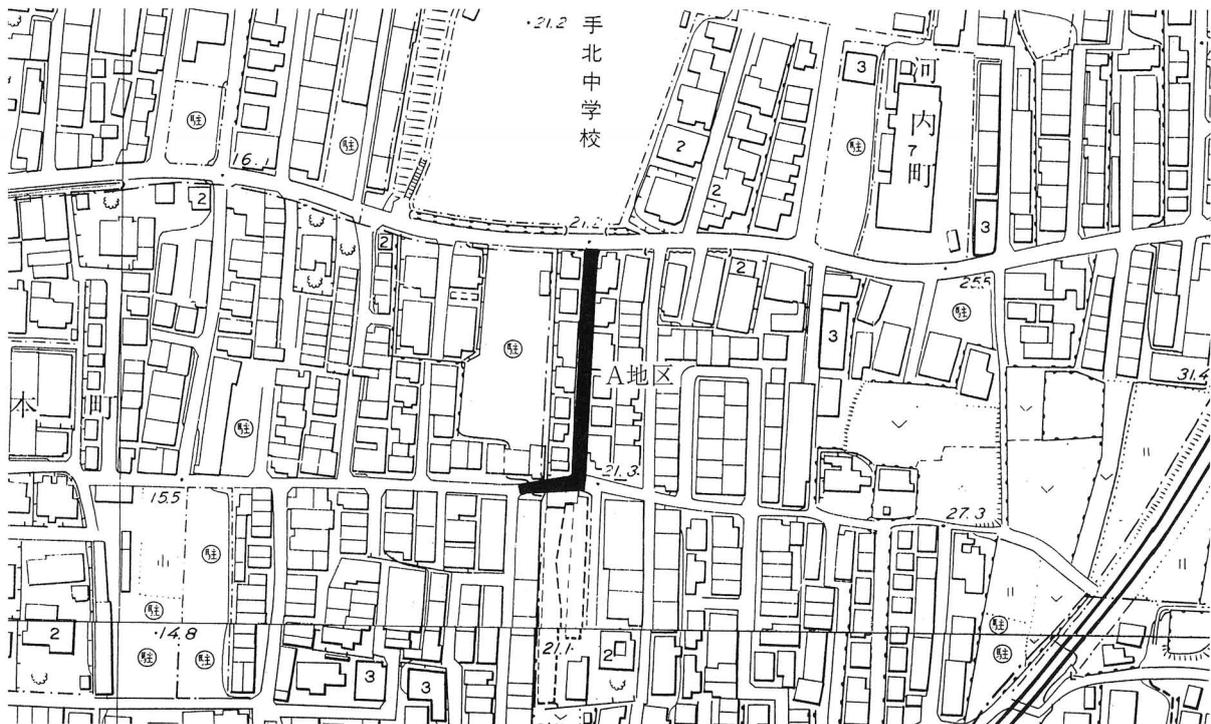
A-1 地区土層断面



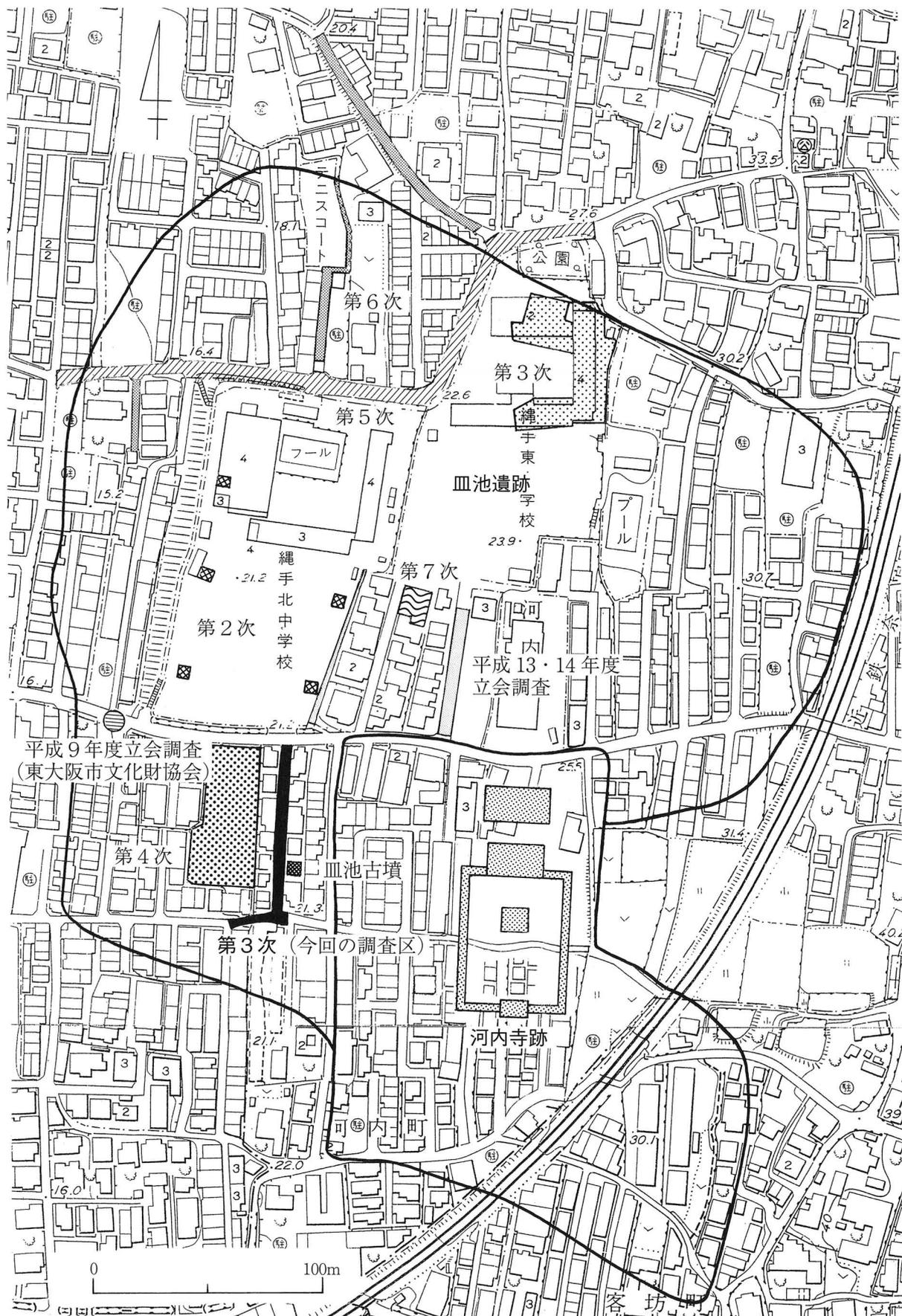
出土遺物（須恵器・土師器）

第24章 さらいけ 皿池遺跡の第8次調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成17年度公共下水道第110工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市河内町456～本町668
3	調 査 面 積	139㎡
4	調 査 期 間	平成18年8月3日～9月15日（延べ27日）
5	報 告 担 当	庵ノ前
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は縄手北中学校の南である。当地点は皿池遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ163mの間であり、開削工法である。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)



第2図 皿池遺跡・河内寺跡既往の調査位置図

1. はじめに (第1・2図)

皿池遺跡は、当市の東部、生駒山西麓の標高15～30mの扇状地上に位置する弥生時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。

周辺の遺跡としては、遺跡の北には孤塚遺跡(古墳時代～中世)、南には河内寺跡が隣接している。河内寺は、飛鳥時代(630～640年代)に創建され鎌倉時代まで存続する四天王寺式の伽藍配置をもつ寺院で、河内直(連)氏の氏寺として知られている。字名に「こんでら(河内寺)」とあることから命名された。また近鉄奈良線を挟んで東には水走氏館跡(中世)や五条古墳(古墳時代後期)、南に山畑遺跡(弥生時代)、山畑古墳群・客坊山古墳群(古墳時代後期)・客坊廃寺(平安時代後期～中世)などが位置しており、弥生時代から中世にかけて多時期にわたる遺跡が広がっている地域である。

皿池遺跡では、これまでに7次にわたる発掘調査と2度の立会調査が実施されている。既往の調査では弥生時代の竪穴住居や古墳時代後期から奈良時代にかけての掘立柱建物や甕棺(第3次調査)、古墳時代の掘立柱建物(第7次調査)などが検出されている。また、1996(平成8)年の個人専用住宅建設に伴う発掘調査(河内寺跡第6次調査。以下、「皿池古墳の調査」)では、51㎡と限られた調査地であったものの、東西溝が検出され、その埋土中より韓式系土器甕、船形埴輪、家形埴輪、朝顔形埴輪、円筒埴輪が出土した。出土遺物の内容より、この東西溝は小形方墳の周溝の可能性が高いとされている(皿池古墳)。

2. 調査の概要

今回の調査地は遺跡の南部にあたり、第4次調査地の東、皿池古墳の西に接し、東約100mに河内寺跡が位置している。調査区は、東西ライン延長27.3m、南北ライン延長70.0m、総延長97.3mを測る。

調査は東西ラインの西端から雨水管工事が開始され、南北ラインからは污水管工事も並行して実施された。雨水管は延長97.3m、污水管は延長66.0mで、総延長163.3mを測る。工事の進行上、南北ライン北端に至るまでに12地区に地区割りをし、調査を実施した(A-1～12地区)。本管工事終了後、枝管工事が実施され、その際にも層序・遺物確認を徹底した(A-13～26地区)。なおA-13～26地区の層序は隣接する地区のそれと同様であったため、柱状図の作成は実施しなかった(A-17地区のみ作成)。A-12・27地区は立会することができなかった。

3. 層序 (第3図 第1表)

調査地南北ラインの基

第1表 基本層序対応表

本層序は、上層から第I層盛土層、第II層平安時代遺物包含層、第III～V層奈良時代遺物包含層の5層に大別できる。第II～V層はいずれも整地土層である。調査地南側の東西ラインは、盛土層以下は第4次調査でも確認されている旧河川もしくは谷状地形の埋土である。

	A-1	A-5	A-7	A-8	A-10	A-17
第I層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層
第II層			第2層	第2層	第2層	第2・3層
第III層			第3層	第3層	第3層	第4層
第IV層			第4層	第4層	第4層	第5層
第V層			第5層	第5層	第5層	

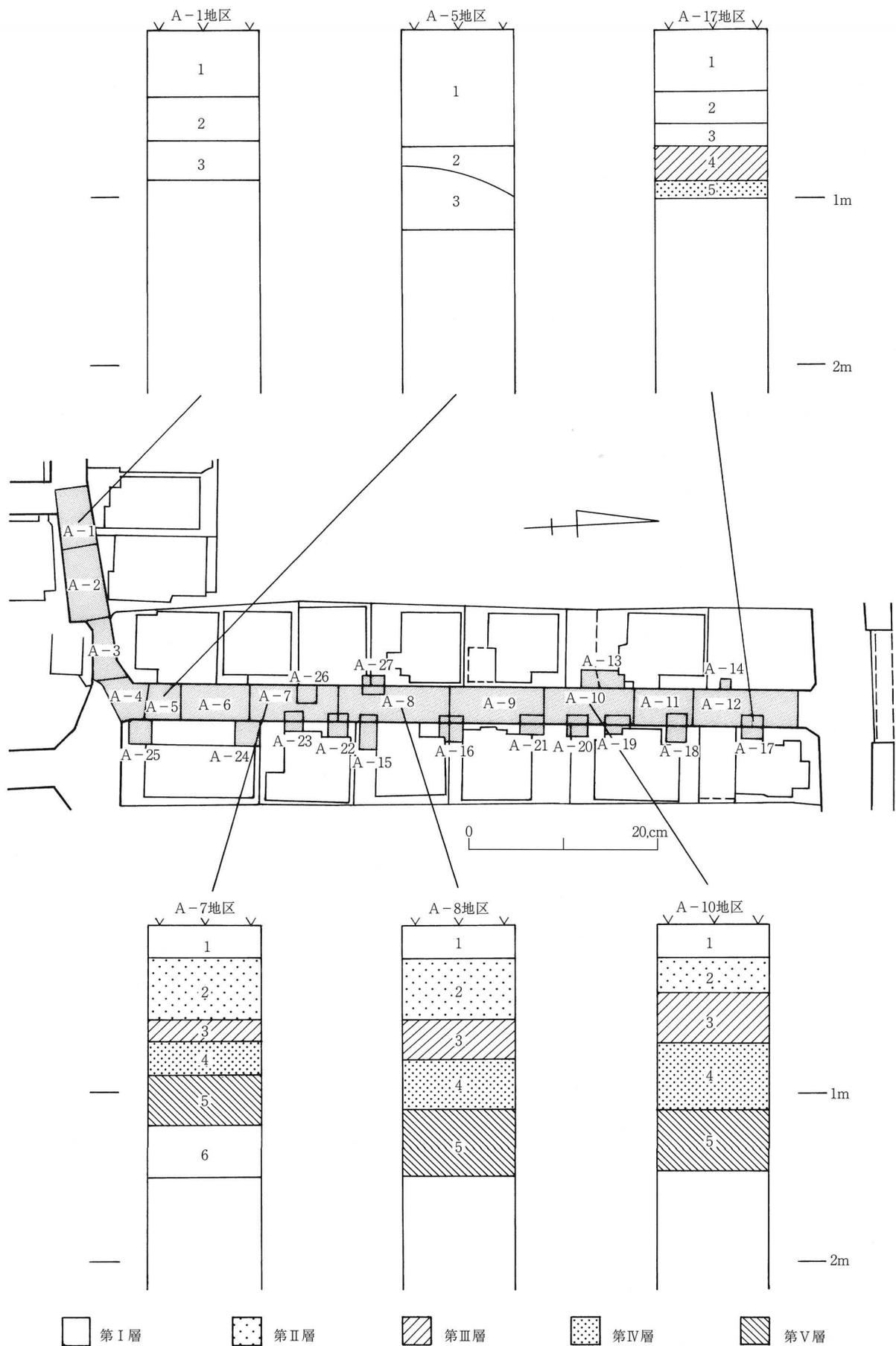
層序は、上層から第I層盛土層、第II層平安時代遺物包含層、第III～V層奈良時代遺物包含層の5層に大別できる。第II～V層はいずれも整地土層である。調査地南側の東西ラインは、盛土層以下は第4次調査でも確認されている旧河川もしくは谷状地形の埋土である。

A-1地区の層序

第1層 盛土層。

第2層 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土。砂礫少量混入。

第3層 灰色(5Y4/1)粘土。砂礫多量混入。



第3図 土層断面柱状図

A-5 地区の層序

- 第1層 盛土層。
- 第2層 オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘質土。
- 第3層 灰オリーブ色(7.5Y4/2)細粒砂混じり粘土。

A-7 地区の層序

- 第1層 盛土層。
- 第2層 黒色(7.5YR2/1)シルト。
- 第3層 オリーブ黒色(5Y2/2)細粒砂混じり粘質シルト。
- 第4層 黒褐色(10YR2/2)細粒砂混じり粘質土。
- 第5層 黒褐色(10YR3/2)細粒砂混じり粘質土。
- 第6層 黒色(2.5Y2/1)粘土。

A-8 地区の層序

- 第1層 盛土層。
- 第2層 暗青灰色(5BG3/1)粘質シルト。
- 第3層 黒色(7.5Y2/1)砂質土。
- 第4層 オリーブ黒色(5Y3/1)粘質土。
- 第5層 黒色(10Y2/1)砂混じり粘土。

A-10地区の層序

- 第1層 盛土層。
- 第2層 暗青灰色(5BG3/1)粘質土。
- 第3層 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)砂混じり粘土。
- 第4層 灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂質土。
- 第5層 黒色(2.5GY2/1)粘土。

A-17地区の層序

- 第1層 盛土層。
- 第2層 暗緑灰色(10G3/1)粘質シルト。
- 第3層 暗緑灰色(10G4/1)粘質シルト。
- 第4層 オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土。
- 第5層 灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂混じり粘土。

4. 出土遺物 (第4～14図 第2・3表)

皿池古墳の西に接するA-6～8地区を主体として遺物が出土した。地区・層位別の遺物の出土状況は第2表の通りである。今回図化できた遺物は139点を数える(第4～14図)。図化した各遺物の特徴は遺物観察表にてまとめている(第3表)。

弥生時代の遺物(第4図 1～4)

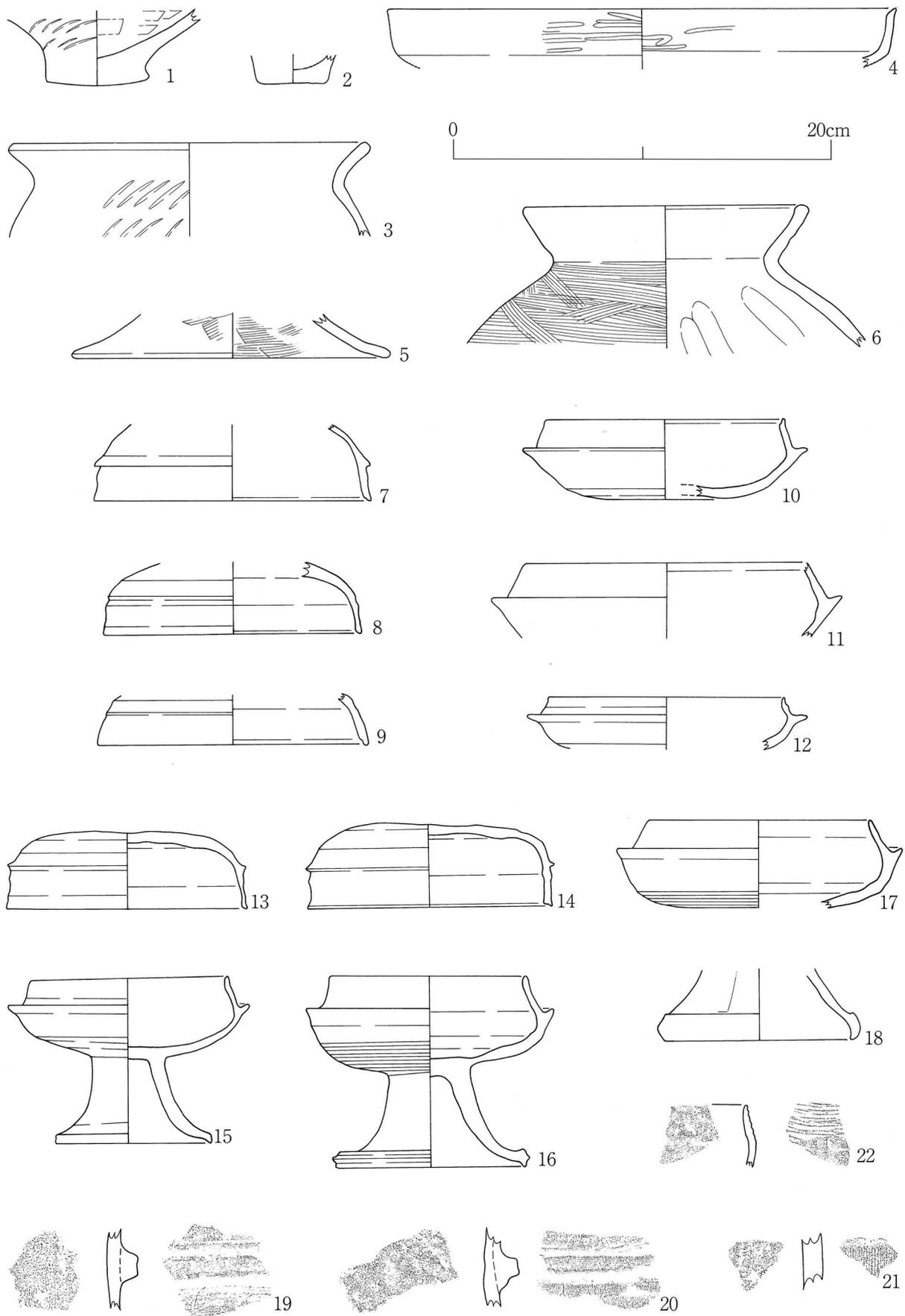
今回の調査ではA-6・10・24地区より微量出土した。図化できた弥生土器は底部2点(1・2)、甕口縁部(3)、高坏坏部(4)の4点のみで、すべて後期(畿内第V様式)に属する。弥生土器は第Ⅱ・Ⅲ層(奈良・平安時代包含層)に混在していたものであり、今回の調査では弥生時代遺物包含層は確認できなかった。

古墳時代の遺物(第4図 5～22)

古墳時代の遺物としては、土師器・須恵器・円筒埴輪・製塩土器が出土した。A-6～9地区とそ

第2表 地区・層位別遺物台帳

地区	層位	出土遺物	実測図
A-3	第1層	土師器・須恵器	
A-5	第2層	土師器	
A-6	第3層	弥生土器・土師器・須恵器	1・3・4・9
A-6	残土	土師器・須恵器・製塩土器・瓦	8・12・22・23・102・108・114・116
A-7	第2層	土師器・須恵器	42・65
A-7	第3層	須恵器	76
A-7	第4層	土師器・須恵器	
A-7	第5層	土師器・須恵器・三彩陶	13・14・15・16・17・51・53・55・95
A-7	残土	土師器・須恵器・円筒埴輪・黒色土器・製塩土器・瓦	6・41・50・52・56・59・64・69・74・93・103・109・110・111・124・134
A-8	第2層	土師器	
A-8	第3層	土師器・須恵器・黒色土器	24・90
A-8	第4層	土師器・須恵器・瓦	38・112
A-8	第5層	土師器・須恵器	25・26・58
A-8	残土	土師器・須恵器・瓦	7・35・47・49・61・63・70・72・77・84・86・89・92・115・117・126
A-9	第2層	土師器	
A-9	第3層	土師器・黒色土器・製塩土器・瓦	88
A-9	第4層	土師器・須恵器・製塩土器・瓦	37・96・135・136
A-9	第5層	土師器・製塩土器	100
A-9	残土	土師器・須恵器・円筒埴輪・瓦	19・73・127
A-10	第2層	弥生土器・土師器・須恵器・瓦	2
A-10	第3層	土師器・須恵器・瓦	81・107
A-10	第4層	土師器	
A-10	第5層	土師器・須恵器	
A-10	残土	土師器・須恵器・瓦	28・29・31・32・66・91・129
A-11	第2・3層	土師器・瓦	
A-11	第4層	土師器	
A-11	残土	土師器・須恵器	85・118
A-12	第2・3層	土師器・瓦	67・123・137・139
A-13	第2・3層	土師器・瓦	
A-15	第1~3層	土師器・須恵器・円筒埴輪・製塩土器・瓦	11・20・21・27・30・34・39・44・45・48・71・75・78・87・97・98・99・101・104・105・106・113・128・130
A-16	第3層	土師器・須恵器・瓦	43・60・68・82・83・119・120・121・125・131・138
A-16	残土	土師器・須恵器・瓦	40・46・54・122
A-17	第2・3層	土師器	
A-17	残土	土師器・磁器	
A-18	残土	土師器	
A-20	残土	土師器・須恵器	
A-21	残土	土師器・須恵器	
A-22	第3層	須恵器・瓦	
A-22	残土	土師器・須恵器・緑釉陶器・陶器・瓦	33・79・80・94・132
A-23	第3層	土師器・瓦	133
A-23	第4層	土師器	62
A-23	残土	土師器・須恵器・円筒埴輪・瓦	18・36・57
A-24	残土	弥生土器・土師器・須恵器	5・10
A-26	残土	土師器・黒色土器	



第4図 出土遺物実測図

れに接するA-15・22~24地区の第Ⅲ~Ⅴ層より奈良時代の遺物と混在して出土した。

土師器(5・6)

細片が少量出土している。図化できたものは、高坏(5)と甕(6)の2点である。5の高坏は古墳時代前期(庄内期)に属し、古墳時代の遺物の中でも古い様相を示す。6の甕は以下に記す須恵器の年代と同時期である。

須恵器(7~18)

坏蓋3点(7~9)、坏身3点(10~12)、高坏蓋2点(13・14)、高坏(15~18)を図化した。A-7地区第5層にて出土した須恵器坏蓋(13・14)・高坏(15・16・17)のうち、13~16は層下位でまとまって出土した(写真参照)。なお、13と15、14と16がセットとなる。

今回出土した須恵器の年代は陶邑Ⅰ-5~Ⅱ-1を主体とし、陶邑Ⅰ-4~Ⅱ-3の範疇に収まる(古墳時代中期後半~後期前半)。

円筒埴輪(19~21)

皿池古墳の調査(河内寺跡第6次調査)では、ほぼ完形に復元できた船形埴輪をはじめ、家形埴輪や朝顔形埴輪といった形象埴輪が出土している。しかし、今回の調査ではA-9・15・23地区より円筒埴輪片が数点出土したにすぎなかった。19~21の円筒埴輪はタガの形状などにより、古墳時代後期初頭(川西編年Ⅴ期・6世紀初頭)に属する。

製塩土器(22)

今回出土した古墳時代の製塩土器は、A-6地区出土の22の1点のみであった。22は口縁部が内傾し、口縁端部は丸く終わるものである。内面はナデ調整、外面は平行タタキ調整する。古墳時代中期後半~後期初頭(5世紀後半~6世紀初頭)に属する。当市域で出土する同時期の製塩土器の典型的なタイプといえる(註1)。

飛鳥・奈良・平安時代の遺物(第5~9図 23~95)

今回の出土遺物の中で、当時期の遺物の割合が最も高い。特に奈良時代の遺物が大半を占めている。土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・三彩陶・製塩土器・瓦が出土している。

土師器(23~69・77~89・91~93)

坏・皿・埴・高坏・鉢・蓋・甕・把手・羽釜などが出土した。今回出土した遺物の中で奈良時代に属する土師器の出土率が最も高い。

坏(23~34)

坏A(23~27)と坏C(28~34)があり、暗文が施されているもの(23~27)と、施されていないもの(28~34)に分類できる。奈良時代(8世紀代)の範疇に収まる。

皿(35~41・77~81)

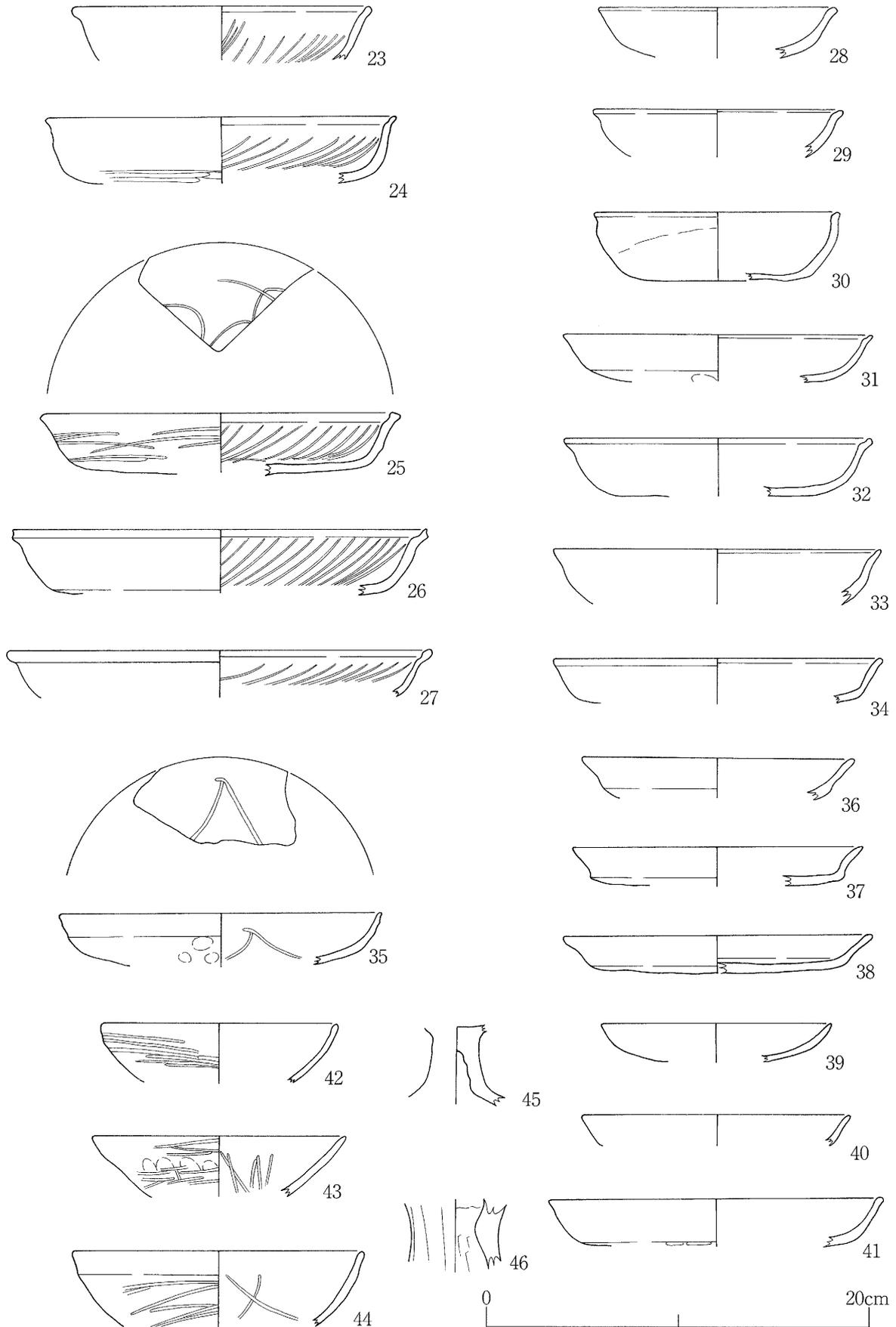
奈良時代(8世紀代)に属するもの(35~41)と、平安時代に属するもの(77~81)に大別できる。

前者は、皿A(35~37・41)、皿C(38・39)があり、35のみ内面に暗文が施されている。後者は、丸みを帯びた底部から内彎ぎみに立ち上がる口縁部をもつもの(77・78)と、「て」の字状口縁のもの(79~81)に分類できる。

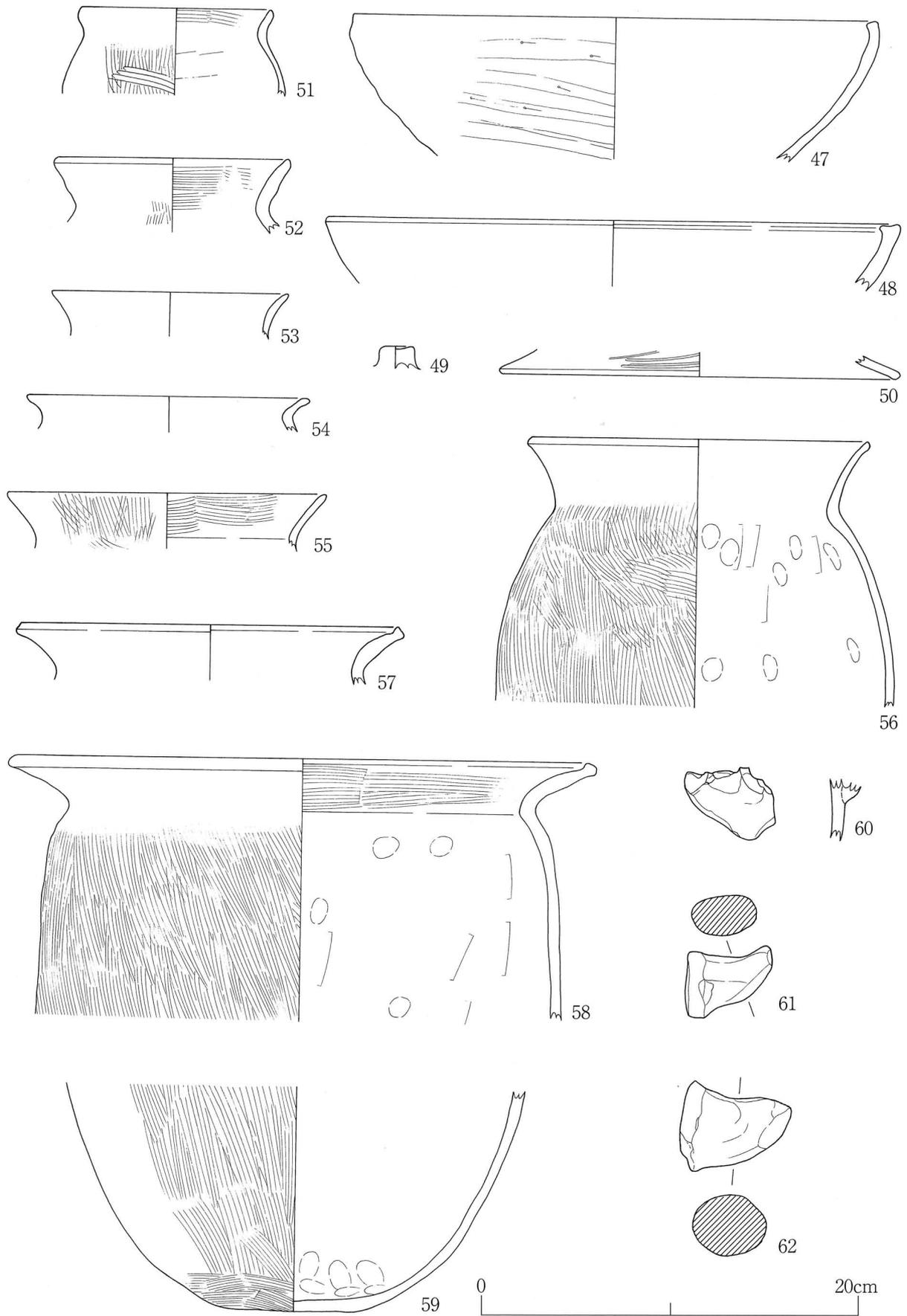
埴(42~44・82~89・91)

奈良時代(8世紀代)に属するもの(42~44・82・83)、奈良時代末~平安時代初頭(8世紀末~9世紀前半)に属するもの(84~89)、平安時代に属するもの(91)に大別できる。

奈良時代に属する埴は、外面ヘラミガキ調整、内面粗い斜放射状暗文が施されるもの(42~44)と、施されないもの(82・83)に分類できる。平安時代に属する91は黒色土器の可能性もあるが、当破片に



第5图 出土遺物実測図



第6図 出土遺物実測図

は黒色部分は残存していない。

高坏(45・46)

A-15・16地区で高坏脚部が2点出土した。45は小形高坏の脚部で、飛鳥時代後期(飛鳥Ⅲ～Ⅴ)に属する。46はヘラケズリによる断面十角形の太い軸部をもつ脚部で、奈良時代(8世紀代)に属する。

鉢(47・48)

内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は上端面を成すものである。47は口縁部外面にヘラミガキ調整が施されている。奈良時代(8世紀代)に属する。

蓋(49・50)

つまみ(49)と口縁部(50)が出土した。

甕(51～60・92・93)

飛鳥時代後期～奈良時代(7世紀後半～8世紀代)に属するもの(51～60)と、奈良時代後期～平安時代(8世紀中葉～9世紀代)に属するもの(92・93)に大別できる。

前者は、口縁部がくの字形に外反し、端部は外端面を成すもの(51～56)と、口縁部が体部からやや外彎ぎみにのび、端部上部が丸く隆起するもの(57・58)に分類できる。底部(59)と三角形折り曲げ把手(60)も出土している。後者は、口縁端部が凹面を成して外傾し、体部は肩が張り稜を成すタイプである。

把手(61・62)

やや上反する牛角状の把手である。生駒西麓産である。

羽釜(63～69)

口縁部と体部の境に水平の鐳がつく羽釜である。64を除いて生駒西麓産である。奈良時代(8世紀代)に属する。

須恵器(70～76)

坏蓋・坏身・壺(底部)・高坏・甕などが出土した。当時期に該当する遺物の比率は、須恵器は20%弱にとどまり、上記した土師器(約80%)よりも低い。A-8地区周辺(A-7～9・15地区)を主体として出土している。

坏蓋(70・71)

A-8地区とそれに接するA-15地区より出土した。70は丸みをもった天井部から外下方に下り、内傾するかえりを付すもので、陶邑Ⅲ-2～3(飛鳥時代後期)に属する。71は、口縁部はやや内傾して下り端部は丸く、天井部は低く平らで中央部に擬宝珠様のつまみを付すもので、奈良時代(陶邑Ⅳ-1～2)に属する。

坏身(72・73)

A-8・9地区で出土した。口縁部片(72)と底部片(73)がある。奈良時代(陶邑Ⅳ)に属する。

壺底部(74)

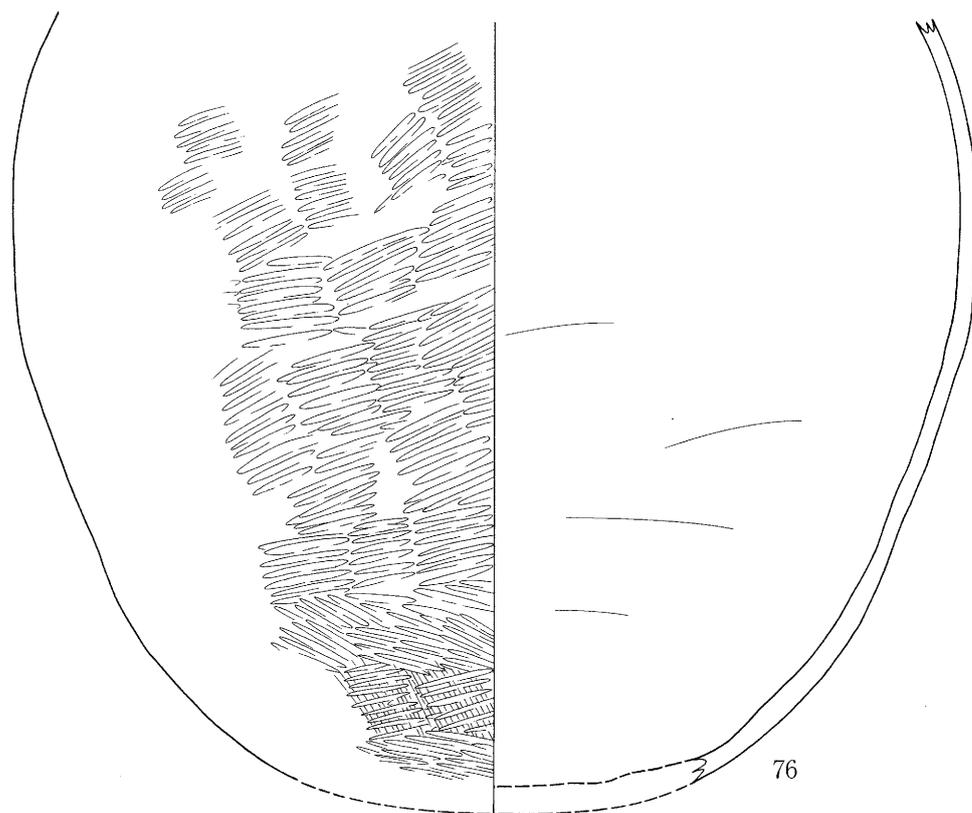
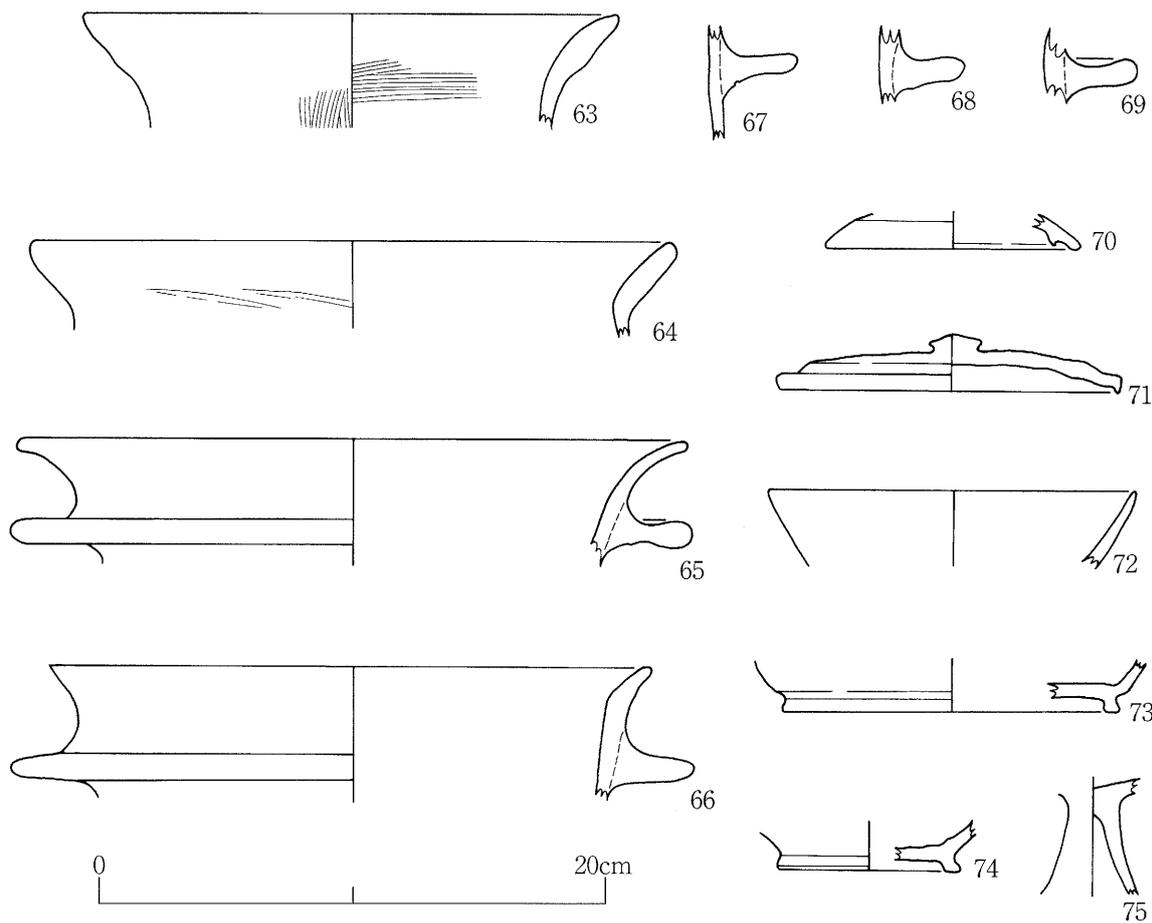
A-7地区で出土した。底部は平たく、ハの字形の高台が短くつき、接地面は平坦面を成す。奈良時代(陶邑Ⅳ)に属する。

高坏(75)

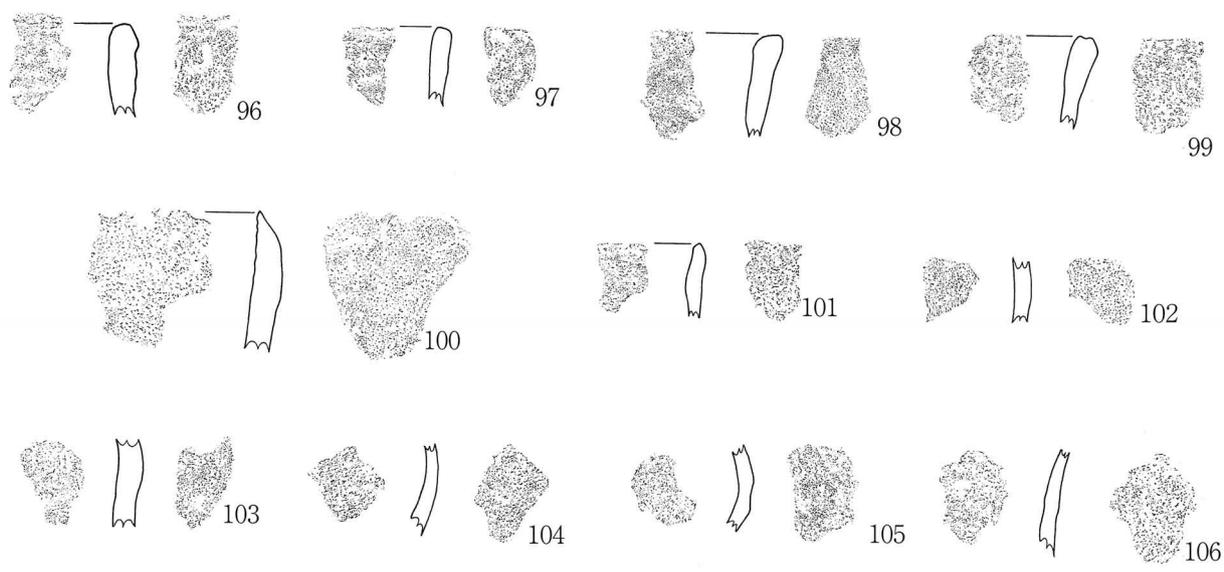
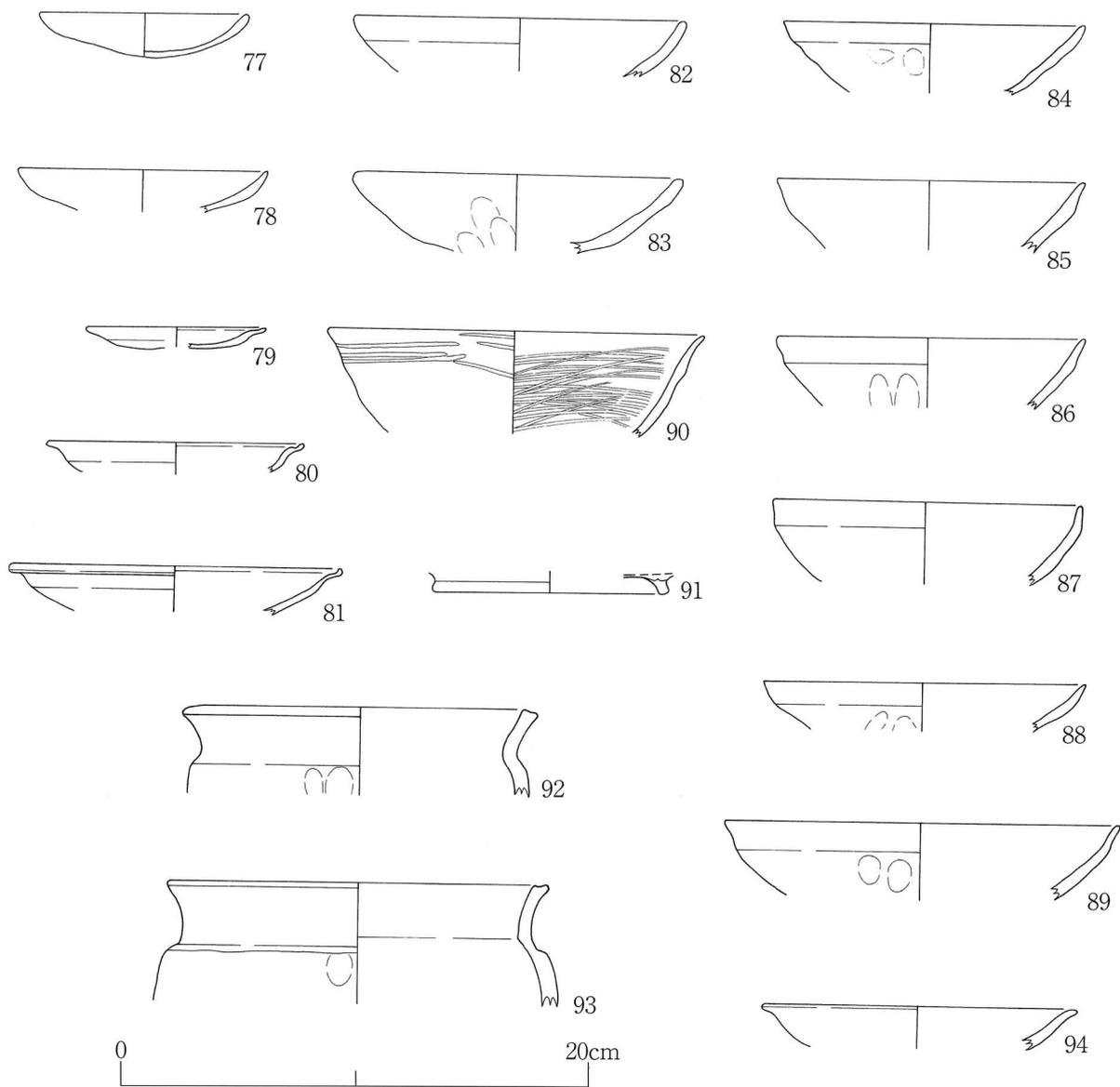
A-15地区で出土した。75の高坏脚部は、坏部から垂直ぎみに下りはじめ外彎するものである。奈良時代(陶邑Ⅳ)に属する。

甕(76)

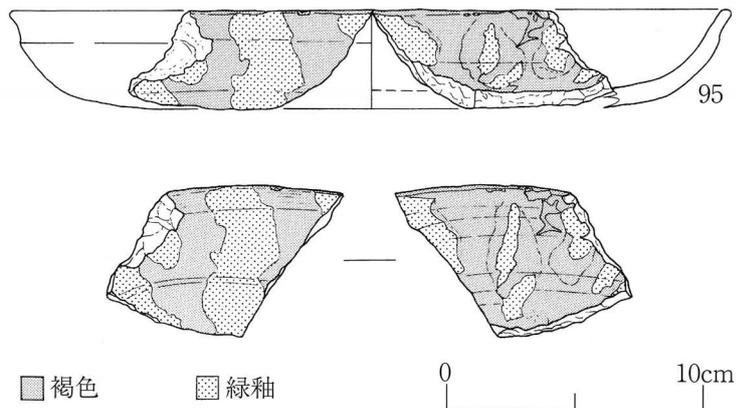
A-7地区第3層より出土した。底体部は球体を成し、最大径は体部の2/3上位に有すものである。



第7图 出土遺物実測図



第8図 出土遺物実測図



第9図 出土遺物実測図

1.8cmを測る。外反して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部でさらに強く外反している。口縁端部外面に緑釉が残っている。平安時代に属する。

なお、西隣する第4次調査第Ⅲ層上面(古墳時代～中世遺構面)検出ピット7からも緑釉陶器の細片が少量出土している。

三彩陶(95)

A-7地区第5層(GL-1.0m付近)で出土した三彩陶は、今回の調査で出土遺物中で最も注目すべき遺物であるといえよう。掘削中に作業員が偶然に見つけたもので、発見以降残土中を隈なく探したが、三彩陶の破片は結局この1片のみであった。出土した破片は口縁部約1/12が残存していた。法量は、復元口径27.8cm、復元底径18.2cm、残存高3.9cmで、器厚は口縁端部4mm、口縁部6mm、底部8mmを測る。器形は、広く平たい底部から丸みをもって斜め上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部はやや外端面を成すが、丸みを帯びている。端部内側には沈線は廻らない。口縁部内外面ヨコナデ調整、底部内外面ナデ調整する。成形は非常に精巧である。胎土は灰白色(2.5Y8/1)を呈している。胎土中には1mm前後の石英が微量含んでおり、黒色砂粒が混入している。決して緻密とはいえず、むしろ粗鬆である。釉薬は低火度釉で、焼成温度は1000度以下(800~900度)で焼成されているものと思われる。焼成は良好である。施釉手法は、胎土に化粧がけをせず、緑釉・褐釉を内外面全面に施釉している。緑釉は淡色部分と濃色部分とムラがある。これは緑釉の銅成分が全体的に混ざっていなかったためであり、釉層の差ではない。淡色部分は特に銀化が激しく、細かい貫入が多く見られる。褐釉はきちんと発色しておらず、くすんだ感があり、粗い貫入が見られる。釉薬は緑釉を全面施釉した後、褐釉は筆を用いて施釉しているのか、それとも緑釉・褐釉を同時に施釉しているのか判断しがたい。どちらにせよ、格子(鹿子)状に褐釉を施し、その間から緑釉が見えている。内外面ともに底部付近で褐釉の溜まりが見られる。口縁端部には褐釉が施されている。

製塩土器(96~106)

A-6・7・9・15地区で出土した。上述した22を除けば、今回出土した製塩土器はすべて奈良時代～平安時代に属するものである。図化できたものは96~106の11点である。そのうち口縁部の残っているものは6点あり、口縁部は直立し口縁端部が丸いもの(96・101)、面を成すもの(97)、口縁部は外傾し口縁端部が面を成すもの(98・99)、口縁部は内傾し口縁端部が鋭いもの(100)に分類できる。調整はすべて内面ナデ調整をし、外面は成形時の指頭圧痕が残る。

瓦(107~139)

出土した瓦は河内寺の瓦である。奈良時代以降の整地土層(第Ⅱ~Ⅳ層)に混在していたもので、す

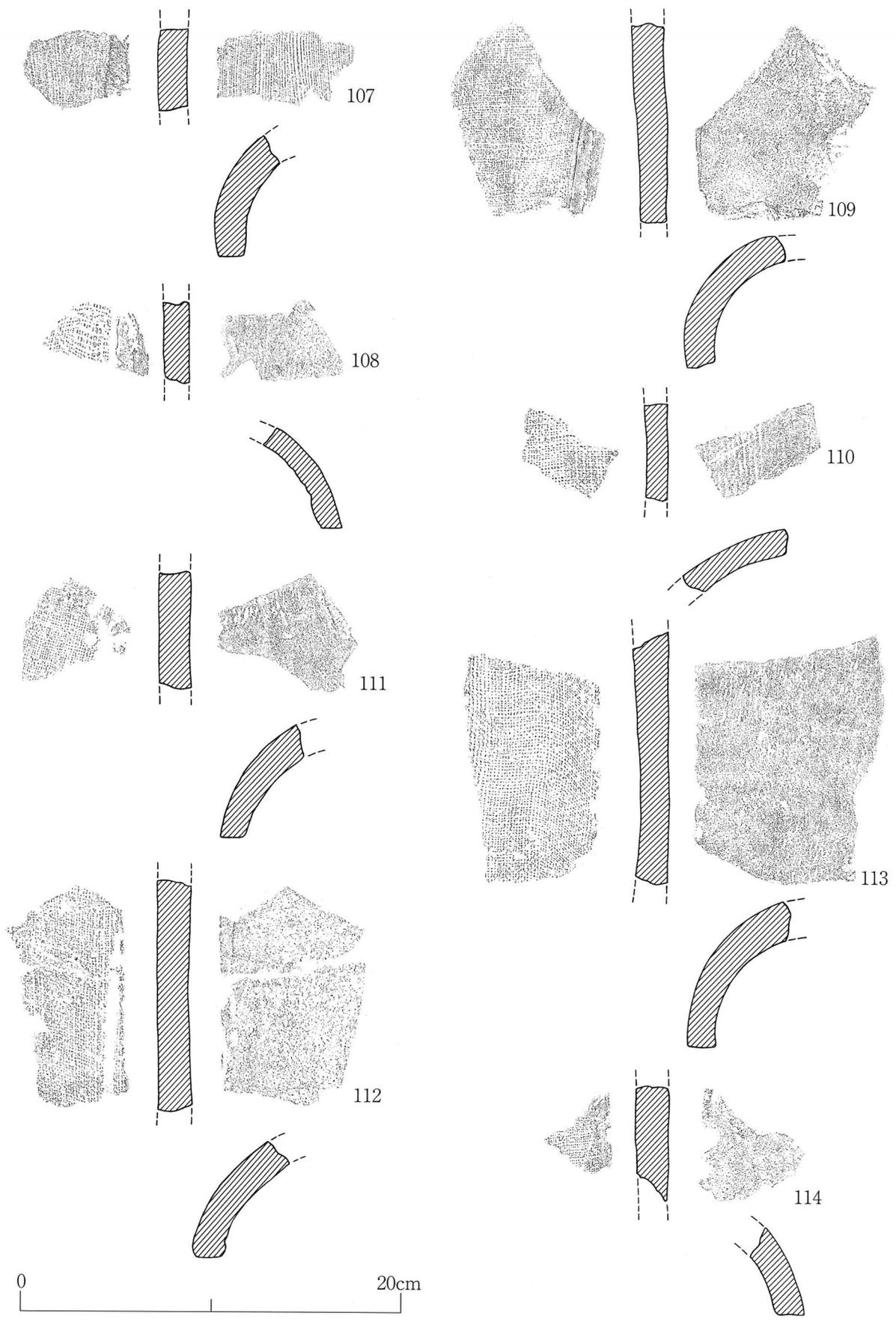
奈良時代(陶邑Ⅳ)に属する。

黒色土器(90)

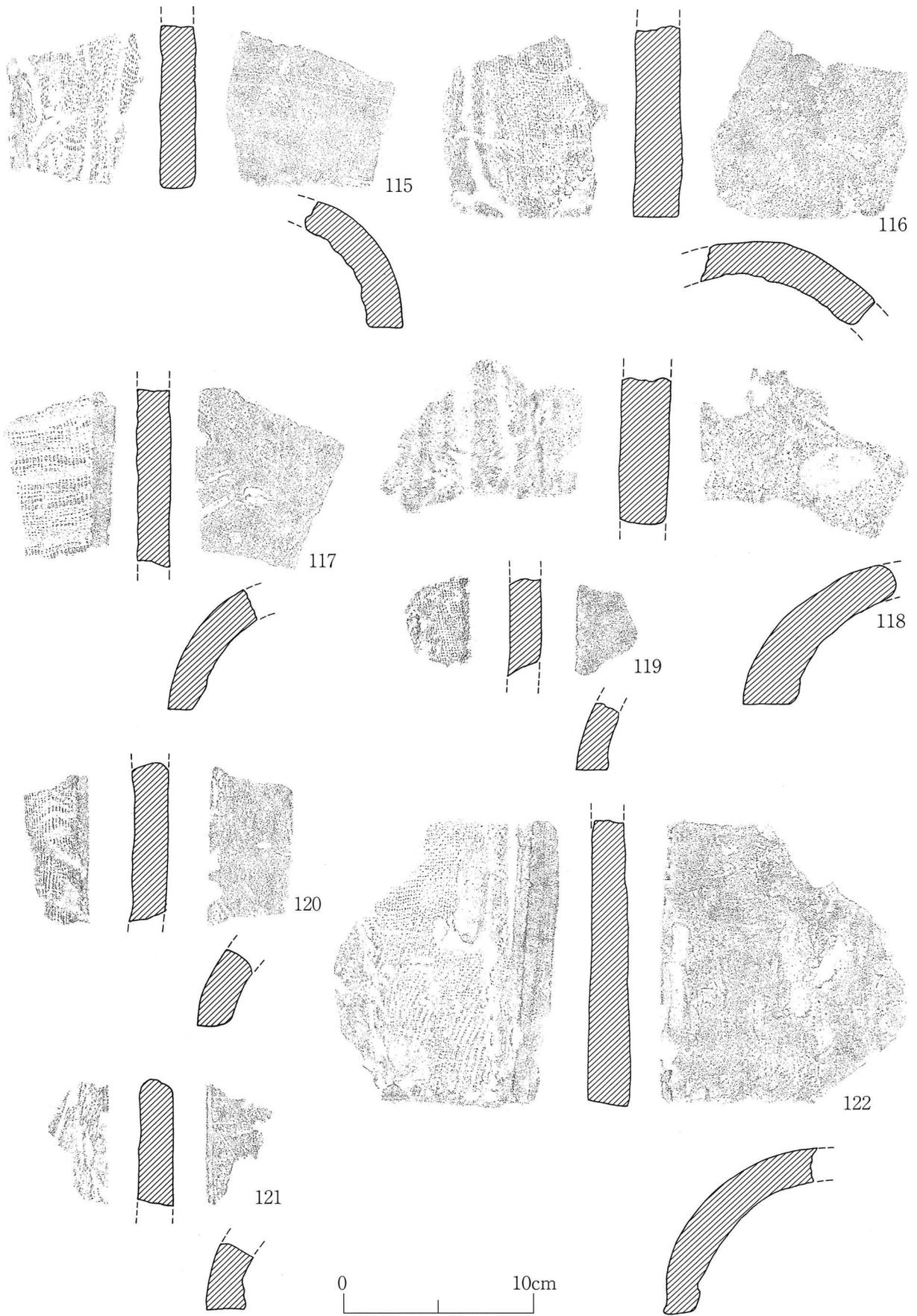
A-8地区周辺(A-7~9・26地区)で数点出土した。今回出土した黒色土器はすべて内面全面と口縁部上端外面を黒く燻した、いわゆる内黒のものである。図化できたのは90の1点のみである。

緑釉陶器(94)

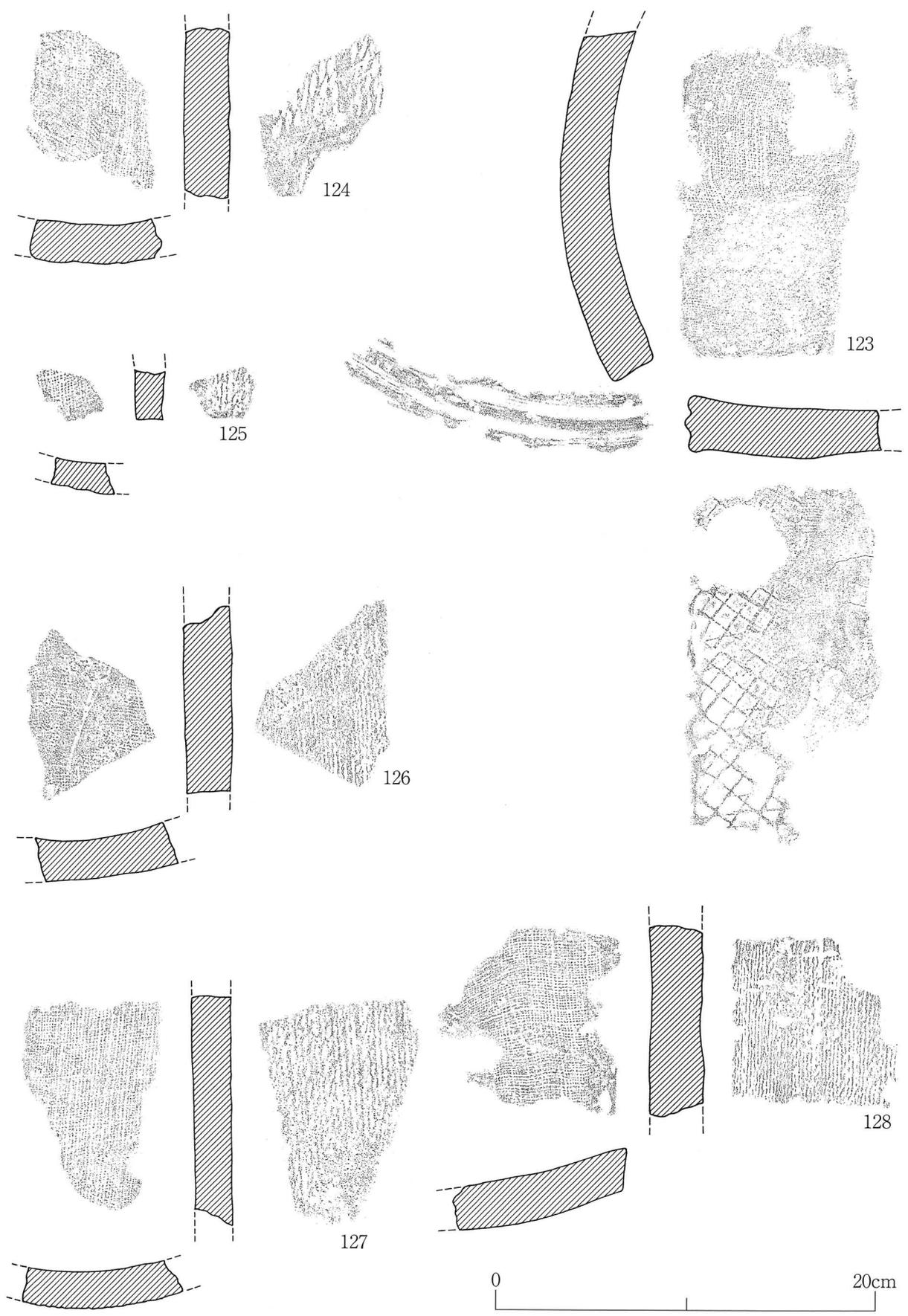
A-22地区より1点出土した。器種は皿で、復元口径13.0cm、残存高



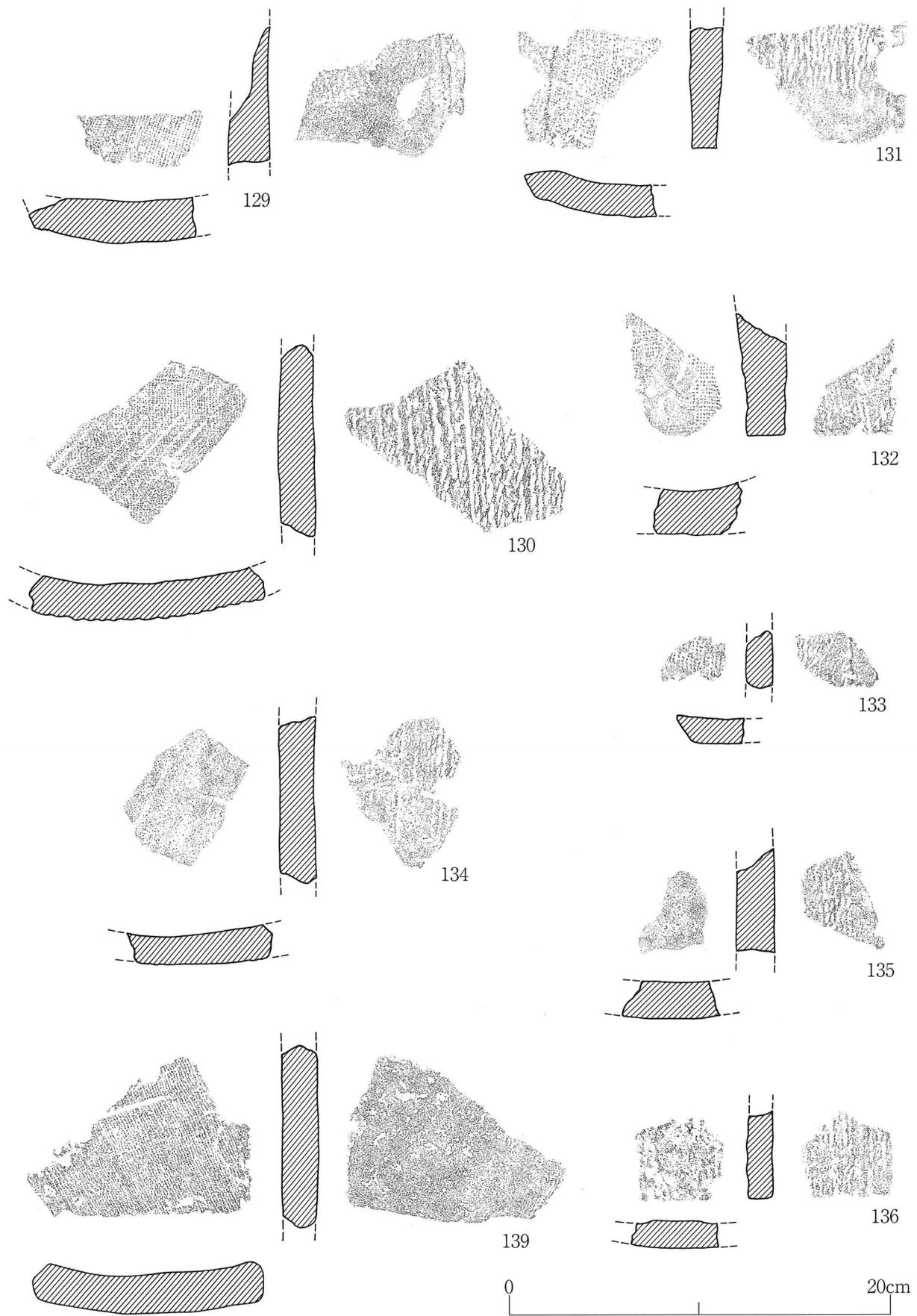
第10図 出土遺物実測図



第11图 出土遺物実測図



第12図 出土遺物実測図



第13图 出土遺物実測図

べて生駒西麓産である。丸瓦16点(107～122)、平瓦16点(123～138)・道具瓦1点(139)を図化した。瓦当面の残るものはA-12地区にて出土した三重弧文軒平瓦(123)1点のみであった。それ以外は奈良時代(107～122・124～136)と平安時代(137～139)に大別できるが、形式までは判断し兼ねる。

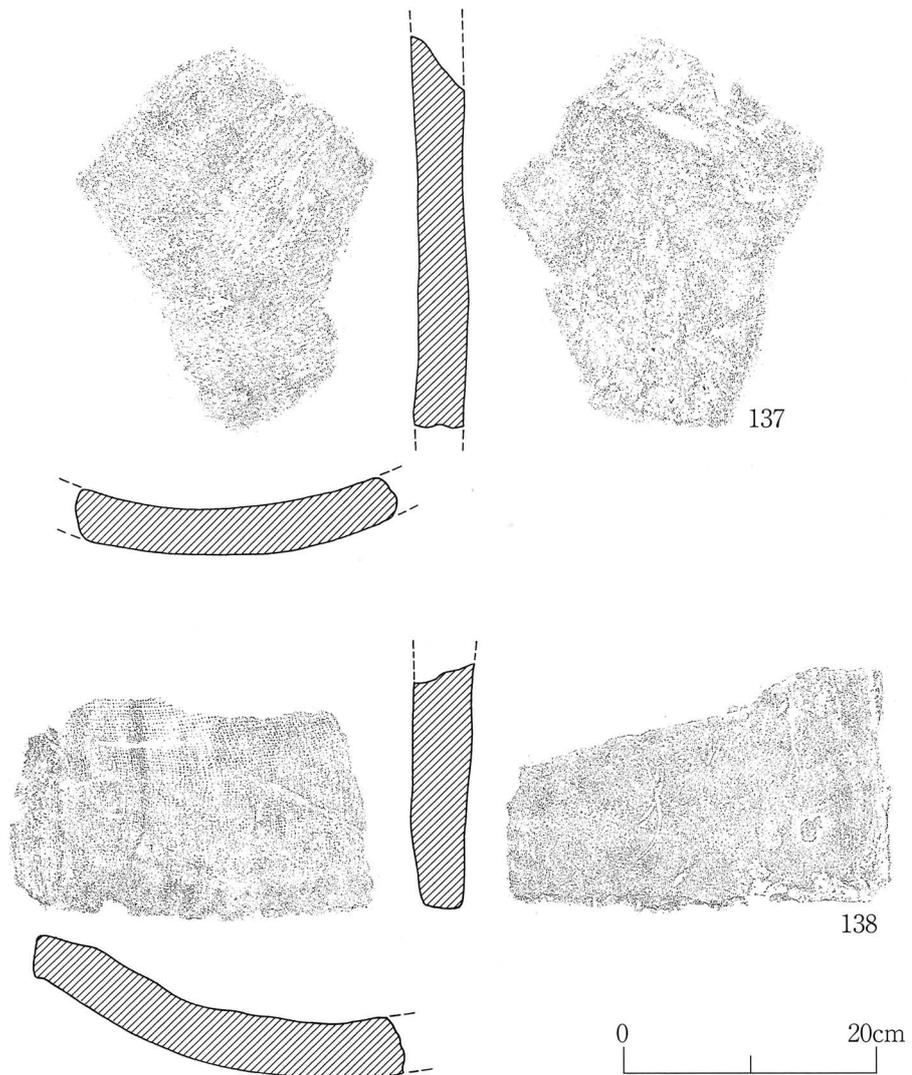
123の軒平瓦は、瓦当面厚さ3.1cm、残存長18.7cmを測る。瓦当面には三重弧文が施されており、顎は曲線顎である。平瓦部凸面格子タタキ調整、凹面布目痕(7本/cm×7本/cm)が残る。当瓦は河内寺創建時の軒平瓦で、軒瓦I類(前端瓦第I形式・7世紀後半)に属する。

中世以降の遺物

土師器・陶器・磁器が出土したが、出土量は極わずかである。A-17地区では磁器片、A-23地区では陶器片が出土している。ともに残土からの出土なので層位は不明である。

5. まとめ

今回の第8次調査は、調査地・工期ともに制約された中での調査であった。そういった状況の中ではあったが、層序確認、層毎の遺物の分別、残土からの遺物採集などを徹底して行なった。既往の調査事例から見て、当調査地の周辺には遺構が存在する可能性は十分に考えられた。調査中、留意して遺構検出に望んだが、遺構の存在は確認できぬままに終わった。しかしながら、弥生時代から中世にかけて、特に奈良時代の遺物が多量に出土した。このことは、近辺に河内寺に関する施設、あるいは集落の存在を示唆できるものとなる。また、出土遺物の中には三彩陶の破片が1片ではあるが含まれていたことは興味深い。最後に周辺の調査成果も踏まえながら、今回の調査成果を時代ごとにまとめていきたい。



第14図 出土遺物実測図

弥生時代

第4次調査では、旧河川もしくは谷状地形上に堆積した層中より弥生中期から後期にかけての土器が多数出土している。弥生時代中期の土器はローリングを受けているのに対し、後期の土器はさほど摩滅していない状態で出土しており、中期までに旧地形は埋まり、後期には周辺で弥生時代の集落が形成されたと推測されている(註2)。今回の調査では、調査地南側の東西ラインにて同様の堆積土が確認できたが、遺物は包含されていなかった。弥生土器に関しては、A-6・10・24地区の第Ⅱ～Ⅲ層(奈良・平安時代包含層)から後期(畿内第Ⅴ様式)の土器が数点出土したにすぎない。第4次調査の成果から見ても、やはり調査地周辺(北・東側)に弥生時代後期の集落が展開していることが想像される。

古墳時代

古墳時代の遺物も出土量は少ない。しかし、皿池古墳の西隣に位置するA-7地区周辺では古墳に伴うと考えられる土師器・須恵器・円筒埴輪が出土した。これらは須恵器の編年より陶邑Ⅰ-5～Ⅱ-1を主体とする時期が与えられるので、皿池古墳の調査で出土している遺物の年代(5世紀後半～6世紀)と矛盾はしない。

調査前、A-7地区周辺で皿池古墳の東西溝の続きが検出できると推測していた。調査を進めていく中で、やはりA-7地区で周溝埋土と思われる層があった。同地区第6層である。同層はシルト・砂質が混入しない粘土層で、水分の含有率も高く、他地区の第Ⅴ層とやや異とするものであった。調査中、同層が皿池古墳の周溝埋土ではないかと思い、入念に断面観察を行なった。その際に第5・6層の間(第5層下面)より須恵器高坏(15・16)が坏蓋(13・14)とセットになって2組まとまって出土したが、周溝の肩となるラインを検出することはできなかった。

皿池古墳は未だ主体部は確認されていないので、その存在は明確とされていない。だが今回の調査の出土遺物の中にも古墳に伴う遺物が出土しており、皿池古墳が存在していた可能性は極めて高いといえるだろう。第Ⅴ層に奈良時代の遺物が包含することから、皿池古墳は早くても奈良時代には削平されており、その際に主体部が破壊されているかもしれない。

ここで、皿池古墳の調査の基本層序と今回の調査のそれの対応関係を整理しておきたい。皿池古墳の調査の基本層序は、上層より盛土層、上層(層厚約30cm)、下層、溝埋土である。上層より古墳に伴うと考えられる須恵器、埴輪片などと10～11世紀の土師器、須恵器、黒色土器などが出土し、下層からは遺物は出土していない。溝埋土からは韓式系土器甕、船形埴輪、家形埴輪、朝顔形埴輪が出土している(註3)。以上のことを踏まえて照合させると、盛土層-第Ⅰ層、上層-第Ⅱ層、下層-第Ⅲ～Ⅴ層、溝埋土-(A-7地区第6層)となる。

飛鳥・奈良・平安時代

皿池遺跡は、遺跡の北半に河内国河内郡衙があったとされており、また位置的に見ても河内寺と深い関係があったと考えられている。残念ながら既往の調査ではそれらに関する確実な遺構は発見されておらず、今回の調査でも検出することはできなかった。だが、今回出土した遺物からはその背景を見出せる資料が多少なりとも出土したことは大きな成果であるといえよう。

まず1つ目に挙げられるのは河内寺の瓦である。今回の調査でも奈良時代以降の整地土層中から出土している。その中でも形式がわかるものとして三重弧文軒平瓦が挙げられる。この軒平瓦は河内寺創建時の軒瓦Ⅰ類に属するものである。当形式やそれに続く軒瓦Ⅱ類(前端瓦第Ⅱ形式・7世紀後半)は、北魏・高句麗古瓦の系譜を引くものであり、大陸ではこの系統は渤海、遼代までその系譜を引いているとされる(註4)。そして「河内寺は、百済系の渡来人河内直一族が建立した氏寺と考えられるが、他の文物を見られる通り、高句麗の文化が百済を経由してわが国にもたらされたことを物語る資料」

と考察されている(註5)。調査地周辺でも奈良時代以降に相当大規模に整地作業が行われおり、河内寺の寺域の拡大を図ったものであろう。当遺跡もその影響を多大に受けている。

2つ目は三彩陶である。三彩陶は当遺跡で初めて出土した。当市の遺跡を見ても、三彩陶は若江遺跡第38次調査(若江寺跡)で出土した例を知るのみである(註6)。この調査で出土した三彩陶は中国製陶磁器として唐三彩鍍片と絞胎陶塊片、国産品として奈良二彩盤・火舎(あるいは広口瓶)がある。日本全国を見ても、遺跡から出土した中国産の三彩の類例は未だ数少ない。

今回出土した三彩陶は、器形から見ると、正倉院宝物の奈良二彩大皿など、奈良時代の土器の様相と類似する(註7)。しかし施釉手法を見ると、例えば褐釉の用い方などは、奈良三彩の特徴とは言いがたい。また、緑釉を全面に施釉した後、褐釉を施しているのであれば、日本的な施釉方法とは言いがたい。そこで一度大陸の三彩陶に目を向けたい。器形・施釉を見ると、明らかに唐三彩や朝鮮半島のものではないことは確実である。それでは渤海三彩はどうだろうか。渤海三彩、もしくはその影響を受けているといえないだろうか。ウラジオストクのロシア科学アカデミー極東支部人民民族学考古学歴史学研究所のEugenia Ivanovna Gelman氏と接点を持って、当資料の写真を観察していただいた。写真観察だけの見解ではあるが、「唐三彩ではないのは確か。この破片の釉葉の色合い(暗い感じの色彩)・施釉の手法は渤海三彩に非常によく見受けられるものと似ている」との御教授を賜った。もし当資料が渤海三彩、あるいは渤海三彩の影響を受けたもの、渤海の陶工が製陶したものであったとしても、不思議とは思わない。三彩陶は寺院・古墓・官衙跡などでの出土例が多い。よって、当資料は河内寺(あるいは河内郡衙)と何らかの関係する資料であることは間違いない。河内寺を氏寺とする河内直氏は大陸との交わりが強く、また上述した創建時の瓦は高句麗系を示しているというような要素もある当地域に渤海系の文化・技術が伝播していても違和感はない。現在のところ、あくまで著者の勝手な推論にすぎないので、今後さらに慎重に検討していき、別稿にて当三彩陶の評価を再度論じたい。

河内郡衙や郡寺である河内寺が所在していた当地域は、この時期に相当な発展を成し遂げたものと思われる。それは今回の調査で出土した遺物の内容を見ても明確である。

最後になったが、三彩陶に関しては、2006年9月11日に奈良県立橿原考古学研究所にて土橋理子氏、橋本裕行氏、石自社氏(中国社会科学院考古研究所漢唐研究室洛陽唐城考古隊)に、2006年11月8日に独立行政法人奈良文化財研究所にて巽淳一郎氏、西口壽生氏、安田龍太郎氏、高橋克壽氏に多大なる御指導・御教授を賜った。また2006年10月23日に蛍光X線分析による非破壊元素分析を奈良県立橿原考古学研究所保存科学研究室にて実施し、奥山誠義氏の協力を得た。また大阪府教育委員会榎本哲氏の仲介のもと、ロシア科学アカデミー極東支部人民民族学考古学歴史学研究所Eugenia Ivanovna Gelman氏から御教授を賜ることができた。以上の方々に対し深く感謝の意を表します。

第3表 遺物観察表

番号	器種	出土地区	層位	法量cm ()は復元値	残存	色調	胎土	焼成	特徴	時期
1	弥生土器底部	A-6	第3層	底径5.5 残存高4.0	底部完形	(内)暗灰色(N3/ (外)にぶい赤褐色(5YR5/4) (断)にぶい褐色(7.5YR5/3)	角閃石を多量含む。1mm前後の長石少量含む。生駒西麓産。	良好	底部は平底だがやや彎曲している。外部外面タタキ。底部外面ナデ。底部内面板ナデ。	弥生時代後期 (畿内第V様式)
2	弥生土器底部	A-10	第2層	底径3.7 残存高1.5	底部2/3	(内)にぶい黄褐色(10YR5/3) (外)にぶい褐色(7.5YR5/4) (断)褐灰色(10YR5/1)	1~2mmの角閃石・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	平底の底部。底部内面ナデ。底部外面板ナデ。	弥生時代後期 (畿内第V様式)
3	弥生土器甕	A-6	第3層	口径(18.6) 残存高5.0 頸部径(16.4)	口縁部1/8	(内・外・断)明褐色(7.5YR5/6)	1~5mmの角閃石・長石を多量含む。生駒西麓産。	良好	外反する口縁部をもち、口縁端部は面を成す。口縁部内外面ヨコナデ。頸部以下外面右上がりのタタキ。	弥生時代後期 (畿内第V様式)
4	弥生土器高坏	A-6	第3層	口径(26.8) 残存高3.2	口縁部片	(内・外・断)にぶい黄褐色(10YR5/3)	角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	受部より屈曲し稜をもつて直立する口縁部をもち、口縁端部は面を成し内傾する。口縁部内外面ヘラミガキ。	弥生時代後期 (畿内第V様式)
5	土師器高坏脚部	A-24	残土	底径(16.2) 残存高2.3	裾部片	(内・外・断)にぶい黄褐色(10YR6/3)	1mm前後の長石・雲母・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	脚柱から大きく屈曲して広がる裾部をもつ高坏脚部。裾部内面ハケメ。裾部外面ケズリ後ナデ。	古墳時代前期 (庄内期)
6	土師器甕	A-7	残土	口径(14.8) 残存高7.7 頸部径(12.0)	口縁部~頸部	(内・外・断)にぶい赤褐色(5YR5/4)	角閃石・雲母などをやや多く含む。生駒西麓産。	良好	口の字形に外反する口縁部をもち、口縁端部は内端面を成す。口縁部内外面ヨコナデ、外部外面ハケメ(6本/cm)、体部内面指ナデ。	古墳時代後期 (5世紀後半~6世紀代)
7	須恵器坏蓋	A-8	残土	口径(14.6) 残存高4.4 稜径(14.5)	口縁部片	(内・外)灰色(N6/ (断)褐灰色(5YR5/4)	密。	良好	口縁部はやや下方に下り、口縁端部先端は鋭く、内傾する平面をもつ。稜は断面三角形で鋭い。口縁部内外面回転ナデ。	古墳時代中期末~後期初頭 (陶邑I-5~II-1)
8	須恵器坏蓋	A-6	残土	口径(13.6) 残存高3.8 稜径(13.0)	1/5	(内・外・断)灰色(N6/ (断)褐色(N6/)	1mm以下の小礫(長石など)を含む。	良好	口縁部はやや下方に下り、口縁端部先端は鋭く、内傾する平面をもつ。稜は沈線有し丸い。口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。	古墳時代後期 (陶邑II-2)
9	須恵器坏蓋	A-6	第3層	口径(14.2) 残存高2.7 稜径(12.8)	口縁部1/5	(内・外・断)灰色(N5/~N6/)	1~2mmの長石を微量含む。	良好	口縁部は下方に下り、口縁端部は丸く、浅い凹面を成す。口縁部内外面ヨコナデ。	古墳時代後期 (陶邑II-3)
10	須恵器坏身	A-24	残土	口径(12.4) 残存高4.3 たちあがり高1.6 受部径(15.0)	口縁部片	(内・断)灰色(N5/ (外)灰色(N6/)	1~3mmの長石を含む。	良好	たちあがりには内傾し、端部は内傾した凹面を成す。受部は上外方にやや鋭い。端部は断面三角形を成し、外面回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。	古墳時代後期 (陶邑II-1~2)
11	須恵器坏身	A-15	残土	口径(14.8) 残存高4.0 たちあがり高2.0 受部径(18.5)	口縁部片	(内・外・断)灰色(N6/)	1mm前後の長石を微量含む。	良好	たちあがりには内傾し、端部は内傾した凹面を成す。受部は上外方にやや鋭い。端部は断面三角形を成し、外面回転ナデ。	古墳時代後期 (陶邑II-1~2)
12	須恵器坏身	A-6	残土	口径(12.4) 残存高2.8 たちあがり高1.0 受部径(14.8)	口縁部片	(内・外・断)灰色(N4/~N5/)	1~2mmの礫を含む。	良好	たちあがりには内傾後直立し、端部は狭小で鋭い。受部は短くやや上方にのび、端部は丸い。たちあがり部~受部内外面回転ナデ。	古墳時代後期 (陶邑II-2~3)

番号	器種	出土地区	層位	法量cm ()は復元値	残存	色	調	胎土	焼成	特徴	時期
13	須恵器坏蓋	A-7	第5層	口径(126) 器高4.1 稜径12.5	1/3	(内・外)灰色(N4/) (断)褐灰色(10YR4/1)		1~2mmの礫をやや多く含む。	良好	口縁部はやや下外方に下り口縁端部はやや丸く、内傾する股をもつ。稜は断面三角形で、端部は鋭い。口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転ヘラケケスリ。ロクロ口回転左方向。	古墳時代中期末~後期初頭 (陶邑I-5~II-1)
14	須恵器坏蓋	A-7	第5層	口径(128) 器高4.5 稜径13.0	2/3	(内・外)灰色(N5/) (断)褐灰色(10YR4/1)		1mm前後の礫を微量含む。	良好	口縁部はほぼ垂直に下り、口縁端部はやや丸く、やや内傾する股をもつ。稜は断面三角形で、端部は鋭い。口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転ヘラケケスリ。ロクロ口回転左方向。	古墳時代中期末~後期初頭 (陶邑I-5~II-1)
15	須恵器高坏	A-7	第5層	口径10.4 底径8.3 器高8.9 たちあがり高11.6 受部径12.8 基部径4.0 脚部高4.5	2/3	(内・外・断)灰色(N5/)		密。	良好	坏部のたちあがりは内傾し、端部は丸い。受部はやや上外方にのび、端部は丸い。底部は深く平らで、更に外反し朝顔状に開き、ほぼ直角に下がる。端部は鋭く浅い凹面を成す。坏部外面底面回転ヘラケケスリ。他は回転ナデ。	古墳時代中期末~後期初頭 (陶邑I-5~II-1)
16	須恵器高坏	A-7	第5層	口径(10.3) 底径(10.0) 器高10.4 たちあがり高11.9 受部径13.0 基部径4.2 脚部高5.2	2/3	(内・外)灰色(N5/) (断)褐灰色(10YR4/1)		密。	良好	坏部のたちあがりは内傾し、端部は丸い。受部はやや上外方にのび、端部は丸い。底部は深く平らで、更に外反し朝顔状に開き、ほぼ直角に下がる。端部は鋭く浅い凹面を成す。坏部外面底面回転ヘラケケスリ。他は回転ナデ。	古墳時代中期末~後期初頭 (陶邑I-5~II-1)
17	須恵器高坏	A-7	第5層	口径(11.6) たちあがり高17 受部径(15.0) 残存高4.7	坏部1/4	(内・外)灰色(N5/) (断)褐灰色(10YR4/1)		密。	良好	坏部のたちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深い。脚部欠損。坏部底面外面回転ナデ。他は回転ナデ。	古墳時代中期末~後期初頭 (陶邑I-5~II-1)
18	須恵器高坏脚部	A-23	残土	底径(9.8) 残存高3.7	脚部片	(内・外)灰色(N4/) (断)赤灰色(2.5YR5/1)		密。	良好	脚部は下外方に下った後、短く水平にのび、さらに内彎して下る。端部は股を成して丸い。長方形ないし台形のスガカン有す。スガカン数は不明。内外面回転ナデ。	古墳時代中期 (陶邑I-4~5)
19	円筒埴輪	A-9	残土	残存高3.4	タガ部片	(内・外)橙色(2.5YR6/8) (断)ぶい黄橙色(10YR7/4)		1mm前後の長石・雲母などをやや多く含む。	良好	断面形が台形状のタガをもつ円筒埴輪。体部内面タテハケ。タガ部外面ヨコナデ。	古墳時代後期 (川西V期・6世紀初頭)
20	円筒埴輪	A-15	残土	残存高4.3	タガ部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)		1mm前後の長石・雲母などを含む。	良好	断面形が台形状のタガをもつ円筒埴輪。体部内面ナデ。タガ部外面ヨコナデ。	古墳時代後期 (川西V期・6世紀初頭)
21	円筒埴輪	A-15	残土	残存高3.2	体部片	(内・外・断)橙色(2.5YR6/6)		1~2mmの長石を多く含む。	良好	器厚約10mmの円筒埴輪の体部片。体部内面ナデ。体部外面タテハケ。	古墳時代後期? (川西V期・6世紀初頭)
22	製埴土器	A-6	残土	残存高3.4	口縁部片	(内・外・断)ぶい橙色(7.5YR6/4)		1mm前後の礫を含む。	良好	口縁部は内傾し、口縁端部は丸い。器厚は5mmとやや厚い。口縁部内面ナデ。口縁部外面指オサエ後平行タタキ。	古墳時代中期~後期 (5世紀後半~6世紀初頭)

番号	器種	出土地区	層位	法量cm ()は復元値	残存	色調	胎土	焼成	特徴	時期
23	土師器杯	A-6	残土	口径(15.4) 残存高2.8	口縁部片	(内・外・断)にぶい、褐色(7.5YR6/3)	密。	良好	緩やかに外反する口縁部をもち、口縁部はやや内端面を成す杯A。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内面5mm間隔の粗い斜放射状暗文。	飛鳥時代後期～奈良時代前期 (平城Ⅰ～Ⅱ)
24	土師器杯	A-8	第3層	口径(18.0) 残存高3.5	口縁部片	(内・外・断)にぶい、橙色(5YR6/4)	密。	良好	広く平たい底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁部は軽く巻き込む杯A。口縁部内外面ヨコナデ。底部外面へラケスリ。内底面周辺から口縁部にかけて5mm間隔の粗い斜放射状暗文。	奈良時代前期 (平城Ⅱ～Ⅲ)
25	土師器杯	A-8	第5層	口径(18.2) 残存高3.2	1/5	(内・外・断)にぶい、橙色(7.5YR6/4)	密。	良好	広く平たい底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁部は軽く巻き込む杯A。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面横方向の粗いミミガキ。底部外面指オサエナデ。内底面ラセン状暗文。内底面周辺から口縁部にかけて3mm間隔の斜放射状暗文。	奈良時代前期 (平城Ⅱ～Ⅲ)
26	土師器杯	A-8	第5層	口径(21.4) 残存高3.4	口縁部片	(内・外・断)橙色(2.5YR7/6)	密。	良好	広く平たい底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁部は軽く巻き込む杯A。口縁部内外面ヨコナデ。底部外面指オサエ。内底面周辺から口縁部にかけて2～3mm間隔の斜放射状暗文。	奈良時代前期 (平城Ⅱ～Ⅲ)
27	土師器杯	A-15	残土	口径(22.0) 残存高2.4	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)	密。	良好	底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁部は内側に巻き込む杯A。口縁部内外面ヨコナデ。内底面周辺から口縁部にかけて5mm間隔の粗い斜放射状暗文。	奈良時代前期 (平城Ⅱ～Ⅲ)
28	土師器杯	A-10	残土	口径(12.2) 残存高2.6	口縁部片	(内・外・断)にぶい、褐色(7.5YR5/4)	1mm前後の長石・チャート・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	丸みを帯びた底部から斜上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ナデ。	奈良時代後期 (平城Ⅲ～Ⅴ)
29	土師器杯	A-10	残土	口径(12.8) 残存高2.5	口縁部片	(内・外・断)にぶい、橙色(7.5YR7/4)	1mm前後の長石を微量含む。	良好	丸みを帯びた底部から斜上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁部内外面ヨコナデ。内底面ヨコナデ。	奈良時代中期 (平城Ⅲ～Ⅳ)
30	土師器杯	A-15	残土	口径(12.6) 器高3.7	口縁部1/5	(内・外・断)橙色(5YR6/6)	雲母・チャートを少量含む。	良好	小さく平たい底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁部は外側に軽く巻き込む杯C。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面下半指オサエ後ナデ。底部外面指オサエ。内底面ヨコナデ。	奈良時代前期 (平城Ⅱ～Ⅲ)
31	土師器杯	A-10	残土	口径(16.0) 残存高2.5	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR7/6)	1mm前後のチャートを少量含む。	良好	丸みを帯びた底部から斜上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁部は内側に軽く巻き込む杯C。口縁部内外面ヨコナデ。底部外面指オサエ。内底面一定方向のナデ。	奈良時代前期 (平城Ⅱ～Ⅲ)

番号	器種	出土地区	層位	法量cm ()は復元値	残存	色	調	胎土	焼成	特徴	時期
32	土師器杯	A-10	残土	口径(16.0) 残存高3.0	1/4	(内)灰褐色(7.5YR5/2) (外・断)橙色(5YR5/2)		1mm前後の長石・チャート を少量含む。	良好	小さく平たい底部から丸みをもつ 斜上方に立ち上がる口縁部をも ち、口縁部は内側に軽く巻き込 む。口縁部内外面ヨコナデ。口 縁部内外面指オサエ。内底面一定 方向のナデ。	奈良時代前期 (平城Ⅱ～Ⅲ)
33	土師器杯	A-22	残土	口径(16.8) 残存高2.9	口縁部片	(内・外・断)にぶい橙色(7.5YR7/4)		1mm前後の長石・雲母を微 量含む。	良好	丸みを帯びた底部から斜上方に立 ち上がる口縁部をもち、口縁部 は内側に軽く巻き込む。口縁部 内外面ヨコナデ。底部外面ナデ。	奈良時代中期 (平城Ⅲ～Ⅳ)
34	土師器杯	A-15	残土	口径(17.0) 残存高2.4	口縁部片	(内・外)灰褐色(7.5YR4/2) (断)橙色(2.5YR6/6)		1mm前後の角閃石を微量含 む。生駒西麓産。	良好	平たい底部から斜上方に立ち上 がる口縁部をもち、口縁部は外 側に軽く巻き込む。口縁部内外 面ヨコナデ。底部外面指オサエ。	奈良時代 (平城Ⅱ～Ⅳ)
35	土師器皿	A-8	残土	口径(16.6) 残存高2.7	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)		1mm前後の長石などを含む。	良好	広く平たい底部から緩やかに外反 する口縁部をもち、口縁部は内 端面を成す皿A。口縁部内外面ヨ コナデ。底部外面指オサエ後ナデ。	奈良時代後期 (平城Ⅲ～Ⅴ)
36	土師器皿	A-23	残土	口径(14.0) 残存高2.1	口縁部片	(内・外)橙色(5YR6/6) (断)灰白色(7.5YR8/2)		1mm前後の長石を微量含む。	良好	平たい底部から緩やかに外反する 口縁部をもち、口縁部は外内 端面を成す皿A。口縁部内外面ヨ コナデ。	奈良時代後期 (平城Ⅱ～Ⅴ)
37	土師器皿	A-9	第4層	口径(15.0) 残存高2.0	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)		1mm前後の長石・雲母を含 む。	良好	平たい底部から緩やかに外反する 口縁部をもち、口縁部は外内 端面を成す皿A。口縁部内外面ヨ コナデ。底部外面指オサエ。	奈良時代後期 (平城Ⅲ～Ⅴ)
38	土師器皿	A-8	第4層	口径(16.0) 器高1.9	1/4	(内・断)灰黄色(10YR5/2) (外)明赤褐色(5YR6/6)		チャート・1mm前後の礫を 含む。	良好	平たい底部から緩やかに外反する 口縁部をもち、口縁部は丸い皿 A。口縁部内外面ヨコナデ。底部 外面指オサエ。	奈良時代後期 (平城Ⅱ～Ⅴ)
39	土師器皿	A-15	残土	口径(12.0) 残存高2.0	口縁部1/6	(内・外・断)橙色(5YR6/6)		雲母をやや多く含む。	良好	やや内彎ぎみに立ち上がる口縁部 をもち、口縁部は丸い皿C。口 縁部内外面ヨコナデ後ヘラケ ズリ。口縁部内面ヨコナデ。	奈良時代後期 (平城Ⅲ～Ⅴ)
40	土師器皿	A-16	残土	口径(13.8) 残存高1.6	口縁部片	(内)橙色(5YR6/6) (外・断)にぶい橙色(7.5YR7/4)		1mm前後の長石・チャート を微量含む。	良好	内彎して立ち上がる口縁部をもち、 口縁部は内端面を成す皿C。口 縁部内外面ヨコナデ。	奈良時代 (平城Ⅱ～Ⅳ)
41	土師器皿	A-7	残土	口径(17.2) 残存高2.5	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)		チャート、1mm前後の礫を 微量含む。	良好	平たい底部から緩やかに外反する 口縁部をもち、口縁部は内端面 を成す皿A。口縁部内外面ヨコナ デ。底部外面指オサエ。	奈良時代後期 (平城Ⅱ～Ⅴ)
42	土師器碗	A-7	第2層	口径(12.2) 残存高3.1	口縁部1/4	(内・外・断)橙色(5YR6/6)		密。	良好	丸みを帯びた底部から内彎して立 ち上がる口縁部をもち、口縁部 はやや内端面を成す碗A。口縁部 内面ヨコナデ。口縁部上半～体部 方向のヘラミカキ、下半～体部 ナデ。	奈良時代 (8世紀代)
43	土師器碗	A-16	残土 (第3層)	口径(13.0) 残存高3.2	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)		1mm前後の長石・雲母を微 量含む。	良好	丸みを帯びた底部から内彎して立 ち上がる口縁部をもち、口縁部 は丸い碗D。口縁部内面粗い斜放 射状隆文。外面は口縁部ヨコナデ、 底部指オサエ後、横方向のヘラミ カキ。	奈良時代 (8世紀代)

番号	器種	出土地区	層位	法量cm ()は復元値	残存	色調	胎土	焼成	特徴	時期
44	土師器碗	A-15	残土	口径(15.0) 残存高4.0	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)	1~2mmの長石・チャートを含む。	良好	丸底を帯びた底部から内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁部内外面ヨコナデ。口縁部下外面横方向のハラムミガキ。口縁部内面粗い斜放射状脚文。	奈良時代 (8世紀代)
45	土師器高坏	A-15	残土	残存高4.3 基部径4.4	脚部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)	1mm前後の長石・チャート・雲母を含む。	良好	小形高坏の脚部。脚部外面指オサエ形ナデ。裾部内外面ナデ。	飛鳥時代後期 (飛鳥Ⅲ~Ⅴ)
46	土師器高坏	A-16	残土	残存高3.6 基部径5.2	脚部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)	1~2mmの長石・チャート・角閃石などを含む。	良好	ヘラケズリによる断面十角形の太い軸部に坏部を接合する。脚柱部外面ヘラケズリ。	奈良時代 (8世紀代)
47	土師器鉢	A-8	残土	口径(27.6) 残存高7.6	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)	1mm前後の長石・雲母を含む。	良好	内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁部は上端面を成す。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面ヘラミガキ。	奈良時代 (8世紀代)
48	土師器鉢	A-15	残土	(口径30.0) 残存高3.5	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)	雲母・チャートを少量含む。	良好	内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁部は上端面を成す。口縁部内外面ヨコナデ。	奈良時代 (8世紀代)
49	土師器蓋つまみ部	A-8	残土	つまみ径1.6 つまみ高1.2	つまみ部片	(外・断)橙色(5YR6/6)	密。	良好	頂部が平坦で柱状に近いつまみ外面ナデ。	奈良時代~平安時代 (8世紀~9世紀代)
50	土師器蓋	A-7	残土	口径(20.6) 残存高1.3	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)	密。	良好	口縁部は内傾し、端面は平面で口縁部内外面ナデ。口縁部外面ヘラミガキ。	奈良時代 (8世紀代)
51	土師器甕	A-7	第5層	口径(10.0) 残存高4.6 頸部径(9.7)	口縁部1/4	(内・外・断)にぶい褐色(7.5YR5/4)	1mm以下の金雲母を多量含む、1mm前後の礫を含む。	良好	口縁部は体部から直立ぎみに立ち上がり、口縁部は外反し、丸い。口縁部内外面ハケメ。口縁部外面ヨコナデ。体部内外面ナデ(接合痕あり)。体部外面ハケメ。	飛鳥時代後期~奈良時代 (7世紀後半~8世紀代)
52	土師器甕	A-7	残土	口径(12.0) 残存高5.0 頸部径(10.2)	口縁部1/5	(内・外・断)にぶい褐色(7.5YR6/4)	角閃石・雲母をやや多く含む。生駒西麓産。	良好	くの字形に外反する口縁部をもち、口縁部は外端面を成す。口縁部内外面ハケメ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ハケメ。	飛鳥時代後期~奈良時代 (7世紀後半~8世紀代)
53	土師器甕	A-7	第5層	口径(12.6) 残存高2.4	口縁部1/6	(内・断)にぶい褐色(7.5YR5/4) (外)にぶい黄褐色(10YR5/3)	金雲母を多量含む。	良好	体部から縁やかに外反する口縁部をもち、口縁部は上端面を成す。口縁部内外面ヨコナデ。	飛鳥時代後期~奈良時代 (7世紀後半~8世紀代)
54	土師器甕	A-16	残土	口径(14.8) 残存高1.8 頸部径13.2	口縁部片	(内・外・断)橙色(2.5YR6/8)	1~2mmの長石を含む。	良好	くの字形に短く外反する口縁部をもち、口縁部は上端面を成す。口縁部内外面ヨコナデ。	飛鳥時代後期~奈良時代 (7世紀後半~8世紀代)
55	土師器甕	A-7	第5層	口径(16.8) 残存高3.0	口縁部片	(内・外・断)にぶい褐色(7.5YR5/4)	金雲母を多量含む。	良好	くの字形に外反する口縁部をもち、口縁部は外端面を成す。口縁部内外面ハケメ(6/1.1cm)。	飛鳥時代後期~奈良時代 (7世紀後半~8世紀代)
56	土師器甕	A-7	残土	口径(17.8) 残存高14.2 頸部径15.0	口縁部~体部	(内・外・断)にぶい褐色(7.5YR5/4)	雲母を多量含む。1mm前後の礫をやや多く含む。	良好	くの字形に外反する口縁部をもち、口縁部は外端面を成す。頸部から体部にかけてはなだらかに下る。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面指オサエ後、板ナデ。体部外面縦方向のハケメ(7/1.2cm)。	飛鳥時代後期~奈良時代 (7世紀後半~8世紀代)
57	土師器甕	A-23	残土	口径(19.8) 残存高3.1	口縁部片	(内)にぶい褐色(7.5YR7/4) (外・断)褐色(5YR6/6)	1~2mmの長石を微量含む。	良好	体部からやや外彎ぎみにのびる口縁部をもち、口縁部は上端面がわずかに丸く隆起する。口縁部内外面ヨコナデ。	奈良時代 (8世紀代)

番号	器種	出土地区	層位	法量cm ()は復元値	残存	色	胎土	焼成	特徴	時期
58	土師器甕	A-8	第5層	口径(30.0) 残存高13.8 頸部径(24.6)	口縁部～体部	(内・外・断)にぶい黄橙色(10YR6/4)	金雲母・1mm前後の長石などを微量含む。	良好	体部からやや外響きみにのびる口縁部をもち、口縁部は上部が丸く隆起する。頸部から体部にかけてはなだらかに下る。口縁部内面ヨコナデ。体部内面指オサエ後、板ナデ。体部外面縦方向のハケメ。	奈良時代 (8世紀代)
59	土師器甕	A-7	残土	残存高12.0	体部～底部	(内・外・断)にぶい褐色(7.5YR5/4)	1～5mmの長石・雲母などを含む。	良好	丸い体部に小さな丸みを帯びた底部から成る。体部内面ナデ。体部外面縦方向のハケメ。底部内面指オサエ。底部外面縦方向のハケメ。	奈良時代 (8世紀代)
60	土師器甕把手部	A-16	残土 (第3層)	残存高3.3	把手部片	(内)褐色(5YR6/6) (外・断)にぶい褐色(7.5YR7/4)	1mm前後の長石・雲母・角閃石を少量含む。生駒西麓産。	良好	三角形折り曲げ把手をつける甕。内外面ナデ。	奈良時代～平安時代前期 (8世紀～9世紀代)
61	土師器把手部	A-8	残土	残存高3.5	把手部	(内・外・断)にぶい褐色(7.5YR5/4)	1～3mmの長石・雲母・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	やや上反する牛角状の把手。把手部内面ナデ。把手部外面指オサエ後ナデ。	
62	土師器把手部	A-23	第4層	残存高4.9	把手部	(内・外・断)にぶい褐色(7.5YR5/4)	1～3mmの長石・雲母・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	やや上反する牛角状の把手。把手部内面指オサエ。把手部外面ナデ。	
63	土師器羽釜または甕	A-8	残土	口径(21.0) 残存高4.6	口縁部片	(内)褐色(5YR6/6) (外)にぶい褐色(5YR6/4) (断)明赤褐色(5YR5/6)	1mm前後の長石・雲母・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	体部からやや外響きみにのびる口縁部をもち、口縁部は丸い。口縁部内外面縦方向のハケメ。頸部外面縦方向のハケメ。	奈良時代 (8世紀代)
64	土師器羽釜または甕	A-7	残土	口径(25.0) 残存高3.8	口縁部片	(内・外・断)にぶい褐色(5YR6/4)	1mm前後の長石などをやや多く含む。雲母を多量含む。	良好	くの字形に外反する口縁部をもち、口縁部は丸い。口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面に工具痕あり。	奈良時代 (8世紀代)
65	土師器羽釜	A-7	第2層	口径(26.0) 残存高5.0 頸径(26.6)	口縁部～頸部	(内)にぶい黄褐色(10YR6/3) (外)にぶい褐色(7.5YR5/4)～褐灰色(10YR4/1) (断)にぶい褐色(7.5YR5/4)	角閃石・雲母・1mm前後の長石を多量に含む。生駒西麓産。	良好	体部からやや外響きみにのびる口縁部をもち、口縁部と体部の間に水平の鑄がつく。口縁部内外面ヨコナデ。頸部以下疎痕。	奈良時代 (8世紀代)
66	土師器羽釜	A-10	残土	口径(23.6) 残存高5.3 頸径(26.8)	口縁部～頸部	(内)褐色(5YR6/6) (断)にぶい黄褐色(10YR6/3)	1～2mmの長石・雲母・角閃石を多量に含む。生駒西麓産。	良好	口縁部は短く外反し、口縁部と体部の間に水平の鑄がつく。口縁部内外面ヨコナデ。頸部以下疎痕。	奈良時代 (8世紀代)
67	土師器羽釜頸部	A-12	第2・3層	残存高4.5	頸部片	(内・外・断)にぶい黄褐色(10YR5/4)	1～3mmの長石・雲母・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	水平の鑄がついた羽釜。頸部内面ナデ。頸部外面ヨコナデ。	奈良時代 (8世紀代)
68	土師器羽釜頸部	A-16	残土 (第3層)	残存高3.0	頸部片	(内・断)明赤褐色(5YR5/6) (外)にぶい褐色(7.5YR6/4)	1～2mmの長石・石英・雲母・チャート・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	水平の鑄がついた羽釜。頸部内面ナデ。頸部外面ヨコナデ。	奈良時代 (8世紀代)
69	土師器羽釜頸部	A-7	残土	残存高2.5	頸部片	(内・外・断)にぶい褐色(7.5YR5/4)	1～3mmの長石・雲母・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	水平の鑄がついた羽釜。頸部内面ナデ。頸部外面ヨコナデ。	奈良時代 (8世紀代)
70	須恵器坏壺	A-8	残土	口径(9.8) 残存高1.4	口縁部片	(内・外・断)灰色(N5/)	1mm前後の長石を微量含む。	良好	口縁部は丸みをもち、天井部から外下方に下り、口縁部は丸く、内傾するからえりを付す。口縁部内外面回転ナデ。	飛鳥時代後期 (陶器Ⅲ-2～3)
71	須恵器坏壺	A-15	残土	口径13.3 器高2.3 つまみ径2.1 つまみ高0.7	完形	(内・外)灰白色(5Y7/1)	1～5mmの長石などを微量含む。	良好	口縁部はやや内傾して下り、端部は丸い。天井部は低く平らで、2/3のところは厚くなる。外面が下方へ屈曲している。中央部に擬宝珠様のつまみ形を付す。マキアゲ・ミスビキ成形。つまみ部ナデ。天井部内面ヘラケズリ。天井部内面1/3不整方向のナデ。他は回転ナデ。	奈良時代 (陶器Ⅳ-1～2)

番号	器種	出土地区	層位	法量 ^{cm} ()は復元値	残存	色	調	胎	土	焼成	特徴	時期
72	須惠器坏身	A-8	残土	口径(14.2) 残存高30	口縁部片	(内・外・断)灰色(N6/)	(内・外・断)灰色(N6/)	1mm前後の長石を微量含む。	良好	良好	やや内彎ぎみに立ち上がる口縁部をもち、口縁部は丸い。口縁部内外面回転ナデ。	奈良時代 (陶器IV)
73	須惠器坏身	A-9	残土	底径(13.2) 残存高22 高台高0.6	底部1/5	(内・断)灰白色(N7/) (外)灰色(N6/)	(内・断)灰白色(N7/)	2mm前後の長石を微量含む。	良好	良好	底縁部に直立ぎみに伸びるハの字形の高台が短くつく。接地面は平坦面を成す。底部は平たい。底部内外面回転ナデ。高台ハリツケ。	奈良時代 (陶器IV)
74	須惠器壺底部	A-7	残土	底径(7.0) 残存高20 高台高0.5	底部(高台部)	(内・外・断)灰白色(N7/)	(内・外・断)灰白色(N7/)	密。	良好	良好	ハの字形の高台が短くつく。接地面は平坦面を成す。底部は平たい。底部内外面回転ナデ。高台ハリツケ。	奈良時代 (陶器IV)
75	須惠器高坏	A-15	残土	残存高4.8 基部径2.0	脚部片	(内・外・断)灰色(N7/)	(内・外・断)灰色(N7/)	1mm前後の長石を微量含む。	良好	良好	脚部は坏部から垂直ぎみに下りはじめ外彎する。脚部外面回転ナデ調整。脚部ハリツケ。基部に一部自然釉あり。	奈良時代 (陶器IV)
76	須惠器甕	A-7	第3層	残存高30.3	体部	(内)灰黄色(2.5Y6/2) (外)灰黄色(2.5Y7/2) ~ 黄灰色(2.5Y6/1) (断)にぶい黄橙色(10YR7/4) ~ 灰色(N6/)	(内)灰黄色(2.5Y6/2) (外)灰黄色(2.5Y7/2) ~ 黄灰色(2.5Y6/1) (断)にぶい黄橙色(10YR7/4) ~ 灰色(N6/)	1mm前後の長石・雲母・チャートを含む。	良好	良好	底体部は球体を成し、最大径は体部の2/3上位に有す。体部内面ナデ。体部外面平行タタキ。底部外面不整方向の平行タタキ。	奈良時代 (陶器IV)
77	土師器皿	A-8	残土	口径8.7 器高2.0	壳形	(内・外)にぶい橙色(7.5YR7/3)	(内・外)にぶい橙色(7.5YR7/3)	1~2mmの長石・雲母・チャートを含む。	良好	良好	丸みを帯びた底部から内彎ぎみに立ち上がる口縁部をもち、口縁部粗雑。全体的に歪みが顕著。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面指オサエ後ナデ。	平安時代
78	土師器皿	A-15	残土	口径(10.4) 残存高1.8	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)	(内・外・断)橙色(5YR6/6)	密。	良好	良好	丸みを帯びた底部から内彎ぎみに立ち上がる口縁部をもち、口縁部は丸い。口縁部内外面ヨコナデ。	平安時代
79	土師器皿	A-22	残土	口径(7.5) 残存高0.9	1/3	(内・外・断)にぶい黄橙色(10YR7/4)	(内・外・断)にぶい黄橙色(10YR7/4)	1mm前後のチャート・雲母を少量含む。	良好	良好	外方に屈曲させ「て」の字状を呈する口縁部をもち、口縁部は上方ヨコナデ。底部内外面一定方向のナデ。	平安時代 (10世紀代)
80	土師器皿	A-22	残土	口径(10.6) 残存高1.3	口縁部片	(内・外・断)にぶい黄橙色(10YR7/3)	(内・外・断)にぶい黄橙色(10YR7/3)	密。	良好	良好	外方に屈曲させ「て」の字状を呈する口縁部をもち、口縁部は上方ヨコナデ。	平安時代 (10世紀代)
81	土師器皿	A-10	第3層	口径(14.0) 残存高2.0	口縁部片	(内・外・断)浅黄橙色(10YR8/3)	(内・外・断)浅黄橙色(10YR8/3)	チャートを少量含む。	良好	良好	外方に屈曲させ「て」の字状を呈する口縁部をもち、口縁部は上方ヨコナデ。	平安時代 (10世紀代)
82	土師器碗	A-16	残土 (第3層)	口径(13.8) 残存高2.5	口縁部片	(内・外・断)明褐色(7.5YR5/6)	(内・外・断)明褐色(7.5YR5/6)	1~2mmの長石・チャート・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	良好	内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁部は内端面を成す。口縁部内外面ヨコナデ。	奈良時代 (平城II~IV)
83	土師器碗	A-16	残土 (第3層)	口径(13.8) 残存高3.3	口縁部片	(内)橙色(5YR6/6) (外・断)にぶい橙色(7.5YR7/4)	(内)橙色(5YR6/6) (外・断)にぶい橙色(7.5YR7/4)	1mm前後の長石・チャートを微量含む。	良好	良好	丸みを帯びた底部から内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁部はやや内端面を成す。口縁部内外面ヨコナデ。底部外面指オサエ。	奈良時代 (平城II~IV)
84	土師器碗	A-8	残土	口径(12.6) 残存高3.0	口縁部片	(内・外・断)にぶい橙色(7.5YR7/3)	(内・外・断)にぶい橙色(7.5YR7/3)	1mm以下の長石・雲母を微量含む。	良好	良好	内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁部は丸い。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指オサエ。	奈良時代末~平安時代初頭 (8世紀末~9世紀前半)

番号	器種	出土地区	層位	法量cm ○は復元値	残存	色	調	胎土	焼成	特徴	時期
85	土師器埴	A-11	残土	口径(128) 残存高30	口縁部片	(内・外・断)明赤褐色(5YR5/6)		1mm前後の長石・チャート・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部はやや内面を成す。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。	奈良時代末～平安時代初期 (8世紀末～9世紀前半)
86	土師器埴	A-8	残土	口径(130) 残存高40	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)		1mm前後の長石・雲母・チャートなどを含む。	良好	内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は丸い。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指オサエ。	奈良時代末～平安時代初期 (8世紀末～9世紀前半)
87	土師器埴	A-15	残土	口径(130) 残存高35	口縁部片	(内・断)明赤褐色(5YR5/6) (外)橙色(5YR6/6)		密。	良好	丸みを帯びた底部から内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は丸い。口縁部内外面ヨコナデ。	奈良時代末～平安時代初期 (8世紀末～9世紀前半)
88	土師器埴	A-9	第3層	口径(136) 残存高21	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)		雲母を多量含む。	良好	緩やかに外反する口縁部をもち、口縁端部は丸い。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指オサエ。	奈良時代末～平安時代初期 (8世紀末～9世紀前半)
89	土師器埴	A-8	残土	口径(166) 残存高33	口縁部片	(内・外・断)橙色(5YR6/6)		雲母・1mm前後の長石などを含む。	良好	内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は丸い。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指オサエ。	奈良時代末～平安時代初期 (8世紀末～9世紀前半)
90	黑色土器埴	A-8	第3層	口径(158) 残存高45	口縁部片	(内・断)暗灰色(N3/) (外)暗灰色(N3/)(口縁部)色(7.5YR6/4)(体部)		1~2mmの長石などをやや多く含む。	良好	内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部でさらに外反し、内面に浅い沈線を通らす。内面全面と口縁部上端外面を黒く焼く。体部外面指オサエ。他はヘラミガキ。	平安時代前半 (9世紀中葉)
91	土師器埴底部	A-10	残土	底径(100) 残存高09 高台高06	底部片	(内・外・断)橙色(5YR6/8)		密。	良好	ハの字形の高台が短くつく。接地面は平坦面を成す。底部内外面ヨコナデ。高台ハリソソテ。	平安時代
92	土師器甕	A-8	残土	口径(140) 残存高38 頸部径(13.4)	口縁部1/4	(内・外・断)橙色(5YR6/6)		1~2mmの長石・雲母などを含む。	良好	くの字形に外反する口縁部をもち、口縁端部は凹面を成して外傾し、上端がわずかに突出する。体部は肩が張り、稜を成す。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指オサエ後ナデ。	奈良時代後期～平安時代前期 (8世紀中葉～9世紀代)
93	土師器甕	A-7	残土	口径(160) 残存高53 頸部径15.2	口縁部～体部	(内・外)灰褐色(7.5YR4/2) (断)明赤褐色(2.5YR5/6)		1mm前後の長石などを含む。	良好	直立さみに立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は凹面を成して外傾し、上端がわずかに突出する。体部は肩が張り、稜を成す。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指オサエ。	奈良時代後期～平安時代前期 (8世紀中葉～9世紀代)
94	緑釉陶器・皿	A-22	残土	口径(130) 残存高1.8	口縁部片	(内・外・断)浅黄褐色(10YR8/3)		1mm以下のチャートを微量含む。	良好	外反して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部でさらに強く外反する。口縁部内外面ヨコナデ。	平安時代
95	三彩陶・盤	A-7	残土	口径(278) 残存高3.9	口縁部片	(内・外・断)灰白色(5Y8/1)		1mm前後の石英を微量含む。	良好	広く平たい底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部はやや外面を成す。内面全面に施釉されている(編釉緑釉)。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	奈良時代
96	製塩土器	A-9	第4層	残存高3.8	口縁部片	(内・外)橙色(7.5YR7/6) (断)黄褐色(2.5Y5/3)		1~2mmの長石・石英などを含む。	良好	口縁部は直立し、口縁端部は丸い。器厚は1.1cm前後でやや厚い。内面ナデ。外面指オサエ。	奈良時代～平安時代
97	製塩土器	A-15	残土	残存高3.2	口縁部片	(内・外・断)浅黄褐色(10YR8/3)		1~2mmの長石・チャートなどを含む。	良好	口縁部は直立し、口縁端部は面を成す。器厚は0.9cm前後。内面ナデ。外面指オサエ。	奈良時代～平安時代
98	製塩土器	A-15	残土	残存高4.1	口縁部片	(内・外)浅黄褐色(7.5YR8/6) (断)灰白色(10Y7/1)		1mm前後の長石を微量含む。	良好	口縁部はやや外傾し、口縁端部は面を成す。器厚は1.0cm前後。内面ナデ。外面指オサエ。	奈良時代～平安時代

番号	器種	出土地区	層位	法量cm ()は復元値	残存	色	胎土	焼成	特徴	時期
99	製塩土器	A-15	残土	残存高3.7	口縁部片	(内・外・断) 橙色(5YR7/8)	1~2mmの長石・石英・チャートなどを含む。	良好	口縁部はやや外傾し、口縁端部は面を成す。器厚は0.9cm前後。内面ナデ。外面指オサエ。	奈良時代~平安時代
100	製塩土器	A-9	第5層	残存高5.7	口縁部片	(内) 橙色(5YR6/6) (外) 橙色(5YR6/8) (断) 橙色(5YR7/6)	1~2mmの長石・雲母などをやや多く含む。	良好	口縁部は内傾し、口縁端部はやや鋭い。器厚は1.3cm前後とやや厚い。内面ナデ。外面指オサエ。	奈良時代~平安時代
101	製塩土器	A-15	残土	残存高3.0	口縁部片	(内・断) 浅黄褐色(10YR8/3) (外) 灰白色(2.5Y7/1)	1mm前後の長石などを含む。	良好	口縁部は直立し、口縁端部は丸い。器厚は0.8cm前後。内面ナデ。外面指オサエ。	奈良時代~平安時代
102	製塩土器	A-6	残土	残存高2.5	体部片	(内・外・断) にぶい 橙色(7.5YR7/4)	1mm前後の長石などを含む。	良好	器厚が0.9cm前後の製塩土器体部。内面ナデ。外面指オサエ。	奈良時代~平安時代
103	製塩土器	A-7	残土	残存高3.7	体部片	(内) にぶい 橙色(7.5YR7/4) (外) 灰白色(5Y7/1)	1~2mmの長石などを含む。	良好	器厚が1.2cm前後とやや厚い製塩土器体部。内面ナデ。外面指オサエ。	奈良時代~平安時代
104	製塩土器	A-15	残土	残存高3.8	体部片	(内) にぶい 黄褐色(10YR7/3) (外・断) 灰白色(10YR7/1)	1~2mmの長石などを含む。	良好	器厚が0.8cm前後の製塩土器体部。内面ナデ。外面指オサエ。	奈良時代~平安時代
105	製塩土器	A-15	残土	残存高3.5	体部片	(内・外・断) 淡褐色(5YR8/4)	1mm前後のチャートを微量含む。	良好	器厚が0.7cm前後とやや薄い製塩土器体部。内面ナデ。外面指オサエ。	奈良時代~平安時代
106	製塩土器	A-15	残土	残存高4.4	体部片	(内・外) 浅黄褐色(10YR8/4) (断) 灰黄色(2.5Y7/2)	1~2mmの長石・石英などを含む。	良好	器厚が0.8cm前後の製塩土器体部。内面ナデ。外面指オサエ。	奈良時代~平安時代
107	丸瓦	A-10	第3層	残存長4.3 残存幅3.5 厚さ1.6	端部片	(凸) 褐灰色(5YR4/1) (凹) 赤灰色(2.5YR4/1) (断) 灰褐色(5YR4/2)	1~2mmの長石・角閃石などを含む。生駒西麓産。	良好	凸面ハケメ(7本/cm)後、縦方向にハケメ。	奈良時代(8世紀代)
108	丸瓦	A-6	残土	残存長4.2 残存幅3.4 厚さ1.3	端部片	(凸・凹) 黄灰色(2.5Y5/1) (断) 灰黄褐色(10YR5/2)	1~3mmの長石・角閃石などを含む。生駒西麓産。	良好	凸面罫目タタキ後、ナデ消し。凹面布目(6本/cm×7本/cm)。布目やや粗い。	奈良時代(8世紀代)
109	丸瓦	A-7	残土	残存長10.6 残存幅5.3 厚さ1.7	端部片	(凸・凹) にぶい 黄褐色(10YR7/3) (断) 灰黄色(2.5Y6/2)	1~3mmの長石・石英・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面罫目タタキ後、横方向にナデ消し。凹面布目(8本/cm×8本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
110	丸瓦	A-7	残土	残存長5.2 残存幅5.3 厚さ1.2	破片	(凸・凹) 断) 灰色(10Y6/1)	1~2mmの長石・石英・角閃石をやや多く含む。生駒西麓産。	良好	凸面罫目タタキ後、横方向にナデ消し。凹面布目(7本/cm×7本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
111	丸瓦	A-7	残土	残存長3.3 残存幅4.4 厚さ1.7	端部片	(凸) 暗灰黄色(2.5Y5/2) (凹) 灰色(N6/) (断) 灰色(5Y6/1)	1~3mmの長石・石英・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	凸面罫目タタキ後、縦方向にナデ消し。凹面布目痕(8本/cm×8本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
112	丸瓦	A-8	第4層	残存長12.3 残存幅5.1 厚さ1.8	端部片	(凸・凹・断) 灰黄褐色(10YR6/2)	1~2mmの長石・石英・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面は罫目タタキだが、風化顕著で詳細不明。凹面布目(7本/cm×7本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
113	丸瓦	A-15	残土	残存長13.4 残存幅5.4 厚さ1.8	端部片	(凸・凹) 灰色(5Y5/1) (断) 橙色(5YR6/6)	1~2mmの長石・石英・チャート・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面罫目タタキ後、横方向にナデ消し。凹面布目(6本/cm×6本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
114	丸瓦	A-6	残土	残存長6.0 残存幅2.0 厚さ1.7	端部片	(凸・凹) 灰色(N4/~N5/) (断) 灰褐色(7.5YR6/2)	1mm前後の長石・石英・角閃石を含む。	良好	凸面ナデ。凹面布目(8本/cm×8本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
115	丸瓦	A-8	残土	残存長10.1 残存幅8.8 厚さ2.4	端部片	(凸・断) 灰黄褐色(10YR6/2) (凹) 灰色(N6/)	1~2mmの長石・石英・チャート・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	凸面ナデだが、風化顕著で詳細不明。凹面布目(7本/cm×7本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
116	丸瓦	A-6	残土	残存長8.6 残存幅4.4 狭端部厚1.5 平瓦部厚2.0	狭端部片	(凸・凹・断) 灰色(N4/~N5/)	1~2mmの長石・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	凸面ナデ。狭端部より5.0~5.5cmに沈線を2本施す。凹面布目(8本/cm×8本/cm)。	奈良時代(8世紀代)

番号	器種	出土地区	層位	法量cm ()は復元値	残存	色調	胎土	焼成	特徴	時期
117	丸瓦	A-8	残土	残存長9.4 残存幅4.6 厚さ1.6	端部片	(凸・凹・断)黄灰色(2.5Y6/1)	1~3mmの長石・石英・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	凸面横方向にナデ。凹面布目(5本/cm×6本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
118	丸瓦	A-11	残土	残存長7.8 残存幅7.8 厚さ2.6	端部片	(凸・凹・断)にぶい黄褐色(10YR5/3)	1~3mmの長石・石英・チャート・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面ナデだが、風化顕著で詳細不明。凹面風化顕著のため調整不明。	奈良時代(8世紀代)
119	丸瓦	A-16	残土(第3層)	残存長5.2 残存幅2.3 厚さ1.6	端部片	(凸・凹)灰色(5Y4/1) (断)灰褐色(7.5YR5/2)	1~2mmの長石・石英・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	凸面ナデ。凹面布目(7本/cm×7本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
120	丸瓦	A-16	残土(第3層)	残存長8.4 残存幅2.9 厚さ1.9	端部片	(凸・凹・断)にぶい褐色(7.5YR5/4)	1~3mmの長石・石英・チャート・角閃石をやや多く含む。生駒西麓産。	良好	凸面ナデ。凹面布目(7本/cm×6本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
121	丸瓦	A-16	残土(第3層)	残存長6.7 残存幅2.5 厚さ1.9	端部片	(凸)にぶい黄褐色(10YR5/3) (凹)黒褐色(2.5Y3/1) (断)にぶい褐色(7.5YR5/3)	1~3mmの長石・石英・チャート・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面ナデだが、風化顕著で詳細不明。凹面布目後、ナデ消し。	奈良時代(8世紀代)
122	丸瓦	A-16	残土	残存長15.2 残存幅8.0 広端部厚2.4 平瓦部厚1.6	広端部片	(凸・凹・断)灰色(5Y6/1)	1~3mmの長石・石英・角閃石をやや多く含む。生駒西麓産。	良好	凸面ナデ。凹面布目(7本/cm×7本/cm)後、一部縦方向にナデ消し。	奈良時代(8世紀代)
123	軒平瓦	A-12	第2・3層	残存長10.3 瓦当面残存長18.7 瓦当面厚3.1 平瓦部厚2.6	瓦当部	(凸・凹)黄灰色(2.5Y4/1) (断)にぶい褐色(7.5YR7/4)	1~3mmの長石・石英・チャート・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	三重弧文軒平瓦。頸は曲線額。平瓦部凸面格子タタキ。凹面布目(7本/cm×7本/cm)。	飛鳥時代後期(河内寺端瓦第1形式・7世紀後半)
124	平瓦	A-7	残土	残存長9.1 残存幅5.9 厚さ2.3	破片	(凸・凹・断)にぶい黄褐色(10YR5/3)	1~2mmの長石・石英・角閃石をやや多く含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面布目(6本/cm×6本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
125	平瓦	A-16	残土(第3層)	残存長2.6 残存幅3.4 厚さ1.5	端部片	(凸・凹・断)灰黄褐色(10YR5/2)	1~3mmの長石・石英・チャート・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面布目(7本/cm×7本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
126	平瓦	A-8	残土	残存長10.0 残存幅7.5 厚さ2.3	破片	(凸・凹・断)にぶい黄褐色(10YR7/3)	1~3mmの長石・石英・チャート・角閃石をやや多く含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面布目(7本/cm×7本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
127	平瓦	A-9	残土	残存長12.3 残存幅8.4 厚さ2.0	破片	(凸・凹・断)灰黄褐色(10YR5/2)	1~3mmの長石・石英・チャート・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面布目(6本/cm×6本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
128	平瓦	A-15	残土	残存長10.2 残存幅9.0 厚さ2.8	端部片	(凸・凹・断)灰黄褐色(10YR6/2)	1~5mmの長石・石英・チャート・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面布目(6本/cm×6本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
129	平瓦	A-10	残土	残存長7.2 残存幅8.6 広端部厚2.2	広端部片	(凸・凹・断)褐色(7.5YR6/6)	1~3mmの長石・石英・チャート・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面布目(7本/cm×7本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
130	平瓦	A-15	残土	残存長10.2 残存幅12.2 厚さ1.9	破片	(凸・凹・断)灰色(N5/)	1~2mmの長石を含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面布目(8本/cm×7本/cm)後、粗いハケによるナデ消し。	奈良時代(8世紀代)
131	平瓦	A-16	残土(第3層)	残存長6.4 残存幅6.9 狭端部厚1.3 平瓦部厚1.7	狭端部片	(凸・凹・断)灰黄褐色(10YR5/2)	1~2mmの長石・石英・チャート・1~7mmの角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面布目(6本/cm×6本/cm)。	奈良時代(8世紀代)

番号	器種	出土地区	層位	法量cm ()は復元値	残存	色	調	胎土	焼成	特徴	時期
132	平瓦	A-22	残土	残存長56 残存幅47 厚さ2.6	端部片	(凸・凹・断)にぶい黄褐色(10YR5/4)	(凸・凹・断)にぶい黄褐色(10YR5/4)	1~2mmの長石・石英・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面布目(6本/cm×6本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
133	平瓦	A-23	第3層	残存長30 残存幅35 厚さ1.4	端部片	(凸・凹・断)明赤褐色(5YR5/6)	(凸・凹・断)明赤褐色(5YR5/6)	1~3mmの長石・チャート・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面布目(7本/cm×7本/cm)。	奈良時代(8世紀代)
134	平瓦	A-7	残土	残存長88 残存幅75 厚さ1.9	破片	(凸・凹・断)にぶい黄褐色(10YR6/3)	(凸・凹・断)にぶい黄褐色(10YR6/3)	1~2mmの長石・雲母・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面ナデ。	奈良時代(8世紀代)
135	平瓦	A-9	第4層	残存長55 残存幅51 厚さ2.0	破片	(凸・凹・断)にぶい黄褐色(10YR5/3)	(凸・凹・断)にぶい黄褐色(10YR5/3)	1~2mmの長石・チャートを多量含む。角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面は縄目タタキ。凹面ナデ。	奈良時代(8世紀代)
136	平瓦	A-9	第4層	残存長47 残存幅46 厚さ1.3	端部片	(凸・凹・断)にぶい黄褐色(10YR5/3)	(凸・凹・断)にぶい黄褐色(10YR5/3)	1~2mmの長石・チャート・角閃石を多量含む。生駒西麓産。	良好	凸面は縄目タタキ。凹面ナデだが、風化顕著のため詳細不明。	奈良時代(8世紀代)
137	平瓦	A-12	第2・3層	残存長156 残存幅125 厚さ2.0	破片	(凸・凹・断)灰色(5Y5/1)	(凸・凹・断)灰色(5Y5/1)	1~3mmの長石・石英・角閃石をやや多く含む。生駒西麓産。	良好	凸面縄目タタキ。凹面布目後、ハケによるナデ消し。凹面とも風化顕著。	平安時代
138	平瓦	A-16	残土(第3層)	残存長96 残存幅145 広端部厚2.1 平瓦部厚2.3	広端部片	(凸・凹・断)灰色(5Y5/1)	(凸・凹・断)灰色(5Y5/1)	1~3mmの長石・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	凸面ナデ。凹面布目(9本/cm×9本/cm)後、一部縦方向にナデ消し。	平安時代
139	道具瓦	A-12	第2・3層	残存長96 残存幅12.1 厚さ1.8	端部片	(凸・凹・断)灰黄色(2.5Y6/2)	(凸・凹・断)灰黄色(2.5Y6/2)	1~2mmの長石・角閃石を含む。生駒西麓産。	良好	凸面ナデ。凹面布目(10本/cm×6本/cm)。	平安時代

註1

才原金弘1980「東大阪市内出土の製塩土器」『東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度』東大阪市遺跡保護調査会

註2

財団法人東大阪市文化財協会2002『皿池遺跡第4次発掘調査報告』

註3

上野利明1997「東大阪市河内町所在皿池古墳出土の舟形埴輪について」『宗教と考古学』金関恕先生の古稀をお祝いする会

註4

藤井直正1968「3. 出土の遺物」『河内寺跡調査概報-東大阪市河内町-』大阪府教育委員会

註5

東大阪市教育委員会1973『東大阪市河内町所在河内寺跡』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報11「Ⅲ 出土遺物」9頁より抜粋。

註6

福永信雄1993『若江遺跡第38次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会 121・122頁

註7

宮内庁蔵版・正倉院事務所編1971『正倉院の陶器』日本経済新聞社

上記以外の参考文献

加藤土師萌1963「唐三彩釉薬考」『古美術』創刊号

高橋照彦2002「日本古代における三彩・緑釉陶の歴史的特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集

Eugenia Ivanovna Gelman (アナトリイ・エリシェフ訳) 1999「渤海の陶器と磁器」『アジア遊学』No.6 特集渤海と古代東アジア 勉誠出版

Eugenia Ivanovna Gelman (荒井雅子訳) 1999「ロシア沿海州中世遺跡出土の施釉陶器と磁器」『アジア遊学』No.6 特集渤海と古代東アジア 勉誠出版

亀井明德1999「渤海三彩陶試探」『アジア遊学』No.6 特集渤海と古代東アジア 勉誠出版

亀井明德2003「日本出土唐代鉛釉陶の研究」『日本考古学』第16集 吉川弘文館

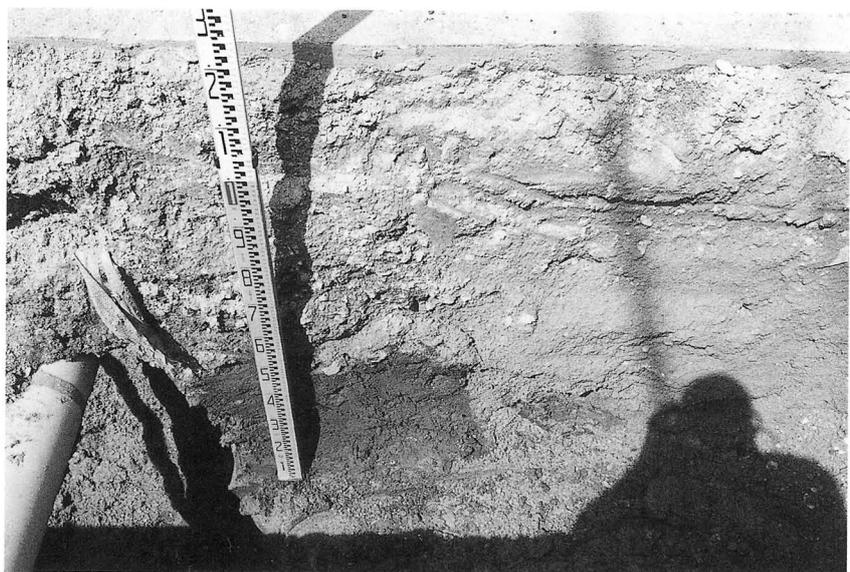
愛知県陶磁資料館・五島美術館編1998『日本の三彩と緑釉-天平に咲いた華-』



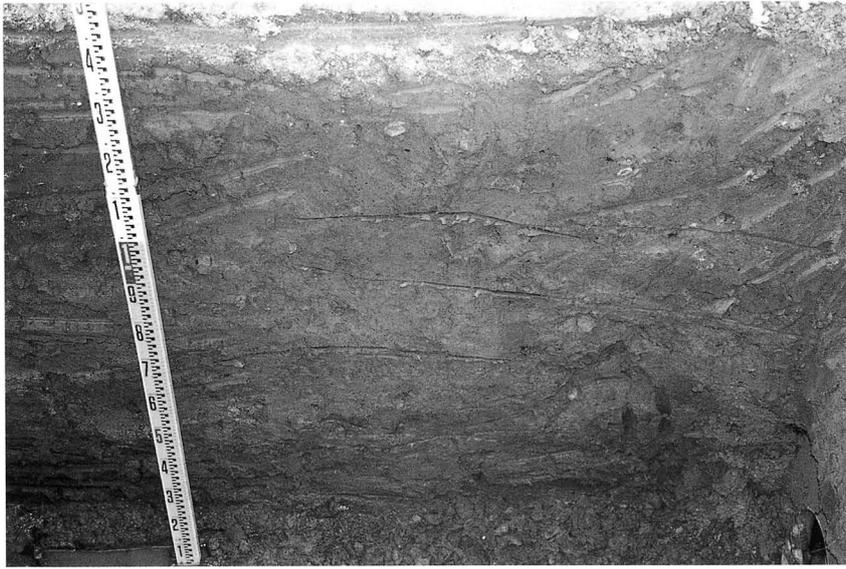
A 地区調査地遠景



A-1 地区土層断面



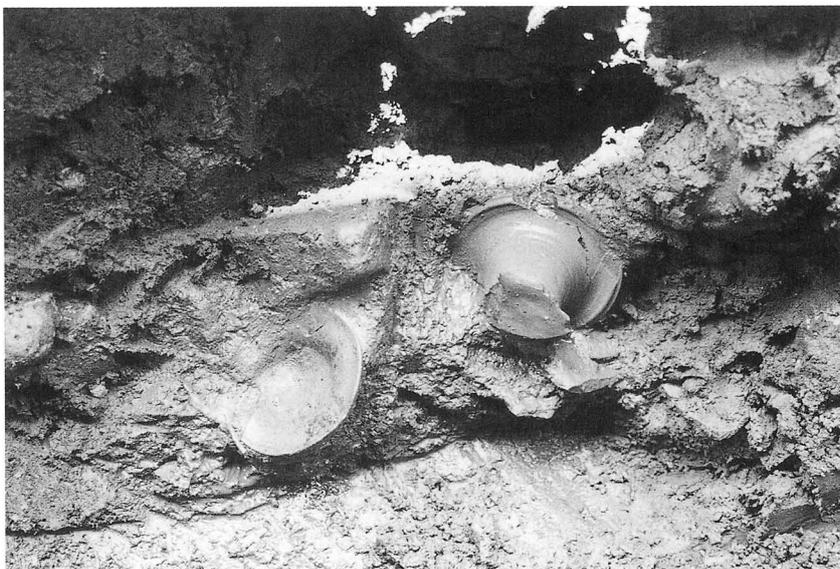
A-5 地区土層断面



A-7地区土層断面



A-7地区須恵器出土状況



A-7地区須恵器出土状況



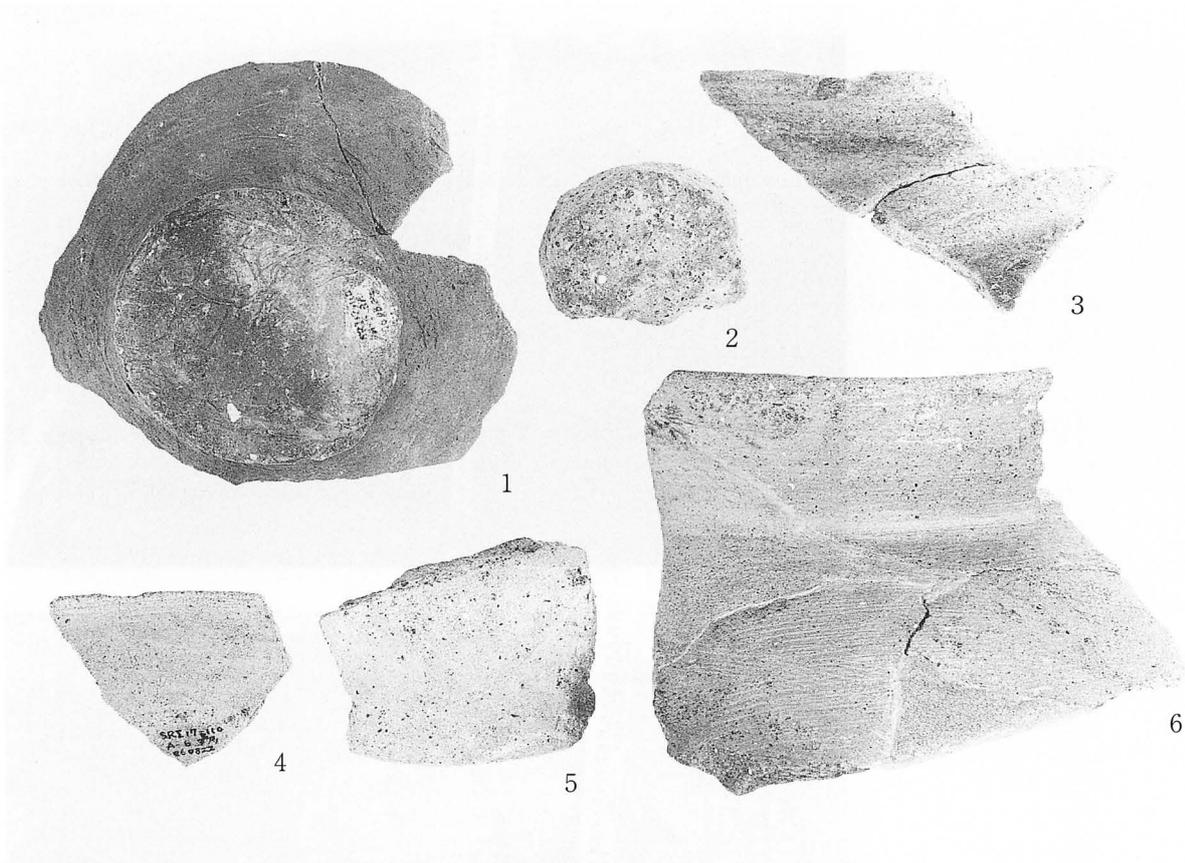
A-10地区土層断面



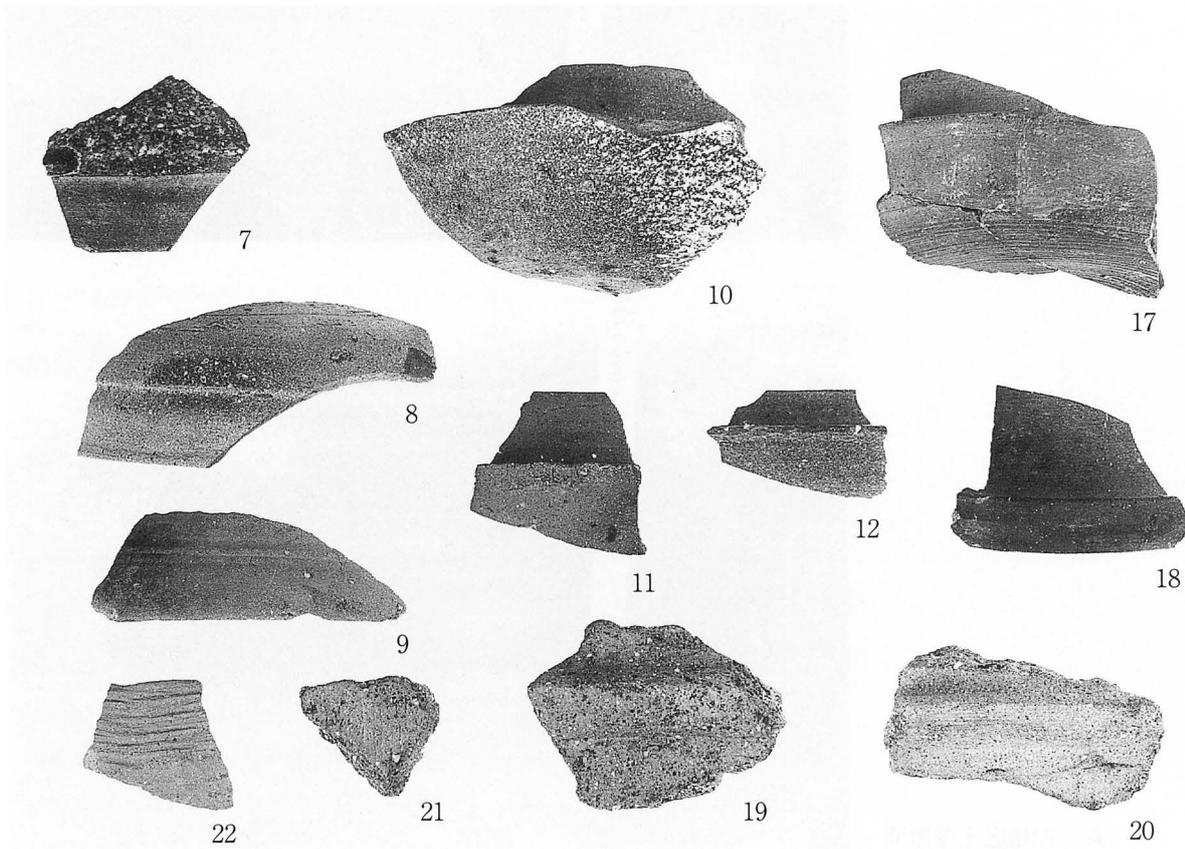
A-17地区土層断面



A-23地区土層断面



出土遺物 (弥生土器・土師器)



出土遺物 (須恵器・円筒埴輪・製塩土器)



13' · 15'



16' · 14'



13



14

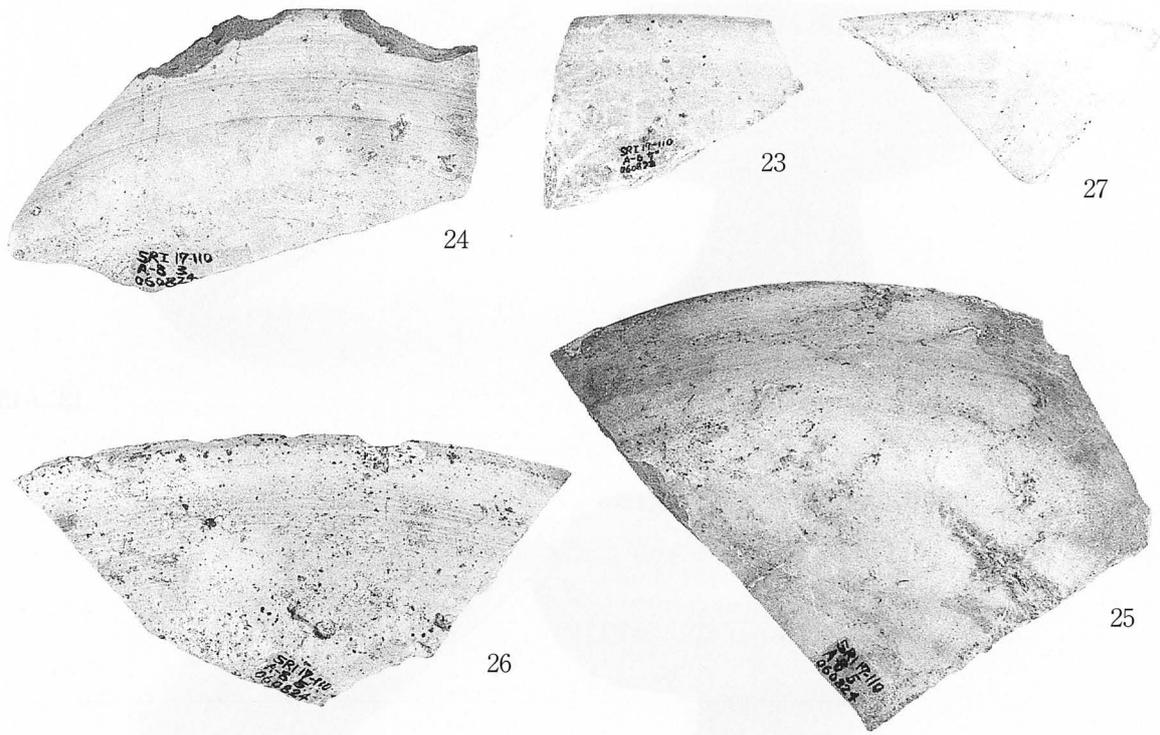


15

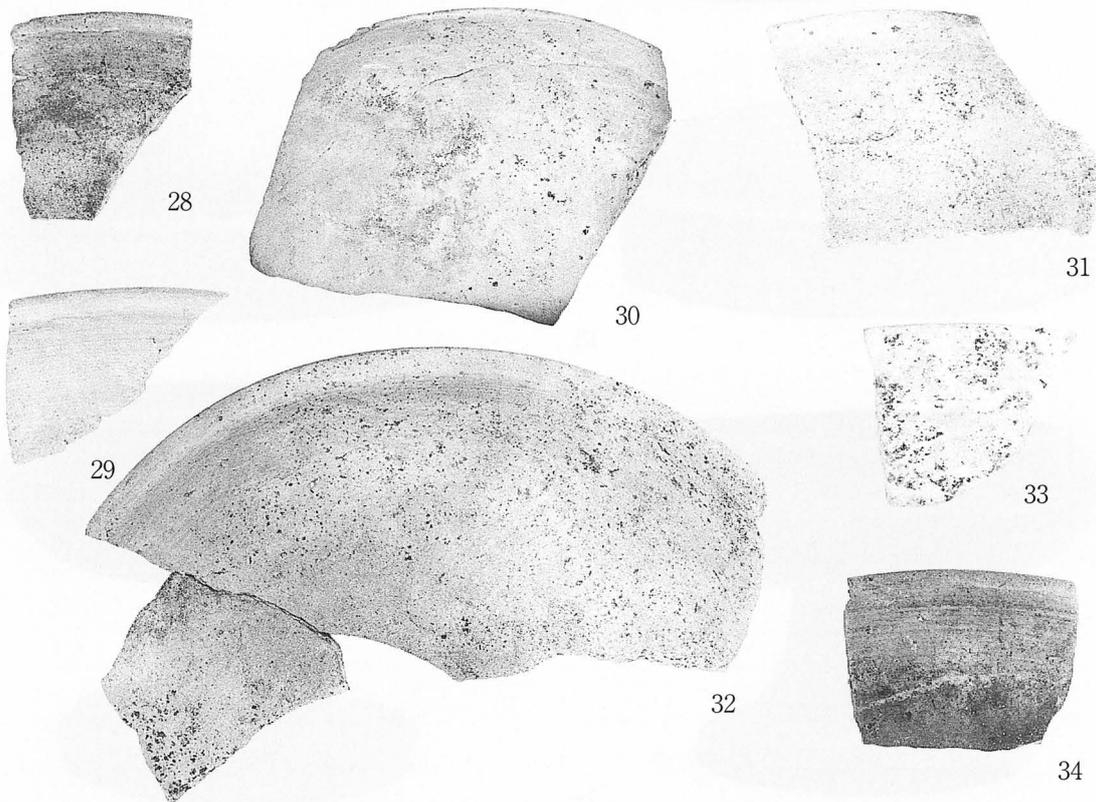


16

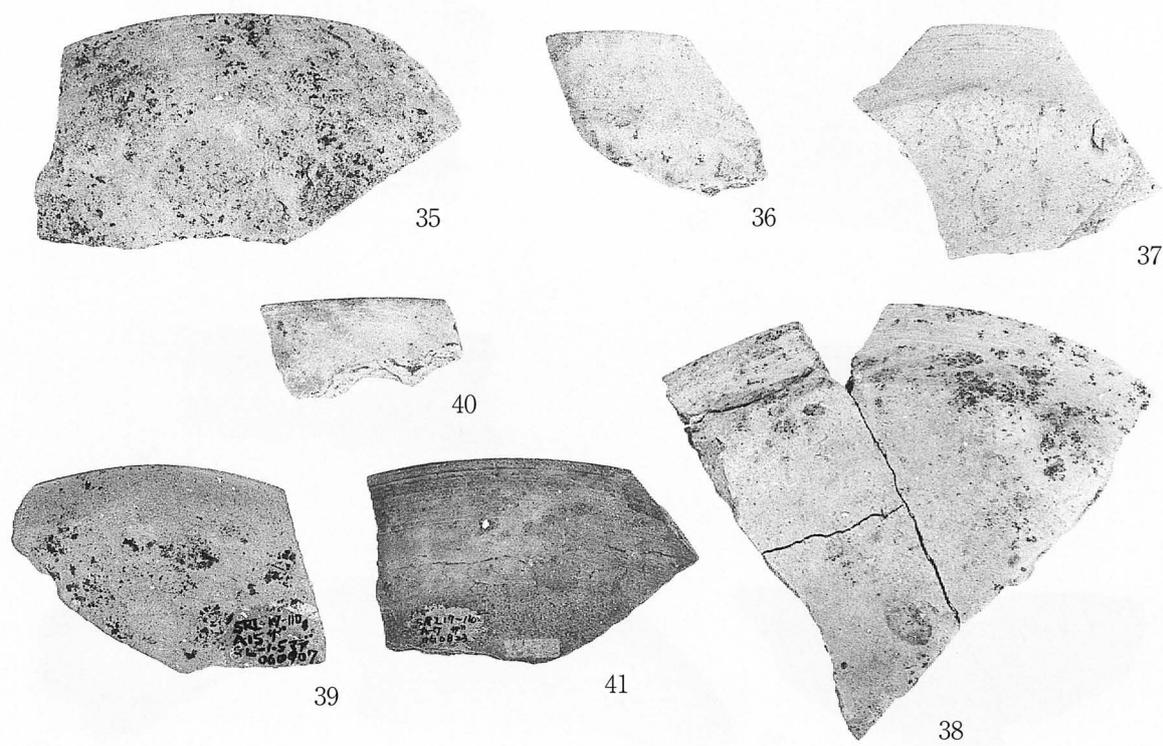
出土遺物 (須恵器)



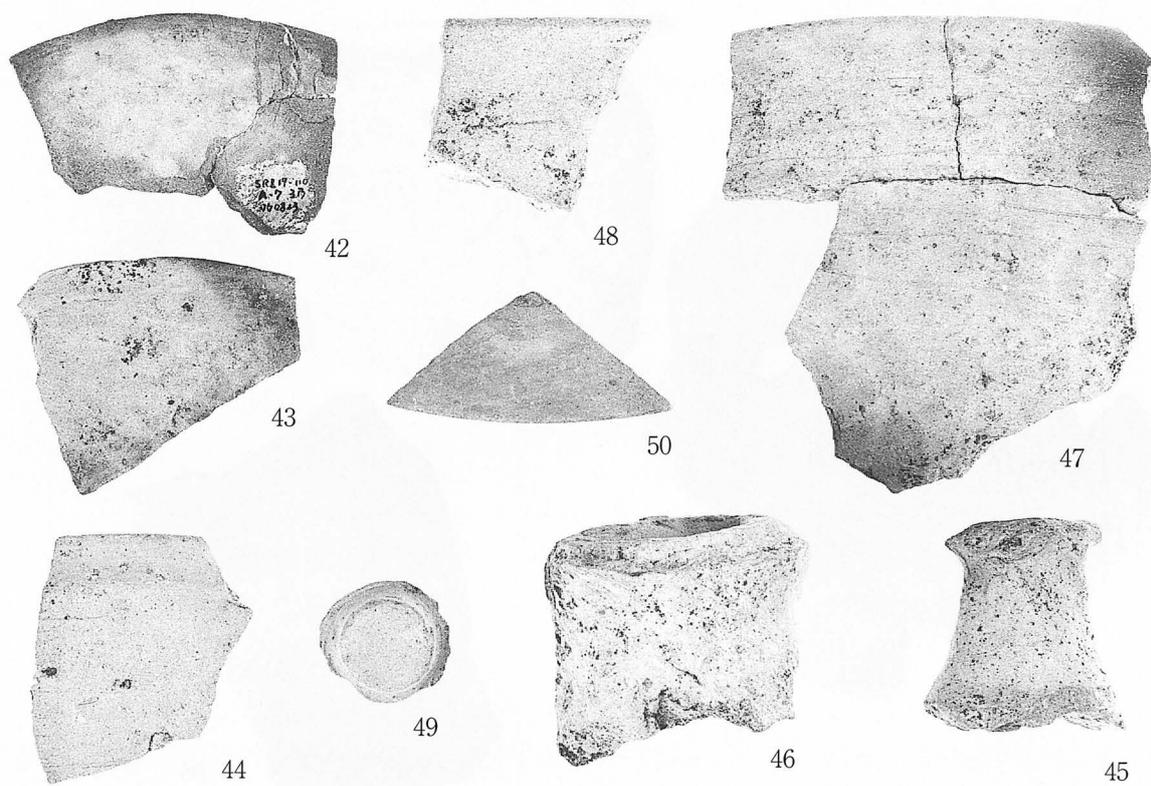
出土遺物 (土師器)



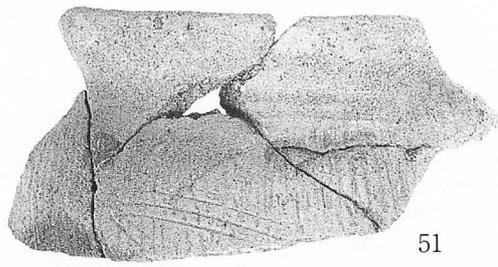
出土遺物 (土師器)



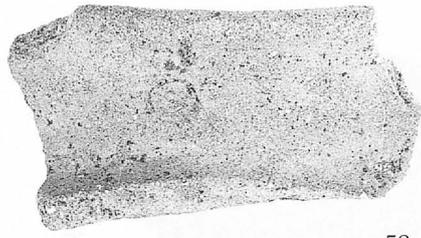
出土遺物 (土師器)



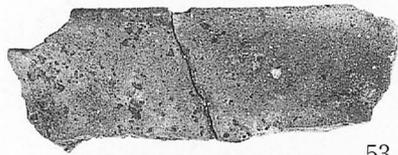
出土遺物 (土師器)



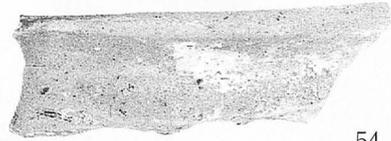
51



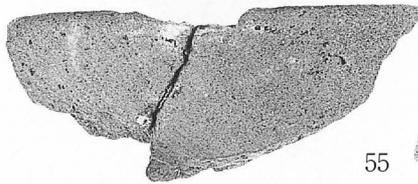
52



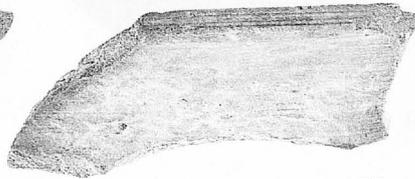
53



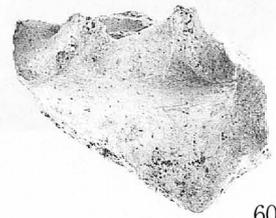
54



55

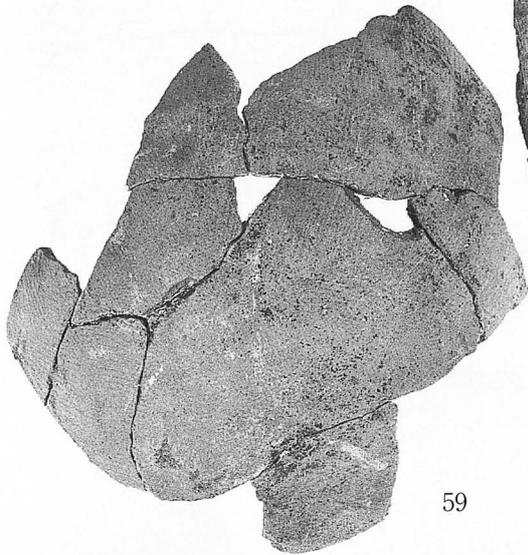


57



60

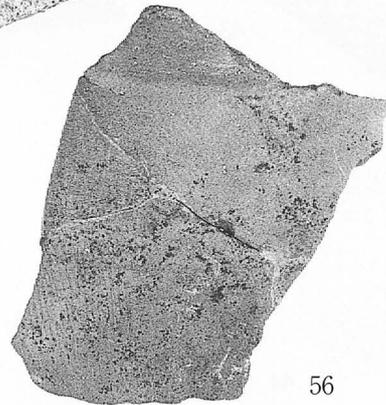
出土遺物（土師器）



59

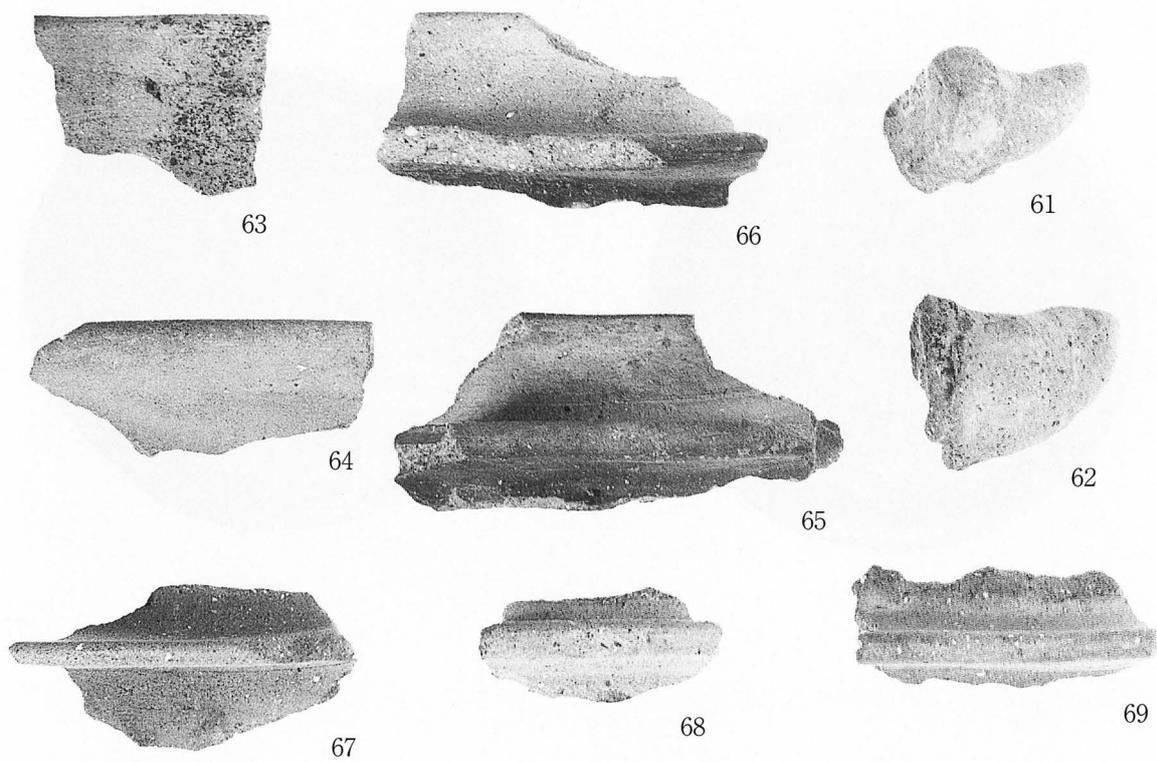


58

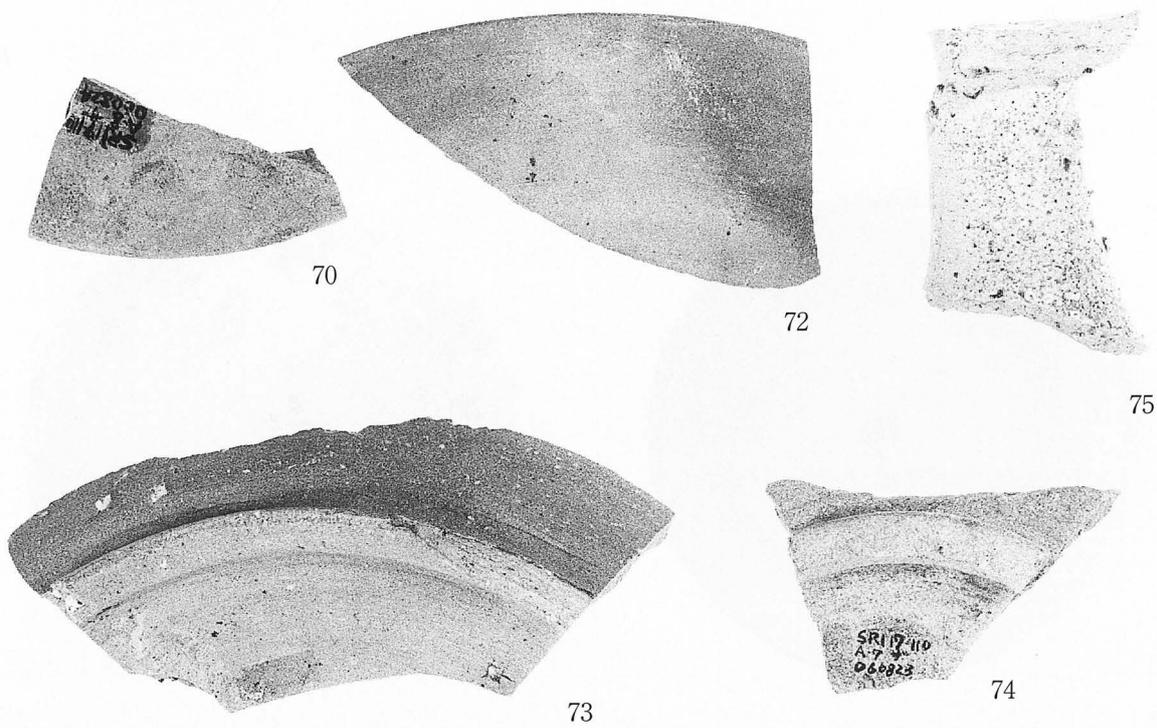


56

出土遺物（土師器）



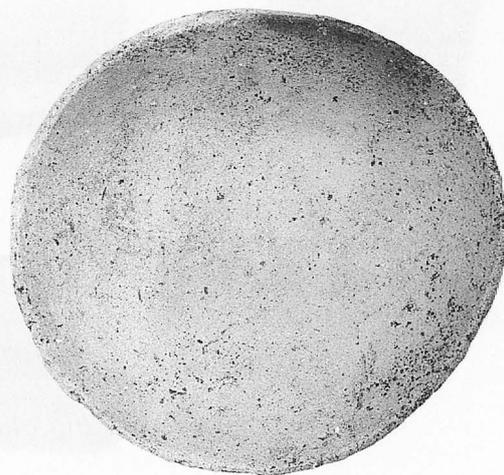
出土遺物 (土師器)



出土遺物 (須恵器)



71'



77'



71



77

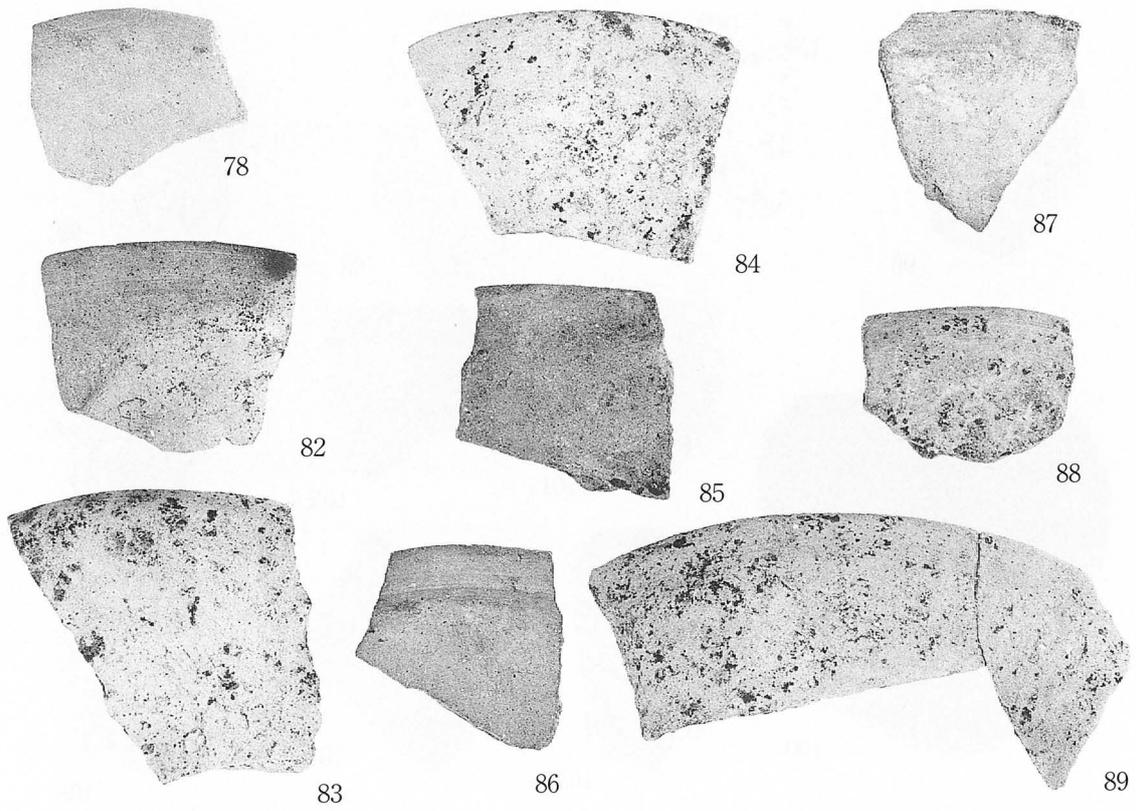


71''

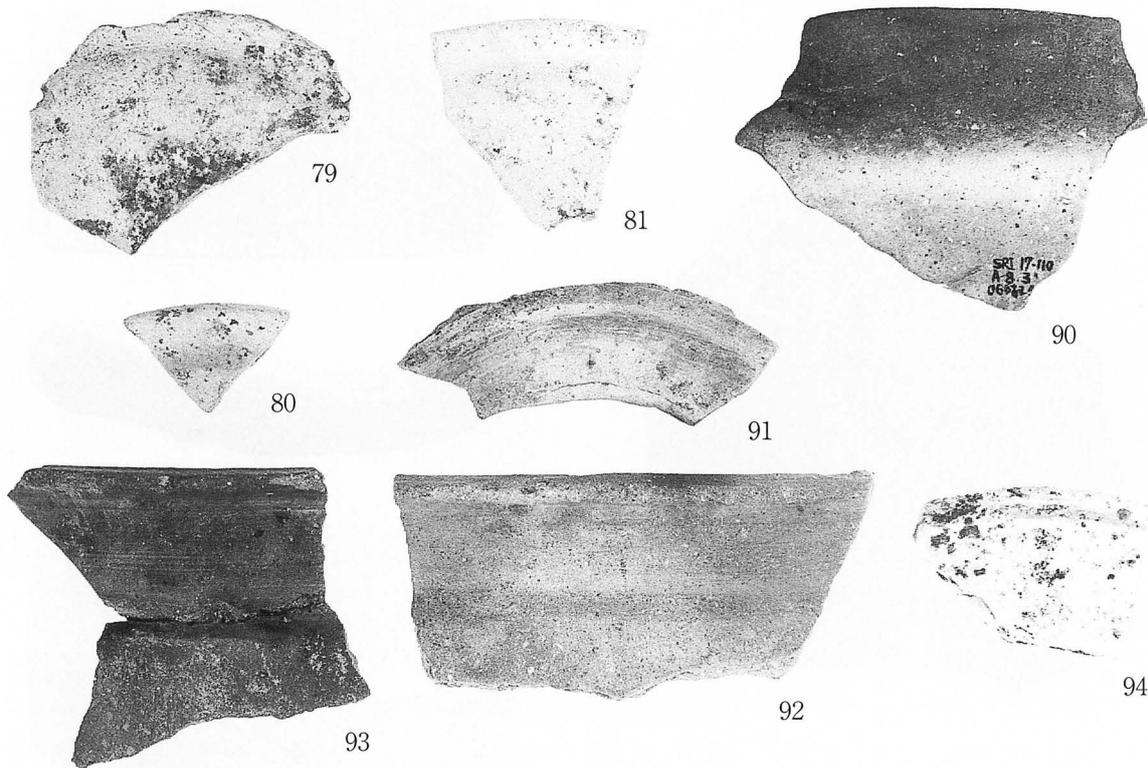


77''

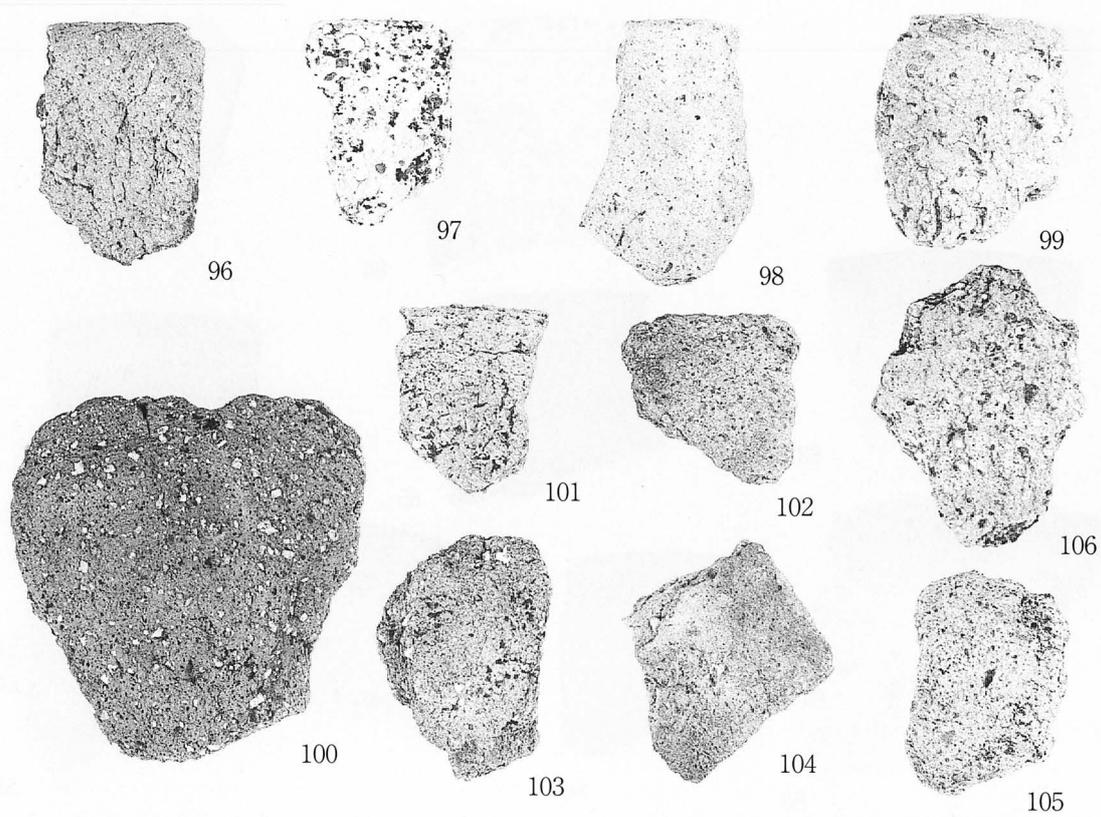
出土遺物 (須恵器・土師器)



出土遺物（土師器）



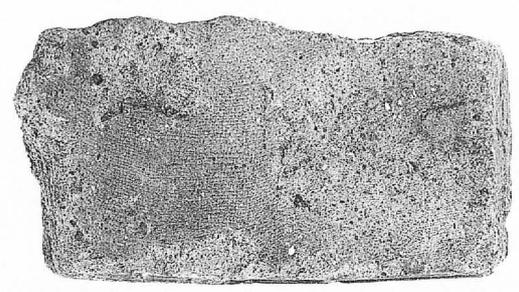
出土遺物（土師器・黒色土器・緑釉陶器）



出土遺物 (製塩土器)



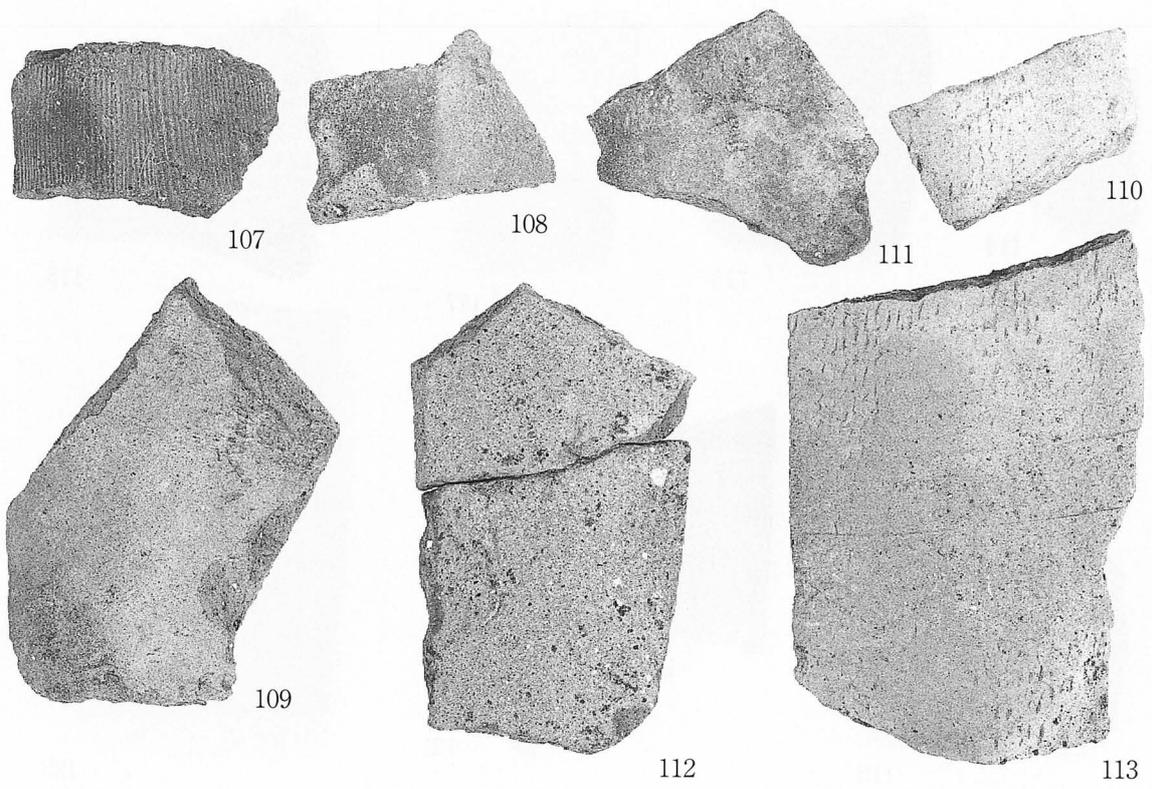
76



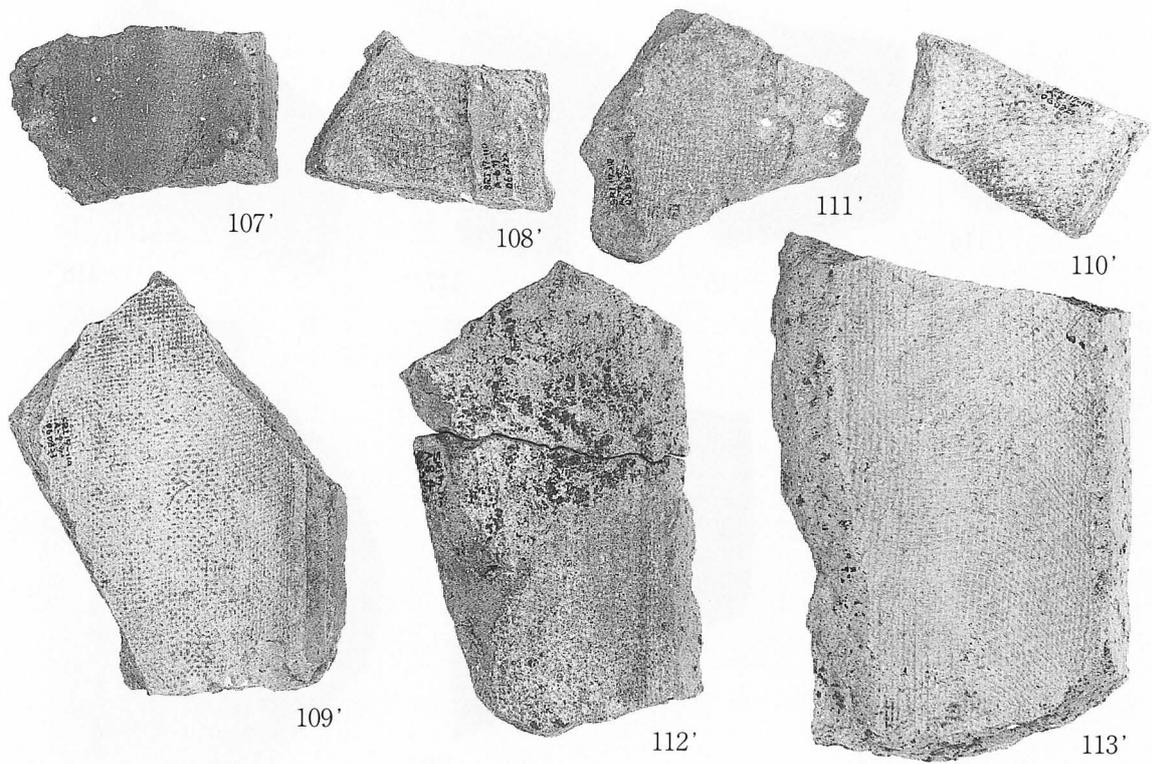
123



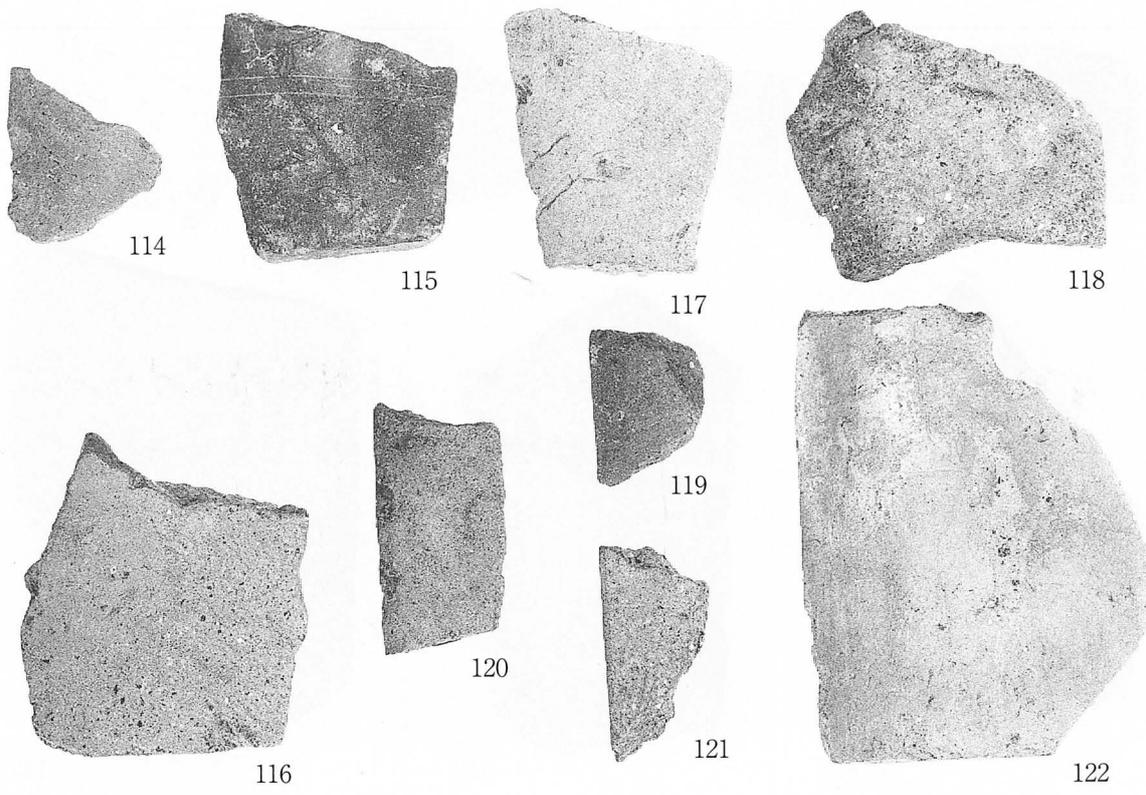
出土遺物 (須恵器・軒平瓦)



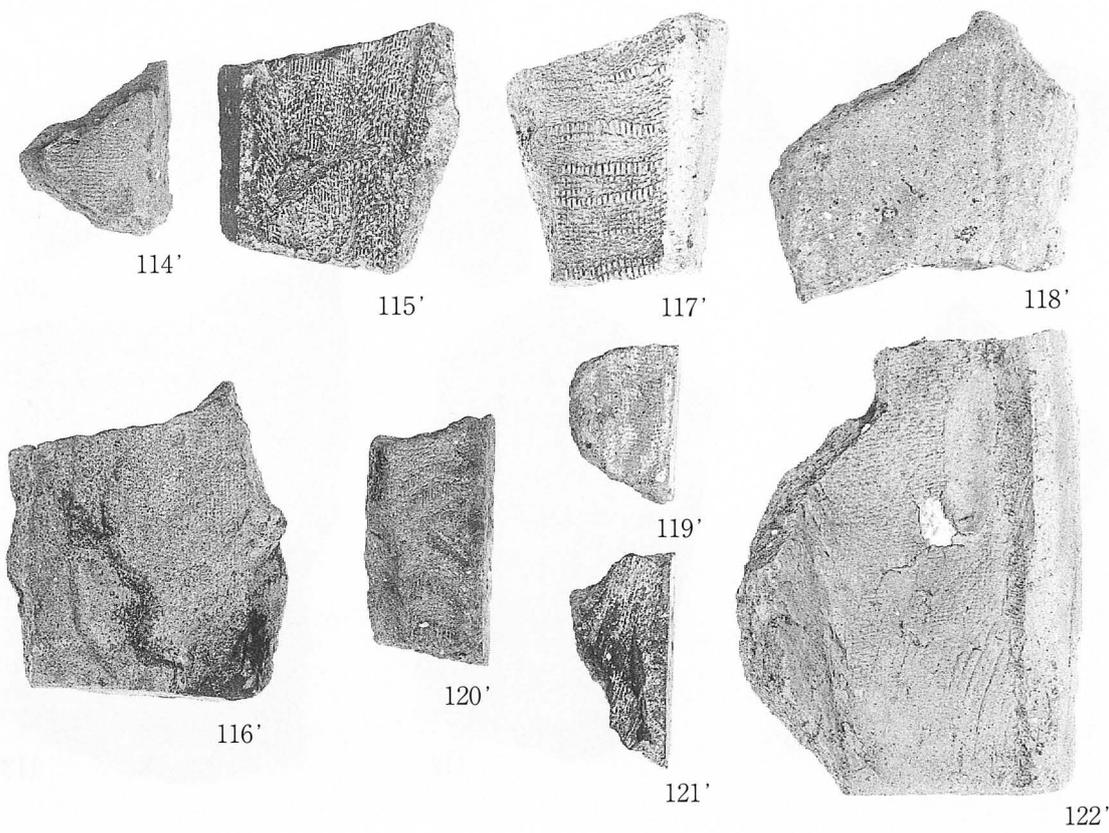
出土遺物 (丸瓦凸面)



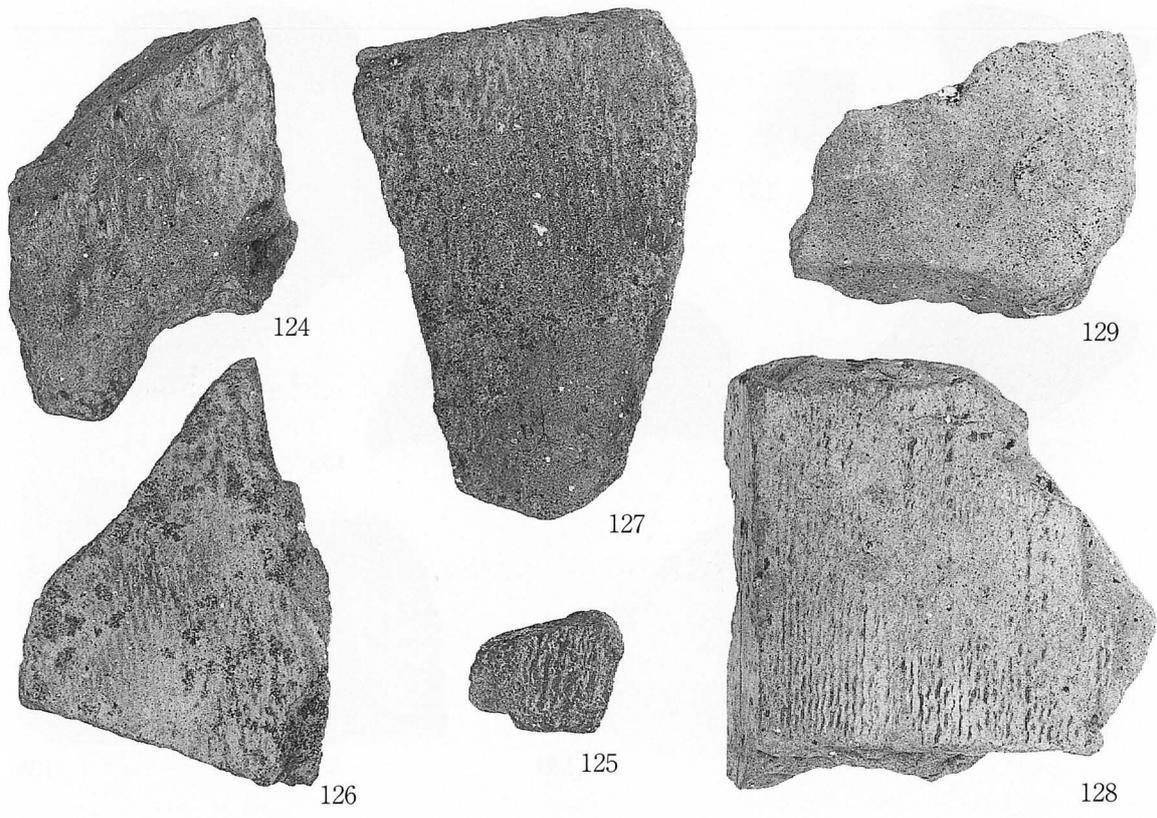
出土遺物 (同上凹面)



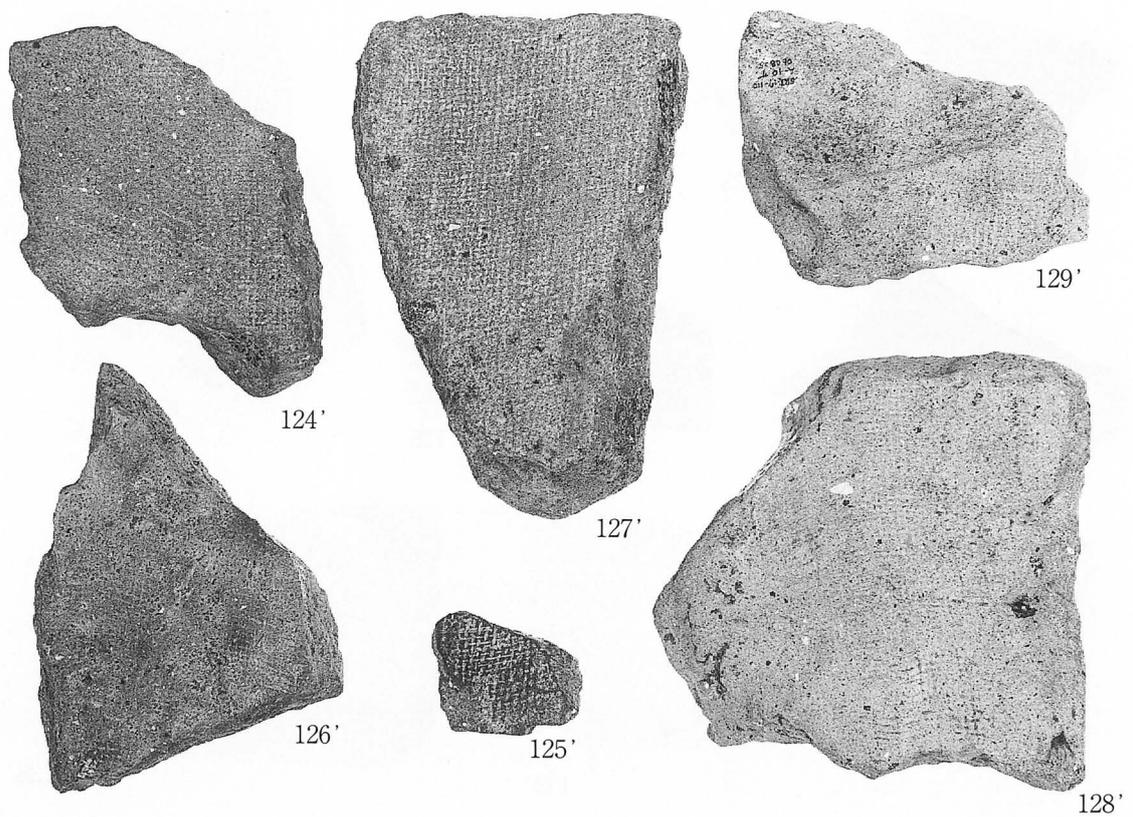
出土遺物（丸瓦凸面）



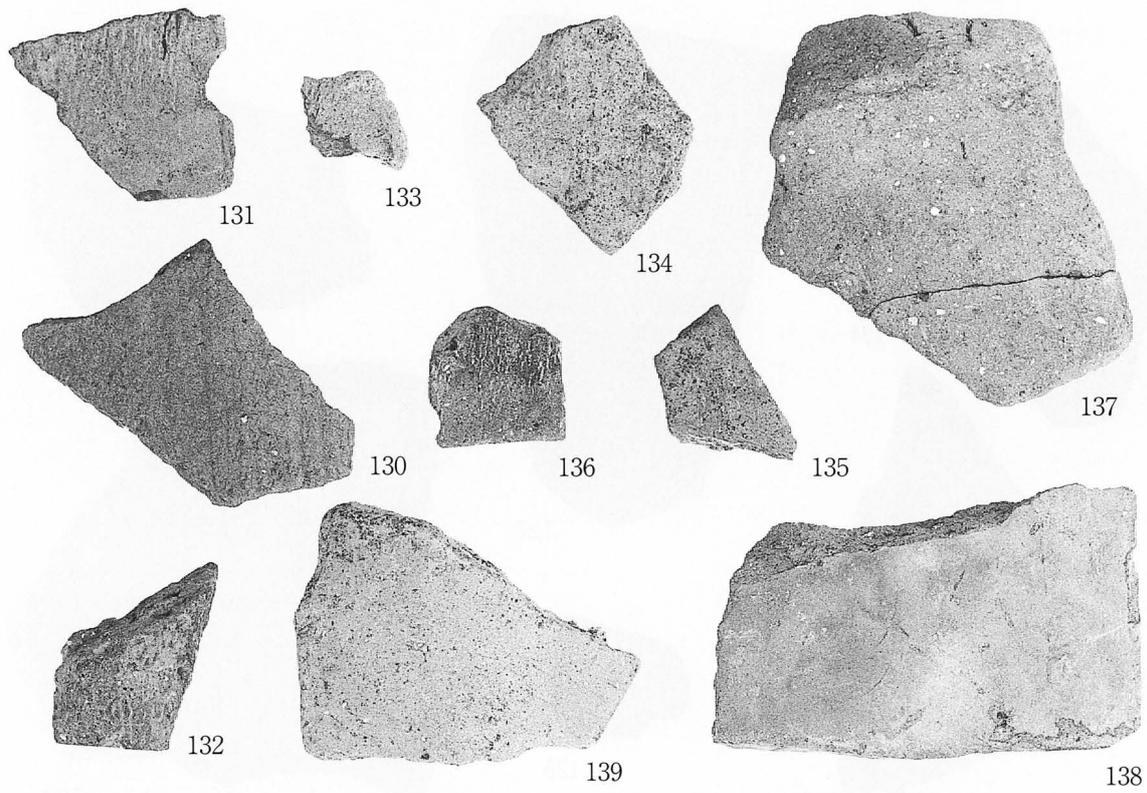
出土遺物（同上凹面）



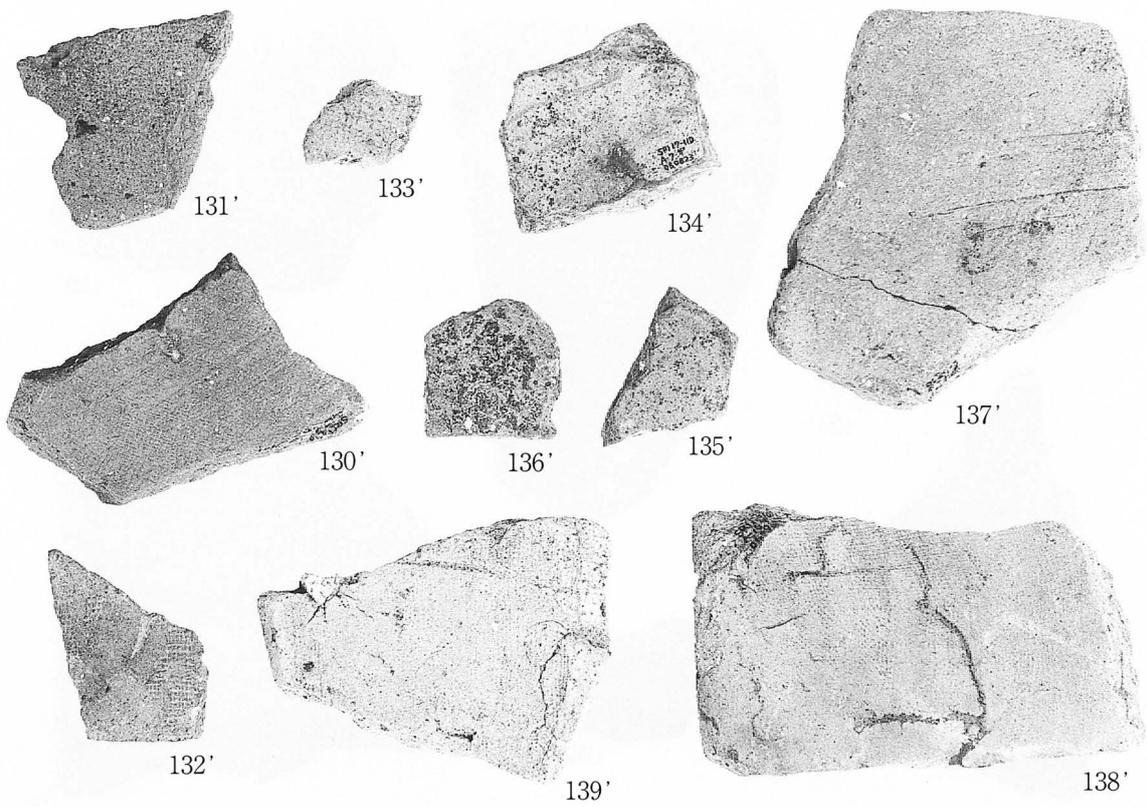
出土遺物 (平瓦凸面)



出土遺物 (同上凹面)



出土遺物 (平瓦凸面)



出土遺物 (同上凹面)

東大阪市下水道事業関係
発掘調査概要報告

－平成18年度－

平成19年3月31日

編集・発行 東大阪市教育委員会
印刷所 (株)近畿印刷センター

